三月一日發行

# 女學世界




高等化粧用
美顔水
雛様の美しさを
羨むは無用の事
美顔水を
絶さず
使ふ
人の
素顔の
美しさ！
白粉の溶けに使ふ人の
お化粧の美しさ！
◎にきび等を防ぎ色を白くしきめを細に艶を出す
◎白粉を溶けば白粉ののり、のび、つきを良くす
本舗
桃谷順天館大阪出張所
沖

# 女學世界 第拾壹卷第四號 三月號目次


心の束縛を脱する工風(二)……大内青巒
純粋なる母親の感情(八)……中川謙二郎
春野の小草の異れる趣味(一五)……物集梧水
女教師の尊き天職(二五)……濱荻
◎卒業の日(こぼれ梅)
日本印象記(三三)……中村春雨
結婚媒妁の苦心(四四)……法學博士 寺尾亨
現代婦人評論――一種の女(五三)……鐵拳禪
◎雛節供の飾り物(菱田忠)
新徒然草(六五)……磯千鳥
彌生日記(七二)……淺みどり
小學卒業後の子女の敎育(八一)……老敎師
贅澤に流れぬ衣裳競べ(八七)……小柳夏村

婦人の人格を認識せよ(九〇)……遠山霞
◎家庭談叢
日常生活の教訓(一〇〇)……瑤琴
垢ぬけのした奥様(一〇九)……浮葉
私の精神生活(一一九)……梅香女史
◎春一週間の獻立
切廻しの上手下手(一三三)……胡蝶
先生の御恩を忘れぬ記念(一四五)……山茶花
◎賢い女の側面(山縣きく子)
◎女子就職難(こぼれ梅)
雜記帳(一五八)……與謝野晶子
千鶴子に對する最後の實驗(一六八)……文學博士 福來友吉
奇蹟縱横の女傑(一七二)……双松庵
◎高輪泉岳寺の印象(若菜)
◎手輕に出來る子供洋服(女子共立會)
◎和歌◎俳句◎美文
奇特の孝子マルコ(一九三)……淡路搖
口繪――△伊太利の風光(原色版)△珍客來△春の海(河崎蘭香)△遠山霞
△桃さく里(加藤南山)△玉の御影△令孃かゞみ△新婚の春
△新夫人の面影(寫眞版)

女(いの二)

# 西洋樂器樂書一切販賣

在巴里某氏來東「……巴里人は廿人に付一個のピアノを有するを以て佛國文明の粹華なりと誇り、獨逸人は現役兵と同數のピアノを有するを以て其文明は健全なりと稱へ居候、思ふに我日本も現今僅に一萬人に付一個のピアノを有するのみなれど早晩斯る時機に到達するは遠からざることゝ存候、現時の令孃方が妻となり母となられる頃は西洋樂器は一般家庭の要具となり西洋樂を解せざるものは社交界より疎外せられ自然圓滿なる家庭をも作る能はざるに到るべくと存候、予は誠意斯る遺憾なからんことを豫め世の母たり兄たる人に警告し併せて令孃方の猛省を促すものに御座候……」云々

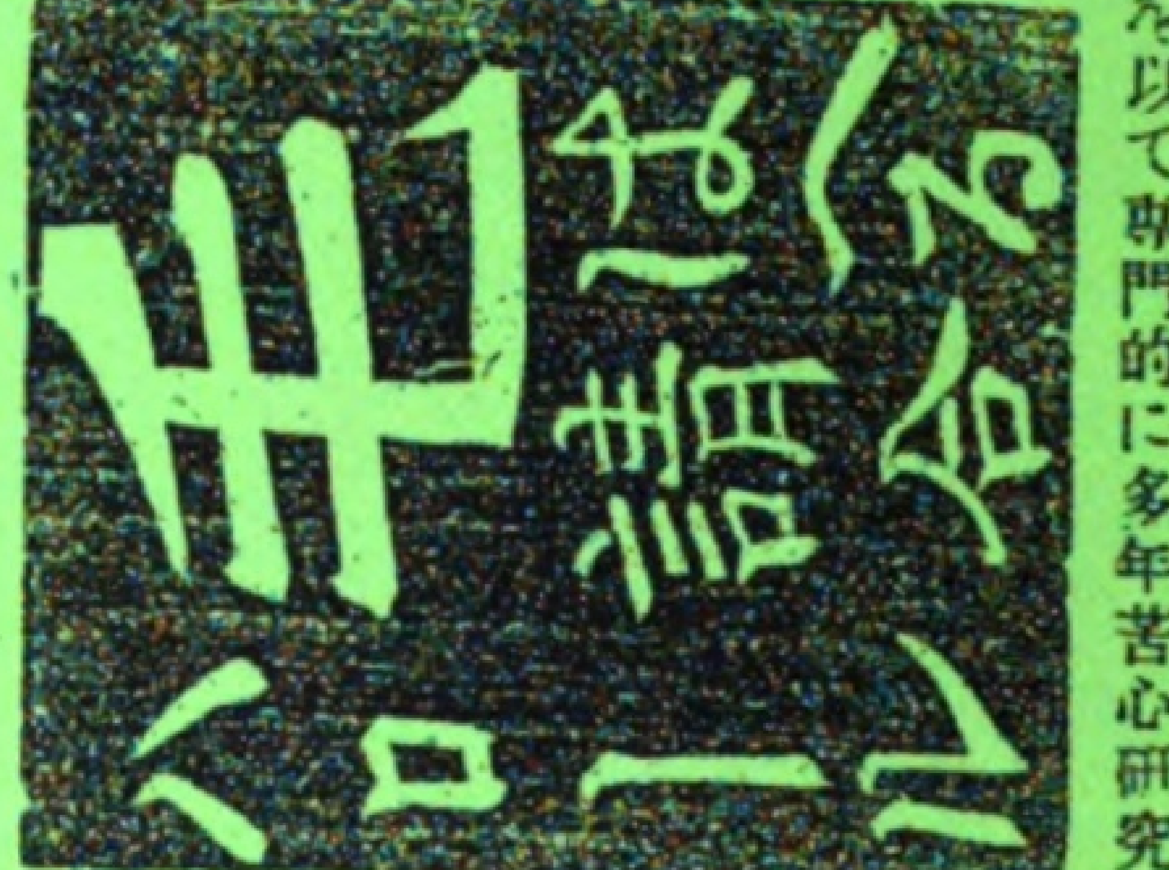
**營業種目**

松本ピアノ、舶來ヴアヰオリン　蓄音器
松本オルガン　和製ヴアヰオリン　ハモニカ
舶來ピアノ　手風琴　内外樂書

**新版目錄** 郵税貳錢送附次第無代送呈

東京市銀座四丁目
## 松本樂器合資會社
電話京橋 二二一九八
振替東京 一三五〇五

---



は歐米各國にて造化の妙工を奪ふの奇効ありとの賞賛好評を博したる秘密藥を當館主が醫科大學醫院在職中深奥なる學理と老練なる技術とを以て專門的に多年苦心研究の後其有効成分を檢明し生毛に關する諸説を參考し有力藥を配合したる世界無比の學理的最良藥なれば其効能の非凡確實なる事世間に有觸れたる技術と學理に暗き醫が山師的に無責任の廣告を露して販賣する瞞着品の比に非らず左れば普通に醫師の處方する禿菁丁幾、レゾルチン、サリシール酸昇汞等の在來の生毛劑や粗惡の實藥にて効なきとて落膽せず是非本劑を試みよ頭髪、はへきは、まゆげ、ひげ其他の薄きを濃くしあるべき所に毛なきを生じ禿頭病其他の病氣にて脱毛するを防止し抜毛の再生を早めヤケド、デキモノ、ハツポー、キリキズ跡の禿に生毛せしむる事請合藥價送料共一劑八十錢二劑一圓三十錢郵券代用二割増の事

●●取次所ナキ地方ハ直接本舖ヘ注文アレ

三河國碧海郡刈谷町
振替口座東京貳參壹壹
電話刈谷三拾貳番

本舖 醫科大學卒業藥劑士 從七位勳六等 **中島龜之丞鑑製**

●●大取次左ノ通リ●●大取次附近ノ各藥店ニアリ●●

東京市
本郷六丁目赤門前 瓜生藥局
麹町區紀尾井町三 齋藤藥局
日本橋檜物町十八 龜田藥局
京橋區八官町八 野田藥局
神田淡路町二の四 森田藥局
芝田町四の一二 加藤藥局
芝愛宕下町一ノ二 岩本支店
赤坂田町四の一 竹内藥局
同青山北町五 西井藥局
本所吉岡町廿五 小島藥局
四ツ谷大傳馬町二 永野藥局
神田旅籠町一ノ一 瓜生支店
堺市大寺南門東入 一色藥局
京都市上京區寺町通り石藥師角 福知藥局
京都市下京區五條通り富小路行當り 安江洋反物店
大阪市平野町二 丹平商會
丸龜市本町 櫻井藥局
名古屋京町三丁目 飯田藤七
同 同 荒川長太郎
高松市片原町 新明藥局
神戸元町一丁目 西村關東局
廣島市橋本町 萬代藥堂
神奈川青木七軒町 水崎藥店
仙臺市新傳馬町 櫻井藥局
岡山市橋本町 加藤藥店
弘前市下土手町角 菊地藥店
大津市菱屋町 磯崎藥局

女(いの四)



紳士貴婦人用
煉香油
パール
一目観て
パールの
使用者は
その毛髪黒く艶美しくお
髪が綺麗で芳香が良くて
全く上品です
東京日本橋横山町三
スミレ黒香油
菊の露白粉本舗
スミレ香水
平尾銑也商店
電話浪花百十番
振替東京百十番

伊太利カップリイの風光



四月四日新學期開始　第一學年第二學年入學許可す

# 女生徒募集

裁縫科、刺繡科、二ヶ年卒業

日本橋區濱町
二ノ十六

## 裁繡女學校

（規則書入用の方は二錢切手を添へて申込あれ）

---

# 生徒募集

## 一英語

豫科（初學者の爲めに設け誰人にても無試驗入學を許す）
本科（高等女學校卒業生若しくは之と同等の學力を有するもの）
高等科（本科卒業生若しくは之と同等の學力を有するもの）

## 一寄宿舍

（當塾は遠く父母の膝下を離れ都下に來遊せる女子の寄宿を諾し專ら家庭敎育の責を負ひ父母に代りて監督保護するを目的とす）

## 一家庭（簡易西洋）料理講習

（會日）每週水曜日（午後一時より午後五時迄）土曜日（午前十時より午後一時まで）

尙詳細の事柄ははがきにて御問合せあらば規則書送呈す

東京本鄕區向ヶ岡彌生町三番地

## 櫻井女塾

---

書籍雜誌迅速廉價販賣

東京神田表神保町

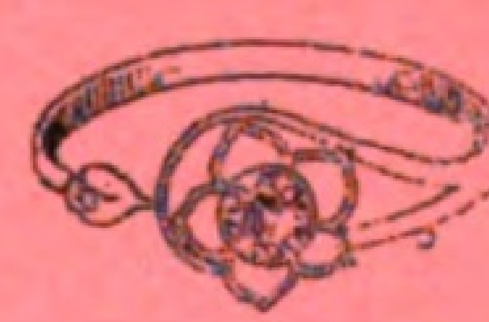
## 大學書院

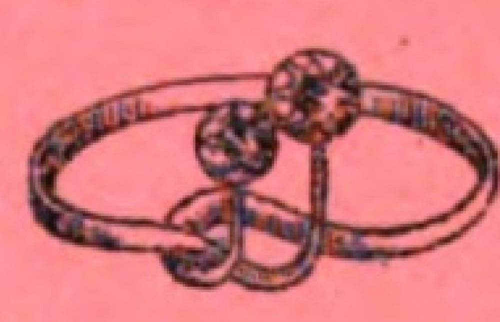
振替東京一五五七七番

▲目錄進呈▼
郵劵二錢御申込あれ

---

# 新案彫刻指環

(1)

K18
ダイヤモンド入
金四拾八圓

(3)

K18
ダイヤモンド入
金卅七圓

(5)

K20
春かすみ櫻
花白金彫刻
金廿一圓

(7)

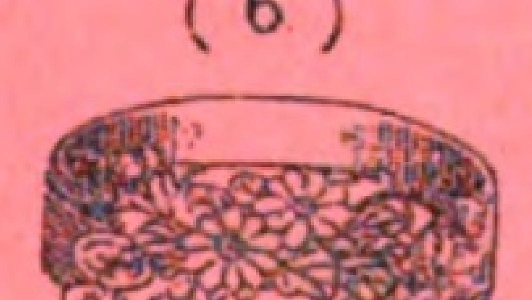
K20
花波彫刻眞珠入
金十五圓半

(2)

K18
ダイヤモンド入
金卅五圓

(4)

K18
ダイヤモンド入
金廿五圓

(6)

K22
水邊菊花
白金彫刻
金拾九圓

(8)

K20
枝櫻彫刻眞珠入
金十二圓

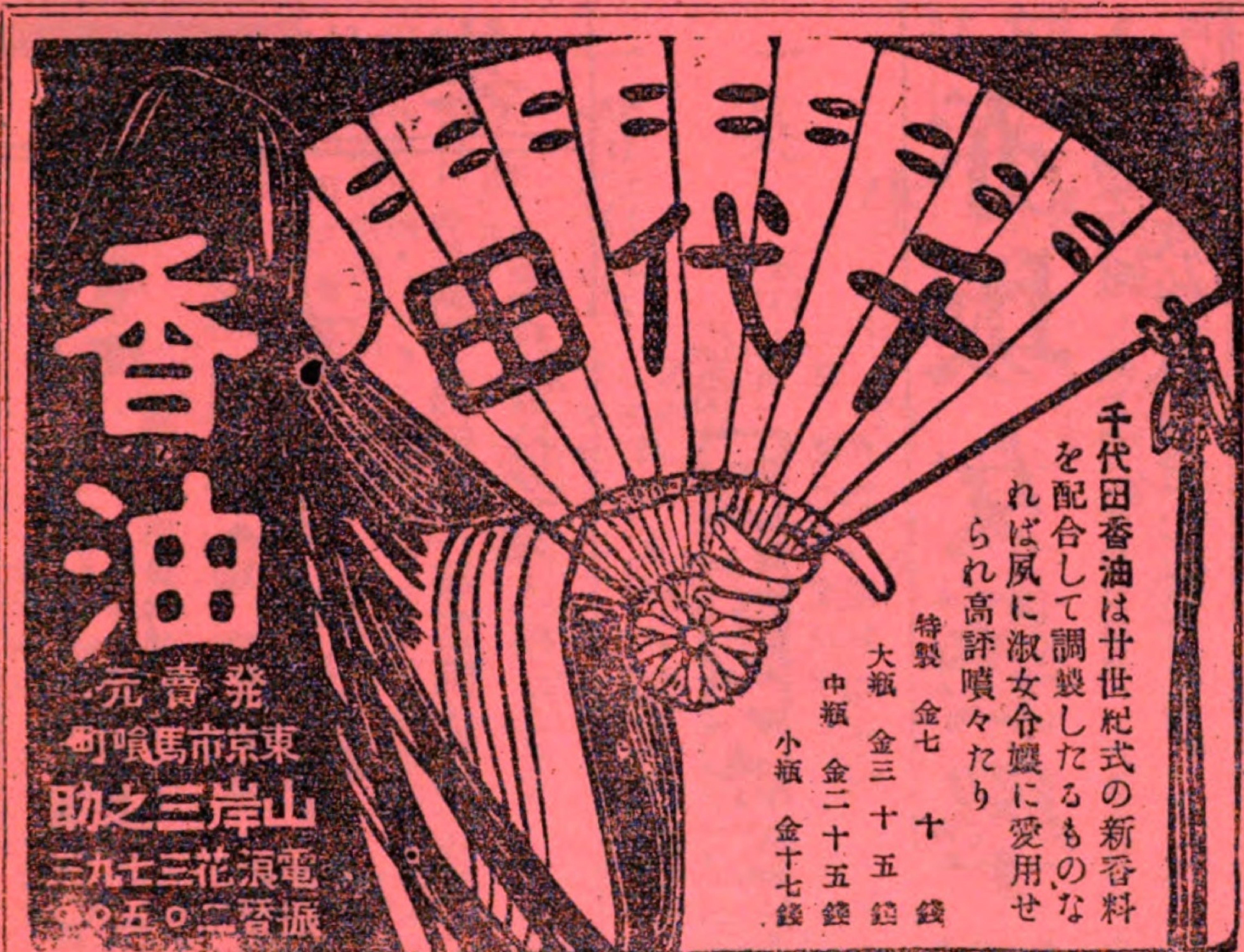
營業目錄
送費四錢

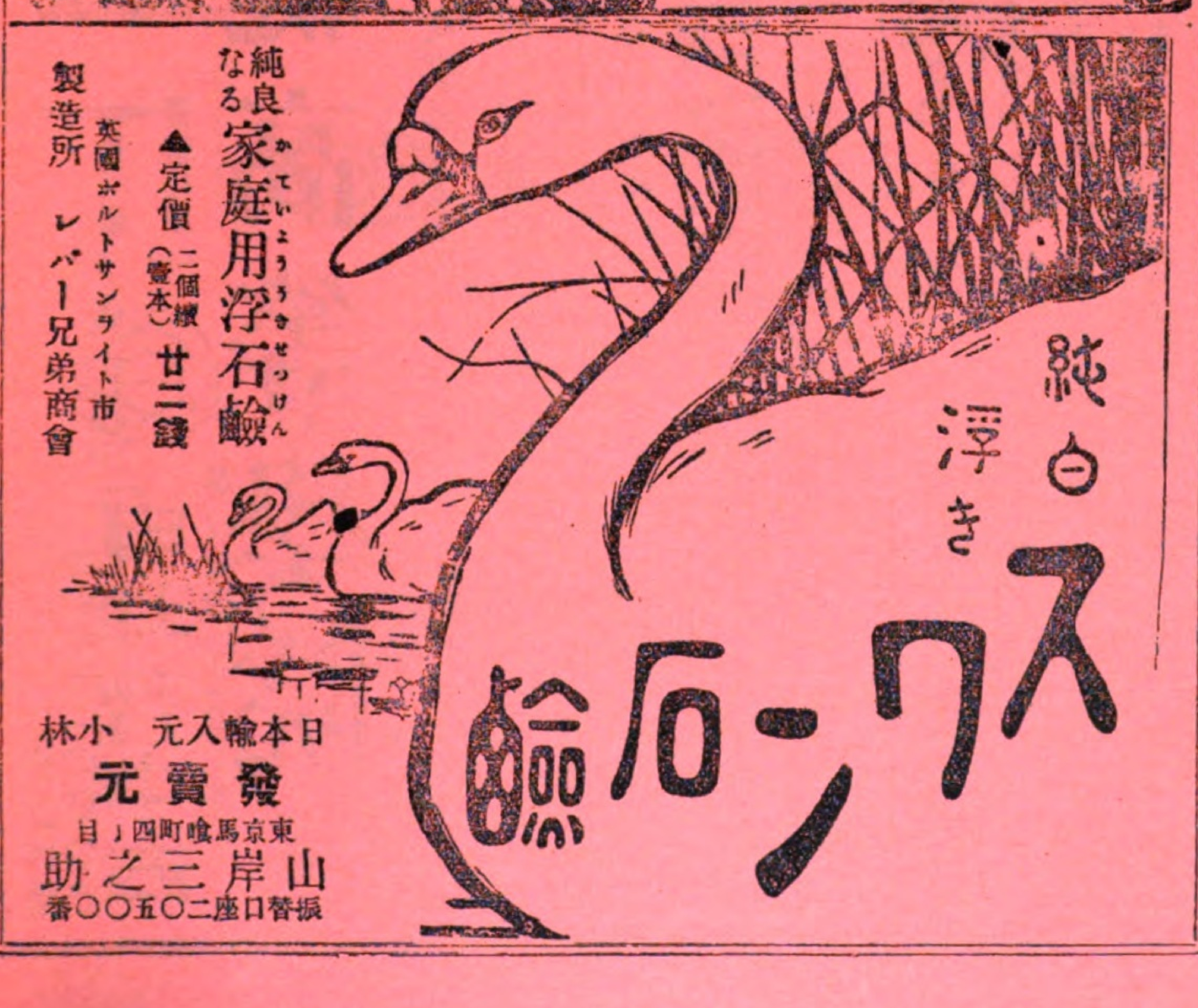
東京市神田區鍛冶町

## 白牡丹中西

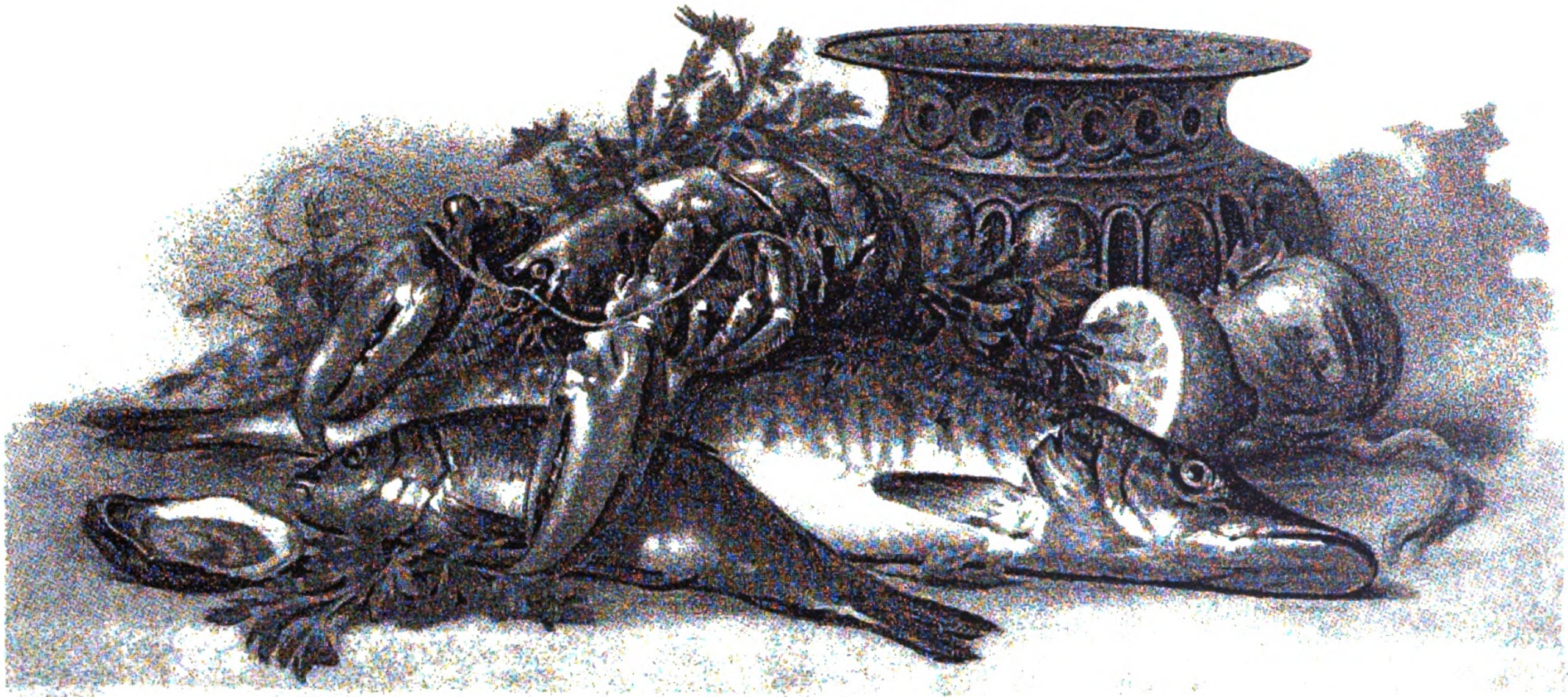
電話本局三〇四〇番
振替口座一五三一四番

女（その二）


千代田
香油
發賣元
東京市馬喰町
山岸三之助
電浪花三七九二
振替二〇五〇〇
千代田香油は廿世紀式の新香料を配合して調製したるものなれば夙に淑女令孃に愛用せられ高評嘖々たり
特製 金七十錢
大瓶 金三十五錢
中瓶 金二十五錢
小瓶 金十七錢


純良なる家庭用浮石鹸
定價 二個續(壹本) 廿二錢
製造所 英國ポルトサンライト市 レバー兄弟商會
純白 浮き
スワン石鹸
日本輸入元 小林
發賣元
東京馬喰町四丁目
山岸三之助
振替口座二〇五〇〇番

来 客 珍




最上醬油
元祖
上
開業貳百六拾七年
宮内省御用達
日英博覽會に於て
太平洋博覽會に於て
最高名譽大賞受領
釀造元
千葉縣銚子港
濱口合名會社
電話銚子一二一番　振替口座五〇二一一番

（はの一）

女（はの二）

# 花も實もあ

# 婦女界

一冊 金十五錢
▲郵税金一錢五厘
六冊 金九十錢
十二冊 金一圓七十五錢
（註文は總て前金のこと）

## 本誌の二大呼物（毎號掲載）

## 夫婦論 …… 羽仁もと子

▲合性ほど不思議なものはない
▲火性水性の夫婦
▲趣味に於て夫の機先を制せよ
▲造化の妙計
▲男子の我儘は積年の習慣
▲妻の氣持と夫の氣持
▲氣の合はぬ同士の寄合ひ
▲佛性の夫、勝氣の妻
▲低き意味の合性、高き意味の合性

## 女 …… 文學博士 三宅雄二郎

▲女と三從
▲參政問題
▲交際問題
▲職業問題
▲家族向の女と社會向の女

# 三月號を見よ

## 逝ける本願寺裏方を懐ふ

◎淡泊で情厚かりし方……公爵母堂 毛利安子
◎惜みても餘りある方……侯爵夫人 木戸壽榮子
◎丁寧にして優しき方……子爵母堂 櫻井錦子
◎徳の高かりし方……男爵夫人 福島貞子
◎聞きしに優る聰明な方……棚橋絢子
◎雄々しき御氣象の方……有島幸子

▲婦人は何のために煩悶し如何にして墮落するか　番町教會牧師 綱島佳吉　救世軍書記長官 山室軍平

◎歐米漫遊みやげ　村井吉兵衛氏夫人 村井宇野子
◎横井小楠に仕へたる盲目の忠婢　海老名彈正氏夫人 海老名みや子
◎九人の子供を斯うして育てます　櫻根醫學士夫人 櫻根きな子
◎家庭以外に於ける二つの務　代議士 田川大吉郎
◎貯金は何うして出來るか　羽仁もと子

◎私の好むイブセン劇……中村春雨
◎彫刻家の見た女の姿……高村光太郎
◎聲の出し方のお稽古……柴田環子
◎新世帯日記　三宅理學士夫人 三宅やす子
◎今様の訪問服いろ／＼……柳子
◎天ぷらを上手に拵へる法……

▲發行所　東京市神田區表神保町　同文館　（全國各書籍雜誌店にて賣捌く）

女（ばの三）

東京南傳馬町

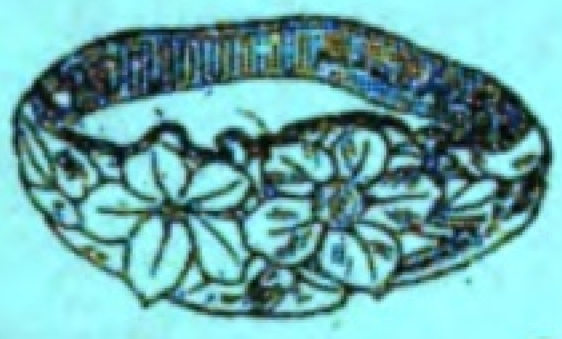
# 流行の指環　大西白牡丹



1 二十二金及白金色繪巴つなぎ彫 金拾三圓



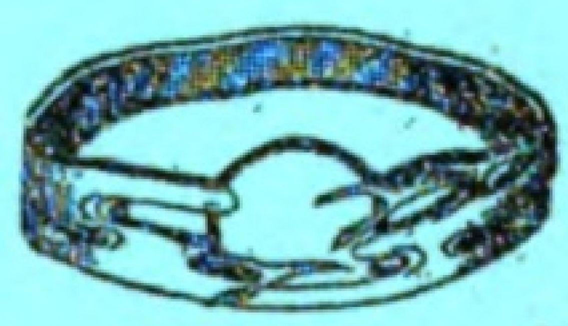
2 二十二金及白金色繪櫻に都鳥彫 金貳拾三圓



3 廿二金彫刻菫の圖ダイヤモンド入 金貳拾八圓



4 廿二金櫻に水の圖ダイヤモンド入 金貳拾六圓



5 二十金及白金色繪月に雁 金九圓半



6 二十二金亂菊彫刻 金拾貳圓



7 二十金彫百合の圖 金九圓半



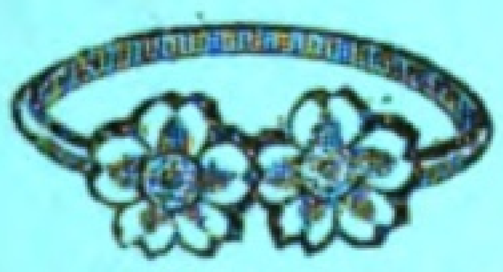
8 二十金蝶の圖 金八圓



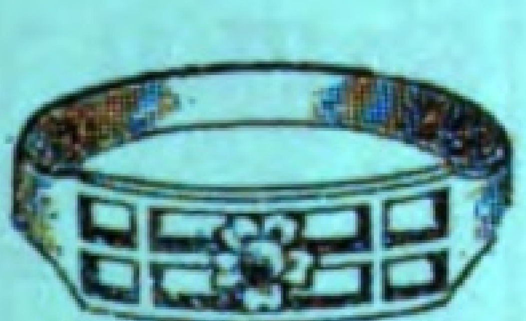
9 十八金製眞珠入水の圖 金十二圓



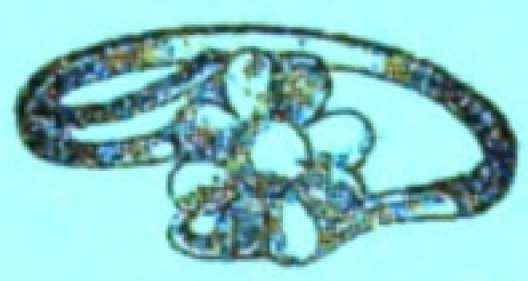
10 十八金製ダイヤモンド及眞珠入 金三拾圓



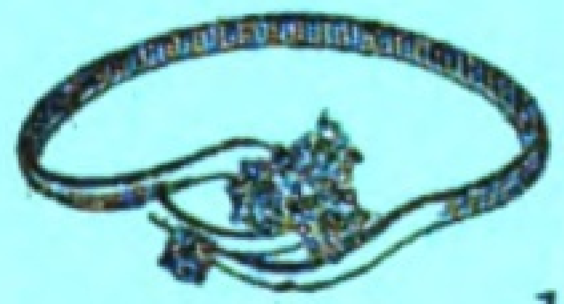
11 十八金製ダイヤモンド及ルビー入 金二拾五圓



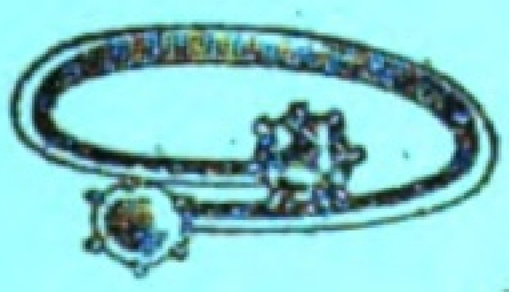
12 十八金製ルビー入 金九圓



13 十八金製眞珠入クロバー 金十二圓



14 十八金製ルビー三個入 金十五圓



15 九金人造ダイヤ及眞珠入 金三圓半



16 九金人造ダイヤ入 貳圓八十錢

女(はの四)

春の海



河崎蘭香筆




女(にの一)

# 婦人世界

三月一日發行 六卷 第三號 一冊 拾五錢 郵税一錢五厘 半年分郵税共一圓五錢 一年分同二圓五錢

◎嫁と姑の別居論……（山脇房子 鳩山春子 棚橋絢子 目賀田夫人 川瀬富美子）

◎貧乏神の話……武田講師

◎お彼岸の御馳走……弦齋夫人

▽卒業式の答辭は何のために讀むか……下田歌子

◎令孃訪問……婦人記者

◎義理堅き京都の女中……

◎人情論（愈よ出でて愈よ天下を驚かす）……村井弦齋

◎髪を美しくする法……伊賀とら

◎小兒病の豫防……加藤博士

▽柳行李を負うて出世の旅……吉村鐵之助

◎家庭衛生談……村井弦齋

◎家事經濟の執り方……嘉悦孝子

◎淀君論……（坪内博士 塚原澁柿 饗庭篁村 巖谷小波 大町桂月 伊原青々園 村田丹陵 麻生正藏 岡部文學士 小金井君子 その他）

發行所 東京京橋南紺屋町 實業之日本社 （郵便振替貯金口座三二六番） 賣捌 全國書店

女（にの三）

# 驚く可き低價

**請求せよ　内容見本無代進呈**

東京女學館教師　國分操子著

▲總紙數千五百頁

（最新刊）

# 家庭日用婦女寶鑑

國家の完備は家庭の完備に待つ、今や我國は一躍して世界一等國の列に入れり、從つて家庭の健全なる發達は急務中の急務なり、女子敎育家として令名高き國分操子女史玆に感ずる所あり、二十年來の實驗と蘊蓄とを發揮して此書を世に公にせらる

國體皇室、敎育、女禮式、家政、育兒、衞生 讀書烈女傳才媛傳 文章、和歌、書畵 音樂、手藝 和服裁縫編物刺繡造花袋物お細工物摘み細工 茶湯生花料理工藝等中等社會以上の女子に缺くべからざる事は一切網羅せざる無く猶坂正臣先生の和歌及び手紙の書き方をも加へたり、以て文明家庭必須の智識を得べく、以て女子の人格を養ふべく、實用にして而かも趣味あり、既婚と未婚とを問はず一般の女子に取りて、師となり友となり、實益を得るのみならず精神を慰藉するに足るべく、實に方今の家庭一日も缺くべからざる實用婦女百科辭典なり、殊に裝釘の如きも高尚美麗にして贈物とするにも適し、婦女寶鑑の名に負かざる絶好の一大著述なり。

和裝帙入極美麗　全三冊
用紙最上等改良半紙刷
正價五圓五拾錢挿畫五百圖

特賣部數盡きれば斷じて此の特價を以て販賣せず

**五千部限り特價四圓**（郵税内地金十六錢）

特賣部數極く少數故一時も早く機敏に購求あれ

東京日本橋角　**大倉書店發行**　振替口座東京二三八番　電本局一四一番　電本局二四〇四番

遠山霞



加藤南山筆



壺ふかき盃とらん桃のはな　北枝



# 天工を奪ふは此時！

梅は咲たが櫻はまだかいナ、と強て御催促を成さらずとも、太夫は身仕度の整ひ次第直樣春風駘蕩の本舞臺へ現はれます、けれども此盛裝した天然の美花は、一時御目通りをする丈に止まり、無論いつまでもと云ふ永久的の御慰さみにはなりませぬ、それを何時でも勝手に觀て、隨意に樂まうといふには、先づ此盛裝した天眞爛漫の花を標本とし、之を寫實的に造花とせらるゝに如く事はありますまい、而して斯く研究なさるゝには現時が最も適當の好時季です勿論其造花に經驗のない御方は、或時は之を臆劫に思召れませうけれども、ソコが世に云ふ習ふより慣よです、少し練習さへ成されば容易に出來るものですから、如何なる初心の御方でも、左の所へ金三十六錢を封入御申込あれば、其の材料も器具の使用法も直に御會得になるやう、懇切なる御案内書を送る事になつて居ります。

東京市日本橋區横山町一丁目十六番地合資會社天野卯兵衛商店宛

女(ほの一)



除毛劑

**デピラ**

効能

ハ剃刀ヲ用ユルヨリモ綺麗ニ毛ヲ除クト共ニ皮膚ヲ害セザルノミカ同時ニ皮膚ニ浸穢スル垢ヲ除キ去ルヲ以テ**デピラ**ヲ用ヒテ髯ヲ除キタル後ハ俄ニ色ヲ白クシ、潤澤玉ノ如クナラシム。而シテ皮膚ヲ刺戟セザルハ本劑ノ特徴ナリ

一罐定價金三十錢

全國知名藥店ニ有リ
送料二種共各四錢

本舖 東京神田區旅籠町貳丁目
**資芳堂藥舖**
電話下谷三一一〇番
振替東京一九八七五番

生毛液

**ピローゲン**

効能

ハ身體中毛ヲ生ズベキ部分ニ毛ノナキモノニ塗抹シテ効驗ヲ顯ハスハ論ヲ俟タズ譬ヘバ鬚髯、腋毛、陰毛等ノ缺陷シタル者頭髮其他ノ生エ際ノ薄キ者ヲ治シ兎舐病及ビ惡疾ヨリ生ズル毛髮ノ禿脱、火傷、刀傷、發泡等荀クモ毛ノ生ズベキ所ナラバ生毛セザル事ナシ

一壜定價金六十錢

---

根治確正

**わきが**

新治療藥 ラピヨン

本劑を塗擦すれば主成分は皮膚及び肉の組織に吸收せられ其組織にある**毒素**を清潔驅逐し惡臭を**根柢**より**全滅**せしむる作用を有する最近發見の特種の新劑にして如何程頑固劇烈の難重症も甲價特別製を用ひよ

**必ず全治**し決して再發或は他病に變ぜず速に用て苦惱を脱せよ

丙價七拾錢乙價壹圓卅錢甲價特製貳圓五拾錢送料拾五錢

**毛のぱへる**

毛髮生長液 原名 ヘクネス

**有力**なる**最新液**にて**毛**をはやしたき**人**早く試みられよ◉ぬけ毛落毛を止め生す◉頭などにはげのあるのは見苦しき者也

定價壹圓卅錢特別製貳圓送料拾四錢本品は原名をベグネスと稱する現今最賞用せらるゝ

其他の所に毛なき人用ひよ毛髮増はへぎわうすき人◉まゆ毛◉口ひげ◉

化學製品

**色の白くなる**

防ハンドコロン溶液

盛にし**皮膚**を**漂白**するを以て全身次第に**白色艶美**となる

價A印壹圓B印特製壹圓五拾錢送料拾五錢本劑は貴紳淑女粋士間に大高評を博し殊に愛用せらるる最新流行の秘方奇劑にして本劑を塗擦すれば**主性分の力**に依り皮膚は次第に新陳代謝し男女交際上最も必用の品なり

**月やくをろし**

**メソルビン**此藥は子宮を痛ず如何ほど長き月經とまりも必ず下る二三月位のは壹劑も用ゆればすぐ下る二三ヶ月以上のとまり又は血塊には特製を用ひよ速に**流經**す本劑は効能極て烈強なるも毫も身體子宮に害なくたやすく下ろ、月經不順より起る**血の道**を全治し**古血**を一掃す價半劑六拾五錢壹劑壹圓貳拾錢特別製貳圓卅錢參圓五拾錢送料拾貳錢

**專賣** 東京神田區小川町東明館前 **オリエンタル藥舘**

女（ほの二）

# 婦人画報

三月一日發行　三月の巻　一冊廿五錢　郵稅二錢　六冊郵共壹圓五拾錢　十二冊稅共二圓八十八錢

## 畫報

▼桃……梶田半古筆二頁大
▼豫選歌人とその筆蹟……附錄美人畫三色版
▼御新築の閑院宮御邸
▼三井男夫妻村井氏夫妻歡迎會夜會
▼益田孝氏の室内と庭園▲新郎新婦
▼伏見宮王女の御昇校
▼各國の人形▼將校婦人會の會合
▼少女の踊り▼跡見女學校汲泉會
▼造花の順序▼飛驒白川の大家族
▼盆栽のいろ／＼
▼東京高女淑德高女展覽會
▼華頂宮の邸溫室
▼禮法の栞▼諸名家の令孃
▼海苔の製造法順序
▼田代博士令孃中野氏令孃
▼婦人教育會と婦人衛生會
▼二條公爵令孃と三島子爵の二令孃
▼神田婦人會▲柳原典侍と筆蹟
▼御玄關前に立せ給ふ久邇宮王女殿下
▼キャベルマン夫妻と柴田環女史
▼夫婦巻と日韓巻▼少女の笑ひ
▼大谷籌子の方と筆蹟並葬儀
▼江戸時代の雛遊びと今の雛遊び
▼女學生の漬物實習
▼古今各地の雛

## 讀物

◎不健全な思想に囚る勿れ……文學博士 中島力藏
◎家庭は過去將來の連鎖……法學博士 浮田和民
◎兒童に對する保護……法學博士 小河滋次郎
◎暴言を吐く婦人……法學博士 上杉愼吉
◎家庭と調和的精神……中島德藏
◎皇后陛下の御歌……遠山稲子
◎靜御前論……文學博士 建部遯吾
◎廣義の節操……安井哲子
◎その日／＼……三宅花圃
◎大倉德子夫人を訪ふ……すが子
◎女學校教員室の一時間……
◎鑛山の奧樣生活……くれなゐ
◎三月の料理と三月の活花
◎訪問の心得……中島義式
◎娘の卒業後
　(一)家庭の實地……中野武營
　(二)貧乏世帯……工學博士 高橋豐吉
　(三)卒業後の氣風……理學士 吉武榮之進
◎防腐劑と食料貯藏……農學士 西村實三
◎いろ／＼の女中……尾島菊子
◎家庭十二ヶ月……森しづか
◎日韓巻と夫婦巻……佐藤あき
◎この頃の遊覽地……坂本紅蓮洞
◎女子と法律……法學博士 川名兼四郎
◎熊野御前……いれ子
◎雛遊び……文學士 藤懸靜也
◎英國人は日本婦人を解せず……秋元春朝
◎少女の同情を養ふ人形遊……岸邊福雄
◎雛祭りの教訓……高橋平三郎
◎芝居から受くる教訓……巖谷小波
◎時々の境遇に處する道……宮田脩
◎婦人美發揮の根本義……文學士 下田次郎

東京麹町區飯田町四丁目四番地　**東京社**　電話番町二三三九番　振替口座一一八一八

女（ほの三）



荒れたる肌を美しくする
氣のある、匂ひの高尚な
大學白粉
大學化粧水

# 玉の御影



故大勳位 山階宮菊麿王殿下の第一女王安子殿下、第三王子藤麿王殿下 第四王子萩麿王殿下

# 新夫人の面影



松方正熊氏　夫人登美子　（海軍大將山本權兵衛伯第五令孃）

# 毛髪の艶を美しくする
# 椿製ランラン香油

ランラン香油は髪をさらりとして常に御使用被下候はゞ決して臭氣を發しませぬ



東京市内……到る所油店小間物店有……

價 大瓶金廿五錢 小瓶金十八錢

發賣元　大阪市新町

**福田源次郎商店**

電話西千六百〇一番　振替大阪一四八五番

東京市日本橋區馬喰町三の廿二　**福田號支店**

（一〇八）

# 婦人へ相談

## 月やく滯又は不順

等を人知れず秘密に治療せんとするのが女の性癖である、夫故往々有觸れた無効の藥などに迷ふて後日の大病を引起す人が多い、此等の婦女に斯道大醫の方劑を仰ぐと同様最も安心に快通流下する靈藥をお知らせするから、郵券三錢を添へて申込みあれ密封にて詳報す

東京市京橋區金六町三番地　笹山むめの

---

# ◎産婦人科
# ◎小兒科

宅診　午前
往診　午後

病室並ニ産室ノ設備アリ隨時入院ノ需メニ應ズ

院長　女醫　鷲山改姓　吉岡彌生

東京市麴町區飯田町四丁目卅一番地

## 東京至誠病院

電話番町(二二五七)

---

# 出たり!!

嶄新奇拔な發明品

## 時計形銀貨入



○本品は圖の如く片側十六形龍頭引廻薄形流行の時計形にて蓋を開けば優美高尚なる錦の巾着を仕込み巧妙嶄新なる細工は一見流行時計の如く婦人少女用至極ハイカラなる銀貨入なり

◉鎖、磁石、一組進呈す

鍍金メッキ　一圓廿錢
白銀上製　九十錢
白銀並製　七十錢
送料十錢

大阪市東區上本町九丁目
振替貯金口座大阪九二一九

## みかど商會

---

改良

# ね小便袋

◉子を持つ親 病人ある家人は是非必要 特許品

定價 ●乳兒用 九拾五錢 ●中人用 壹圓貳拾錢 ●大人用 壹圓九拾五錢 特別製品各拾五錢上り

送料各拾錢



衛生最良徳用輕便れ小便袋は洗濯の世話なく手數を省き小便は袋の外へ洩れず蒲團を汚す事なく常に清潔なれば**小兒病人**、老人の最も必要にして、おきたち、すわり等に毫も差支なきは本品の特長なり(男女の區別あれば御注文の節御注意を乞ふ)

**ルーデーサック**(十二個五十錢 三十個一圓 五十個一圓半 送料八錢

**子宮サック** 特製七十錢 二個一圓廿錢 三個一圓六十錢 送料八錢

註文切手代用必ず一割増

振替口座東京八一九八番

發賣元 大阪市東區京橋二丁目 常盤號ゴム部

●注意:各所に合羽製の粗品有り:御注意を乞ふ●

東京市九段下 神田今川小路二丁目十一番地

はなたかくするほう

# 隆鼻術

午後夜間

和田耳鼻咽喉醫院

---



東京神田裏猿樂町

## 東洋音樂學校

電話本局三八五四番

本科、特別科、本校及東京音樂學校入學豫科

男女生徒募集

東京音樂學校教師ユンケル氏ヲ顧問ニ同ウエルクマイステル氏及本邦教師增聘各科共懇切ニ教授ス

右入學志望者ハ至急申込ミアレ

---

男女ちゞれくせ毛赤毛は何程の難毛も直に根本的矯正黒化良き艶の出る最新發見奇液を郵券封入申込の方に教授し誓て美髪に治して差上升

東京麻布區材木町

岩阪澄子

---

# にきびとり化粧水

本品は有名なる獨逸專門大家の調劑にして多年の經驗と最新の學理により精製せられたる化粧水なり常に本品を愛用すればいかなる吹出ものと雖ども二三瓶にて必治は實驗者の證明なり幸に御試用あらん事を乞ふ御一報次第速に郵送す定價郵送料共一瓶卅錢（但郵便切手は一割增）

化粧水ベヒロン發賣元 東京淺草千東町二丁目二三五

小林榮達堂

---

目下大流行のダーリヤ（天竺牡丹）種子特價分讓

△一重咲一重筋入咲八重咲カクタス咲紫花笠亂菊咲五十餘色混合一組五袋特價三拾錢

△春蒔和洋草花種子十五種混合十五袋一組特價三拾錢

△但し明細書入用の方は郵券封入申込次第送呈

千葉縣君津郡湊町

獨樂園

---

# 蹄鐵印 シャトーリヨン 白赤葡萄酒

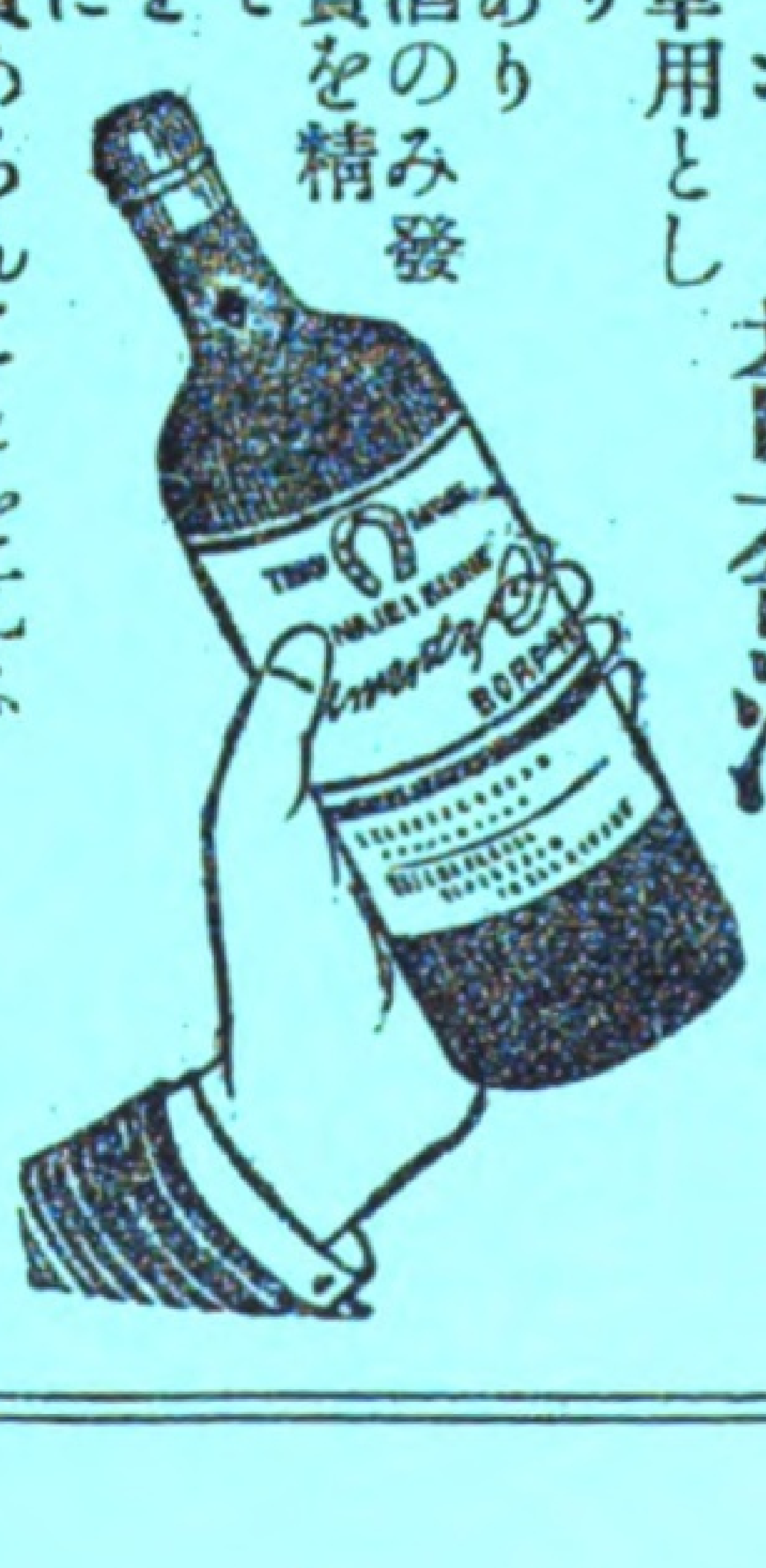
は藥用飲料並に食卓用として御進物に最も妙なり

●至る處に取次店あり

本品は從來赤葡萄酒のみ發賣の處今回更に品質を精撰し最も純粹にして善良なる白葡萄酒をも輸入發賣仕り候に付御愛飲の上御稱贊あらんことを乞ふ

東京市本町三丁目

電本局長一四三五



鈴木洋酒店

女（への三）

實用 文字速成通信 教授

○悪筆は一生一代の恥です○

本會獨特の特許速成の方法に依れば如何なる悪筆の方にても直に上達すること不思議のやうです、ゆえに先づ見本説明書を御請求なさい、直に送呈致します

○女子會員募集―今や入會の最好期也○




專賣特許第九五五九號
專賣特許第一七九一〇號
實用新案特許第四八七三號

▲本會書者兼講師
小野鵞堂先生
玉木愛石先生
稻川雲谿先生

▲外講師大家數拾名

▲見本詳細會則無代進呈

東京本郷區大學正門前
電話下谷三〇壹壹番
電話下谷三貳壹〇番

# 帝國習字速成學會

文(への四)

# 令嬢鑑



右　子爵松平康民氏令嬢隆子（本郷龍岡町）
左、伯爵徳川達孝氏令嬢艶子（三田綱町）

雛かざり



女（との一）

●大隈伯爵令夫人御賞讃
●村井弦齋令夫人御賞讃

御化粧料皮膚の營養品

# 早稻田の華

定價一瓶金貳拾錢
送料荷造共金五錢

本品は植物より採取したる、溶解性蛋白質にして、在來の化粧料と異り、一度之れを、塗沫すれば、直に皮下へ注入せられ、皮膚の營養光澤を增し、天與の美質を保ち、皮膚のあれ「ヒビ」「アカギレ」「シモヤケ」「日ヤケ」「海水ヤケ」等に患む事なく最も「おしろい下」には「おしろい」ののりよく美顏となり給ふべし

大隈伯爵令夫人曰く「誠に結構なものが出來ました之れで皆さんが美しくなられて世界の美人國と言われたいものです、」

村井弦齋令夫人曰く「先日頂戴した、化粧水を試みに子供の「シモヤケ」に付けましたら大層よく利ますす何卒今少々送つて戴きたい、」

皮膚の營養だに足らば、天然の美容を備へらるべし

東京市牛込區早稻田鶴卷町
尾崎兄弟商會

製造發賣元
大隈伯爵家養鷄場

特約販賣店

東京市麻布霞町　糠精販賣元　南信堂藥舖　口座東京七八五〇番

東京日本橋（水天宮前）象印齒磨本舖安藤井筒堂　口座東京二九五〇番

京都西洞院花屋町　糠精特約店　高橋龜次郎　口座大阪一〇〇四五番

◎賣捌所は全國到る所の有名なる呉服店及賣藥店化粧品店雜貨店にあり御最寄にて御購求を乞

# 懷姙避姙自由自在

全壹册
拾五錢
送料貳錢

子なき人は本書を讀みて懷姙の法を知るべく又子が出來て困る人は避姙の法を知るべく實に本書は懷姙避姙を望むが儘に自由ならしむる秘訣書なり郵劵代用必一割增

大阪市東區鎗屋町壹
和泉屋

# やせる藥

●多血症●脂肪過多●中氣●便秘●酒ぶとり●凡てふとりすぎて御困りの方に害なく●やせて●中肉美容となる新藥なり試みたき人は郵劵二錢送れ詳細報知す

東京市小石川區第六天町一七
池田製藥舖

◉子を持つ親
◉病人ある家人は是非必要特許品（特別製品各拾五錢より）

定價●乳兒用九拾五錢●中人用壹圓貳拾錢●大人用壹圓九拾五錢

# ね 小便袋



送料各拾錢

衛生最良徳用輕便れ小便袋は洗濯の世話なく手數を省き小便は袋の外へ洩れず蒲團を汚す事なく常に清潔なれば

## 小兒病人

老人の最も必要にして、おきたち、すわり等に毫も差支なきは本品の特長なり（男女の區別あれば御注文の節御注意を乞ふ）

## ルーデーサック

十二個五十錢　廿五個一圓
六十個貳圓　送料八錢

## 子宮サック

特製七十錢　二個一圓廿錢
三個一圓六十錢　送料八錢

注文切手代用一割增
振替口座大阪八三一〇番

發賣元
大阪市東區鎗屋町一丁
和泉屋商會




日本輸入品に限り包装紙に斜に「**アイボリー石鹸**」と記入し一見模造悪質石鹸と判別に容易ならしむ御購求の節「**アイボリー石鹸**」に御注意を乞ふ

---

東京皮膚病院發明山崎製

# 毛生液

禿、脱毛、薄毛、生際悪き人試みよ……



本劑は第一毛をはやし、ぬけ毛を止め、髪の毛はへぎは眉毛髪等の薄きをこく生じ皮膚病でき物ヤケド跡はげ其他あるべき所に毛なきに用て毛はへる事請合

○藥價三十錢、五十錢●特製一圓、二圓●送料六錢

本舗 東京市日本橋區馬喰町二丁目 山崎愛國堂

---

本法は

# 女髪結師安部歌子女史

ちゞれ毛くせ毛 毛はへうけあい 一大奇方劑

●東京市麹町區三番町六十七

多年の實驗を經たる證明秘法劑にして是迄の使用者を悉く滿足せしめたる奇劑なり往復端書紹介詳報す

濟世園

---

●婦人科 明治療院

殊に月經障害、内膜炎、姙娠、膀胱病、ヒステリ

生殖器病 専門治療從前通り

東京淺草七軒町二 院長 平田章之丞

---

竹柏會は佐佐木信綱氏指導のもとに清新なる和歌に志ある人々のため添削質疑に應じ又毎月一日雜誌『心の花』を發行す入會規則書は郵券二錢『心の花』見本は郵券十二錢を送られなば直に發送すべし

東京神田小川町一 電話本局一一一四

竹柏會

---

# 肺病

私儀多年肺病にて九死の際偶々一奇藥發明の爲め全治せる故世の同病者を救ひ度き志願に付望の方は郵券二錢封入にて御照會あれ

京府下大森入新井村 川名助次郎

女(との三)

舶來ライロホーン 兩面盤音譜◉於内外諸博覽會名譽賞牌各種受領

女（との圖）

多數着荷

# 三光堂製クラウン片面音譜發賣

（明治四十四年三月吹込新製）

樂隊 ｛東京行進曲、鐵道唱歌 愛國心戰友、野崎村 等

小唄 ｛とつとれ、おいとこ、さのさ、芝で生れて、かつぽれ、新ラツパ節 等

新内—富士松加賀太夫演奏—蘭蝶 明烏 等　富元 歌馬 玉川 長世 等 其他

謠曲 高砂、松風 熊野 八島 等　歌舞伎諸名優臺詞 數十種

◉尚三月吹込の新曲譜發賣仕候

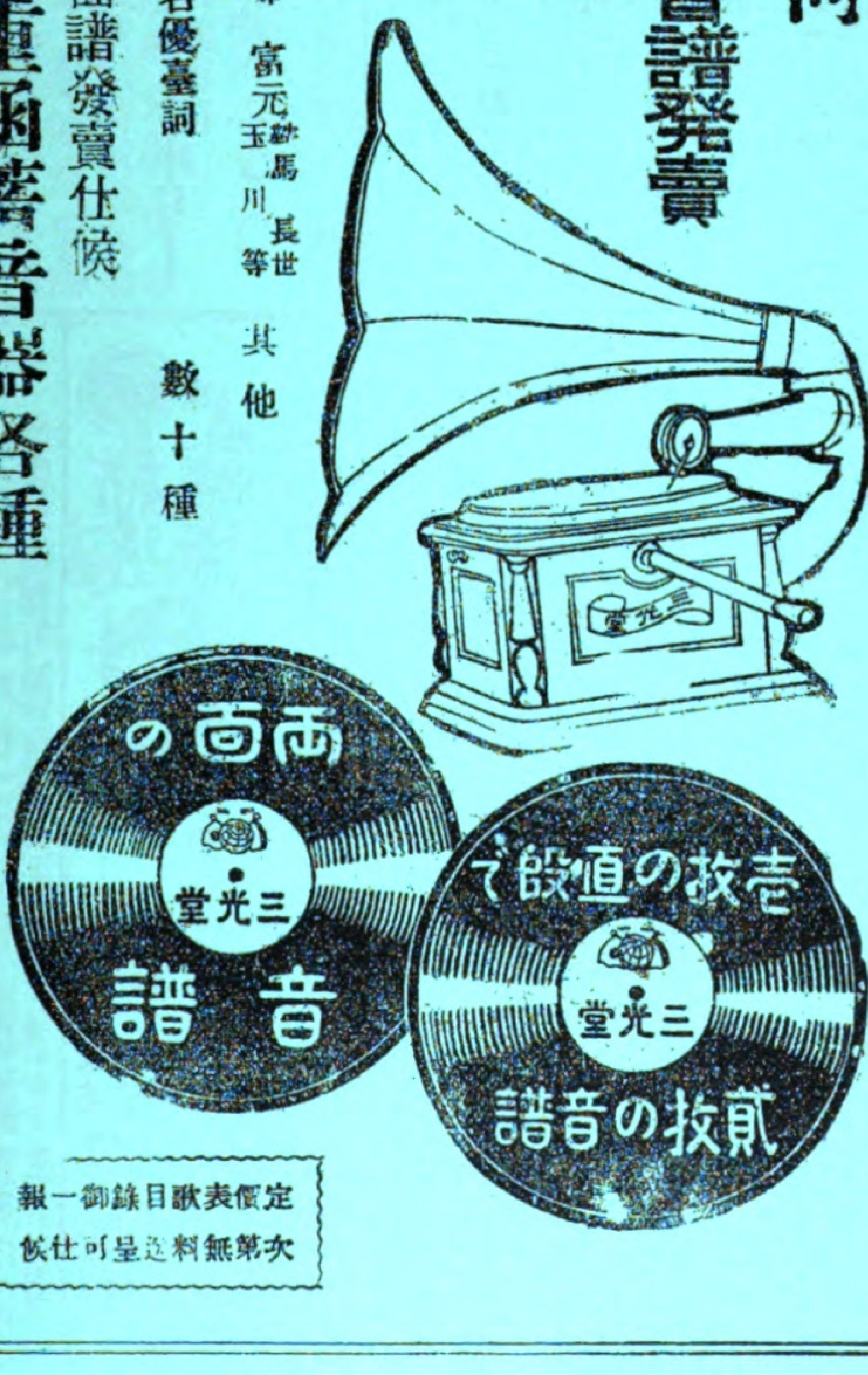
專賣特許 連動蓄音器 新案特許 重函蓄音器各種

東京市銀座一丁目 長電話京橋九九七八 振替口座東京六四二五九

東京市淺草區並木町 長電話下谷九八八 振替口座一九八八四

大阪、博多、小樽

# 三光堂




定價表歌目録御一報次第無料送呈可仕候

# 新婚の春



子爵戸田康保氏（雑ヶ谷旭出戸田家 新夫人昭子（松平康荘侯令妹）

令孃かゝみ



上、中野美保子（麻布狸穴町）下、平井政子（淀橋柏木）中央、上野綾子（芝）

上、豊島つぎ子（小石川）

下、中江れん子（本郷弓町）

化粧香水

# プラチナ



八方美人の香水

世に香水の數は山々あれど悉く一品一効で人の鼻を衝くだけの効能さい持つて居ないが此のプラチナ香水は

◎ハンカチーフに一二滴たらして持てば終日香氣を保ち
◎微温湯に濁らせば乳白の化粧水と變じ
◎顔を洗へばニキビ、ソバカス、吹出物を全治し
◎頭髪に塗抹すれば毛髪を養ひ香氣馥郁香油の代用をするのみならず髪のくせを直し赤毛白髪を防ぎます

故に人は本品を「八方美人香水」と云ふは尤なる次第である

定價壹瓶三十錢▼郵券代用一割増遞送無料

東京日本橋横山町一丁目
發賣元 近江屋 天野源七
浪花八六三番・振替口座五九三三番

---

宮内省御用達

ヒゲタ醬油

千葉縣銚子港
田中玄蕃釀造

伊國皇室御用

女(ちの一)

# 肺病患者に警告す

醫科大學藥學專攻
藥學得業生　金澤巖

肺病は難治の疾病にして病理診斷等の幼稚なる時代に於ては殆ど不治の病と稱せられたり此習慣久しくして今日尙必死と信ずる人多く敎育ある醫師と雖も患者が肺病の診斷を以て死の宣告となし失望悲嘆するを恐れ最末期に及び治療の目的なきに至り始めて實を告ぐる事多し故に輕症時代に患者は其覺悟にて充分攝生服藥せず又家族は平素消毒豫防せず爲めに一家傳染滅亡する事多し是實に大なる迷信にして此考への爲めに生ずる人生の不幸は極めて多大なりとす不肖往年肺病に罹り一時は不治と決心したるも多數の成書を涉獵し大に悟る所あり現今醫學上の方式を原則として自ら實驗に實驗を重ね攝生療養に力を盡し又藥化學上の原理を應用し一新藥を發明し終に自個の病軀を全治し舊倍の健康を得るに至れりその藥物を**キニトール**と號し發行せるに既に一幾千通の全治輕快の報告實證を受領せり爾來十箇年間に於る學界の進歩と實地の經驗を鑑み數次の改良を經て『第三**キニトール**』を發行せり此新藥は少くとも現代に於ける理想的肺病治療藥にして消化器を害せず食氣を進め全身の營養を增加し精神を爽快にし熱を去り痰を切り咳を鎭め肺病の各症狀を寛快し病原菌を擊退し漸次體量を增加し全治に至らしむるもの也同病患者にして一度使用せらるゝ時は自覺するを得べし尙委細は東京市下谷區上根岸町金澤巖宛御申込ある時は報告と同時に詳細の養生書一冊を進呈すべし（文句の盜用嚴禁）



# 婦人技藝材料

營業目錄
袋物、造花、刺繡
摘ミ細工、果實、瓶細工
編物、器具並に材料

東京市本郷區弓町二丁目
倉持商店
電話下谷三五一三、振替貯金口座壹七壹壹壹

此切取を添へ御申越しの方へは美術技藝の栞並に定價表無代進呈す
（女學世界三月號）

# 女學生

毎號懸賞讀者文藝募集



三月一日第三號發行
價五十錢郵税壹錢半

參月號

口繪石版密刷數葉木版其
他數葉毎號懸賞文藝滿載

○少女歌劇 はげみの鐘……さむしろ
○貞女の鑑 袈裟御前物語……かさゝぎ
古武士の妻の哀れに床しき精神……
英米佛三様の婦人氣質……
苅萱道心と石道丸……
老夫人新夫人評判記……

## 現代の女らしき女

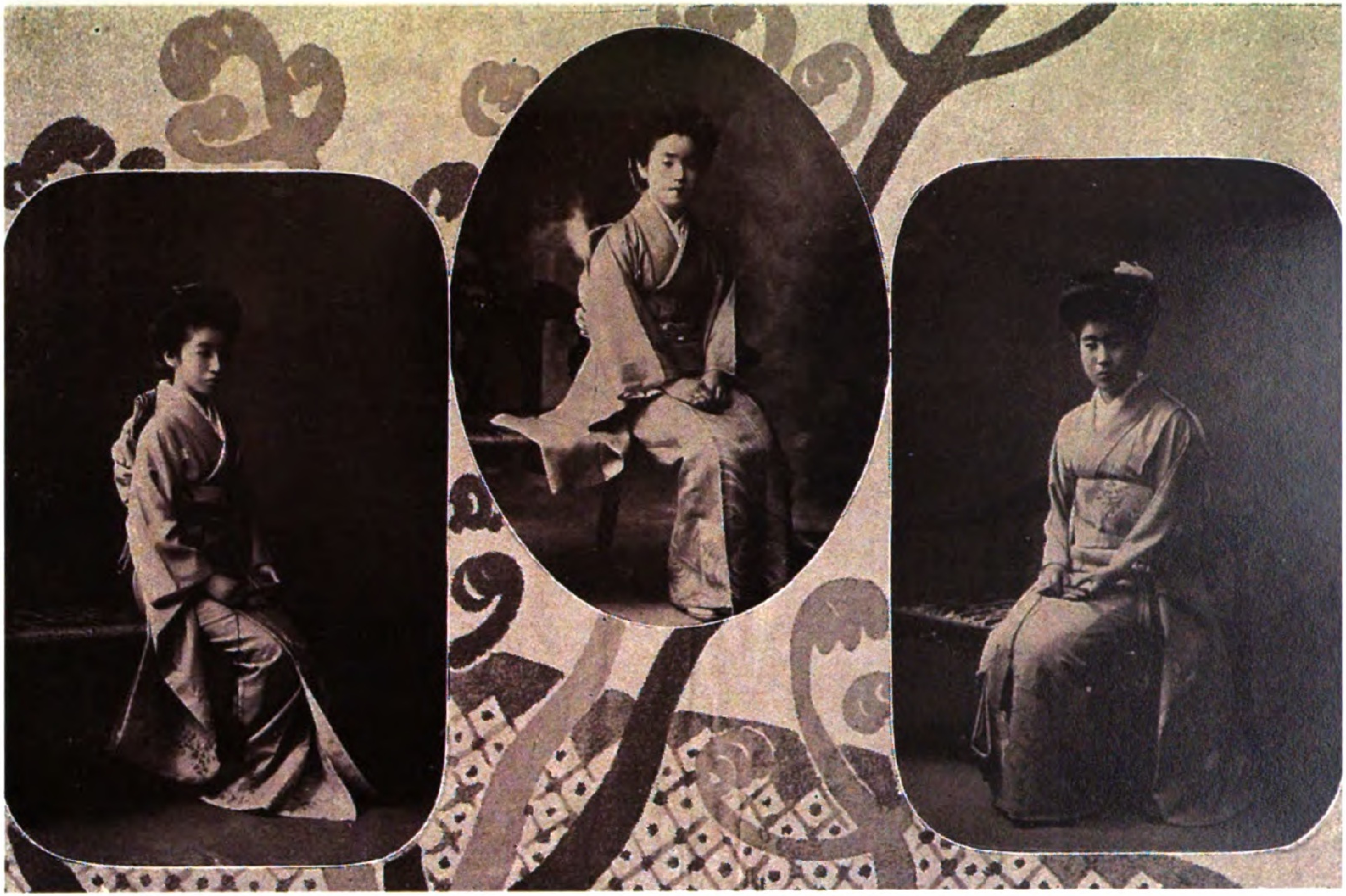
日本女子大學校長 成瀬仁藏
女子學院長 矢島揖子
女子高等師範敎授 下田次郎
法學博士夫人 鳩山春子
成女高等女學校長 宮田脩

切腹して下さい骨丈は拾ひます……
都下女學校評判記……
病人と嬰兒を連れて敵中を免る……
古歌に現はれたる我祖先の戀愛……
○嫁としての保證金……新渡戸博士
○英雄は婦人に近し……三輪田元道

發行所 東京神田旅籠町一 文光堂 振替口座東京一九五五番

女(ちの三)

令嬢かゞみ



右、貿易商　米井源次郎氏令嬢喜代子（麹町三番町）
中、貿易商　佐野理八氏令嬢つる子（青山）
左、貿易商　瓜生寅氏令嬢久芙子（角筈）

# 令嬢かゞみ

右、紳商菊池長四郎氏令孫きぬ子（下谷竹町）



左、紳商中澤彦吉氏令孫玉子（京橋新佃島）



獨乙國バイエル會社製

# 治肺新藥

# グワヤコーゼ

グワヤコーゼは獨乙國バイエル會社が最近治療學上の學理に基き製出したる卓越の効ある呼吸器病新藥にして、祛痰を容易にし、咳嗽を治するの効速かなるのみならず、食慾を進め營養を増進し體重を増加し、進んで結核病竈に特趣の殺菌作用を營むを以て、急性及び慢性氣管支炎、肋膜炎、肺結核に比類なき効を奏す。

▲一回四乃至五グラムを水又は牛乳に混じて食後一時間を經て服用すべし。

▲一瓶百グラム入として發賣す。

輸入元横濱市山下町七十番カール、ローデ商會

（説明書進呈）

◉血液と体量とを速かに増加する
卓越なる滋養强壮劑

# ソマトーゼ

# SOMATOSE

ソマトーゼは十七年來血と肉との素として醫家の賞讃を博し來れる卓越なる滋養强壮劑にして食慾を進め血液と体量とを増加し氣力を旺盛ならしむること最も速かなれば、体質及び氣力の衰耗せる者、貧血症、慢性胃腸病者、肺結核、神經衰弱、熱性諸病、及び疾病の回復期にあるもの等に用ひて卓越なる滋養强壮の效を奏す。

ソマトーゼは又婦人の乳量を増加し其成分を濃厚ならしむる特効を有し又發育不良の小兒をして完全の生育を得せしむ。

詳細の説明書は無代進呈仕り候

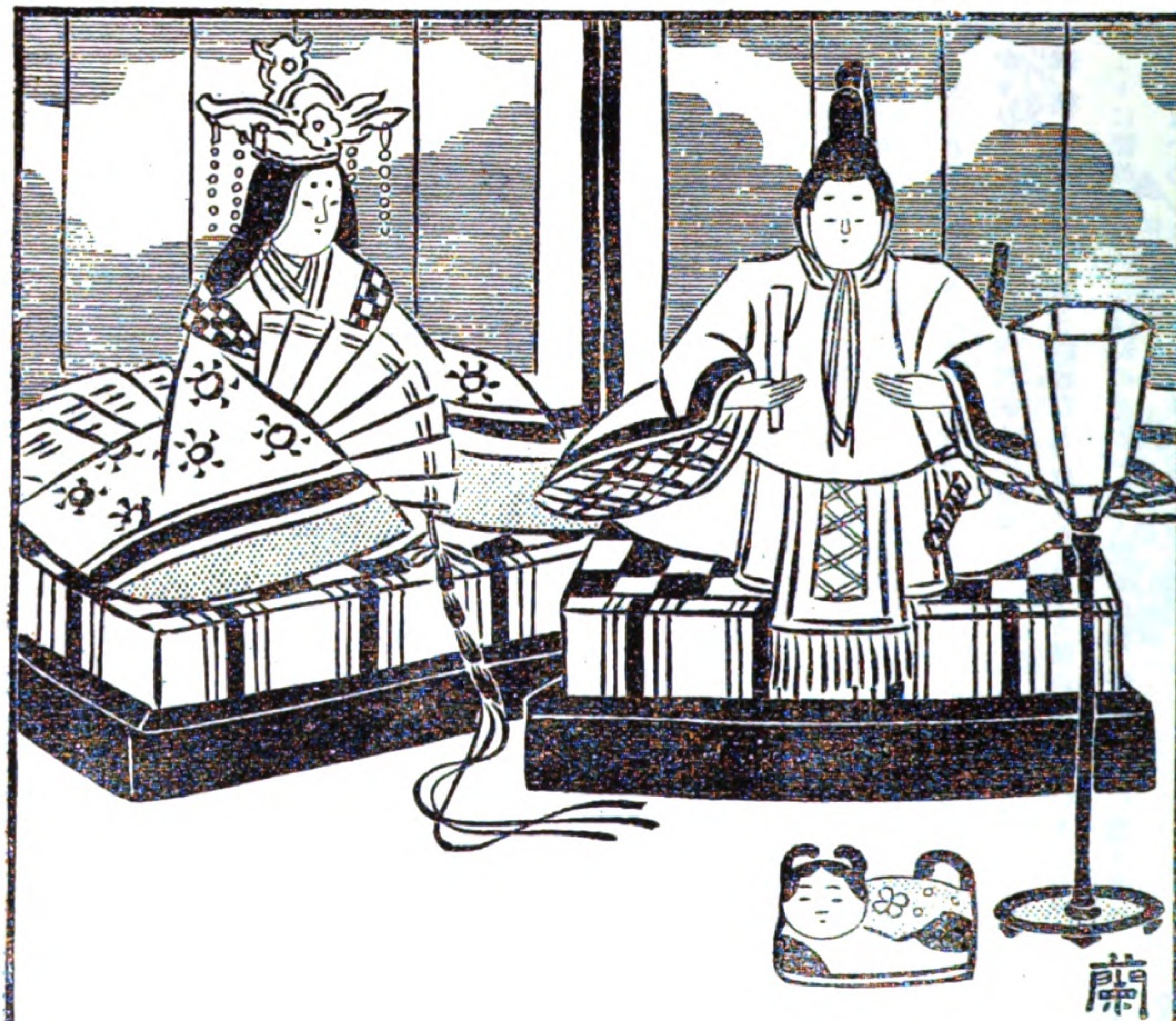
輸入元　横濱市山下町七十番
カール、ローデ商會藥品部

女（りの一）

女（りの二）

女(りの三)

女(りの四)

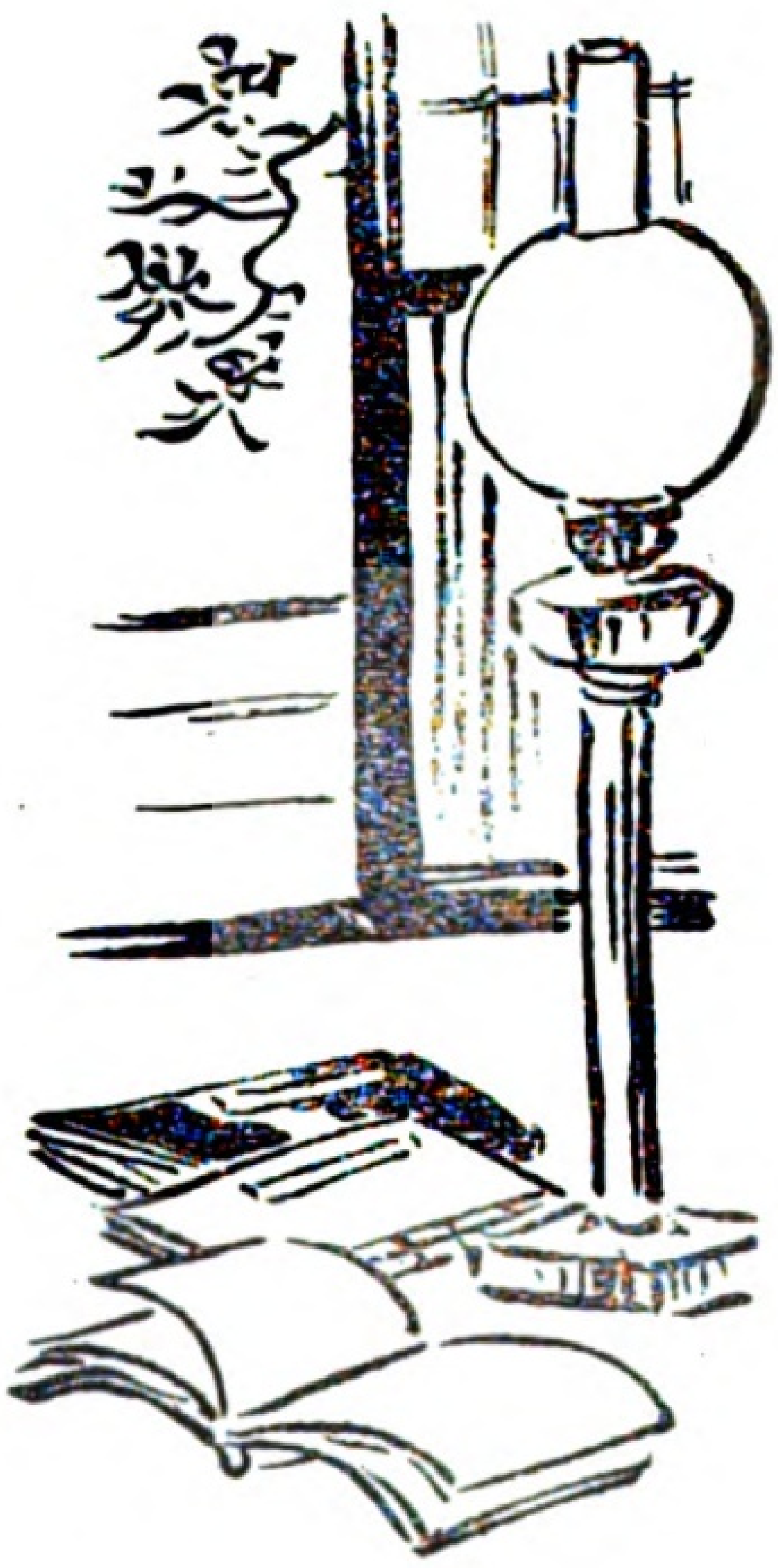



# 女學世界

第拾壹巻

第四號

三月號



# 心の束縛を脱する工風

大内青巒

今日の宗教界で學問道德の高い老大家といへば、まづ大内青巒居士を第一に推さずばなりますまい。居士は佛教界の先覺者で維新の當時より、四十有餘年間佛教の弘道、普及に盡力され、説教に講話に、法談に、慈善事業、救濟事業、敎育、感化事業に心をそゝぎ身を致された方でございます。記者一日居士をお尋ねして修養談をうかゞひました。お話は現代婦人の通弊ともいふべき煩悶、狹量、自我執着に對する篤き訓戒など頗る有益なる談話でございました。こゝに記載したのはほんの其一端で記者の禿筆は十分に盡す事のできないのを遺憾と存じます。（婦人記者識）

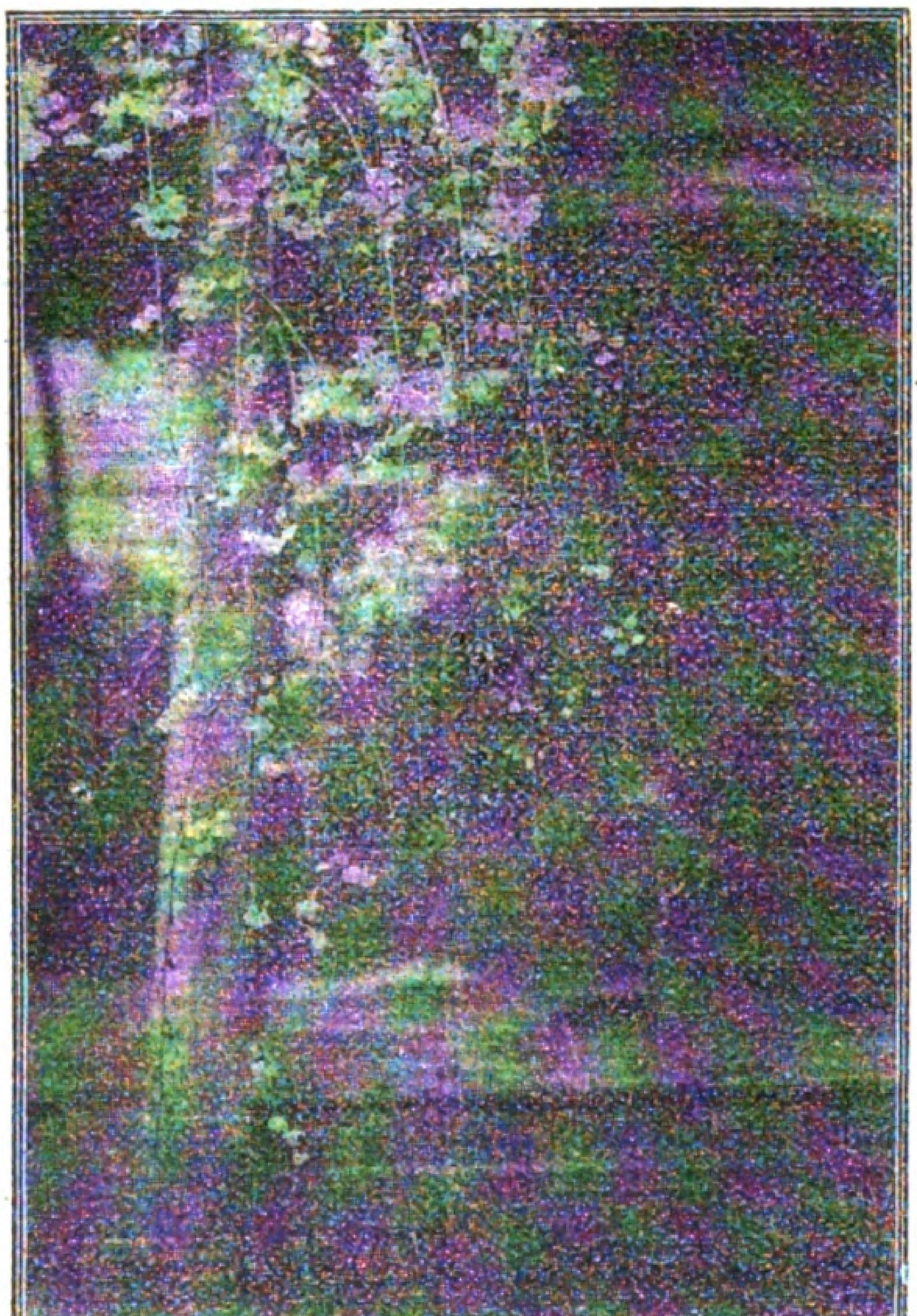
維新以後長足の進歩を爲して列强と肩を並べる地位に上つた我國民が、今日のやうにこせついて居るのは面白からぬ現象で、特に愛の化神、慈の泉と喩らるゝ婦人達が、切詰た、餘裕のない性格に傾いてゆくやうでは、迚も國運に釣合ふ民草を養成することは覺束ないのであります。

## ▲神經過敏の結果

昔の人間は一般に泣子と地頭には勝れぬと云ふ諦め方であつたから、長上の命令を守るのに潔かつた。泣子と地頭に服するのは卑屈盲從の行動で、弊害も勿論伴ふのですが、昔の人間は神經遲鈍であつたので、格別の苦痛もなくて濟んだのです。ところが今日の人間は智識が發達して、神經過敏となつて居るから、長上の命も事毎に批評を企て、左程にもないことまで腹の内で一々理窟をつけて見ると云ふ風になつた。この神經過敏となつた爲に、心の餘裕を失ひ、煩悶の結果自殺を企てる婦人なぞも多くなつて來やうであります。

## ▲自然に一致する心掛

今後の婦人は泣子と地頭などと云ふ盲從的の卑屈を脱しなければなりませんが爰に深く考へてもらひたいのは、自然に任せる、自然に一致すると云ふことであります。假令ば櫻が散り、楓葉が散るのは天然であるから、如何に惜んでも止めることは出來ぬと同じく、世の中の物事には人力でどうすることも出來ぬ、自然の成行と云ふものがある。この成行に逆らつて不平を抱いて見たところで致方がないから櫻の散り楓葉の散るのも天景の美妙と感じて樂しむやうに何事も吾が修養として樂觀すれば何時も心に綽々の餘裕を得るのです。


春雨にあらそひ兼て我宿のさくらの花は咲初めにけり

## ▲鏡の照映する例訓

此世の萬事萬物が自分のために存在して居るやうな考へを持つのが婦人の常でありますが、これが煩悶の基になるのです。例令ばこゝに火鉢が一つあつて、この火鉢が他を觀察することゝ假定しますと、此座敷も疊も火鉢のために作られたもの、その疊を置くために床あり床のために地面あり、私も貴女もこの火鉢あるために對話して居ると云ふことになる。又この菓子箸から他を見れば、菓子箸あるために菓子皿あり、盆あり盆を乘する卓子ありと云ふ風で、猫の社會、犬の社會から見たならば、自分等のために人間を始め萬物が、

生存して居るやうに見ゆるでせう。吾々も確かにこの自惚を持つて居るのです。併し世の中は持合ひもたれ合で、決して主客の類別は出來ません。華嚴經に、一室に十の鏡をかけた場合には一面に映る物影が他鏡に映じ、又その形が他の鏡面に映じて、十鏡互ひに相照映するので。何れを主の鏡と定めることは出來ぬと云ふ例訓がありますが、實に社會はこの通りのもので親子兄弟夫婦の間柄の如きも互に持合ひもたれ合ふて十鏡の相互照映するごとき關係があるのです。この考を持て生活すれば少しも不平不滿はない筈ですが、婦人は兎角自己中心主義に傾き易く、親や良人は自分のために親切を盡すべきもの、召使は自分のために手足の如く働くべきものと云ふ考が腹の底にある。ところが左樣旨くゆく理窟がないから始終煩悶が絶ないのであります。



雀子も來るや雛の膳廻り

## △一枚の衣服を持つた女と十枚持つた女の比較

十枚の衣服を所持して居る婦人は一枚の衣服を持て居る婦人より煩悶が多い。無教育の女より學問した女の方が苦痛を感ずることが深い、畢竟己と云ふ範圍が殖えれば殖るほど己を捨にくゝなるのです。己を捨得ぬものは心の束縛を免れない。己を捨得ぬ者が難事と出遇ふと遂に身を失ふにいたるので現今自殺する婦人なぞも生活や敎育の程度が可なりであるのが多いのであります。

さらば無智無識の女が幸福かと云ふにこれは禽獸と等しいので己を捨るのではなく己を自覺して居らないのであります。本當に己を知らなければ己を捨てることは出來ません。

## ▲心の束縛を脱した人

氣ずゐ氣儘の女は束縛を免れて居るやうに見えるが却つて心を束縛されて居るのです。氣ずゐ氣儘のものは自然に任せる心の餘裕を失ひ儘ならぬ世の中で己が儘を爲たいと望むからその苦しみに心を縛られて居るのであります。半可通の教育を受けた婦人によくある短處はこれであらうと思ふ。深く修養を積んだものが却つて平凡の如くに見えるのは高山に登りつめれば麓に降るのと同じ事で、この麓に降つた者が眞に心の束縛を脱し得るのであります



書法の手ほどき

加藤繁子女史と其敎へ子

## ▲看護婦の心持となれ

良人の虐待を怨み歎つのは畢竟良人が自分の思ふ通りにならぬと云ふことであります。妻は良人の看護婦の如きものである。看護婦は受持患者の病苦を憐れみ介抱するのが務であるのに、あの病人は私の思ふ通りにならぬと云つて苦情を鳴したら可笑しなものではありませぬか。世間の不德なる良人は恰も魂が病氣にかゝつたやうなものであるから看護婦たる妻はこの病人に對して怨んだり憤ほつたりする理由はない。どこまでも憐れむ心を以て良人

に對すべきであります。この愛憐の情は人間道德の上乘なるものである。解脱安心と云ふことを誤解すると、放縱、怠惰で宜いと云ふ意氣地なしになり、又生遍若に解脱すると、自分ひとりが脱俗しては他が皆な馬鹿に見えると云ふ暴慢に陷いる。それ故少し宗教をかぢつた生悟り貴婦人などが、いやに取すますのはこの加減である。本當に解脱したものは慈悲を行はずに居られなくなるもので、如何なる相手に對しても看護婦が病者に盡す如く各自の天職に精勵するやうになるのであります。

## ▲佛教の眞意義

地方局長の床次氏が歐米を視察して深く宗教の必要を感じ著書歐米小感の巻頭第一に宗教を説かれました。我邦は維新以後、行政法律等の組織よく整ひ、卒土の濱まで律令がゆき渡りこれと同時に政法を執扱ふ人物は續々養成されました丁度汽車も運轉手も完全に揃つたのですから、車は縱橫自在に進行出來る筈であつたが、イザ引出して見ると、思ふやうに車が動かなかつたのは、道路が荒て居た所爲でありました。道路は即ち人の心で、折角の律令も人心の荒廢して居た爲に實施が困難であつたのである。人心の荒廢したのは羅馬法王の專橫なぞを見聞して宗教を弊害視するものが多くなつた結果でありました。ところが近來教育家が宗教を歡迎するやうになり、宗教家の方でも教育的の智識が養はれて追



お茶の水幼稚園

追一致する傾になつて來たのは誠に喜ばしい現象であります。そこでこの宗教の中で尤も古くから日本に行はれて居るのは佛教ですが本當に佛教の眞意義を解した者は甚だ少い。彼の苦しい時の神頼的佛教や、弔祭的の佛教は一番よく世間に往わたつて居ますが、是等は本の佛教の一部で、決して眞意義ではありません。佛教は前に述べた解脱、慈悲が本義でありますから、精神教育の基礎として頗る有力のものであらうと思ひます。

## 婦人のゆかしい態度

西洋婦人は、全身のスタイルに深く注意を拂つて、其スタイルの中に、人に對して親切らしい動作も表はし、又威嚴も之に因て保たうと思つて努めて居ります、今の日本婦人が、西洋婦人の此動作全部を完全に學び得たならば醜いことは少しもありません、寧ろその態度は、立派に見えるでありませう、けれど日本婦人が西洋婦人のスタイルを學ぶとなると、多くは單に形の上のみで、その精神は忘れて居ります、加ふるに生活上の風俗習慣が全然異つて居るのであるから、精神を忘れて形のみを取るとなると、それは甚だ見苦いものになつて了ひます、例令ば西洋婦人は椅子に腰を卸すにしても、ドンと卸す、是れは彼等の精神が、ドンと亂暴に坐らうと思ふのではなくして、健康な體の力が餘つて、然うなるのであります、それを日本婦人が形だけ倣つて、疊の上にドンと坐つたら、何うでありませうか、又立つて歩くにしても、怯めず臆せず、平氣に往く、その天眞爛漫の風姿は、彼等に於てこそ、美しくも無邪氣にも見えるのでありますが、若し日本婦人が之を眞似たならば、言ふまでもなく甚だ粗暴に見えます、日本婦人の服裝は何うしても足許の方に意を用ひなければならないやうになつて居りますから、勢ひ天眞爛漫に濶歩する譯には往きません、又此現在の服裝の改良せられざる限りは歩むにも注意周到に步を進むる處に、日本婦人の捨て難い趣きも見えるのであります、それから又、西洋婦人の服裝ならば、下半身は始終自由にして、重れても、褄先が不揃にしても、一向醜いことはない、處が西洋婦人に接近して居る日本婦人が、見様見眞似に、斯う云ふやうな態度をすると、其無作法は見るに堪へないことになつて仕舞ひます、これは一二の例でありますが、斯う云ふやうなことが往々あらうと思ひます。（三輪田元道氏）

# 偉大なる國家的觀念と純粋なる母親の感情

女子高等師範學校長　中川謙二郎

この一編は明治母の會新年會の席上にて演べられた中川先生の御話の大要であります この外に猶當日は平岩先生と野口復堂先生の有益な御話がありましたけれど今回は中川先生の御説だけ掲ぐる事に致しました　記者識

母が子供を生んで、其の子が又子供を生むのだから、現在の母は母の母、或は將來の日本人の母といふ事が出來ます。そして將來の日本人は何うなるかといふ事は、主もに、現在の母たる人にかゝはつて來るのですから、母の立場は實に重いものと言はねばなりませぬ。今日本人の立場を考へて見ますと、我々はお互に、世界人類の幸福の爲めに、將來益々發展しなければならぬと思つて居ります。其の將來の發展を雙肩に擔つて立つ所の子供を生み、之を育てゝゆくのは母であるから、母たる人の國家に於ける地位は、我々の想像以上に重いのであります。不幸にして母が不健康であるならば、忽ちそれが國民の身體に反射すると共に、母の健康がます〳〵良い方に趣くならば、將來の國民は今一段進歩した立派なものになる事が出來ます。精神上に於ても亦同じことであります。

更に方面をかへて考へて見ますと、我々の身體精神は、直接には父母から受けたものであるけれども、遡れば祖先より受けたものであるから、之を子孫に傳へるには、無論汚すことは出來ません。のみならず、如何にもして之を磨き、少しにても美いものにして後世に遺さねばならないのですが、之をするのは又母の重大なる務めの一つであります。斯樣に母の地位、其の國家社會に於ける立場を考へて見ると、母たる人は益々自重すべきであります。

## △比類なき國家觀念

特に注意して後々迄永く傳へて欲しいと思ふのは日

本人特有の國家觀念であります。我々は世界中他に比類なき一種特別の國家觀念を有つて居ります。我々が我が大日本帝國に對する觀念、感情、皇室に對する觀念感情は、外國人には殆んど了解出來ないのであります。が世の中が複雑になると、やゝもすると此の美しい感情が傷けられるやうな事が全く無いとは言はれません。けれども我々日本人に取ては次の國民の感情の基礎となり幹となるべきものは實に、何事をするにも國家皇室の御爲めであるといふ考でなければなりません。天皇皇后兩陛下は、我々の大きなお父樣、大きなお母樣であるといふ赤子の慈母に對するが如き其の深い熱烈なる觀念でなければなりません。故に之れは永久に我々の子々孫々に傳ふべきでありますが、之を傳ふる人は母より外にありません。



けさみれば汀の氷うつもれて雪の中ゆくしら河の水

### △幹となるべき精神

世の中は一日も進んで止みませぬ、物質的に於ても精神的に於ても、日日に變つて行きます。此れは進歩に當然伴ふ喜ぶべき現象で、水溜の樣にぢつとしてゐるのは決して望むべきではありません、即ち世の中は益々變つて行くべきですが、たゞ我々は根本を失はぬやうにしたいと思ひます。進歩は恰も樹の枝葉の如く、日本人特有の觀念感情は其の幹の如き狀態に於てずつと進

みたいと思ふのです。これは何人も恐らく異論はなからうと思ひます。母としては何人も子供を善くしたいと思ひませうが、之を善くするには、其の基礎となる精神が肝腎です。それも其の子が將來學者になるにせよ、軍人になるにせよ、或は政治家、實業家、教育家、美術家等、何になるにしても、たゞ漠と社會に貢獻させるといふ樣な考のみではいけませぬ。やはり右に述べたやうな純潔なる立派な精神が根本にあつて、其の上に働く日本人を作らねばならないのです。



ついて來て門で別るゝ胡蝶哉

### △性の別は子供は無意識

以上は社會上に於ける母の立場に就て述べたのですが、次に育兒に就て少しく御注意を願ひたいと思ふことは、第一、日本人はどうも早熟でいかぬと言はれて居りますが、これは子供の間に母親の躾方が餘程手傳つて居りはせぬかと思ひます。元來人間は幼少の時には男と女とを區別する考は有つて居りません。試みに男女の子供を手を取つて遊ばせて置いても少しも性の別を知らずに遊んで居ります。又身體の自然の狀態に於ても、男女の性の分れるのは、餘程成長した後のことであります。然るに世の母親達は人爲的に成るべく早く區別をつけることに世話を燒くやうな傾向はありはしないでせうか。或人はさういふ事をするから日本人に早熟早老の氣味があるのだ言つて居ります。果し

てさる事實があるか何うか、よくは分りませんが、其の有無に拘らず、教育上、家庭に於て母親達の手心で早く子供を男と、女とするといふ事は、好しいことゝは言はれません、女が嫁した時は知らず、成るべくさういふ事は餘り早く考へさせない樣にしたいと思ひます。

### △非常な不便と苦痛

次に子供を人形のやうに考へてゐる母親達が少なくないやうに見受けます。可愛がり過ぎるといふのでせうか、子供に非常な不便と苦痛とを與へて喜んで居る人があります。着物などは動かれない程澤山着せます。母親は美しい着物を着せてやつて嬉しいのでせうが、子供の身になつて見れば、着てゐる物は多く、裾や袂は長く、十分おいたも出來ず、隨分苦しい譯です。幼稚園などへ來てゐるのを見ても、倒んだら起きられぬやうなのがよくあります。どうか幼い間は斯かる不自然な拘束を加へずに、身體も心も成るべく自由に働かせたいと思ひます。其の自由なところにこそ子供の天眞爛漫なところが見られるのです。顔のおつくりをするにしても、極端なのになると、目の縁へ紅をピーッとにぢつたり、隨分可笑しいのがあるが、あゝいふ事を子供は果して喜ぶでせうか。これはほんの一例です。かゝる例はまだ外にもあらうと思ひ



母の愛

ます。即ち子供を玩弄物のやうに取扱ふ傾向があるのですが、之を將來の日本人の爲に考へて見ると、重大問題であらうと思ひます。一時の不注意の爲に、日本人の發育に非常な傷害を與へますから、之れも十分考ふべきことと思ひます。

### △干渉と放任の利害

今一つ、子供に嚴しく小言をいふのと、いはずに放任しておくのとは、何方がよいかと、能く人から質問を受けますが、若しいはずに濟むならば言はぬ方がよいと思ひます。口ぎたなく小言ばかりいふのは、決して善い事ではありません。けれども性質が惡るくて打捨て丶置けないやうな子供に對しては、十分干渉もし、小言もいつて、之を矯めることに力めなければなりませぬ。即ち其の子供の性質によつて打ち捨て丶置いてよいこと丶、惡るいこと丶あつて、絶對には言はれませんが、先づ干渉せずに濟むやうならば、成るべくしないで、爲すが儘にして置いた方がよろしい。又それが自然であらうと思ひます。ただ子供も二三歳位になると、友達等から色々惡るい事を習ふから、さういふ事は必ず嚴重に正さなければなりませぬ。即ち斯斯の事は必ず干渉せねばならぬと定めておいて、其の事柄は必ず干渉する樣にした方



日比谷公園の心字池

がいゝと思ひます。

### △規律的生活の準備

例へば寢たり起きたりする時刻をきちんと一定するが良いか惡いかといふと、子供に依つて定められない場合もありませうが、また醫者なぞの說を聞くと、子供は一日幾時間寢かせるときちんと定めて置くが良いと言ふかも知れません。斯かる場合に之を一定したら、それを決して亂させてはなりませぬ。此の樣にして育てると大きくなつて苦しみませぬ。人は成長すると色色規律ある生活をしなければならぬもので、今日それに苦しめられてゐる青年が少なくありませぬ。即ち家庭でだらしなく育つた者が、俄に規律に縛られるから。非常に苦痛を感ずるのです學校なぞへ這入つても非常に窮屈で苦しく感じます。學校等で此の樣に規律的に嚴しくすることが良いか惡いかは問題でせうが、定められてゐる事を嚴重に守り得る程の習慣は子供の間から躾けて置かねばなりませぬ。



日比谷公園の心字池

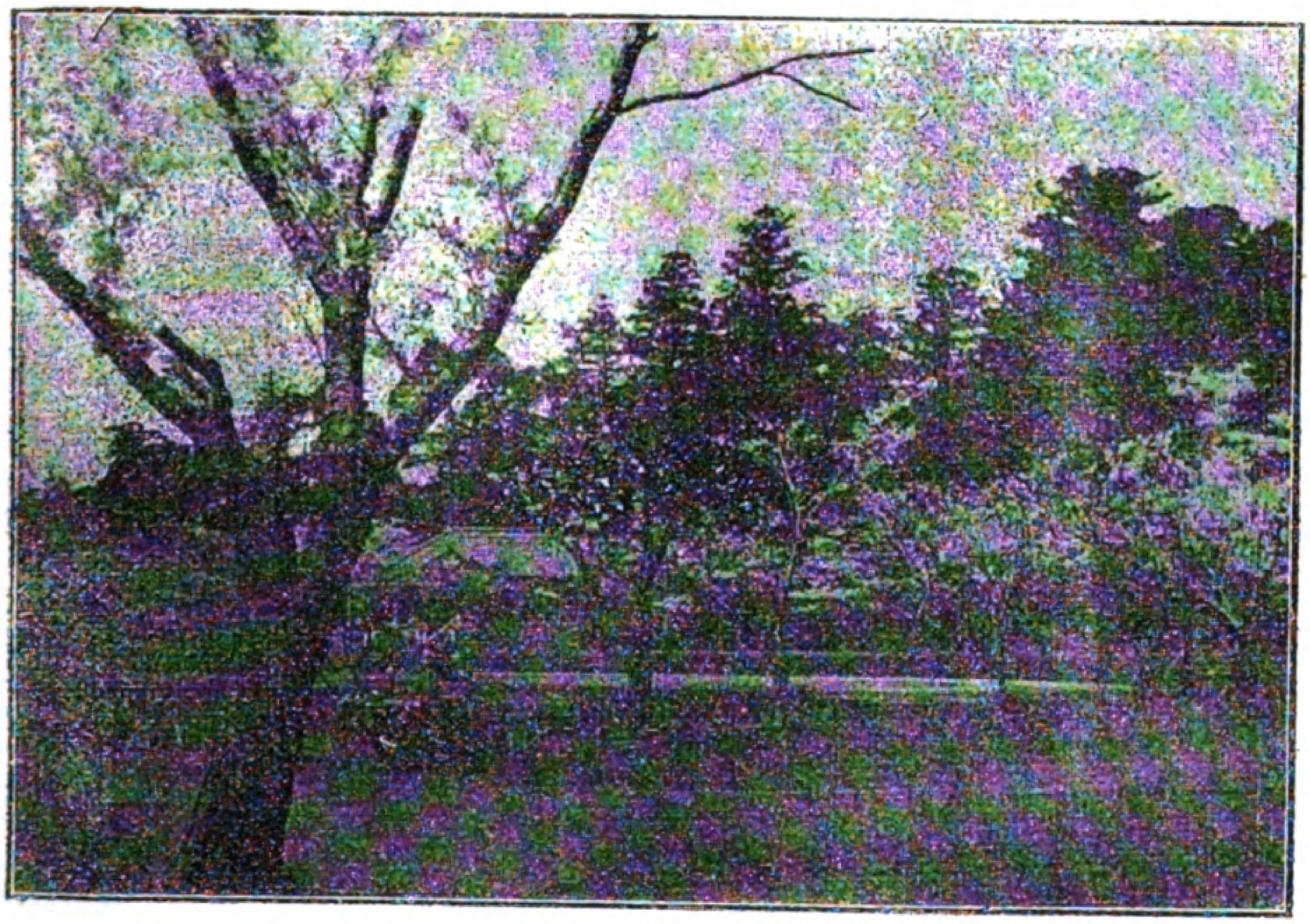
### △子供の嘘言

又子供は嘘言をいふ時代があります。これなども非常に惡いことだから、十分干渉して直さねばなりませぬ。西洋人などは、日本の商人は嘘言をいつて平氣でゐると言つて、容易

に信用しないとか云ふ事ですが、かういふ事も恐らく子供の中に種が播かれるものと思ひます。即ち子供の時に嘘言を言ふのは、大きくなつてから、國の體面を汚す樣な結果にもなるから、大に注意すべきことゝ思ひます。要するに小言は言はないで濟むならば成るべく言はぬ方が宜しいが、然かも或る點は十分嚴重に取締らねばならぬと思ふのであります。

## ●發育中の變態

子供に依つては非常に無性な子があつて、格別勉强もせず、されぱとて面白く遊戯するでもなく、只茫然として如何にも無性らしく、仕事を命じても一向に勵みがないのがある。これには身體を動かす事の嫌ひなのと、物を考へ腦を使ふ事の厭ひなのとあるが、孰ろが第一である。



武藏大宮公園の櫻

要するに興味が缺乏してゐるので、他の子供が非常に面白いと思ふ事でも當人には少しも面白味がないのである。

其中恐ろしいのは生れ乍らの無性な子で、是は精神病の一種とも云ふ可きものである。或は終日ジツと坐つて日を暮すものもあれば、或は御飯だと呼ばれても立ち上がるのが厭で泣いて居て横から誰かゞ行つて扶け起してやると喜んで食卓に就く樣な實例は澤山にある。斯る兒童に對して、其精神を興奮させる爲めに酒類を呑ませる人があるが、これは非常に悪ろいことで、中には小さい時分に親が面白半分に酒を呑ました爲に斯う云ふ風に變じたと云ふ小兒もある。

此種の子供の矯正法としては、先づ非常な根氣を持つて其兒童の平生に注意し、少しでも其子が興味を惹く樣な場合を見たならば、夫を奬勵して漸次に其他の方面に迄興味を覺えしめる樣にし、是と同時に規則正しい生活をさせ、アルコール性の食物は一切嚴禁して運動營養を盛にしなければならぬ。そして又同年輩の子供と遊戯する事を奬勵する事が大切である。

又病氣の爲其理解力が薄弱になつた結果無性になつた樣な子供に對しては、强ひて學課の復習を課する事なく、學校と家庭と共同で漸次に恢復せしむる方法を



# 春野の小草の異れる趣味

物集梧水

### ▲芹

◎春寒料峭、野中の清水なほ薄氷に鎖されてゐる間から、紫色を帯びた小さな緑葉を呈出してゐるのは芹である。若し蕗の薹を陸に於ける春の魁とすれば、芹は正しく水中に於ける春の魁である。

◎芹は澤山せりあつて生えてゐるので、セリと云ふのだとやら。

◎枕草子に「我が身に芹摘みしなどおぼゆることこそなけれ」とある。又童蒙抄に「芹摘みし昔の人も我がことや心に物のかなはざりけん」とある、何れも戀のことを意味するのである。

◎往時、宮中の主殿寮に仕へてゐた一人の男子があつた。或朝お庭を掃除してゐると、俄かに風が吹いて來て、御殿の御簾を動かし、折柄その內で芹を召上つてゐた姫君の顏がチラと顯はれた。男子はそれを見まゐらせて急に戀病になつたが、扨て如何かして今一度お顏を見んと心の切なるまゝ、或日芹を摘んで御簾の側に置き、密かに姫君の顯れ給ふのを待つてゐたけれど、終に姿すら見せ給はず、空しく芹は萎れて了つた。乃で男子の病氣は益々重くなり、愈々終焉の時に臨むや、己れが死ぬる所以は實は斯樣々々であるから、死んだ後には芹を供へて呉れるやうにと遺言したさうである。誠に愚にもつかぬ傳說だけれど、軈て此傳說から芹を摘む云々が直ちに叶はぬ戀に轉用されるやうになつたのである。

根芹摘む春の澤田におりたちて
衣のすその濡れぬ日ぞなき　　曾根好忠

薄氷やわづかに咲ける芹の花　　其角

▲薺

◎その葉は蒲公英の如く、その花は米粒の如く、その實は小さな三角形をなしてゐる。少女等、その實を採つて相摩すれば、幽かに三味の音がするので、一名ぺん／＼草、また三味線草とも云つてゐる。

◎能く空地や、家屋を破壊した跡などに生えてゐるので、「ぺん／＼草が生えるやうになつた」と云へば、直ちに家屋の荒れ果てたことを言ひあらはすのである。

◎支那では、薺が早く生える歳は豊年だと云つてゐる。

咲梅の色には雪もまがへとも似たるものなき鶯の聲



友のむつみ

是れぞ軈て春の七種の中に數へられるやうになつた理由では無からうか。

◎薺の莖を以て燈心押へにすれば、蚊や蛾が飛んで來て燈火に燒死ぬことがないとやら。故に薺をば一名護生草とも云つてゐる。

藤原清輔
我れひとりからなづなこそ悲しけれ、身をつみてだにとふ人もなし

嵐雪
濡緣やなづなこぼるゝ土ながら

▲土筆

◎春野の歌記さんと、地を抽出でしつく／＼し、昔か

ら之を土筆と書くのは道理と思はれて、可笑しき心地がせらる。

◎土筆の側には必ず杉菜が生えてゐるので、杉菜のことを一名土筆の小母さんと云つてゐる。されば土筆は杉菜の坊ちやんか。袴穿いた姿さへ愛らしく思はれる。

◎杉菜化して蟷螂となる一寸面白い傳説ではないか、彼の百合の花瓣化して蝶となるとの傳説と同じやうに、何點から思ひついたものか、多分其色が甚く似通つてる故であらう。

杉苗に杉菜生ひ添ふ荒野かな　　白雄

▲菫



春の草むしらして門に蝶待ん

◎縱し其花は小さくとも、縱し其色は淡くとも、菫ほど姿のやさしく、風情あるものは少い。

◎この花の形が木匠の使用ふ墨斗に似てゐるといふので、スミレと名けたのだとやら。それでは聊か趣味が減じるやうに思はれて口惜しい。

◎西洋では、菫を眞實の愛を表はす花としてゐる又黒色の代りに喪服や、斷食の衣服の色に用ひられてゐる。

、曠世の英雄奈翁は菫の花が大層好きだつたさうだ。エルバ島に配流されてゐた時、遙かに佛蘭西に居る友へ、次度本國へ歸る時分には菫を持つて行かうと申し送つたので、其後奈翁が佛蘭西へ歸ると、貴婦人連が菫の花束を持つて集り、菫伍長萬歲！と叫

んださうだ。伍長とは奈翁を親んで云つたのである。

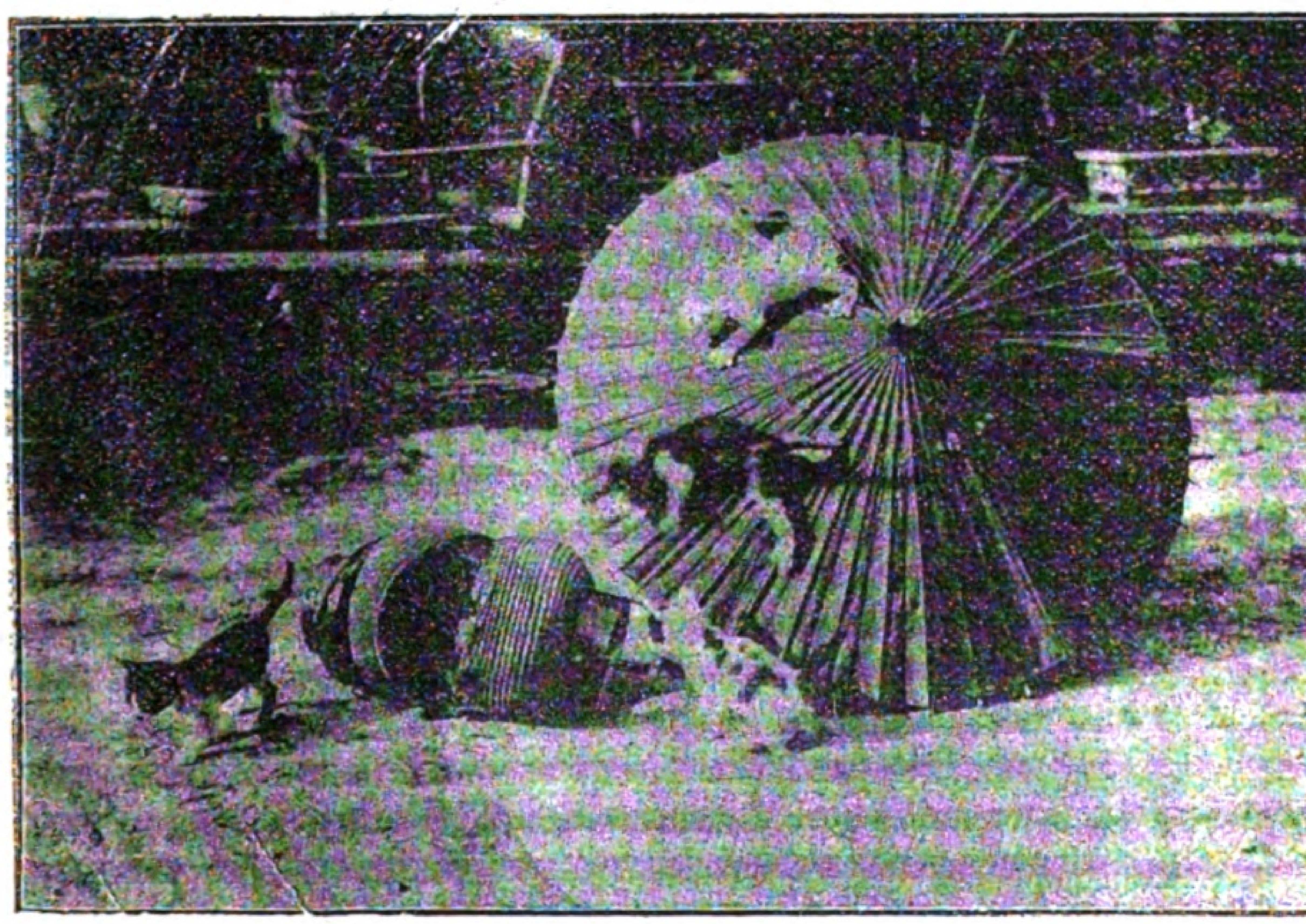
◎菫を一名相撲草と云つてゐるこれは子供達が菫の花を互ひに引掛けあつて、花瓣の首を落しあふからである。この遊戯は餘程昔からあつたと見え、小式部内侍の歌に「このたびは負けても呉れよすまふ草とりても知らぬ六つ子なにもの」とある。

　昔見しいもが垣根はあれにけり、茅花まじりにすみれのみして　　藤原公實

　壺ばかり日の射す岨のすみれ哉　　舟泉

## ▲蒲公英

◎菫は野に咲く草花の中で餘りに上品であるが、蒲公英は實に野趣横溢、無くてならぬ花である。



草臥たやうに降なりはるの雨

◎朝に露を受けて咲き、夕べに露を受けんとて凋む。斯くて數日の間咲いては凋み、凋んでは咲くのである。其花の黄なるは黄金の如く、白きは白銀の如くであるが、然も些かだに俗臭を帶びてゐない所に無限の趣味がある。

◎詩人ローウエル、蒲公英の咲いてゐるのを見て、歌つて曰く『路傍に咲ける見馴れし花よ。罪なき黄金に塵多き道を飾る』と、眞に罪なき黄金である。

◎花咲き終つて、毬の如き絮、春の軟い風に飛ぶのを見れば、春の行方さへ思はれて、愈々限りなき趣味を覺ゆるのである。

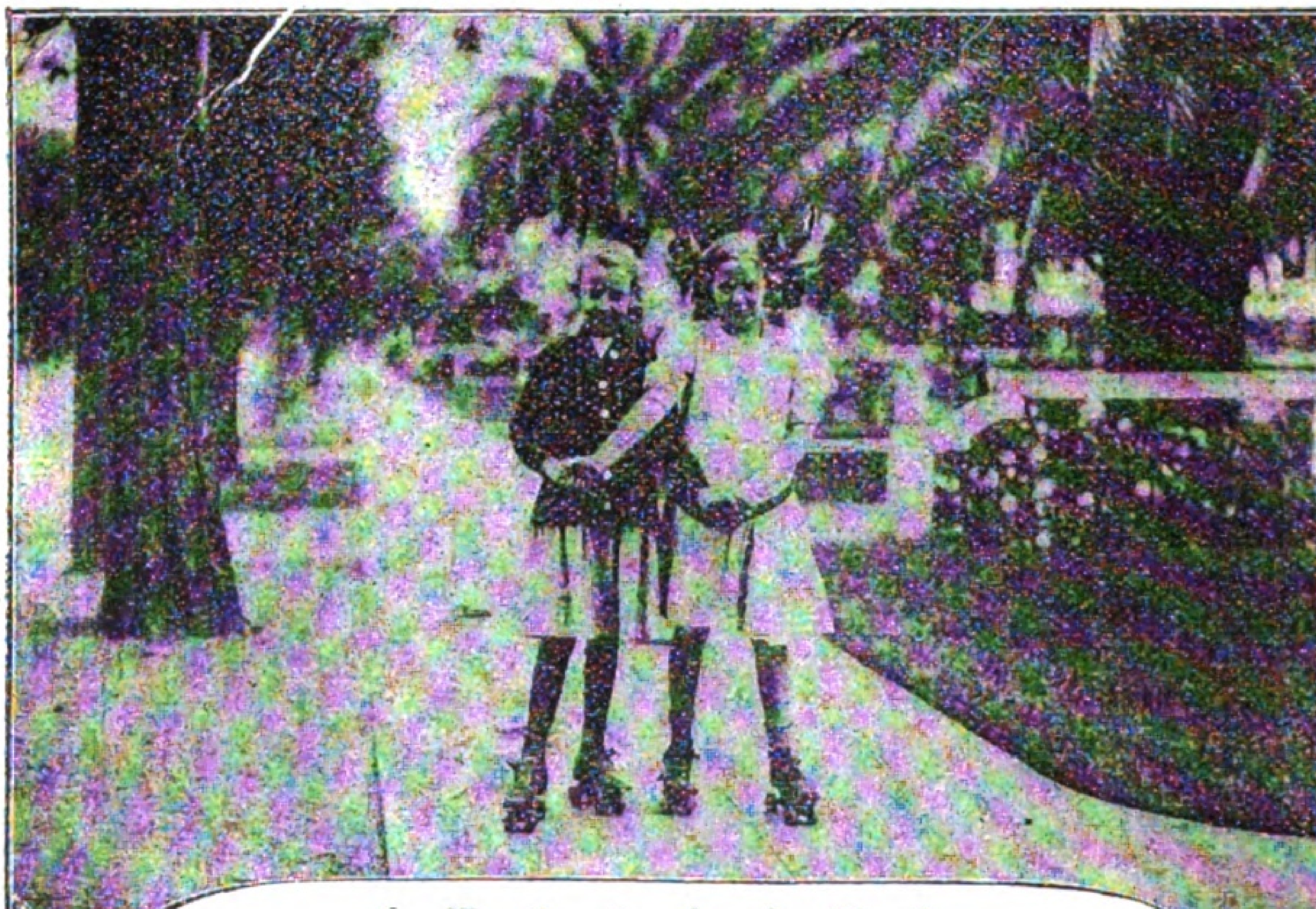
たんぽゝの花並び咲く濱屋かな　秋夫

### ▲蓮華草

◎春漸く闌はならんとする頃、野原と云はず、畝路と云はず、錦の茵を敷き詰むるのは此蓮華草である。若し此蓮華草が無ければ、春野の趣味は餘程薄らぐだらうと思はれる。

◎鄙の小兒等は蓮華草を摘んで花束にする。而して限りなき可憐さの接吻をする。この間の情調、歌にも詩にも述ぶべからざる韻致を含んでゐる。

◎生溫き春の小川に、不圖蓮華草の花束が流れて來ることが能くあるものだ。誰れが摘んで、誰れが流したか判らず、唯だ其美しさが沈みつ浮びつ流れるのを見る時に、言ひ知らず哀れさを覺ゆるのである。



米國少女の氷滑り

◎蓮華草に就て斯ういふ哀れな物語がある。昔、羽前國時田の里に一人の美人があつた。野に蓮華草を摘んで、それを花束にして家へ持つて歸る途次、或家の前まで來ると、一人の美男子が其家の庭に立つてゐて、不圖その蓮華草に目を注け、其の花束を呉れないかと云つたので、美人は喜んでそれを献上げた。これが緣となつて、兩人は互ひに相思の間になつたのであるが、美男子は其國守の家老の令息なので、軈て父が死亡ると、其跡を繼ぐやうになつた。既う是れからは從來のやうに會ふことも能きず、美人は到頭焦れ死に死んで了つた。其後、彼

の美男子はお伴の行列美々しく其里へ乘込んで來たが曾て戀してゐた女は既に死んで了ひ、其墓の邊には一面に蓮華草が美しく咲いてゐたので、美男子の君は坐ろに往時のことを思ひ出し、絶か其花を摘んで墓上に捧げたのであるが、尚ほ亡き跡を長く弔ふ爲めに一寺を建立し、寺の名さへ蓮華寺と名けたさうである。

手に餘る蓮華草の束
捨てにけり　子規

## ▲荷蘭紫雲英

◎濃緑の花麗しく春野を飾つてゐるのは荷蘭紫雲英である。これは西洋骨牌の繪にもある通り、葉は三つ宛と極つてゐるが、如何かすると、時には四つのもある。

◎西洋では、四つ葉の荷蘭紫雲英を得れば、必ず幸運が來ると云はれてゐる。その花の赤いのは精勵の意、白いのは私のことを思つて呉れとの意である。

◎愛蘭では、白色の荷蘭紫雲英を國標としてゐる。其起源は四世紀の頃、ウヰクロウ附近で聖パトリックの上陸記念祭を行つた時、愛蘭人が鈕の孔に白の荷蘭紫雲英を挿んだからである。蓋しパトリックは常に門弟に三位一體のことを説明する時に、この葉を以て説明したさうである。



新婚の春

## ▲櫻草

◎櫻草は荒川堤などに能く咲いて居り、却々美しく可愛らしい花であるが、如何いふものか、日本では、昔

から餘り詩歌にも、俳諧にも詠じて無いやうである。

◎西洋では、櫻草を少年を表す花としてゐる。就中赤いのは獨立自尊の表象としてゐる。

◎昔、英國で、ビーコンスフヰールド伯が此の櫻草を愛したと云ふので、英國の保守黨共は其會をば櫻草聯合會と名けて、保守黨の徴としたさうである。

◎西洋の櫻草は白いのが澤山あると見えて、シエークスピーアは之を青白い花と云ひ、ケイルウは之を病人らしい花と云つて居る。

幼きが書院にするゐつ櫻草　青々

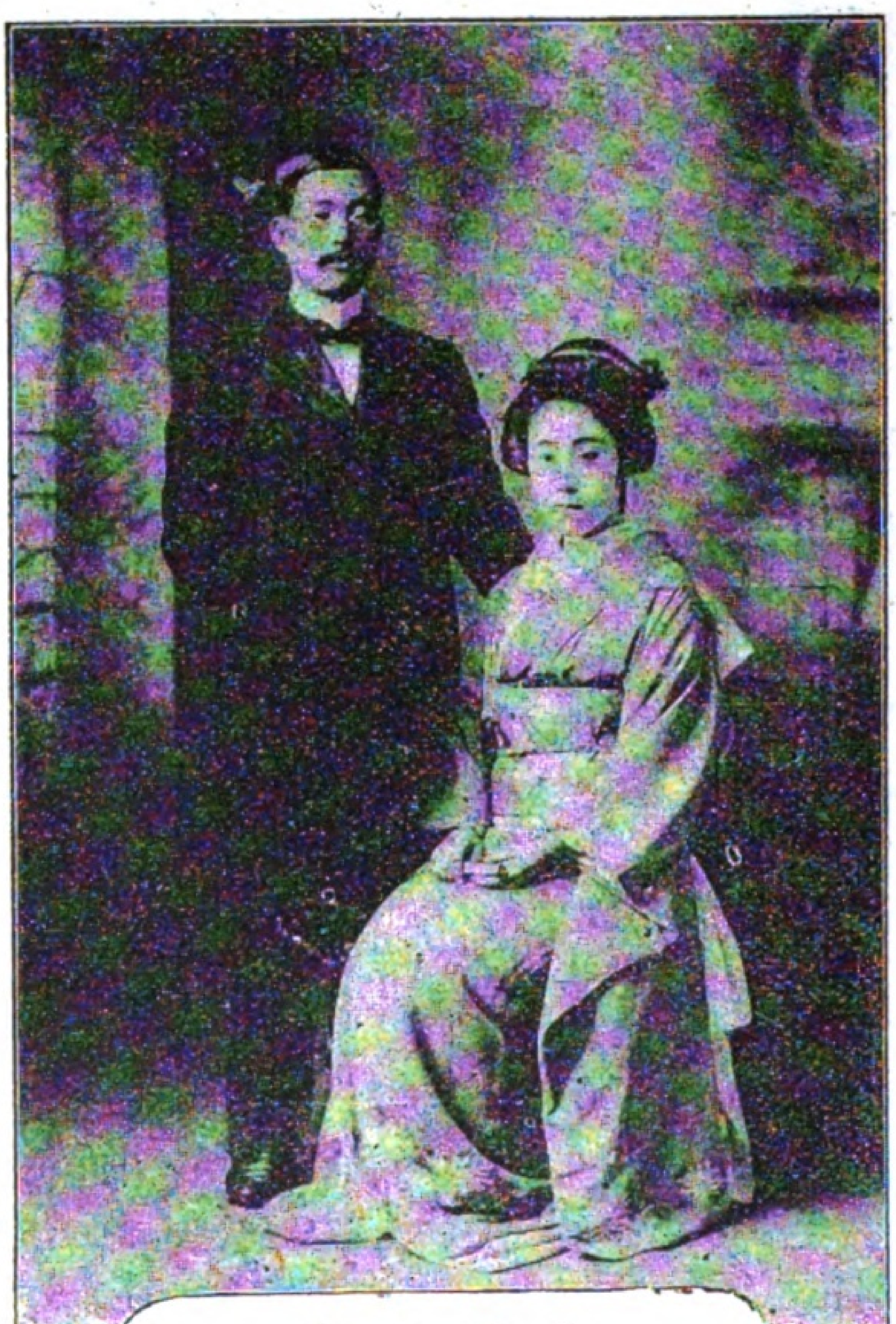
## ▲茅花

◎春風暖く吹く頃、野邊に、堤に、白い穗を出してゐるのは茅花である。

◎試みに其穗を拔いて、之を口にすれば、何となく甘く親みやすいやうな味ひがする。昔からこれを喰べれば肥ると云はれてゐる。其證據には萬葉集に紀女郎の歌に『わけが爲め吾手もすまに春の野に拔ける茅花ぞめしてこえませ』と詠じられてゐる。

◎茅花の根を乾して、夜に之を見れば青い光を放つさうである。故に昔の人は、茅花の根から螢が生るものだと信じてゐた幼稚な思想ながら、實に詩的ではないか。

茅花ぬく淺茅が原のつぼすみれ今さかりなり我がこふらくば　大伴田村家之大孃



新婚の春

川島や茅花亂れて日は斜め　蘭更る。

## ▲母子草

◎母子草、一名御形とも云ふ。正月七日に七種粥に入れて喰べ、又三月三日に草餅に搗いて喰べるのである。その長六七寸、白い纖毛を着けた葉の間から卵黄色の花を開き、その趣き何となく落着いてゐるのである。

◎昔嘉祥年間、人々曰く今年は餅を喰ふことなかれ、母子が亡くなるからと、果して其豫言に違はず、皇太后及び其皇子死亡り給ひて、共に深草山に葬り奉つたさうである。而も此歳は田野の間に甚く母子草が繁つたので、人々皆な奇異の思ひをしたさうであ



黄鳥や障子一重はあるもよし

三日の夜の餅はくはじわづらはしきけばまどのにはゝこつむなり　藤原實方

## ▲蓬

◎蓬は叢をなして亂れ茂るものであるから、其趣味も從つて幽閑荒廢を示してゐる。

◎蓬生の宿と云へば、至つて穢き宿のことをあらはし、蓬が門と云へば、至つて幽靜な閑居をあらはすのである。これは「柴門晝靜掩蓬蒿」から出てゐるのである。

◎又蓬が下と云へば、直ちに死人を送る所となり、歌にさへ能く詠まれてゐる。

◎日本でこそ餘り蓬を珍重しないけれど、支那では昔

から、餘程之を重んじてゐたと見え、蓬を詠みこんだ詩さへ甚だ多いのである。

裏門の寺に逢着す蓬かな　蕪村

### ▲酢漿草

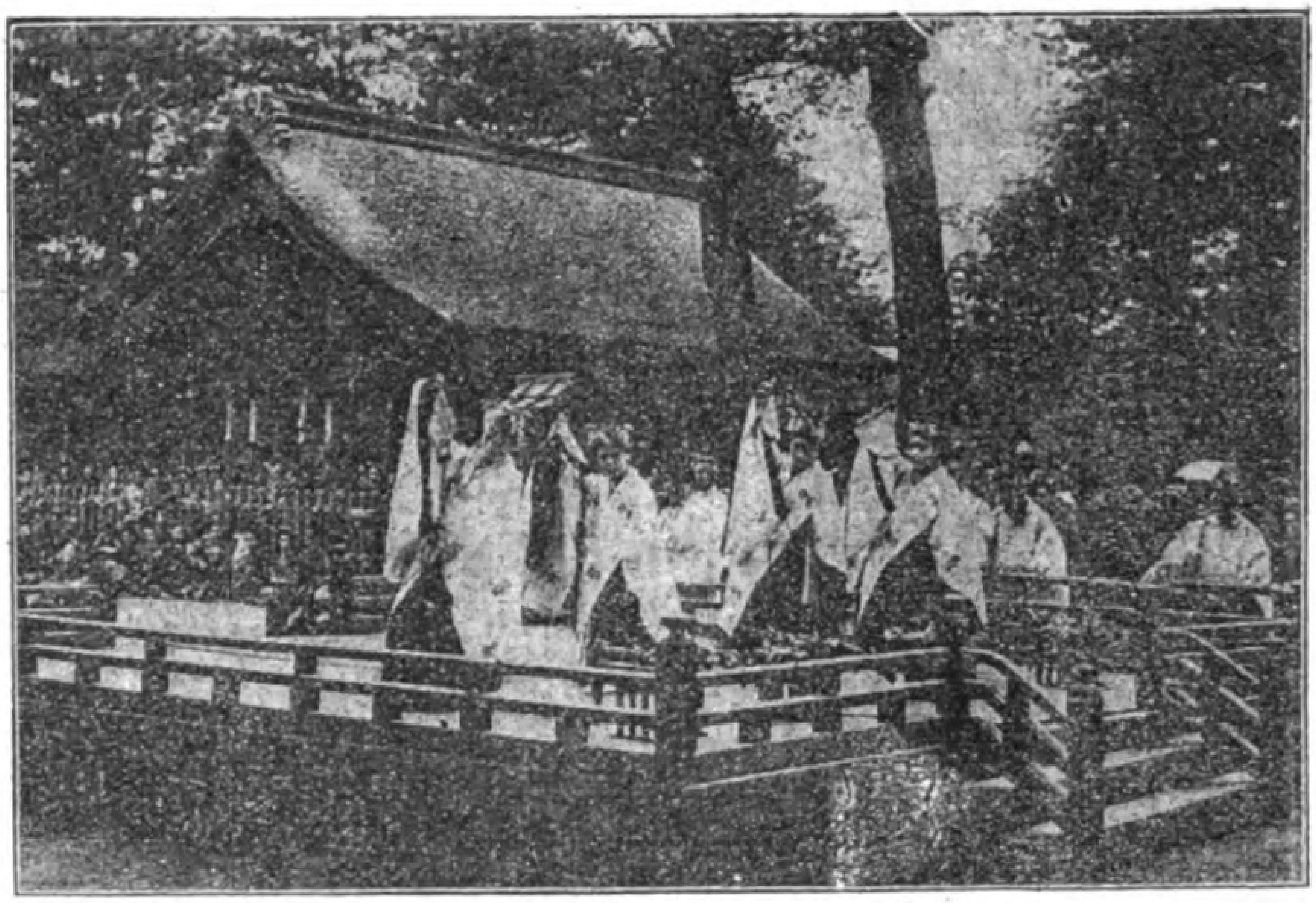
◎人の目に注き難き草ではあるが熟々これを見れば、小さき黄なる花、整々たる三つの葉、亦た捨て難き趣きがある。

◎枕草子にも「あやの紋にても、異物よりはをかし」と書かれてある通り、酢漿草の紋は却々に趣味のあるものである。

◎野と云はず、畔路と云はず、溝の縁にさへ能く生えてゐるので、小兒等は其嫩葉を摘んで喰べるのであるが、酸味を帶びて、一寸口當りが好い。

◎この葉を澤山採つて、これで眞鍮を磨くと、大層白く美しくなるさうである。多分酸類を含有んでゐるからであらう。

かたばみの花の宿にもなりにけり　乙二



熱田神宮の大和舞

### ▲虎杖

◎虎杖は、その莖獨活に似て、長高やかに延び、別に見どころも無いが、是れ亦た春野の一異彩である。

◎枕草子に「いたどりは虎の杖とかく、杖なくともありぬべき顔つきを」とあるが、其長高く延び、太く逞しく斑紋などのあるところ眞に虎などの杖とも見えて、可笑しき心地がせらるゝのである。

◎昔、反正天皇の御誕生あそばされた時、虎杖の葉その傍らなに井戸に落ち、其井戸の水にて産湯をば使用

ひまゐらせた故、御幼名をば多遲比瑞葉別命と名け奉つたとやらで有。蓋し多遲比とは虎杖のことである。

◎今ではあまり珍重されぬけれど、昔は却々之を重んじたと見え、虎杖狩をは度々催されたことがあつた。

◎四月一日は山城の貴布禰神社の祭禮である。この日、上加茂の社司等駿馬に乘つて參詣し、その歸り途すがら、市野原で虎杖狩を催し、その大小に依つて勝負を決したさうである。

野邊に出でゝ誰が家つとに折つらん　春の蕨にまじるいたとり　土御門天皇

狩勝ちしいたどり鞭に下向かな　紹慶

## ▲薊

◎縱ひ其の萼に刺があつても、是れ亦た捨てがたき春野の花の一つである。

◎其花の形が恰も女の眉拂に似てゐるので、一名眉作の花、又鬼の眉作などゝも稱せられてゐる。

◎古來如何いふものか、此花を惡女の深情に譬へてゐる。「薊の花も一盛」と云へば、醜婦も十七八の頃は一寸見られるとの意に用ひられる。

◎西洋では、此花を峻嚴、可酷などの意味に用ひられてゐる。いかさま能く趣味に適してゐるやうだ。

◎薊の葉に白い斑點があるのは、昔、サンタ、マリアの乳が零れて此葉の上へ落ちたからであるさうな。

◎蘇格蘭では、薊の花を國花のやうにしてゐる。その譯は斯うである。昔、丁抹人が夜る跣足で蘇格蘭人を攻めやうとした時、薊の花を踏んで、キヤッと叫んだから堪らない、直ちに蘇格蘭人に見つけられて、鏖殺にされて了つた。乃で蘇格蘭人は薊の花をば國花に採用したのださうである。

石原やくねりしまつの花あざみ　白雄





# 女教師の尊き天職

## 兒童家庭訪問の記

濱　荻

潮の香高い、浪の荒い血をそゝるやうな、若い心をおどすやうな、音をきゝながら私は、朝な夕なに、一里もあらうこの海岸の新道を、納戸の袴ひるがへしながら通ひました、光榮ある人生の春！ 花恥しき十九の春を、人の子に敎ふるべく通ひました。あまりにその、榮のなきを幾度か悲しみましたけれども、それは高い調をうたふやうな浪の音に打消されてしまひました。さうして、かうさせた私の運命に、あきらめかねつゝ、あきらめました。

私は今、校長の命によつて、兒童家庭訪問を試みました。十か十一になる子ですけれど、海の子は荒うございます。意に從はぬ時は叱りもしました、いぢめもしました。その子等は家の父母に何といつて、先生の噂をして居たであらう。家庭の父母はどんな考があるにらう？、などゝ、こんな事を思つて、村に這入りました一の漁村に過ぎませんけれども、風景のいゝ、小さな島を前に控へた、靜かな村です。夏は避暑客が賑はしい位です。今は廢れた町となつてますけれども、昔は船舶場で、他國の人は入り交り、まことに賑はしい町だつたさうで……ために、村全體つて、まあ漁師をのぞく外は皆茶屋で、女なども、澤山あつて、そのまた女達は、藝は賣つても身は賣らぬといつた風なもので、大さう評判だつたさうです。それがずつと今だに殘つて居て、學校の女の子の七分通りは、みんなさうした女になるのです。だから家の育て方と學校とは矛盾してゐるので、其處に言ふにいはれぬ、味があつ

て、面白いぢやありませんか、先づ第一に荒い格子の家の前に立ちました。

谷いと子（尋常三年生）

「御免なさい」菊屋と筆太にかいた障子戸を明けて中へ這入りました。二三年前の火事で、その何屋が火元だとかでみな商賣をやめさせられたが御神燈のちやうちんこそ下つてなければ立派な家の構へが昔そのまゝ。出て來たのが、眉をおとした、恐しく拔衣紋にした、それこそ昔の腕を忍ばせる五十恰好の婆さん。「さあ。お出でなさりませ。お初てお目に掛ります、まあ學校の先生樣で――私等のいとが毎日お世話になりまして、まことにお難有うございります。きかなくつてほんとに困りますので、先生樣もさぞお骨折りのことで……」と一息に言ひ終つて笑をつくりました。まじ／＼と私の身體を見てゐる。

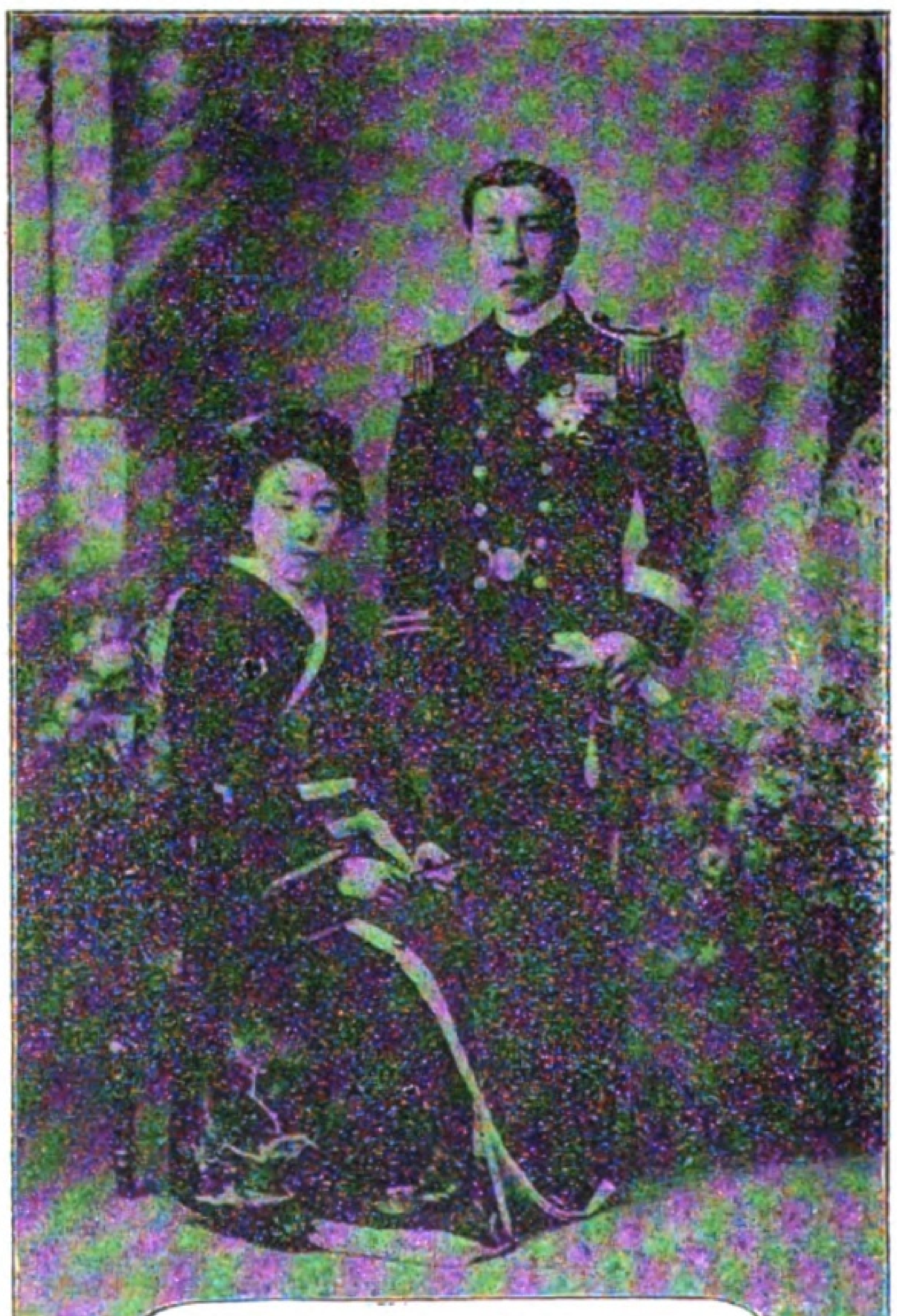


細川侯爵家の庭園

「いゝえ、何にお家の子供は溫しい方で……あの今日上りましたのは、子供の事について、家へ歸つてからの樣子なども伺ひ度いと思ひまして、一寸失禮いたしましたので……」

「はあ左樣でございりますか。何別段變つたこともありません、たゞ家では御存じの通りなのでございりますので、歸ると直ぐ稽古にやりますので――日暮方までかゝります。まあお茶一つ：…それでまあ晩には本をよんだり何かしてゐますでご

ざります。いゝえ、學校へはすゝんで行きます。朝なども後れるつて大さわぎして行くゝらゐでござりますから。稽古の方もいやがりません、何私に叱られますんでございますからオホゝゝゝはあ成程、習ふ方に邪魔になりますでござりますかな、然し私共ではまあ稽古の方が大切ですから……えさうでないつていふでござりますか。でもまあ先生樣も御存じの通りこの土地は昔からこの道でおまんまを食べるので……土地柄で、まあいやしい商賣とした所で、この道で食べて行かなければ、しかたがござりませんので、とても吾々の子等は、學問して身を立てるといふとも出來ませんからはい……それあ事あ先生樣のいふ通りで、どの道何にならうが、學問しておけば仕合せでございます、すれば、藝者になりませうがお客様の相手も出來易く又あれ達の爲になりまするで、私も承知致して居りました。だから否といはずに毎日上げておきますのでハイ。又お上の仰せで上げずにおくことも出來ませぬが——はあ左樣でふたつやるために學校の方には身が入らぬで、ためにならぬと、成程御尤もでござりますが、先刻いひました通り……


新婚の春

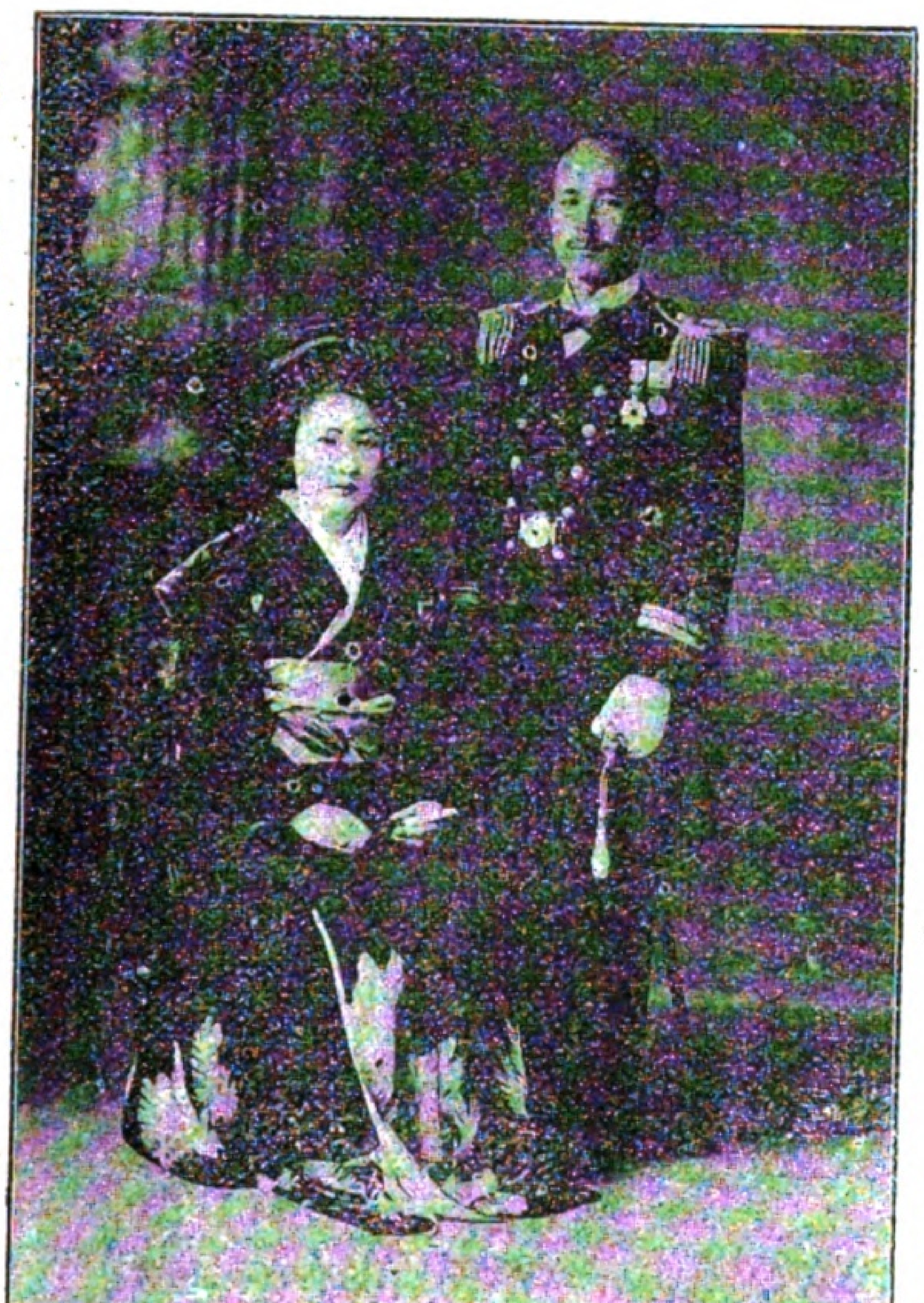
はい、先日はえん會へ出るので、さらひをやりましたので、糸が加たらなければ踊になりませんのでハイ、お暇をお願したら下さらないとかで、校長樣からも叱られたとかで、泣いて來ましたほんにあゝいふ時は、困りまするで、毎日上げておくのでございますから、どうぞ、あんな時

にはお暇くれて下さりませさうでなければほんとに：：：。」

此の子は、容貌もよく、賢い子で、ほんとにそれには申分ないけれども可哀想でならない。算術などはちつとも解らないので、いつでも、いつてるけれども、宿題もやつて來た事がない。それもその筈。同じ友達の近所の子がこんな事をいつて居た。

「先生糸さんは、稽古が出來ないと、お母さんに縄でしばられて小家に入れられますよ」つていつてゐました。學校に來ては、小さな頭を苦しめ、家へ歸ればこの有様、お丶可哀想に、今からこんな憂目にあつて、さうして末には又も人の氣嫌を取らねばならぬ辛い身になる。生れついてこんな運命にされた子がかわいさうでなりません。お母さんていふのは養母です。かうした女の子はこの村に何十人あるか知れません。けれども、此土地では、こんな女を出すのが誇りとしてゐますよ。又子供等も望として居ますの、かわい想でせう。何處の路次を歩いたつて、三味の音のせぬ所はありません。浪の音にからんで。私はこゝを出ました。

磯山喜太郎



新婚の春

漁師の家です。寢間の外は皆板の間ですから、それがピカ〱光つてゐます。板の間がですよ。爐ばたに六十許の爺さんと、父らしい人が、網をつぐなつてゐました。子供は家の前で遊んでゐましたが禮をして、笑ひながら家へ這入つて、家の人に告げたと見えます、「今日はおかせぎでございますね」とはいる

と、急に膝を折つて、窮屈さうに、かしこまつた。
「さあ御這入られ、何今日はしけだもんだから」
「はあ、しけで成程。あのいか釣りがまだ見つからないでせうか」
「はい、まだ、見えねいさうで、ほんにまあいたわしいことをしたもんでがす」とくすべ／＼いつた。それからだん／＼話をはじめました。
「あれあほんとに赤兒で何もわかんねえでがす、一向の餓鬼で、六年の兄きあまあどうか、かうかいゝが、あれと來てあ、全然わからねえでがす。家へ歸つても復習ことして居ますあ、書くのと、かんじやうがわからねえで、ほんに先生様も精が切れますぢやろ、わしもまあ深くは習ひませんが、尋常だけは習ひましたで、それで、かんじやうがさう解らねえでがす漁師が、一番之が大切で、一寸魚を荷着るにしても沖へ行つても之がわかると大そう便利でがすからどうかしてまあ習はせ度いと思つてるでがす」矢張りそれなりの事をいつて居ます。爺さんは。



米國の辯護士

「どうでも人あ正直でなくちやなんねえであす、わしあ二人に行く度、人の物などを取つてあなんねえぞ、うそもいつてあなんねえ、家へ入れねえからつていひ付けてやつてるでがすが、惡い事などした時は、うんと、しばりつけて、叱つて下せい」と意氣巻つて居ました。まめの固まつた手で煙草をのんでゐる。
ほんとに氣前のよさゝうな人達です。喜太郎も矢張り似て、氣さくな、面白い子供です。讀方とお談が一

番の得意で習字と算術は何にもわからん。活潑な小さな子で、お神樂が好きです。こんな子供を相手にしてゐると、何もかも忘れてしまひます。

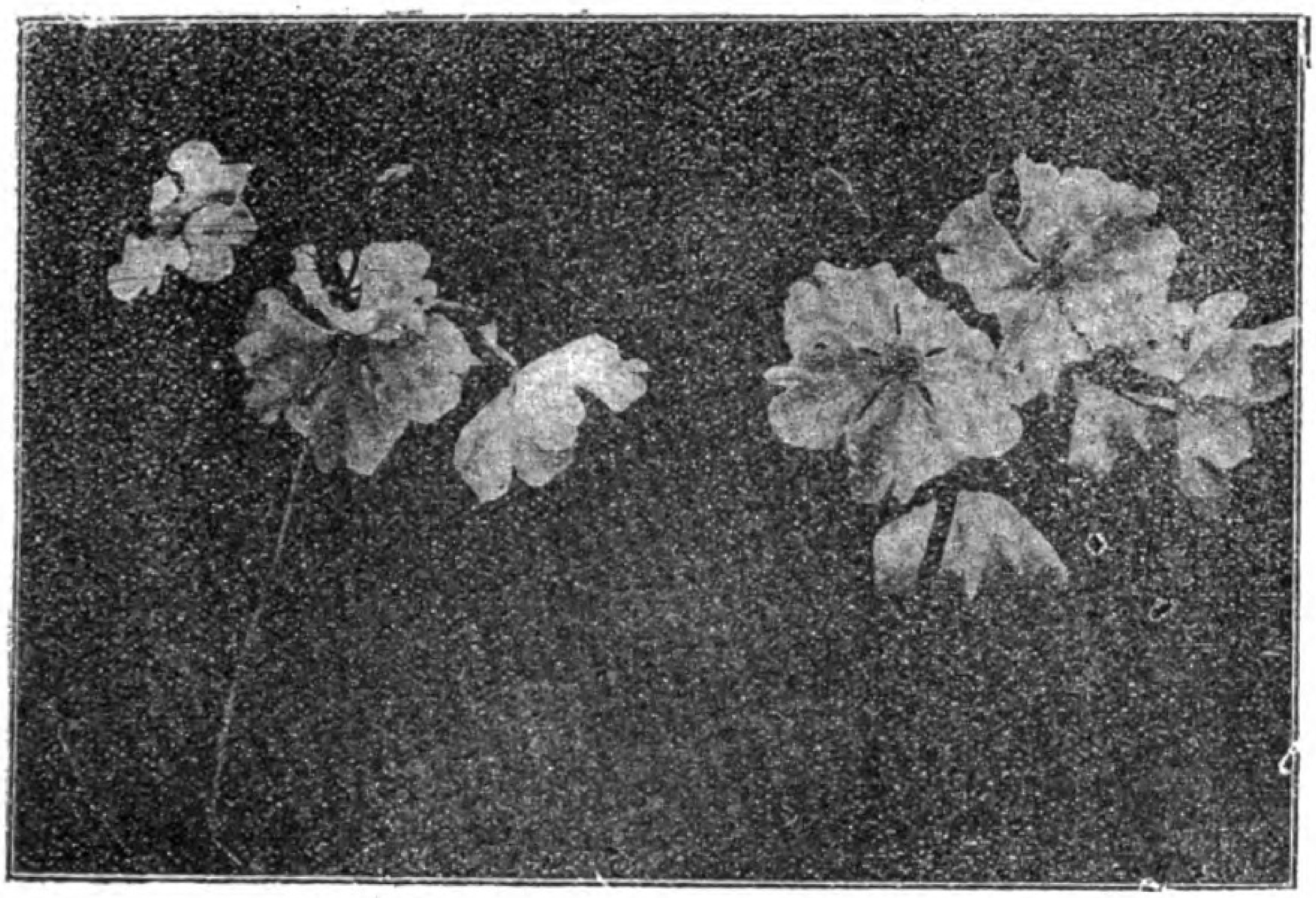
清水時雄

藝者の子ですよ。色の白い大きな品のある顔をして居ます。父は役者だといひますよ、今はあるかないか解らないんですつて。大變出來るんです。正直で溫順で眞面目で最も好な子です。面白いことばかりいふ子なんです、畫を非常に好んで上手です。

「時雄は何になりたいの」といふと、眞面目で、

「先生、わつし、大工になりたいと思ひます。」

「何故つていふと、



鶏の時聞く丘の春日かな

「だつて〳〵、大工さんはいゝんですもの、でも中學校へはいゝります」なんていふ子です。

料理店です。丸髷に結つた四十位の女が出て來て、挨拶しました時雄とは、似て居ますが、伯母さんださうです。

「はい。私は時雄の伯母で……もういつも先生に御世話になつて難有う御座ります。あれはもうあんな子ですから他の子等に、いたづらなどしますまいがもし過でもしたなら、ようく言付て下さりませ家は、こんな商賣ですから朝遲くなつてはいけないと思ひまして、夜だけすぐ向ひの伯父の家へやつてとめますので朝はおくれたことは、ありません、伯父の家から學校へ行きますので……」と話した。あゝ

それがいゝ。よく考へた。時雄の爲にはどんなにいゝかしれない、難有いわかつた伯母樣だと、それに大いに贊成してやりました。けれども時雄はどうしたつて、もう罪の子に生れて來てるんだもの、彼は、物心がついて、密に父や母の考へた時、嗚呼どんな想ひがするだらう。さうと知つた時の彼の哀しみと嘆とはどんなであるだらう。今から思へば、可哀想でならない、同時に非常に彼は可愛くなつかしくてたまりませんでした折から外から這入つて來た時雄は、私の居るのを見て「やあ、先生が」と大聲でいつて、おじぎをした。今彼を見た私は何とも知れず胸が一ぱいになりました。
「お母さん、今こんな大きなたこ見て來たよ」と手まねをして示した。時雄は母さんだと思つてゐるのです
「先生、たこの目はおつかないよ、にらまれたら死ぬんだらうか」なんていつてます。
　私はいろ／＼お話して夕方又もあの新道をたどりました。

# 卒業の日

こぼれ梅

眞個にうれしい、英語が百點、音樂が百點、地理と歴史と裁縫が六十點だつたけれども、なに私のこれからの理想の生活に入るには少しも影響はしないのだから、構ひはしない、それでも二番の次席は日常缺がした事がない私だもの、只Aさんに負けた丈けが口惜しいけれども、それもその筈だわ、Aさんはお家も華族で、音樂の先生や家庭教師の高商の方が附いて居られるし、それにご自分も一番末つ子である丈け、御兩親の御寵愛は深く、御歸りになると、毎日御兩親が下讀から復習からそれは／＼御念が行く程に御稽古なさつてお居でなのだもの、私の家見たやうに、敎育なんか學校任せと云ふ風とは丸で違つて居る、それで一番の席次の日常動かないのは當り前だわ。
　それも岡目から見ると、隨分日常點はよくない樣な時もなくはないわ、併し底には底ありで、吉村先生なんど時々お屋敷にお招きになるのは、何だか試驗の點にも手加減がありさうに見える。
　ホラ先年の秋季文藝會の時のレシテーションもグレーの墓畔の詩れ、吉村先生があの時にお屋敷に行って手を取らない許りに復習をして上げたつて言ふぢやありませんか、アンマリだわ、それに引換へてSさんなんぞ眞個にお可哀さうに、そりやお家もさうよくは無いけれども、あ

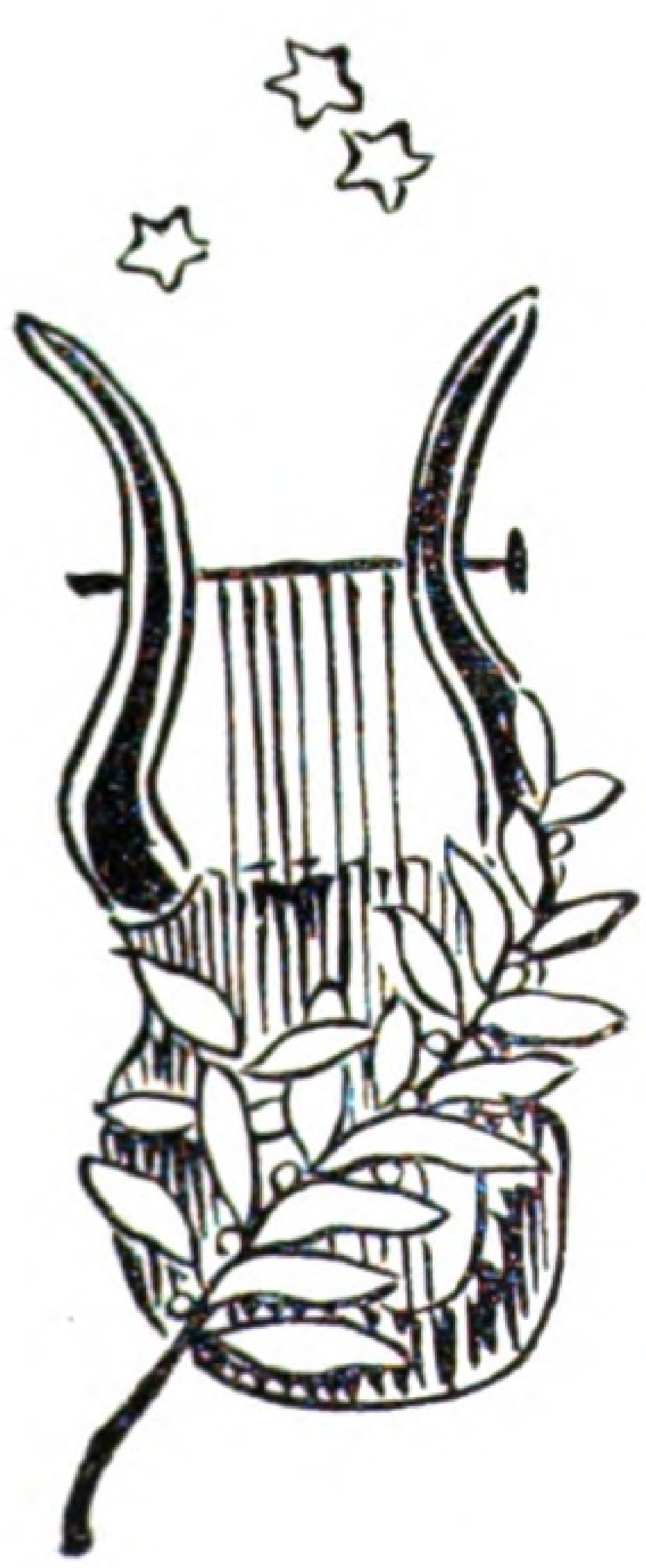
の位熱心に御勉强なさるのに、吉村先生は少しも見て上げやうとはなさらないのですものそれに引換へて、私は何て幸福でせう、くだらぬ暗鬪渦中からは中立不偏の態度で、人からは惡まれもせず、さりとて特別に可愛がられもせず、試驗の度毎に二番の席次から動かないのですもの。

何時かも、從兄の秀雄さんがさう云ひましたつけ。

「君子さんは敢て高きを望まず、また低きにも居ないで、適所を占領して居る、亢龍悔ありだから一番にはならぬ方がよい」つて、秀雄さんは何時も惡口博士だから、日常ならアイロニーかとも聞えるけれども、此時許りは何だか私の爲に言て呉れたやうな氣がしたわ。

そんな點數の事なんど、什麼でもいゝ、一番面白かつたのはあの卒業式の時よ、いくら質素々々つたつて、あの式場の裝飾など隨分振つて居たワ、正面のテーブルの前の造花のブツ揷の對の大花立は、それはまだしもだつたが、入口と云ふ入口、窓と云ふ窓、壁と云ふ壁、天井は一面の、それは〳〵各國の旗で行列は、丸で下手なクリスマスデコレーシヨンのやうだつたワ校長さんの式辭の中に、學校を出た後でも本校の主義を忘れず家庭の人となつて良妻賢母の模範になるやうにと云ふ事であつた、それから書記の木村さんが、本科卒業生總代……の答辭と言はれた時Aさんはしづ〳〵と蓮歩を運ばれた、アノ時のAさんの御澄しつたらありやしない、眞紅色の新調の洋裝でその前の日にお買ひになつた一瓶十幾圓かの香水と、千五百圓だとか噂さのあつたブローチを胸にお掛けになつて、ダイヤの御指環は、其光りが滿室を射る許りなんですもの、私等はこの御風采を見てアツと許りでしたワ、是丈けでも卒業生總代として答辭をお讀みになる御資格は十分にあつてよ、眞個に二十世紀の眞義を、一身に集めたやうなものでした、Aさんにレプレゼントされた我クラスは光榮だと言ひたい位でしたワ、御答辭の文句はよく覺えて居なかつたのですが、それは永く御恩になつた師の御惠みは　新高の山の高きベーリング海の深きにも比すべく今や我校を去るに臨み實にお名殘惜しい、例へ學校は去つても本校の主義は一生體得して永く其發揮に勉むるやうにしやうと言ふのであつた、併し同じ千遍一律の此答辭でもAさんの樣に、二十世紀の粹を集めた方に讀れて戴　のと質素な陰氣なKさんに讀んで戴かれるとは凡て別物のやうに聞えてれだから何でも裝飾が肝腎よ、イヽエ惡口でも何でもないのよ、

私等二十五人はこんな有樣で女學校を卒業しました。



SECTIONAL—BOOKCASE

# 組合セ本箱

一 藏書の増加に隨ひ自由に大さを伸縮し得る本箱
一 室内の構造に應じて適宜に配置し得る本箱
一 書物を入れたるまゝ手輕に運搬し得る本箱
一 硝子戸の開閉に巧妙なる構造を有する本箱
一 書物を分類するに至極便利なる本箱
一 其他多くの優れたる特徴を有する本箱

之を要するに最善最良の

**本箱!!!**

構造の詳細と價格を示せる目錄を無代進呈す

發賣 東京市京橋新大通銀座際 新橋堂 電新三六七七番 振替東京二百番

---

●狩野病院長 狩野謙吾先生著

# 神經衰弱自療法

本書は神經衰弱症治療の專門大家として有名なる狩野病院長が斯病救濟の目的を以て各種の神經衰弱症の治療法を通俗に然かも詳細に記述せるものなり就中生殖器神經衰弱症の自療法は餘蘊なく之を說明せる者なるを以て衞生を重んずる一般人士が必讀すべき良書たるを疑はず

六版 定價六拾錢 郵稅六錢

發行元 東京日本橋區下槇町十六(振替二一〇三〇番) 文星堂
東京市銀座大通新橋際(振替二一〇〇番) 新橋堂

---

村井弦齋撰評

# 樹下石上 吟誦の友

著者本書卷頭に記して曰く月の夕烟の朝、樹下に座し石上に踞して、古人の名篇を吟誦するは、快之に過ぐるものなし、優美なる心情も之に由て生じ、高傑なる思想も之に養はる、山川の粹宇宙の美、悠々として吟誦聲裡に來往す、此篇は、隨て得、隨て錄す、玉石同架採擇宜しきに適はざるものあらん、唯遊子一日の伴侶となりて吟誦の資たるを得ば幸ひなり

此書は古來の俳句、詩歌、川柳、漢文、謠曲文中より著者が會心の名篇を拔萃し之れに輕妙なる評語を加へたるものなり

定價八拾錢 郵稅六錢

發賣元 東京日本橋區樽正町一番地 服部書店
東京市銀座通新橋際(振替二一〇〇番) 新橋堂書店

# 東洋家政女學校 生徒募集

●裁縫二十時間……個人教授……
●學科十四時間……悉く實用……
●教養方針は……鋼鐵主義……

▲裁縫は材料隨意……
▲育兒法は東洋幼稚園にて實地練習す……
▲料理法は味噌の擂り方大根の切り方などより始む
▲音樂には謠曲、仕舞あり……
▲洗濯、洗ひ張は毎週實地練習す……

（徽章は學校より授與す）

東京神田區北神保町十五
（電話本局四二一七番）

# ▲生徒募集▼

◉裁縫科◉袋物科◉普通學

本校の特色は專ら家庭的敎授にして如何なる家庭にも應用の出來得るやう極めて親切丁寧を旨とす入學を望まるる方には御申越次第直ちに規則書無代送呈すべし

東京市牛込區天神町五十三番地
私立女子技藝實踐學校

# 都針箱

◉大改良せる都針箱

發賣以來本誌愛讀者間に好評を博せる都針箱は材料其他に大改良を加へ益々輕便の物となせり尚又今回は弊店新案の裁縫用手帖並に蠟を呈す

（一個金卅五錢 送料八錢 市內四錢）

竪七寸 幅三寸

●日本橋區住吉町廿二
長島商店

女（ぬの三）

最新直輸入獨逸製

# ボン萬年筆

特價一本九拾錢



滔々たる歐洲文明の風潮はあらゆる階級を通じて必ずや萬年筆を携帶せざる者なきに至れり。就中目下沖天の勢を以て流行しつゝある。ボン萬年筆はインキの注入法簡易にして運筆自在輕便この上なし而かも價格の至廉なると耐久力の十分なるとは慥に在來の萬年筆を壓倒するの實質を有せり。



## 特色及用法

**インキ注入法**　清潔なるインキにペン尖を浸し車形の軸を右方に廻轉する事數回に及び或る抵抗の感ずる時則ちインキの充滿したる也

**ペンの使用法**　車形の軸を左方に廻轉する時はインキ壺の如く流出し右方に廻轉すれば逆行舊に復す

日本輸入元

東京神田區錦町
大阪東區瓦町　文運堂

東京本町　博文館

文學博士　芳賀矢一先生
文學博士　萩野由之先生
露　伴　幸田成行先生
文學博士　黒板勝美先生
文學博士　三上參次先生
文學博士　三宅雪嶺先生
文學博士　森　鷗外先生
文學博士　關根正直先生

評論（イロハ順）

# 最新刊

饗庭篁村先生編

# 馬琴日記鈔

裝釘頗優美
四六判全一冊
紙數約五百頁
定價一圓五十錢
郵送料金八錢

## 好評如湧　初版數千部數日にして盡き再版發行

兒童走卒も其名を知れる**曲亭馬琴翁**日記の精粹を抜きたるもの。趣味津々、一讀人をして或は笑ひ或は泣き、手巻を措く能はざらしむ。翁の**性格、家庭、**見聞、著述、時代等皆之によりて洞見すべく、同時に**日記文の模範**として推奬すべし。加之諸大家の各項に就ての論評は十人十色、或は時世を論じ、我は文學を評し、奇想往々人意の表に出で筆花燦爛目眩し心奪はる。眞に天下の一大奇觀なり。

發行所
東京市神田區小川町一番地
**文會堂書店**
電話本局一四二二
振替東京三五一三

# 受驗者之良指針

# 學生參考叢書

| 書名 | 册數 | 著者 |
|---|---|---|
| 日本地理 | 全一册 | 志賀重昂君校閲　設楽金三郎君著 |
| 外國地理 | 全二册 | 東洋大學講師　三島定之助君著 |
| 地文學 | 全一册 | 理學士　八巻準次郎　設楽金三郎君著 |
| 日本歴史 | 全一册 | 東洋大學講師　三石賤夫君著 |
| 日本史年表 | 全一册 | 東洋大學講師　三石賤夫君著 |
| 東洋史 | 全一册 | 文學士　丸井圭次郎君著 |
| 西洋史 | 全二册 | 文學士　深澤鑛吉君著 |
| 西洋史年表 | 全一册 | 文學士　深澤鑛吉君著 |
| 物理學 | 全二册 | 理學士　林茂增君著 |
| 化學 | 全二册 | 理學士　加納濟三君　理學士　小林盈一君著 |
| 代數學 | 全二册 | 陸軍大學教授　宮本藤吉君著 |

| 書名 | 册數 | 著者 |
|---|---|---|
| 動物學 | 全一册 | 農學士　今村猛雄君著 |
| 生理學 | 全一册 | 農學士　今村猛雄君著 |
| 植物學 | 全一册 | 農學士　今村猛雄君著 |
| 鑛物學 | 全一册 | 農學士　今村猛雄君著 |
| 國文典 | 全一册 | 東洋大學講師　三石賤夫君著 |
| 漢字異同辨 | 全一册 | 東洋大學講師　安藤弘君著 |
| 幾何學 | 全二册 | 理學士　林茂增君著 |
| 三角法 | 全一册 | 正則豫備學校講師　山下安太郎君著 |
| 算術 | 全一册 | 正則豫備學校講師　宮田耀之助君著 |
| 國文熟語詳解 | 全一册 | 文學士　小倉博君著 |
| 漢文熟語詳解 | 全一册 | 安藤弘君　足利衍述君著 |

低廉無比製本堅牢
袖珍携帯至便
正價各册金十三錢
郵税金二錢宛

本叢書は專攻にして中等教育に教鞭を執らるゝ諸先生の筆に成れる者なるが故に、よく要を摘み、精を蒐め、説明は親切、文章は平易眞に學生諸君が、日常及び受驗準備用の寶典なり、發刊以來非常の好評を博し續々增刷出來せり、倍舊の御愛購を乞ふ。

發兌元　東京本町　博文館　東京神田　東京堂

女(ぬの六)

女(ぬの八)



# 日本印象記（二）

中村春雨

## △不夜城も螢の光

新橋ステーションに着いて、家族や友人に取卷かれながら、瓦斯や電氣の數多く闇の中に點つてゐる市街へ出た。西洋の大都會の夜の巷を見ない前までは、これ程多數の燈光が連れてゐれば「不夜城」などいふ形容詞を盛んに用ゐて、難有がつたものだが、今見ると折角の燈光が皆闇の底で小く燃えてゐる許りである。

闇を掻消すやうに明るく照らしてゐるのではない、恰も夏の夜を幾多の草螢が光つてゐるやうで、綺麗ではあるが、何んとなく物さびしい有樣である、例へば伯林の菩提樹下街、巴里のシャン、ゼ、リ、セー、紐育の第五街などいふ、世界に有名な大都會の中の、第一等の目貫の市街と匹敵する地位にある、この銀座新橋、界隈が、こんなに何うも薄暗くては、物騒な感も起される、辻强盜でも出て來はしまいかと、無上に神經過敏にならせる怖がある、この邊には大燭光のアーク、ライトをのべつにブラ下げて、形容詞許りでなく、眞の「不夜城」にしたら善さゝうなものだ、試みに夜の伯林の菩提樹下街の辻々に立つて、新聞紙を讀んで見ると、結構讀める、日本の模倣文明は、燈光の力にまで、その弱點が現はれてゐるやうで、物足らぬ感に堪へなかつた。

それから又、西洋の殖民地などに急造されるやうな安つぽい洋風建築、ペンキ塗りの妖怪のやうな大々的の廣告看板の下に小くなつてる不體裁な商店、そんなものが、兩側に並んでゐる銀座通りの眞中を、電線にぶら下つて電車が走つてゐる、電線をこんな場處へ引

張り廻してあるのは、苟も世界の文明國の他の首府では嘗て見た事が無い、もう大分時代遲れの田舍電車の仕掛であるが、東京はサスガ廣い丈けに、空にはまだまだそんな餘地があるのであらう。

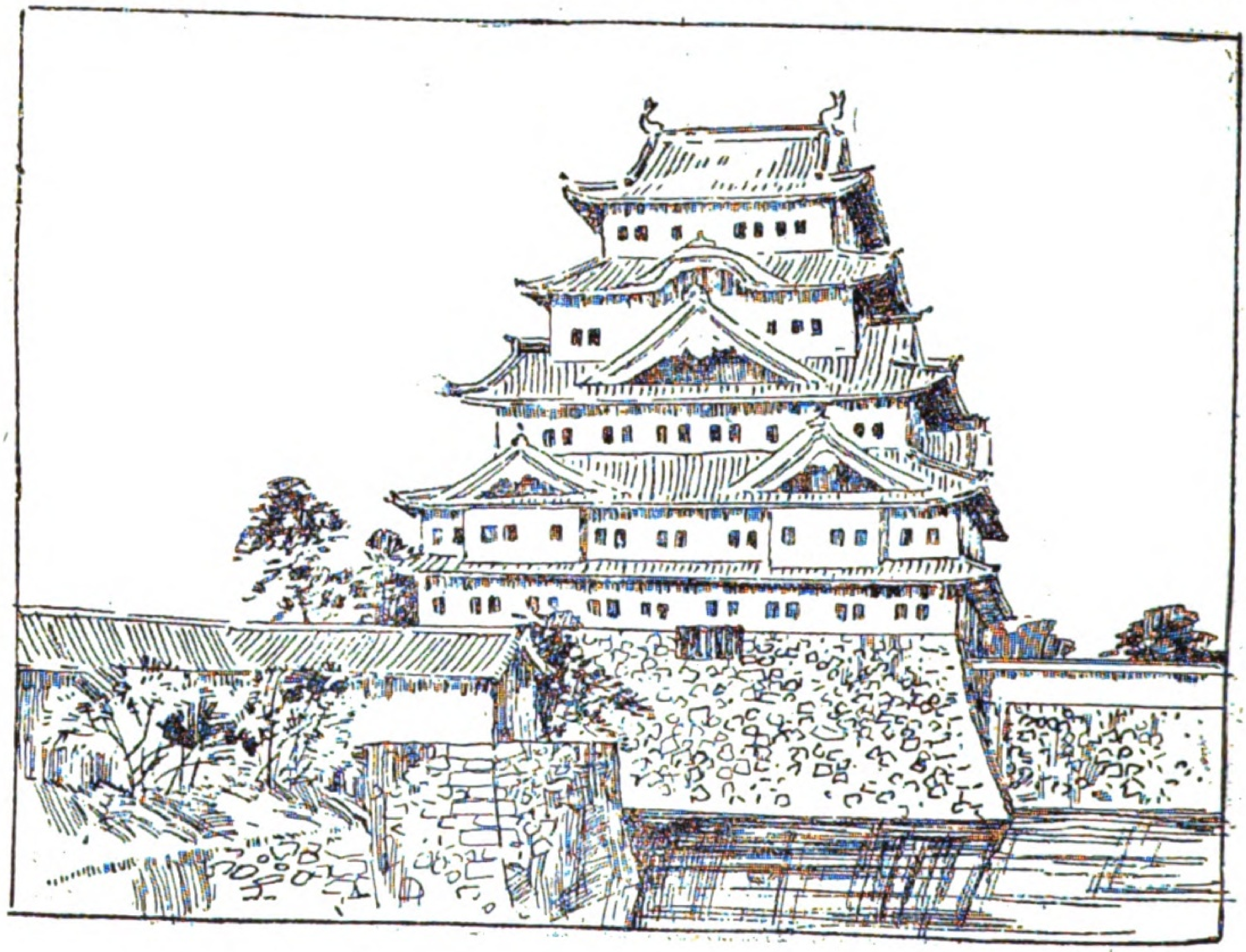
△旅館は家庭的

かくてそこらの旅館に入つたが、座敷へ上る時、番頭さんが叩頭する、主婦さんが叩頭する、女中がズラリと並んで叩頭する、頗る丁寧なものである、こんな處は至極此方にも親し氣が起つて、早く已に家庭的な氣分になる、西洋のホテルだと斯うは行かない、扉を押明けて入ると、支配人の前へ連れて行かれて、いきなり住所氏名を宿帳へ認めさせられ、それから室の鍵を渡されて、そこを引下つて案內者に附いて行く、案內者も室を敎へてくれると、そのまゝ何處かへ消えて無くなる、特別に注文をしない以上、お茶や菓子などは一切持運ばない、この事に就いて一つの笑話がある或る日本人が始めて洋行の途次、北米シャトルの某ホテルに泊つた、處が客室へ案內してくれた限で、お茶も菓子も出さない、これは人を輕蔑してるのだ、失敬千萬な奴等だと怒り出して、日本流の考へから早速給仕を呼び付け、叱る如く茶を命じ、又菓子やら、水菓子やら澤山持運ばせて、やつと疳癪の蟲を押へて得意になつてゐたが、翌朝イザ勘定となると、茶菓代、金五弗、即ち日本の十圓程請求されて、大に閉口したといふ赤毛布を演じたのである。

△西洋ホテルと日本旅館

西洋のホテルの不便は、それ許りでない、萬事が頗る事務的であるから、一泊といふも時間づめで、例へば前日の午後五時から、翌日の午後五時までを一日間とし、若しその時間を五分でも、十分でも遲れて長居したりすると早速、更に一日分の宿泊料を容赦なく請求するのである。

加之、その宿泊料といふのは、ホンの室代丈で、若し食事をすると、その都度々々、食料代を請求され



封建の面影（其四）名古屋城

る、それもホテルの料理となるとナカ〳〵上等で、例へば東京でも帝國ホテルの洋食が一番御馳走だとなつてゐるが如く、苟も巴里、紐育、ロンドン、伯林あたりの第一流、第二流のホテルの食堂は貴顯紳士が奢侈贅澤を競ふ場所となつてゐるから、隨つて滅法高い金を取られる、それでは遣り切れぬから、大抵は室代丈拂つて、食事は近所の安いレストラントへ食べに行く客が多い、何時か日本の實業團體が米國へ渡つた折、紐育第一等のホテル、アスターへ泊つて食堂へは出ないで、廊下をムシャ〳〵、バナヽの果を食つて歩いた人なども出たといふ珍談を生じたのは斯る算用づくからであらう。尤も、この室丈取る方は、歐羅巴式といひ、食事附幾何と價を定めるのは亞米利加式と云ひ米國などは、一つのホテルが、この兩法の式を用ゐて客の好に任せてゐる。

又、西洋のホテルで費用の嵩むのは、例へば扉の傍に立つて、戸を開閉して客を送迎へする門番、階段の上り口に立つて昇降掛を上下させてくれる番人、その

他、給仕や、床を造る婢や、又食堂へ出ると給仕人などに對して、その都度々々、必ず十錢とか二十錢とかの心付をやる習慣になつてゐる事だ、それや、これやで、餘程金のある人は別として、旅費を十分に持てない者は、何うも氣が引けて居心地が善くない。

併し西洋のホテルで、一番便利を感ずるのは、客人の誰にでも自由に使用させる廣い大きな應接室若くは安息室といふやうなものゝ設備があつて、圖書館樣のものまで出來て居り、あらゆる新聞雜誌は素より、旅行案內、旅行地圖等をも勝手に縱覽させ、又卓、インキ壺、封筒、用紙などまで備へ付け、それと客人の使用するに任せてゐる事である、客間々々は、鍵でキチンと鎖して、互に城郭を設けてゐる代り、宿泊人が皆この大廣間に集つて來ると、喫煙したり、談笑したり、對交の場所となるのである、一面、個人主義的である西洋人は、他面、頗る社會的、團體的である事がかゝる方面からでも合點される。否、彼等は元來、個人主義的の修養を積んでゐるから、かく、社交的に、旨く調子を合して行く事が出來るのであらう。

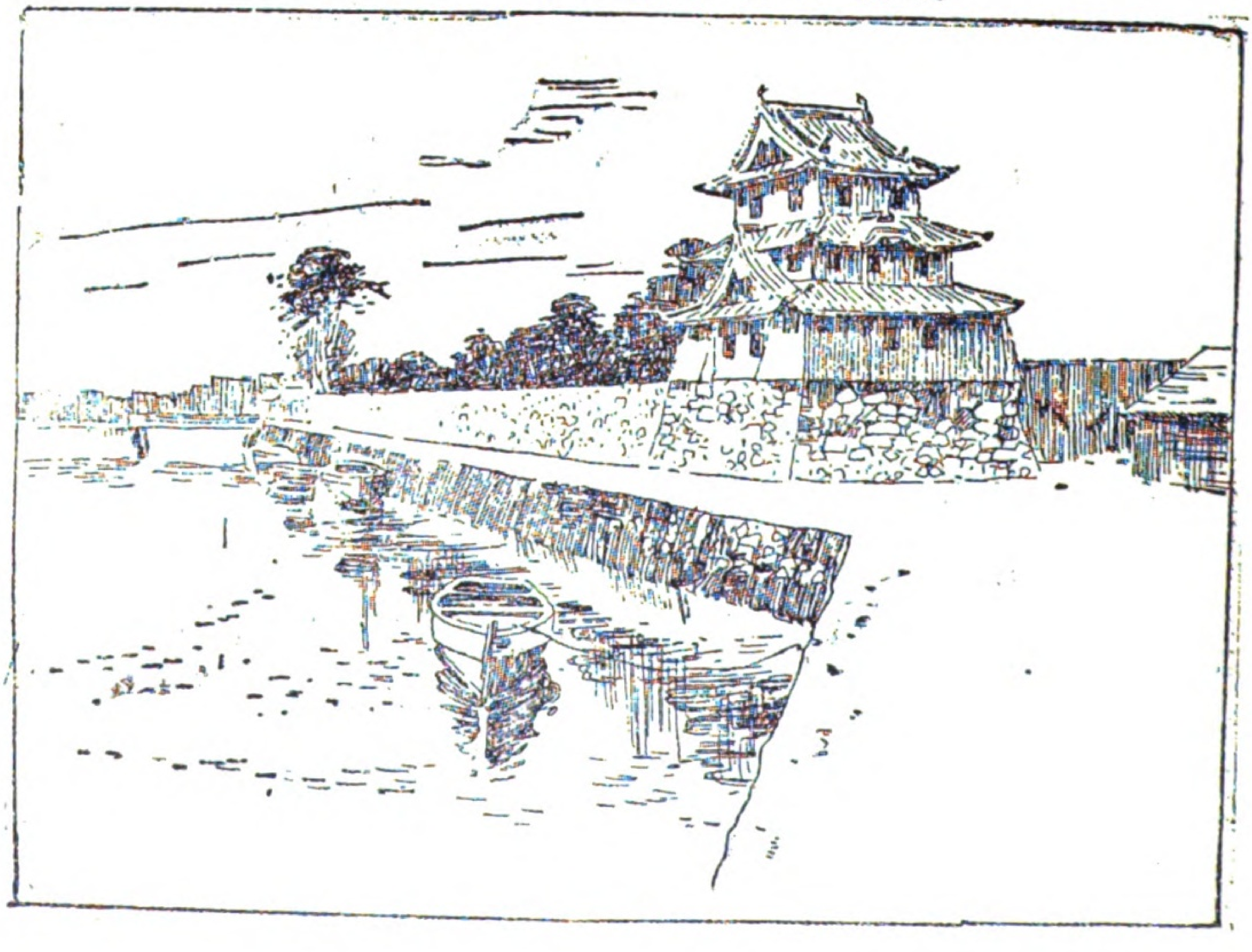
西洋のホテルを見て來た眼で、日本の旅館を見ると客室、客室の區劃が立つて居ないのが、何んだか不安である、それは無論、壁や襖や障子で、それ〲隔てはあるものゝ、双方の話聲が聞え合ふ、煙管の雁頭をポン〲火鉢の緣に叩き付ける音が手に取るやうだ、咳拂ひの聲もする、長廊下を通つてゐても、老人の聲若い人の聲、女の聲、それが一々聞き分けられて、凡そ何んな客人がこの室々にゐるといふ事が直ぐと分つて了ふ、それ位の事は善いとしても、鍵も扉も無いから、障子や襖を外間から明ける事は勝手である、大切な荷物や衣服、殊に金入など浮つかり室內に打捨つて置いたまゝで便所へも行かれない、愈々寢るとなつては猶更で、あの薄つぺらな、拳で叩いたら壞れさうなナイフ一つでも切り拔かれさうな、雨戶一枚で盜賊を防ぐ用心にしてあるのからが覺束なく、殊更、客人の込み合つてゐる家の中で、室々を固める用心は皆無だから何時、枕さがしが入つて來るが分りはしない、紳

經過敏になれば、夜中に誰か寢首を掻きに來ても知らなからうといふ餘計な心配が生ずるのである。

## △日本の戸締は樂天的

一體、日本にコソ〳〵泥棒が多く、西洋にはこの種の犯罪が至つて少いといふのは、矢張りこの家の構造室々の戸締りとか、扉の工合とかに依る事が極めて多いらしい、錠の附いてゐない日本の家の上り口では、よく靴や下駄を晝鳶に浚はれて行つたりし、又夜盜に手もなく雨戸をコキ外されて、箪笥や押入を勝手に荒らされたりなどするが、西洋の家屋の如く錠と錠と、扉と扉とで、ピシ〳〵と固めてあつては、晝鳶は愚か夜盜にしても忍び込んだり、押入つたりする事は容易ではない、生命財産の保護といふ點にかけては、西洋の家屋の方が寧ろ理想的であると思はれる、日本の家屋にしても少くとも、戸鎖を今一層嚴重にするやうな方法を取るのは必要の事である、殊に近頃の東京のやうに、いろんな物騷な事件の續々起つて來るのに見て

封建の面影(其五)　高知城



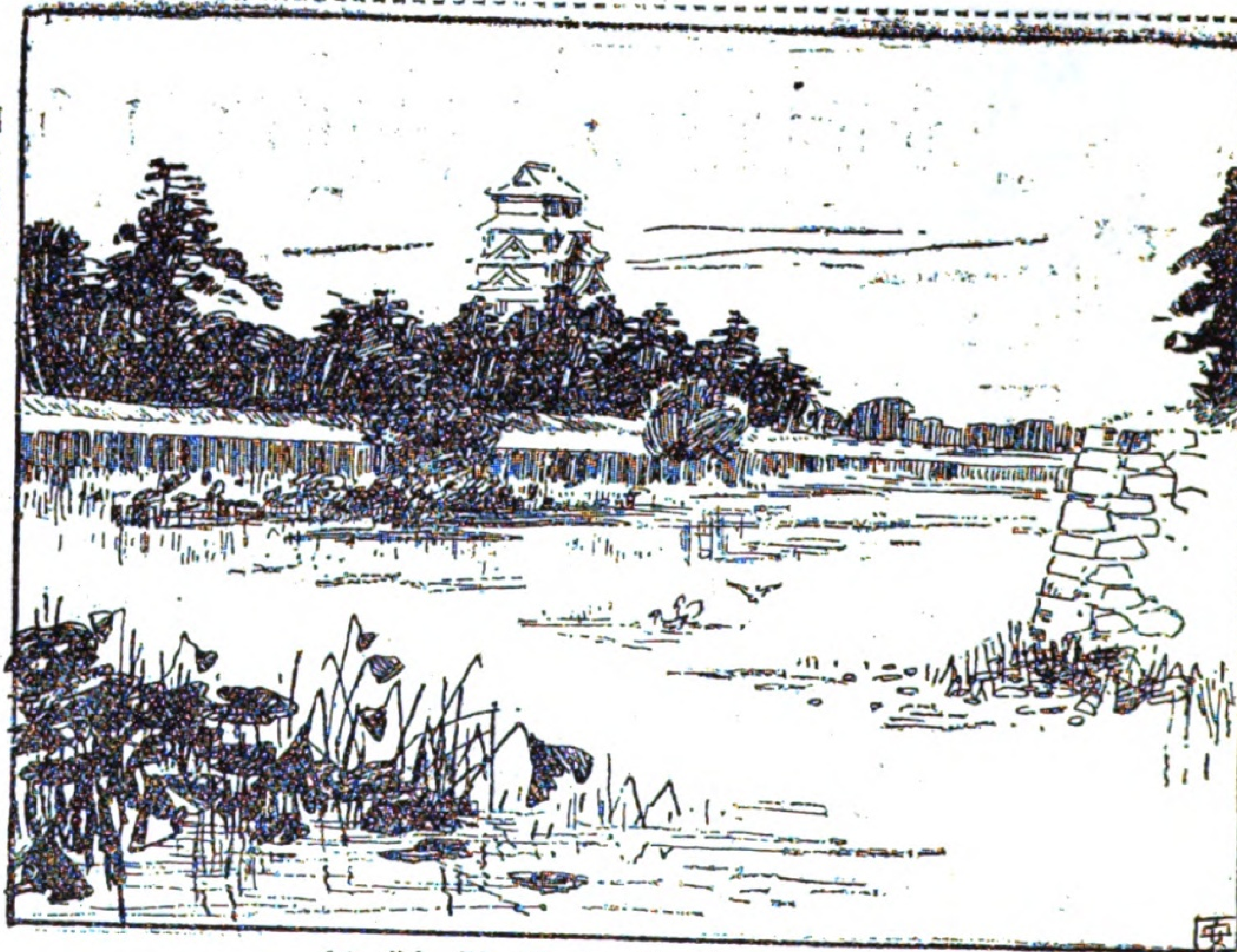
も、この事はナカ〳〵輕々しく打遣つては置けぬ問題である。

この戸締の問題の序に云つて置きたいのは日本人の服裝の事である、明治の過渡時代、文明混亂期の姿はいろんな方面に現はれて來てゐるが、服裝の事などもその目立つものゝ一つである、洋服を着て、帽子を冠らないで歩く者もあれば、印袢天に尻切草履もある、紋付や袴がゐるかと思ふと、筒袖服に三尺帶が通る、懷手をしたり、頰冠をしたり、鉢卷をしたり、頭巾を冠つたり、亂雜至極で、何れが日本人の一定した服裝か、日本人が見ても分らない程である、そこになると、西洋にはキチンと秩序が立つてゐて、衣服の式や洋服の地の柄は違つても、皆一定の樣子、體裁を作つて歩いてゐる、その間に自ら禮儀があると云つてよひ、併し、この禮儀といふ事は兎に角、家屋の戸締と一緒に、衣服の戸締が西洋風にはキチンと附いてゐるが、日本服は、日本の家屋と同じく、何うもだらしが無い婦人の服裝は殊にこの點を注意する必要があると思ふ

## △戸締と服裝

西洋の婦人は、自然、下襯衣や下股引を着け、その上にコルセットを嵌め、上襯衣を着け、ウエスト、コートといふ順序になるから三重にも四重にも肉體を保護してゐる、一朝、惡漢に襲はれても、無造作に辱めを受けるといふやうな事はない、又一寸した惡戲をされても、白い脛を露出するとか、玉の腕を曝らすとかいふやうな事は一寸無い圖である。

然るに日本の婦人の今の服裝では、少し風が吹く日などには、裾がめくれて白い脛の露出するのは普通の事、長襦袢の模樣までが人目に曝らされる事になるのである、それ許りか、袖は又袖で引めくられて、二の腕が出て了ふ事もある、風一つ吹いてさへ所謂醜體狼藉の有樣である、一朝、惡漢などの手にかゝつたら最後、殆んど肉體が保護してないから、容易にその毒牙を逞うせしむる始末になるのである、恰も戸締りのない又、室の錠のない日本の家屋が、夜盜や書斎のため



福島正則築きて後ち淺野氏の居城となる

廣島城封建の面影（其六）

に、屢々惱まさるゝのと同じ道理である。

處女の貞操とか、婦人の節操とかいふ事を口にする教育家や、宗教家のあるのは結構だが、かゝる卑近な婦人の服裝などが、一面、その貞操、節操を保險するものである事をも注意して、實際的見地から一歩々々と足元から踏み固めて行くのが一層大切な・又有効な處置ではあるまいか、日本婦人の服裝問題などを今更らしくこゝで說き立てるのも、一向に實効が擧つて居ないとの事である。

## △西洋の下婢と日本の女中

話はつい脇道へ外れたが、前いふ如く、日本の旅館には、西洋のホテルに泊つたやうな、兎角安心で、手丈夫だといふ感の一面の缺けてゐる代り、番頭や主婦さんや女中が、頭を列べて、家族的に迎へ入れてくれた時、直覺されて來る親しさ、氣輕さ、お手輕さの一種の懷し味といふ感情が、何彼の上に附き纏つて來る、電話室へ電話一つかけに行つても主婦さんがチャ

ホヤ云ふ、長廊下を走つて行く際にも行違つた番頭さんは笑顔で挨拶する、他人の家ながらも、兎も角、一時的に家族の端くれになつてゐるやうに客人に思はせる、西洋のホテルに泊ると、一つの事務所、若くは一の官衙にでも入つたやうな氣分がして、この家族らしいといふ匂は寸分もしないのである。

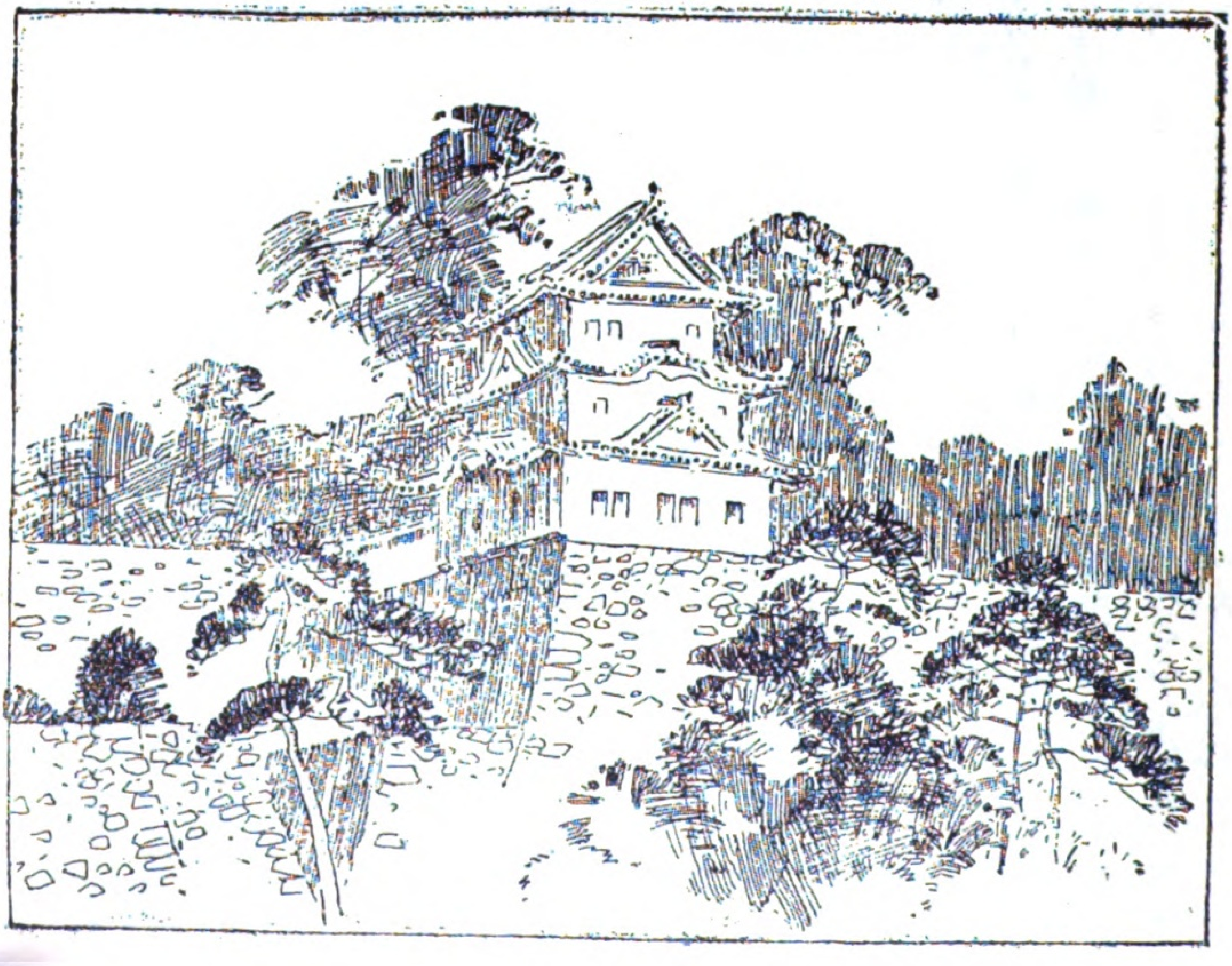
取分け、朝夕の三度の食事に給仕をし、衣服の取片附けから、蒲團の上げ下し、室内の掃除萬端引受けて一手でやる、恰も西洋のホテルの、小使と給仕と、床造りの婢との三役四役を一人で兼ねて、不平な顔も見せず、お世辭を云ひながら働いてゐる宿屋の女中は、最も驚くべく、忠實な婢であると思はれた、イヤ、これはこの女中許りでない、一體、日本の家庭に奉公してゐる女中の如く忠實で、勤勉で、しかも從順なものは、世界の文明諸國にその比類がないと云つても過言でなからう。

例を米國の婢に取つて見ると、彼等は自由主義、獨立主義・平民主義の氣風の行渡つた國柄にゐる丈け日本の女中と恰も兩極端をなしてゐる感がある。第一、彼等は餘つ程分業的である、日本にも仲働きとかお針とか、それ〲手別をしてゐる處もあるが、米國の婢はそんな事處でなく、中上流の家庭になると、床丈を造る婢とか、コーヒーを造つて皿丈を洗ふ婢とか、或は洗濯專門の婢とか、そんな風に部分々々に仕事が小く別れ、各自その受持が濟めは、空手で遊んでゐても他の者へ助力してやらうともしないといふ風だそれで給金といへば廿弗乃至三十弗、即ち日本の金で月給四十圓や五六十圓は普通で、中には百圓内外を得てゐるものも珍らしくない、日本の高等官顔色無しといふ高い報酬を支拂はれてゐるのである、それて無論自己の定まつた義務に丈けは忠實にやつてゐるが、それ以外は、自己の權利を主張する事を忘れない、例へば女主人公が洗濯番に向つて、小使の役を云ひ附けたりなどすると、知らん顏をして濟ましてゐるとか、若くは反抗を敢てする事を躊躇しない、イヤ、女主人公も、その邊の呼吸はかねて吞込んでゐるから、一體

こんな役目違ひの事など云ひ付ける氣遣ひもないのであるが、當番がゐなかつたりして、萬止むを得ない場合には、女主人公から頭を下げてお願して役目以外の用事を間に合せて貰ふといふ有樣である。

それでゐて、毎週日曜日など先づ外出は自由になつてゐる、少くとも一週一回の休日は與へられる、又その日、その日の仕事にしても、約時間詰になつてゐるから、夜の八時とか、九時とかに、切が付いて了へば後は自分の室に閉ぢ込つて、起きやうと寢やうと又遊びに行かうと勝手な眞似が出來る、時間外に、不意の客來があつても、主人公はお茶一つ命令する事は出來ない、殊に食事の際など、日本流に臨時客の爲めに、即席料理など出させるやうな事は一切出來ない習慣になつてゐる。即ち彼等は下婢たる一定の義務以外に、矢張一個の人格としては、主人と同等の權利と地位とを有する事を自覺し、又それで通つて行くのである、又それが通らなければ自分の方で勝手に出て行つて了ふ、主人の方でも氣に入らないで解傭するとなると、

封建の面影（其七）明石城



一週間とか、二週間とか本人が他の奉公口を求めるまでの間の、猶豫期間を與へて、その事を前以て宣告して置かなければならぬ、尤もこの解傭の際には主人公はライセンス、即ち本人の義務上の成績、働きぶり如何を證明する書狀を與へる、この書狀を以て彼等は新らしい傭主を求めて歩く事になつてゐる、要するに、給金の點から云つても、自由の利く點から云つても、善惡共に米國の下婢は先づ理想的のものと云へるだらう、尤も主人公の方から云つたら最も非理想的のものかも知れぬ、これを日本の下婢の事と比べて考へると一見何んだか別世界の感があるやうに思はれる。

英國の下婢は、大體、米國流ではあるが、第一給金が安い、一ヶ月十五圓から二十圓位にしか當らぬらしい。尤も見識は高いもので、例へばおかね！ なんかと、日本風に呼び捨てにすると、無氣になつて、ミスおかね孃と呼んでくれと請求する。

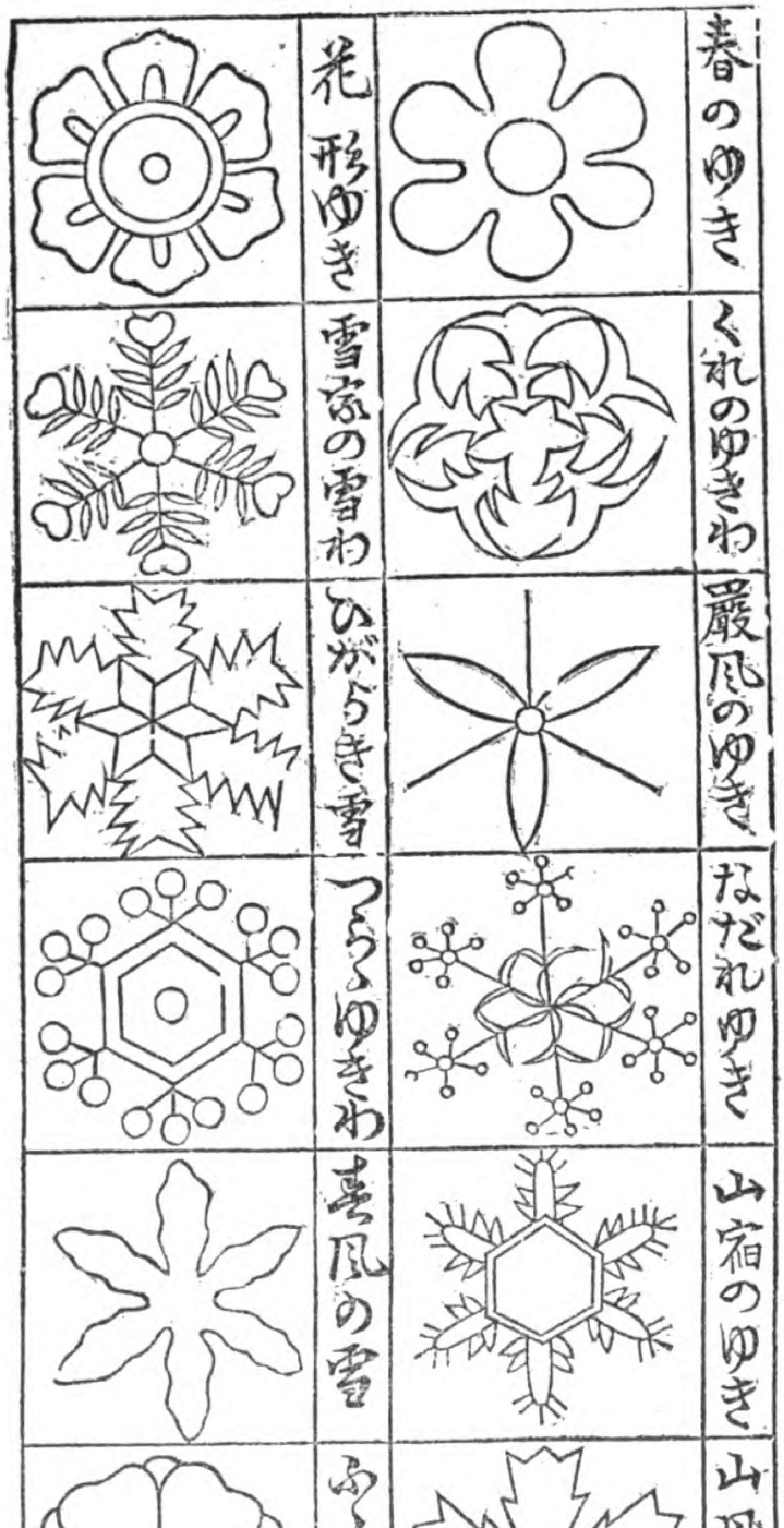
給金が更に安くて、又餘つ程從順で、よく働くのは獨逸の下婢である、一ヶ月十圓位なら先づ可い事になつてゐる、そして仕事の範圍も米國の下婢の如く定り切つてはゐない、イヤ、例へ定があつても、それ以外の事も隨分手助けする、一體獨逸の婦人は家庭的で、從順で、何處か日本の婦人に似寄つてゐるから、隨つて下婢なども使ひ善いやうに仕付られてゐるのである歐羅巴の女が、米國をさして下婢奉公志願で出かけるものが、大西洋通ひの汽船の中に隨分多くあるのも、矢張仕事が樂で、金高の餘分に得られる事を希望するからであるのは勿論である。

それや、これや比べて來ると、一ヶ月の給金僅か二圓五十錢から三圓位の程度で、休日と云へば唯、年二回の藪入に限つて居り、一家の料理番ともなり、給仕ともなり、風呂も焚き、床も造り、朝から夜中まで、忠實に主人の命令通りに動いてゐる日本の下婢は、主人公側から云つて理想的の下婢たるに相違ない、一家の主婦たる諸君は、かゝる理想的の下婢を使つてゐながら、その上に、まだ何の彼のと不平や叱言を列べるやうでは、不知不識の中に、自ら暴虐の君主になつて

了つてゐるのである、日本の下婢は飽くまで勞つて、出來る丈け愛して、使つてやるべき筈のものである。

つい、下婢論になつて了つたが、自分はかゝる理想的の下婢君に、三度の食事の給仕をして貰ひながら、一種の家族的の感情を味ひつゝ、忙しい中に數日を過して了つた、友人が夜晩くまで話し込んで、泊つて行くなど云ひ出す、こんな事が、ホテルで起つたのならワザ〳〵床を持ち込ませたりなど大騷ぎだが、日本の疊の寢間は都合がよい、下婢君が早速、蒲團を延べてくれると、床造りが出來つて了ふのである。ア、呑氣な者だと、つい微笑せずには居られない。

雪の意匠



# 結婚媒妁の苦心

法學博士　寺尾亨

## △長し短しは贅澤の沙汰

度々結婚の媒妁をして沁々感じた事は、例の『帶に短し、襷に長し』と言つて多くの縁談を不調にするのは、どちらかの氣の持樣から來る贅澤沙汰であるといふ事です。假に甲乙一雙の求婚者があるとして、乙から甲へ縁談を申込んだとすると、甲の方では、どうも少しと躊躇するが、其の反對に甲が乙に申込んだとすると、乙の方でもどうも少しと同じ樣に躊躇するのが多いのです。これは『隣りの婆さんも頼めば鼻が高くなる』と言ふ諺の通り、申込まれた方に自惚が手傳ふから起る事と思はれます。けれども傍で見てると斯く双方で長し短かし、少し不足だと思ふ位ゐの處が丁度釣合つた縁談で、十分自分を滿足させるやうなのは、必ず不相當な縁談と決つてゐます。故に縁談を求める者は先づ自惚を去つてかゝらねばなりません。

同僚の山田三良君（帝國大學教授）などは自惚れたのではなかつたが、初め洋行して歸つた當座隨分澤山な好い嫁の口が向いて申込者が非常に多かつたけれどやはり長し短かしで落第させてゐるうちに、其れが評判になつて、娘の親達は彼處は却々むづかしいからと後には思ふて見ても申込まずに通り過ぎるやうになり同君も長い間手甲擦つてゐたやうでした。

## △嫁の値は漸次下落

そして一體から言ふと、目下の處、嫁の供給は需要を超えて良縁は次第に難しくなり、男子の生活難につれる俸給の下落と正比例して、嫁の値が次第に下落してゐます。從つて私なども、大概嫁の方から頼まれるのが多いので、女は女學校を卒業して、思はしい縁談も見着からず、マゴついてゐるうちに二十歳位になるのが普通であります。

處が困るのは、婿の方の要求で、大概成るべく若い

女を求める、普通十七から九位迄で二十から二十三歲位になつてはちと讓步した手合でなければ娶りません。又た嫁側では、普通廿六から八迄の婿を求めるのが多いが、今の高等敎育を受けた男子の自活して一戶を構へ得るのは普通二十八歲から三十一二歲の間であるため、誂向なのは滅多にないと言ふ有樣で、仲人もこれには隨分苦しめられます。が年齡の差は先づ十三が極限で、其れ以上違つては難しいやうです。

### △第一は男は腕、女は容貌

近頃仲人に持込む双方の要求は、嫁側では第一婿の腕――將來の發展、學校の成績が先で、門閥とか、容貌とか財產とかは漸次第二の問題にする傾きがあります。地方の門閥家とか豪家とかになると、第一に門閥財產を要件にするのがあるが、それも段々少くなつて行くやうです。

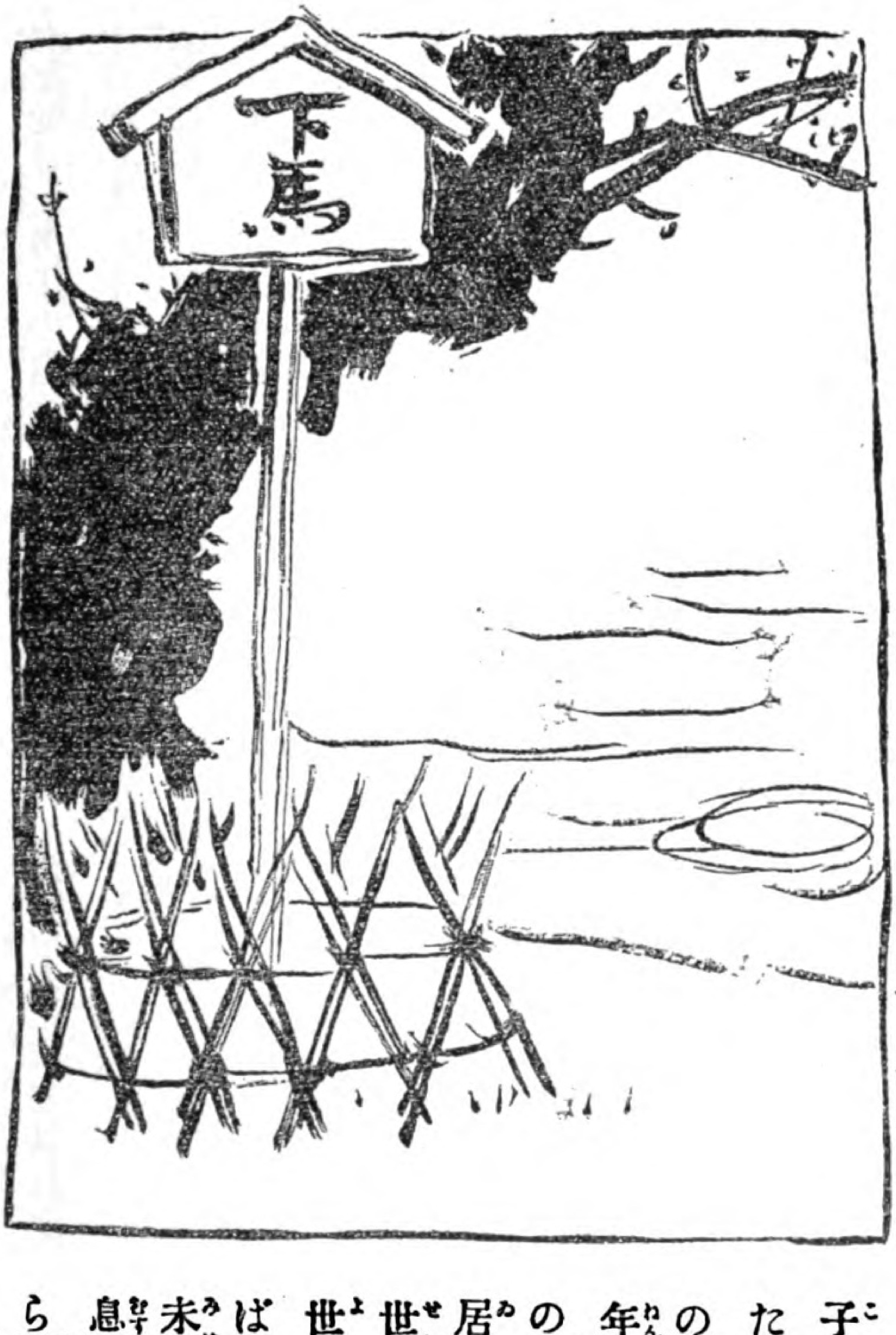
次に婿側の要求は、口で立派な事を言つてゐても、やはり第一が嫁の容貌で、次いでは先方の兩親が物が解る人か何うかを問題にし、(これは新舊思想の衝突から來るらしい)、次が財產門地となります。

尙ほ非常に注意するのは、双方の健康中呼吸器系の遺傳で、大概の人は直ぐ其れを問題にし、神經過ぎる程の詮索をして、親戚に一人肺病に罹つた者があると言つては考へ、顏色が蒼いといつては思案するといふ風です。

學士で何が一等よく望まれるかといへば、私の見る處ではやはり法學士で、次が醫學士、それより工、農理、文と言ふ順序のやうに思はれる。法學士は將來の發展が自然位階や權勢に緣があつて、幸よくば何爵夫人と呼ばれ、何大臣夫人と呼ばれ得ると言ふ空想を繫ぐに都合がよいからでありませう。從つて法科の秀才が卒業したとか、洋行して歸つたとか言ふと、一人婿に嫁十四五人も一時に結婚を申込むといふ有樣です。それが醫學士となると、妙に商賣柄を氣嫌ひする向がある。中には醫者の不養生で、一體に早世すると言つて心配する人があります。

## △媒妁人の困ること

媒妁人が一番困るのは、先の女親の姑としての氣質を知ることで、母親として、主婦としては評判の可い人でも、嫁に對する姑としては、どうも手の着けられぬのがよくあります。それと、も一つは婿の性質は何かで知られるが、嫁はどう言ふ氣質の女かといふ事は、唯其の家庭の樣子と、學友位から聞いたゞけで見當を着けねばならぬ事です。些と會つ




て見た態度丈では、女の氣質は消極的であるから、能く機徴を捉へることが出來ません。

或る未亡人が獨息子と家庭を持つてゐた。其の息子といふのは、眉目秀麗の青年士官でした。兼ての知己で、賴まれて居たから、一人嫁を世話したところが、世に言ふ、三人寄ればひとりぼつちで、未亡人の姑は、今迄息子の著物の世話から洗濯、朝晩の送迎を皆自分の手一つにやつてゐたのを嫁の手に奪られて淋しい上に、色々心にひがみを起して、遂に血を吐く思ひの二人を、厭應

言はせず割いて了ひました。其後又一人世話したが、其れも長くは耐たなかつた。かういふ氣質を豫め知るのは非常に困難です。

### △金持の嫁にはならぬ

其他色々縁を求めるに就て考ふべき事があります。或る名高い醫師の娘は私の世話で有名な地方の資產家の許に嫁ぎましたが、婿殿の教育も淺く、兩親も其の通りで、何一つ話しても趣味は合はず。資產家といつた處で鐚一文嫁の自由にならないし、却つて窮屈な位で、非常に漏言してゐます。嫁の兩親も『金持の親類は懲々です。親類になつて見ても話一つ出來ません。』と言つてゐる。其の妹娘も『金持の嫁には、姉樣が可い手本だから、どうしても行かない』と主張してゐます。無暗に財產家を望むのも考へ物です。

### △一雙の美談

私が媒妁した法學士で感心したのは、今は辯護士として相當に働いてゐる人ですが、最初香竄葡萄の近藤利兵衞氏の處に養子がいるが、君は次男だし行つたらどうだと、兼て近藤氏から頼まれてゐた其の男の友人が勸めたので、私の處にも相談に來て、色々思案してゐましたが、自分の家が貧しい上に、家兄が働きのない男だから、何時兩親の世話をせねばならぬか解らず其の場合に養子に行つてゐてはどうもと言ふので、遂に此の大資產家をすてゝ田舍の一郡長の娘と結婚しました。

そして其の郡長が又感心で、懸換のない一人娘を、今時養子と言つた處で、碌な者は來る筈がないから、寧ろ良縁があれば呉れてやつて、其の間に出來た子供でも貰ふて育てる方が氣が利いてゐると、早速其の法學士に嫁せしめ、自分達は今大阪で熱心に慈善事業や社會公共事業に力を盡してゐます。これなど一雙の美談と言つて可いでせう。(談話筆記)



# 乳母の選み方

乳母を選擇するに當つては、其乳母の健康と營養の如何が大切なる條件であります。即ち第一に乳母の健康強壯を檢査しなければならぬが、夫れには先づ乳母の小兒を診斷しなければならぬ。其の兒が健康に肥滿して育てば、其の母の乳汁は申し分が無い譯で、乳母に傭つても愛兒の營養に申分ないのです。尙此外健康上注意すべきは、乳母となるべき當人及び其小兒に黴毒や結核の疑ひがあつてはなりません。斯ういふ缺點が見えたら、此點ばかりでも旣に傭入るゝ資格がないのです。之れは西洋に於て申す事ですが、日本では尙是以外に癩病の疑ひある者、或は脚氣の疑ひある者は取除けなければなりませぬ。

第二の條件としては乳母は成可く第二回の分娩者を選ばなければならぬ。夫れは乳母の旣往を尋ねるのに最も便利である。即ち乳汁は澤山でたか、乳汁の性質にも申分無かつたか、生んだ小兒も健康に肥滿して育つたか、斯ういふ履歷を詳しく尋ねる事が出來て、乳母としての資格を判斷するのに大變都合が良いのです。且つ若し出來得べくんば分娩後六週間經つたものを要する。其理由は分娩の時分に乳兒が先天性黴毒に感染して居るとすると、六週間頃からソロソロ其徵候が顯はれて外部へ見えて來るから乳母の黴毒の如何を知るの便宜となります。要するに乳母の兒を診斷する事は、小兒の發育の狀態を見るにも都合が宜く、又乳兒の良否を鑑定するにも都合がよいのです。

乳母を選擇するに當り乳房の形狀などを八釜しく云ふものがある。例へば垂れ乳房であるとか、或は質が硬いとか柔いとか云つて、夫れによつて乳汁の分泌の良否を鑑定します。併し之れは全然不必要な事であります。夫れから又乳汁の化學的試驗をして見ます。扨其試驗に依つて如何なる成分を決めるのかと云ふに、脂肪の多少を問ふのです。元來脂肪分の多少に依つて乳汁の良否如何を問ふのは全く矛盾した話で、殆んど之れは必要の無い事です。

尙ほ此の外に乳母を選定する際多くは乳汁の顯微鏡檢査をします。之れとても全く重きを置くに足りません。能く世間の母親が訴へますには「乳汁を顯微鏡で檢査して戴いたら、乳球が揃つて居ないから良く無い母乳だと醫者から申されます。實際私のお乳は成分が惡いでせうか」と心配さうに尋ねられます。併し乳球の揃はぬ抔と云ふ事は全然心配にはなりませぬ。何故ならば哺乳前と哺乳後即ち乳汁を搾る時期に依つて乳球の大小に大なる關係があるからです。畢竟斯ういふ事を特に顯微鏡で檢査するに

は及びません。

私共が乳汁の顯微鏡的檢査をするのは、右の意味で爲るのでなく、乳汁の中に異物があるや否やを試驗するのです。異物とは血液とか膿球とか又は初乳球などをいふので、斯ういふ物が分泌すると、此乳房は病的故乳汁も矢張り病的に屬する。斯ういふ乳汁は授乳を禁じなければならぬから、夫れで顯微鏡下に檢査する次第であります(醫學博士弘田長氏)

## 動物の天氣豫報代用

天候に異調があると、鋭敏な猫の身體は直に生理的の變調を呈し、精神作用の上に其の兆候を表はして參ります。そこで其變調を仔細に觀察すると、恰も天氣豫報に代用する事が出來るといふ譯ですが、中にも三毛猫の牡が、一番その變象を呈し易いのです。其の譯は一般に三毛の牡を珍重する結果として、好んで三毛を交尾させる、その結果は則ち同族結婚、近親結婚の理に基いて、三毛の牡は身體が虚弱に出來上り、從て天候の變異を鋭敏に感ずるのであります。

天氣豫報の代りになるのは獨り猫許りではありません。鳩が啼いて其雌を追ひ廻はすのや、鳶が舞ふのや、雞が朝啼きをするのや、水を浴びるのや、鷄が其雛を背にし、水鳥が木に攀ぢ、蟻が其穴を閉ぢ、魚が水面に飛ぶなどは、皆昔から降雨の前兆だとしてあります。尚ほ犬が草を嚙み、猫が顔を撫でゝ、其手が耳を越えないのは、何れも晴天の兆だと世俗では信じて居りますが、皆相當の根據があるやうです。

猫の動作に據つて、其日々の天氣を豫知する方法は、猫が靜かにしてゐる時は、降雨にもせよ、晴天にもせよ、其現狀を保持すべき場合が多く、而して大抵は晴天であります。それから猫が何も動作をしない時も、明日晴天と思つて宜しい。又霖雨中に猫が騷ぎますと、其翌日から半晴か晴天になります。實驗によると、午前七八時頃に猫が騷ぐと、午後になつて天氣が變ります。並に云ふ猫が騷ぐと云ふのは、唯猫が平靜にして居ない事を意味し、今迄靜かにして居た猫が、何か思ひ出した樣に俄に騷ぎ出し或は座敷を走り廻つたり、障子に駈け登つたり、過度に爪を磨いたりして、總ての樣子が平靜でない事を言ふのです。眠りより覺めて體を伸したり、又は爪を磨くのなどをいふのではありません。又子猫が徒に押戯れたり、走り廻つたりするのも、同樣です。

尤も猫に據つて天候を豫知するには、二頭以上を飼養しなければ十分に出來ません。騷ぎ廻る狀態も、二頭以上なら確な事が判ります。私の實驗は皆的確に當りました。試みに自家の猫に注意して御覽なさい、頗る趣味ある研究にもなり、時に依つては、隨分役に立つ事があります(獸醫入江澹吉氏)

## 身體の組織と食物の調和

果實は誠に結構なもので、食慾を進め、血液を清め、疲勞を醫し、殊に肉食後などには缺くべからざるものである。肉食後果實を用ふれば酸化作用を起して體内の食物を腐敗せしめ、往々中毒すると言ふ人もあるけれども、特殊な

病的の體質の者なら知らぬこと、一般普通の人にはそんな心配はない。唯喰べ過ぎると下痢を起して身體を衰弱せしむることがある。

野菜に至つては更に大切で、人間の身體を組織するに必要な脂肪と蛋白質と含水炭素との悉くを含有して居る。玉子や牛乳を唯一の滋養物と思ふのは古い考へで、是等は蛋白質や脂肪には富で居ても、含水炭素が少ないから之ばかり喰べて居ると豚の様に肥るばかりで、骨格や筋肉は其割に發達しない。野菜を食つて始めて十分の發達をするのである。唯纖維が多いから喰べ過ぎると腸を悪くする。

野菜や果實に限らず、如何なる食物でも喰べ過ぎて宜いものは一つもない。喰べる時と量さへ過たなければ害になる食物は又一つもない。夜睡際に果實を喰べて下痢すると同じく、他の食物を腹一杯喰つて寢ても夢ばかり見て安眠が出來ない。安眠に最も適する狀態は、可い加減腹の減つた時分である。（醫學博士遠山椿吉氏）

# 植物製の化粧料

胡瓜のクリーム　之を作りますには、先づ好い加減の大さの胡瓜を、四本ばかり取つてよく洗ひ、皮ごと極薄く切刻んだ上、少量の水を加へてドロ〳〵に軟くなる位迄鍋で煮るのです、それから其れを篩で濾して更らに布濾にした上、巴旦杏油を六オンスと白蠟一オンスを加へて、再び火に掛けて溶かし、ベンゾインを二三滴滴らして、冷却して置けば宜しいのです、斯うして作りました胡瓜クリームは、日焦、雀斑を治し、皮膚を白くするのに特効があります。

薔薇葉液　脂氣の多くて醜塗する人は、薔薇の葉から作つた液で顔を洗ふのが宜しうございます。此液は非常に香氣が佳く、且つ顔の色艶を美しくし、皮膚を細くして脂氣を去るに妙です。之を製しますには、乾燥いた薔薇の葉を一オンスばかり取つて、之に酢を三合ばかり注ぎ、斯うして一週間放棄つて置いた上、之に約三分一量の薔薇水を加へて作るのです、又之を使用ふ時には、顔を洗ふ度に、此の液を食匙に一杯づゝ金盥の水の中に加へて用ひれば宜しうございます、或は濡れた手拭に二三滴たらして顔を拭いても効があります。

糠の代りに馬鈴薯　馬鈴薯で顔を白くする法は、先づ大きな馬鈴薯を取りて、其れを半分に切り、微温湯に浸した上で、恰度糠袋を使ふやうに、手速く顔や頸の上を擦るのです、斯して十分か十五分位擦りましたら、後は微温湯で綺麗に洗つて置けば宜しうございます、此の化粧法は單に顔や頸許りでなく、身體全體に施しても差支へはありません。

高苣の化粧水　高苣で製したクリームも、亦化粧料として非常に効能があります。日に焦けたり、粗れた皮膚を治すには、比類がありません。之を製るには、五分間ばかり高苣を茹でゝ湯を絞つた後、乳鉢若しくは臼の中で、糊のやうになる迄擦つて、更らに之れを布濾にするのです。それから鯨臘を一オンスと、巴旦杏油を四オンスと、白蠟を二オンスとを混じたものをトロ火に掛けて溶解した上、（此の場合には煮立たせないやうに注意しなければなりません）恰度溶解した時分に、前に製つて置いた高苣の液を、一滴づゝ滴らすやうにして、二オンスばか

り加へ、箸で攪きまはしながら、十分に冷やすのです。

菾菜と胡蘿蔔の肉白粉　又頰を紅色に染める肉白粉は、菾菜及び胡蘿蔔から製ることが出來ます。即ち先づ黄色く熟した三本の胡蘿蔔及び菾菜を取りて、之を十分に擦り潰した上、袋に入れて汁を殘らず搾って仕舞ふのです。それから一オンス半ばかりの玉蜀黍製の粘液を混じて日に晒らし、時々攪き廻して水分を全く蒸發させてから、紗の布で漉せば、美しい肉白粉が出來ます。

## 重箱の川魚料理

東京で川魚料理で名高き山谷重箱の料理秘書の一節に曰く、

◎鯉の鼈羹——鯉の調理法は數多あれ共、先達より引來りたる鼈煮を製せんとする時は、先鯉を跳切とし、能く血を洗ひ、一片に付万上味淋一合の割合を以て十五分間より廿五分間位にて煮揚ぐべし。鯉の汁煮を製せんとする時は、鱗を其儘筒切となし、血は其儘にして、煮る事凡三十分間、鍋底に附かぬ樣火を弱くして煮るべし。味噌は白赤にて加減する事。而して味淋又は砂糖にて味を附すべし。鯉の生作を製せんとするときは、鯉の形極々上等なるを見計ひしめずして鱗を取り、肉をば骨に少も傷かぬ樣に大切に取りて製すべし、右の如くして出來上りたる生作を、客に出す迄は、眼に鱗一枚を乘せるべし。而して客の前に出したる時、勢を見せる爲め、其閉ちたる目の鱗を取除け、萬事客の心附かざる樣目に醬油を滴らすべし。

◎鯰の鼈煮——先づ鯰の頭を一打して、夫より鰭と骨を拔き、長さ一寸五分に切り、其儘血もぬるも洗はず、例へば五百匁を煮揚るものとして万上四合、詰醬油五合程を加へ、是を煮詰る事十五分以上廿五分間程煮る時は、其色工合頁く、美事なる事玉の如く、これを鼈煮といふ、鼈煮には自家仕用詰醬油を用ゐるをよしとす、是は極上等醬油色濃く肉のあるを選み、先一樽に對し万上五升を合せて、是を四晝夜休なく粉炭で煮詰めて作る也。

◎鮒の甘露煮——先づ鮒目方五六十匁より百四五十目迄を白燒となす、燒方は頭を能く燒いて、尾は燒き過ぬ樣注意すべし。夫を夏は半日、冬は三日程風に晒して、而して後ち鍋に敷笊を用ゐて湯煮する事六時間、ちよい〳〵水を差しながら詰るべし、其上にて味淋及び砂糖の極上を澤山用ゐ、煮揚る前に至りて醬油を加減すべし。

◎鼈の吸物——鼈の吸物は、切りたる肉を湯にて程よく、煮揚げ、皿に取揚ぐべし、殘りたる湯は即ちスープとなる、是を奉書又綿、毛布等にて能く漉し清め、是をば燒鹽及び色薄き醬油にて味を附け、前の煮揚げた肉を入れ、四季に依て何なりとも取合せのものを加ふべし。

## 萬引する女

呉服店で萬引をする婦人に盜むといふ意志があるか無いかは一寸疑問だけれど、彼の華美華美しく飾り立てゝある處へ虛榮に憧憬るゝ婦人が往つたら、自と欲しくなるであらう。酒好きの男が酩酊し前後を忘れて了ふやうに、只もう醉へるが如き精神上の發作となつてそつと欲へ

入れるといふのが大部分である。中には百圓以上の買物した貴婦人が三圓五圓の小さい物を竊つたのがあり、小學校の女教員、何某伯爵家令の細君など如何にも意外な人もある。

婦人を單獨で遣る處ではないと自分は常に警戒して居るが、現に昨秋も或書籍會社の社員の妻が、裾裏一枚盗んで擧げられた時、其人が驚き驅て來て、男泣きに泣き崩れ、五十圓の買物で足らずば、更に五十や百の金には困らぬ身を以て、何たる情なき事をして呉れたと打ち嘆き側で聞くさへ氣の毒で堪まらなかつた。

脊の子供が可愛くて前後も辨へず子供のものを取つたといふ悲しい話もある。一圓五十錢を工面して晴の衣物を買つてやらうと三越まで來て見ると、綺羅を飾つた群集の姿を見ては、今更にモスリン友禪では我慢がならず、惡い事だと思ふ隙さへなくて盗んだと泣く〳〵詫びた時などは、如何にも悲憐に思はれた。

住所を詐り氏名を明かさぬ姉妹二人のハイカラ女を、不埒な奴だと怒つて見たれど、父は何某小學校で首座訓導を勤めて居り、自分等二人もつい此頃檢定試驗に合格して、之から奉職する時で、如何にも事實を打明けかねたと懺悔を聞いては、其も尤もと首肯かれた。(當局某氏)

# 福壽草と雪割草

福壽草の種類は、サカエり香、秩父香、青梅香の三種で、花は段咲、菊咲等があり、中には純白の花も眞紅の花もあります。其内サカエり香は少さい草で、一本七圓位、秩父香も餘り多くなく、一本二圓位、青梅香は一本一圓五十錢位と云ふのが相場です。一體此の花の元は武州の青梅で、右の三種は福壽草の珍木です。然し普通の花は黄色で、北海道や會津や信州からも出て來ます。産地は青梅が第一で、産出の多いのは西武藏の倚店、本庄、深谷、安行地方で、毎年十一二月頃から何十萬本と云ふ數が輸送されて來て、それが皆賣れ盡されて了ひます。其の内で安行から出て來るのは地草と云つて莖が細く花を澤山持ち、一本一錢から四五錢位の相場です。此花は今年の様に出來のよい年は、上等の品が出來ますから、却て値段が高く、不出來の年の花が粗末ですから大に安いのです。莖が短くて太く、土際から一寸許り延びて居るのが上等の品で、莖が細長く延びるのは下等の品です。即ちヅングリして居るのに限るのです。

私の所に七福神と名けて、莖が一寸位で花を七ツも八ツも持つのがあります。これは素人にも譯なく出來ます。それは暮に一寸許り延びて蕾を着けたのを鉢に移し、蕾の上に一枚着て居ります澁皮を剝ぎ取つて蕾を丸出しにし、日當りのよい温かな室に入れて置きますと、新年には立派な盆栽となります。又七つも八つも蕾を持つたら、一づゝ咲了る度に摘み取りますと、順順に花が開きます。只咲いた儘に放り出しにして置きますと、何うしても花が小さくなります。斯うして正月の役目が終つた後は、餘り葉の延びない内に鉢から引き拔き、春の間日當りのよい處に置き、夏になると全く日陰になる所へ地植にして、油糟でもやつて置きますと、翌年の正月には又花を持ちます。

雪割草も新春の盆栽には結構な花で、形は福壽草に類似て居て、一名ミスミ草とも云ひます。産地は佐渡及び加賀の白山、四國邊からも出る草花で、佐渡及び白山の産が最も上等の品としてあつて、四國ものはズツと品が劣ります。花の色には紫に赤に白等があります。値段は一本一錢以上で、之れも新春の役目が終つた後は地植ゑにして置きますと、十二月頃に芽を吹き出します。雪割草も福壽草も、素人の手に移りますと地植にしては其翌年能く出來ませんが、翌々年からは立派に出來ます。これは早く花を咲かせやうと前年植木屋が温室に入れた後ですから、木が幾分か弱つて居るので、翌々年位にならないと、元の元氣に回復しないのです。

(團子坂薫風園主人)

## 現代婦人評論（其二）

# 一種の女

鐵拳禪

一

⊙鶯の美は、將に啼かんとする姿態にあり。滿身の油は乘り來りて、胸張り眼耀き、羽毛又輝く、圓聲婉囀、氣脈に反響す。法――法華經―

⊙鶯は梅は配し、竹に配せる畫趣を見るべく、朗かなる高音を聽くべし。紅梅窓裡、輕紗を隔てゝ聽く、更に佳也。

⊙鶯の腹を見んとするは、美人を理解せんとするに等し。その聲を聞くべく、其の言に聽くべからず。有聲の畫、無聲の詩、美は理窟の外に在り。

⊙少女は詩也、美人は畫也、天眞は其の可憐なる擧動に伴ふ無邪氣の言語にあり。魅力は其の姿態の韻律と表情の色彩にあり。

⊙春月照し來らずと雖も、暗にもしるきは梅が香也。美人の粉黛、なほ闇中にくつきりと浮く、清艶楚々の舞姿は銀燭の下に見るべく、娉婷たる立姿は光溢るゝ郊外の寫生に適す。

⊙「婦人は繪畫也。其の眞趣を知らんと欲せば、其の姿を眺めよ……」と、オスカー・ワイルドは皮肉りぬ。是れ、美人少女の畫趣を讃せるに非ずして、「婦人の理解せられんが爲に造られたる者なら」ざるを諷せる也。

⊙婦人の生命は「愛」也。「愛」の光の溢るゝ所。醜婦もなほ其の美を發揮す。脣頭花よりも紅にして、蜜の如く甘し。「愛せられんが爲に造られし」と云ふ、觀察を下すの餘地なきに非ず

⊙然れども、「婦人に天才なし。」彼等は裝飾を好む動物

に過ぎず、綺麗に物言ふの外、何物をも有せず」となすはワイドルの激語也。吾人は美人の天才を認めざるも、醜婦の往々にして天才を發揮するを知る。蓋し、美人は美の爲に身を誤まる也。

⊙鶯は聲樂の天才也。羽毛美ならずと雖も、美聲、群鳥を壓す。春光を宣傳する『法法華經』の高韻は、百萬遍の説法よりも絶大の力あり。高韻過ぐる所、春水温み、若草萠え、枝頭微笑を呈す。

⊙天才の美は内面的也。凡才の美は外面的也。内外兩面の美を併せ有する者は神人也。天照大御神の美は六合に耀き、威は八紘に張り、山川草木皆其の德風に靡きぬ。斯の如きは、恐らく世界稀有の女性ならん。

⊙日本の女性、倘しワイルドの前に氣を吐かんとならば、史乘の女豪は皆其の味方なるべし。勇力絶倫の板額あり。旭將軍を鼓舞激勵せる巴御前あり。粉飾は彼女の武器に非ずして、其の氣魄は大なる雄辯也。所謂綺麗に物を言ひたるの一事、千古を空しうす。

⊙逸話中の醜婦は、瀧鶴臺の妻を推す。『鬼も十八、番茶も出花』の矜持すらなかりしと云へば、其の不美人なる事想ふべき也。而も、父母の卑賤を擇ばずして賣り付けんとするを排して、『瀧先生の如き人の奥様ならでは』と、毅然として自ら高く處せり。鶴臺に嫁するに及んで、始めて内面美を發揮す。又、一種の女たるを失はず。

## 二

⊙幕末の風雲に孕まれたる女豪は、福岡の野村もと也。本姓は浦野氏、野村貞貫の後妻となり、五十四歳にして夫を喪ひ、剃髪して望東尼と稱す。

⊙詠歌を事として、山中の別墅に優遊せる望東は、文久二年の初夏に至りて世間と觸接せり。長州藩を脱走せる高杉晉作を隱匿して衣食を給し、其他勤王の志士

常陸鹿島神社の樓



を救ひて難を解く事數々也。後太宰府に到りて謫居の五卿に密謁し、慶應元年捕へられて姬島に流さる。風浪海邊を洗へば、騷音慌しく獄中に落ち來る。『浮雲のかゝるもよしや武夫の日本心の數に入りなば』と、一詠直ちに壯夫の膽を奪はんとす。

⊙同志の士二十餘人は既に刑せられぬ。望東の命又旦夕を圖るべからず。翌年九月、藤茂親、高杉晋作の二人相謀りて、不意に姬島に入り、獄を破りて彼女を援ひ、馬關に留めて靜養す。三田尻に移るに及んで病に罹り、志士の看護、毛利家の厚遇も其の効なく、『明星の如き眼は永しへに閉されぬ。花浦の松の葉白く置く霜と消ゆるは哀れ一ざかりかな』と、最後の詠は是れ也。

⊙彼女の著作に『比賣島日記』あり、篇を『いまのわかれ』『流れ木』『うぐひす』の三に分つ。將に涸れなんとする老血を灑げるの文也。僞らざるの歌也。女豪望

東の面目、躍如として浮び來るを覺ゆ。

⊙維新の冐頭を飾るもの、會津に赤岡竹子あり。西軍國境に迫りて、孤城將に落ちんとす。佐川官兵衛精鋭を提げて起つ、固より生還を期せず、次で起つもの白虎隊あり。玄武朱雀の諸隊あり。竹子は一方の女將として、馬上に薙刀を揮ふ。西會兩軍の接戰酣なる頃、深く敵中に突入して終に陣歿す。戊辰戰史中の異彩ならずんば非ず。

⊙蓮月燒は京都の一名物也。古淡にして、雅致あり。俳趣味を發揮す。されど、是れ俳人の創意に非ずして、歌人蓮月尼の纖手に成る。其の詠洒脫にして、筆又書趣あり。一點飛雁の如く、一畫纖月を欺く、得易からざるの神品と稱す。

⊙尼は京都の人、姓は太田垣、名は誠、智恩院の寓間侍光古の女也。妙齡二十にして夫に死別れ、烏婆玉の黑髮を剃り毀ちて尼となりぬ。風雲月露を友として、諷詠自適す。四十の時父を喪ひたれば、手づから陶器を製し、之に自詠の歌書をして鬻ぐ。京洛の陶工、皆驚嘆す。

⊙『宿貸さぬ人の心を情にて朧月夜の花の下臥』の詠は、最も人口に膾炙す。尼は其の詠の如く家居を定めず、花香水聲の裡に一夜の眠を成す。遂に西加茂神光院の茶所に住し、明治十八年の晩、八十五にして歿す。變物傳中の女性也。

⊙法衣は、夫に後れたる女が唯一の慰藉也。三界に家なしと觀念せる幕末の女性は、夫を喪へば先づ珠數をつまぐり、身邊の色彩を捨てゝ隱家に入る。剃髮は當代に於ける、一種の趣味也。信仰に非ずして詩歌也。竹子又生還を得ば、比丘尼となりしやも知るべからず。

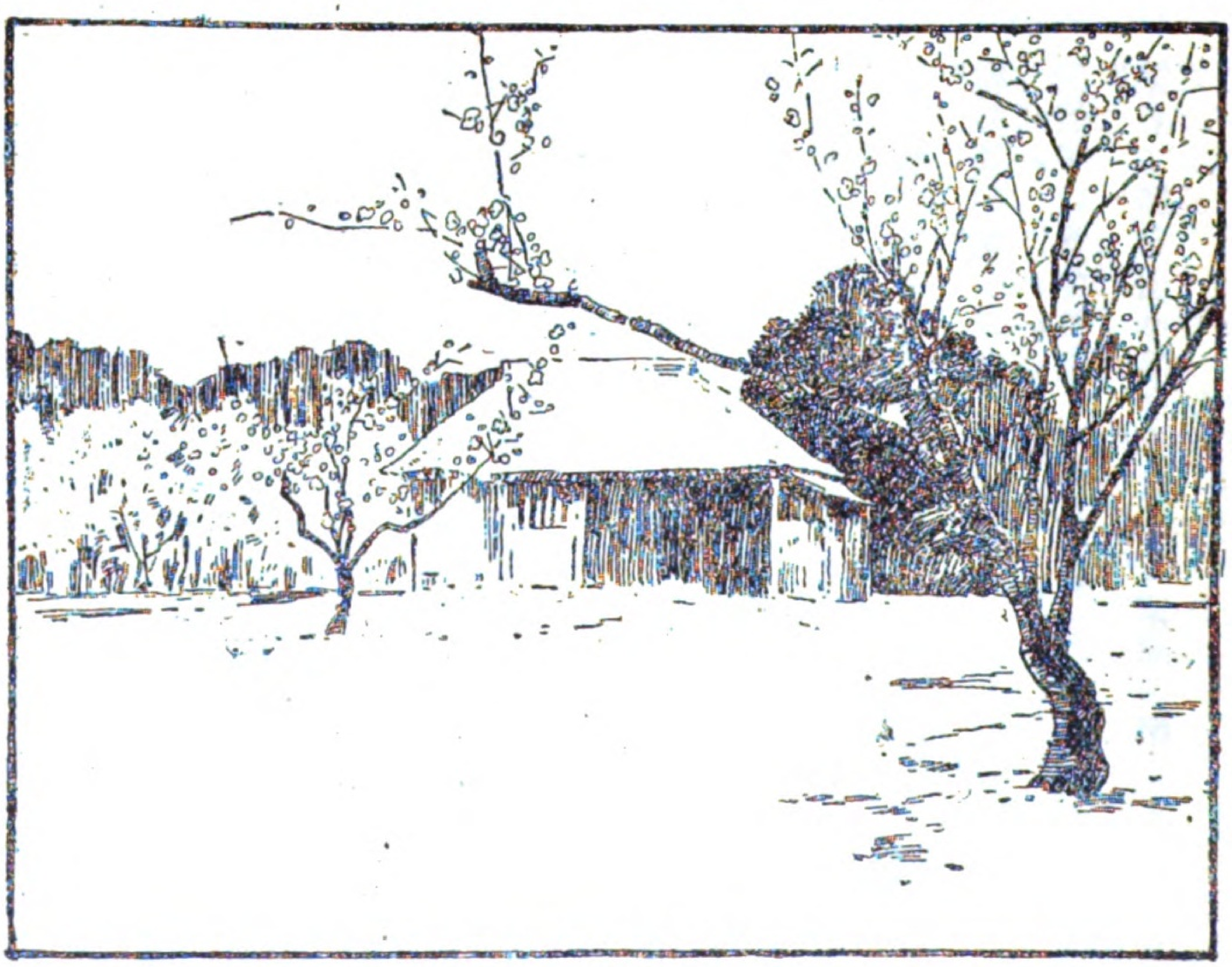
⊙本郷駒込に瘦身短軀の老尼あり。門を閉じて孤樓を守ること二十有數年、良人は有れども身を行雲流水に托して還り來らず。出家の時、良人の齡末だ二十三を

越えざりき。待つ程に〱花の色漸く衰へ、佛門に歸依して黑髮を斷ちぬ。宛然『古事記』の人の趣あり。

⊙老尼、名はゆう子、村松藩の奇士近藤勝慶の妻也。春來れども花信なく、秋老ゆれども雁音なし、香煙綏かに立ち騰る所、行を修して薄命の女性を濟度し、以て餘生を送りつゝあり。

⊙良人を捨てゝ有髮の尼となり、比丘尼の生活に入れるは河野お關也。お關は立憲國民黨の領袖河野廣中の妻、雲照律師に歸依してより以來、珠數を腕首に懸け、墨染の被布を纏ひ、遂に良人と別居す。現に青山善光寺に住する、切髮の年增は即ち其人。

⊙先年中江兆民臨終の際、律師を其の枕頭に招き、兆民をして怒らしめたるはお關也。伯板垣此の一件を聽きて河野に苦情を持込み、之が爲に家庭の波瀾を醸して別居するに至れりとも傳ふ。良人の奇、女房の變と相待ちて、渾然の光を放つは古來稀れ也。



大森八景園の梅

⊙河野の一女高子は、詩人宮崎濟瀾の妻也。濟瀾固より詩人中の奇物、高子又母に似て變物也。良人曾て江湖放浪の客となりて諸國を遊歷するや、高子乳兒を抱きて遠く隨伴す。『道中膝栗毛』以上の奇也。

⊙濟瀾は名士廣中の女婿たるの故を以て、到る處に歡迎せらる。新潟に入るや有志相議りて彼れを一酒樓に招く、宴酣なる時、一婦乳兒を抱きて席上に現はる。是れ、招かざるに來れる高子夫人也。强ひて濟瀾の座側に侍し、滿座の紅裙を頤使して獻酬猛烈を極む。今に北越の一笑話柄たり。

⊙其後、高子の名久しく聞えざりしが、近時母と共に誓光寺にあるを耳にす。彼女の家庭風波常に絕えず、遂に離緣して土佐より歸京し、兩三年は小金貸を試み、思ふ所ありて佛門に歸依せるなりと、厚化粧を廢して香華に親しむ、又奇緣ならずんば非ず。

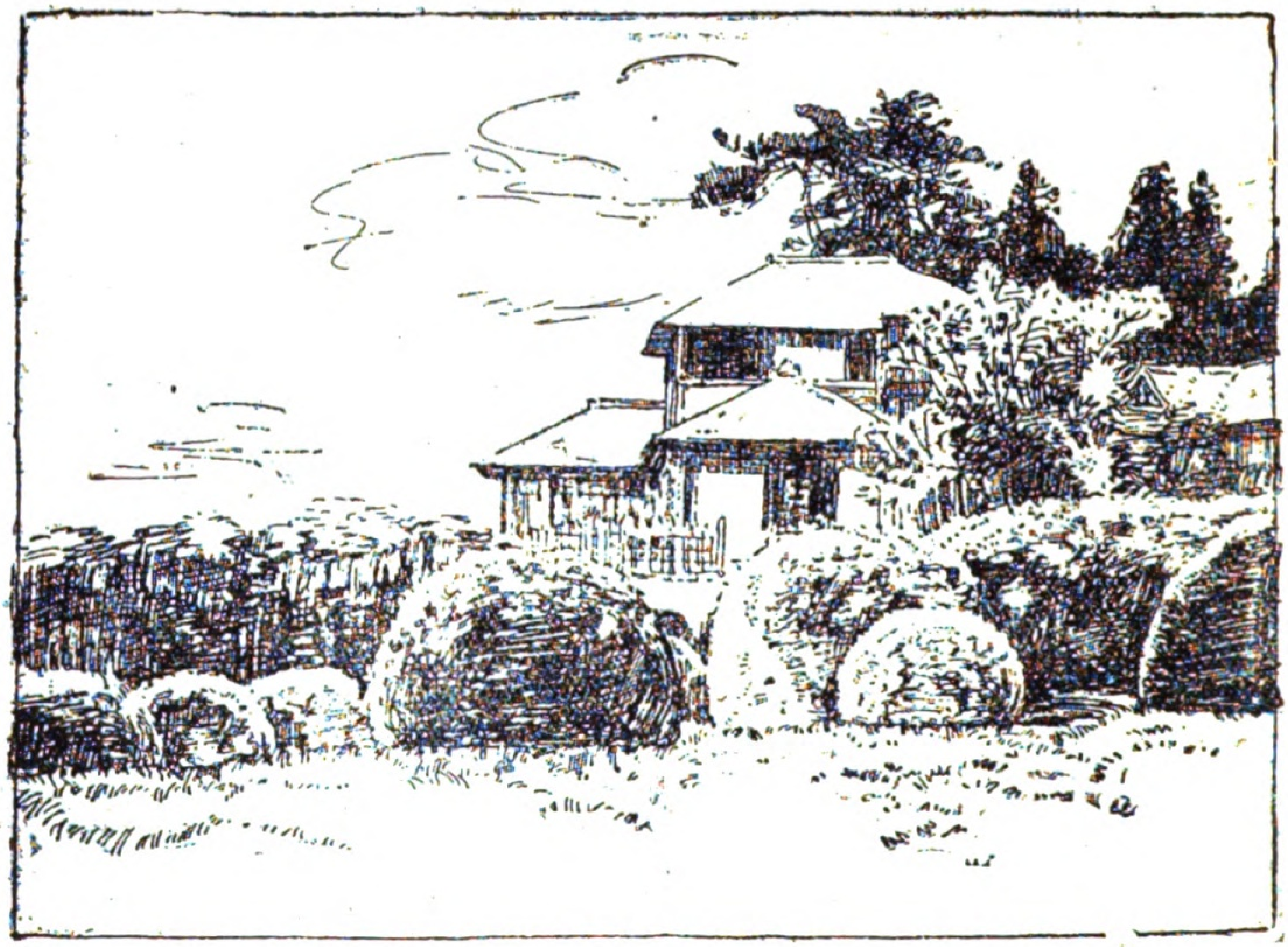
# 三

⊙『太閤記十段目』は、義太夫百番の粹也。人生の波瀾、曲折收めて一篇の中にあり。三味線の韻律を借り來りて情緒を描盡すれば、紅涙珠を綴りて双頰を濕す『括ら成果つるは理の當然、系圖正しき我家を、逆賊非道の名に汚す……仁義忠孝の道さへ立たば、もつそう飯の切米も百萬石に勝るぞや』の一齣、是れ千古の絕唱といふべし。

⊙獄中に望東の苦を嘗めたるもの、維新後中島俊子あり。影山英子(現姓福田)あり。英子は大阪事件に連座して獄に下り、當時の女傑を以て推さる。近年社會主義の徒と交り、末尾甚だ振はざるもの有り。

⊙俊子は男中島信行(最初の衆議院議長)の妻、湘煙と號して詩を善くす。少にして家國の事に奔走し、老いて文墨に怡樂す、文名一世を蓋ふ。

水戸常磐公園好文亭



⊙木村貞子は教育學者能勢榮の義姉、元華族女學校舍監也。現時小石川原町に梅香女塾を開き、子女の教養に任ず。身體肥滿、謠曲を善くし、女流武道を談ず。所謂男勝りの女也。

⊙昨年物故せる中川幸子は、燕趙悲歌の女流也。青春の熱血を灑ぎて自由民權を呼號し、頭山滿等と交友す。晩年悟る所あり、三省學舍を創立して、遊學の子女を寄宿監督す。而して資なき者には衣食を給して、勉學せしめたり。

⊙然れども、幸子素より富裕に非ず、黄白は他の補給を待たざるべからず。一冊の寄金簿と學生の成績品を懷にして、東奔西走して資を集む。押の強きこと奧村五百子に讓らざるも、勢力の及ぶ所は狹隘の天地也。遂に成功を見ずして、四谷に病死す。

⊙痘痕滿面の幸子の、『一風變つた女ですよ』と評せしは、畫家大島湘蘭也。老齡五十にして家を成さず、下

宿屋にころがりて彩管を揮ふ。嚢中錢なきに至れば、描く所の繪畫を携へて上流搢紳の門に伺候し、之を押賣す。本莊幽蘭と共に毀譽紛々たる女性也。

⊙幽蘭は現代教育の產める私生兒也。湘蘭は舊思想に成長せる畸形兒也。一は明治女學校の出身にして、新聞記者となり、心機一轉して放縱の生活に墮せり。一は繪草紙の感化を受け、好きなる途へと發足せるも、俠氣餘りありて技は之に伴はず。

⊙曾て女權擴張の建議を議會に致せるもの、今井歌子あり。配下に遠藤清子あり、清子の父は小學教育に從事する事十數年、恩給を得るに至りて鹽から賣となる、此の父ありて、斯の子あり。岩野泡鳴と同棲して、彼我主張の是非を事實に決せんと壯語す。

⊙「呪はれたる女」！ とは元祿姉さんの著也。聞說、彼女は越後糸魚川の人、女子大學の出身なりと。嗚呼呪はれたる女！ 斯の如きは、新興女學界の副產物也。

⊙現代の婦人界を橫流するは、相反對せる二大潮流也。甲は『人』としての『女』の養成を必要とし、乙は『妻』としての『女』の教育を主張す。甲は自由開放主義にして女性の自覺を促進し、乙は良妻賢母主義にして在來の慣習と家庭に拘束せらる。而して此の問題の解決は、終に女子の幸福如何と云ふに歸趨す。

⊙此の間、彗星の如く現はれしは平塚明子也。文學士森田草平に戀慕され、相互の意力を試みんが爲に、相携へて山中に走れりと傳ふ。事、餘りに芝居の筋書めきたりと雖も、女子研究の一資料ならずんば非ず。

⊙爾來草平は『煤烟』を出し、數種の短篇小說を作りて、多少文壇に知られたるも、明子は杳として聞えず。禪學令孃の名、時に青年子女の話頭に上るのみ。

⊙菅野すが子は京都の產、極端なる思想にはぐゝまれたる、突飛なる女性也。赤旗事件に於て都下を騷がし、大逆謀事件に連座して死刑の宣告を受く。『皆樣、失禮致します』の一語を殘して退廷せる背後には、虛榮の閃き無きに非ず。

# 四

⊙現下女丈夫の稱あるもの、東京月島に丹澤喜代子あり。オチニの本家本元生盛藥館の女將にして、全國八千の賣子に號令す。喜代子はもと甲州生れ、明治三十一年の大洪水に全家流亡の厄に遭ひて、夫善利と共に上京し、賣藥行商に成功せる也。

⊙先年夫病死の後は、二代目善利を補佐して、自ら業務監督の任に當り、單身全國を巡回して支部の成績を視察す。紀律は總て軍隊に準じ、手風琴を奏してオチニの懸聲を南濱北阪に散布せしむる所、商界の尼將軍たるに愧ぢず。

⊙黒光女史は書生パン屋(中村屋)の細君、相馬良子は其の本名也。雅號の由來を詳にせずと雖も、黒光のする御面相には非ず、時に藝術を談じて、くろうとを煙に捲く事あり。然れども、業務は飽くまで着實にして、如才なく立ち働く所、幽蘭軒の比に非ず、

⊙往時の幽蘭軒は新聞記者集合所の奇觀を呈し、現時の中村屋は美術家倶樂部の趣なきに非ず。新進の畫家及び彫刻家、屢々出入して新興の藝術を説き、色彩の苦心を談ず。一種の新空氣、或は這裡より風生せん。

⊙未成品なるも田頭さつ子は、一種の風格を有す。昨年大水害の時、罹災民の慘狀を見るに堪へず、一臂の力を救濟に致さんと欲し、駒込曙町邊を戸毎に叩いて、金品及び衣類の寄附を受け、之を荷車に積みて運搬し、柳島妙見寺の被難者に施與せり。

⊙越えて數月、歳晩の銀座街頭に、南極探檢隊後援の菓子を鬻ぐの少女あり。是れ即ち、當時十八歳のさつ子也。彼女は山階宮家從田頭祐賢の五女、社會救濟事業に甚深の興味を感じ、青春の血潮を斯道の爲に傾倒せんと云ふ。『弱者の友』たらんと欲せば、己れ先づ『强者たらざるべからざる也。

⊙村松君子は、前代議士村松愛藏の妻也。良人の出獄後身を救世軍に投ずるや、己れも亦救世軍に入りぬ。彼女の三十七歳(昨年)は、新生涯の第一年也。『もう斯うと決心したのですもの、淸い心で、何處迄も同じ決心の夫を助けねばならんと思つて居ます』の熟語は、現代女流の思想に對する、一種の刺戟劑ならずんば非ず。

⊙千里眼の御船千鶴子及び長尾いく子、又一種の女也。心靈界の驥北也。博士福來の過るに至りて、名聲頓に揚りぬ。而して、學界は之が爲に紛々擾々たり。

⊙千鶴子(二十六歳)は熊本縣の人、色白く、血色好く身體大柄也。性質感情に脆く、動作淑かなれども、一見頑固なるが如し。觀世音を信仰せるに依りて、神通力を得たりと稱す。

⊙いく子(四十一歳)は山口縣の人、判事長尾與吉の妻也。幼より神佛を信じ、一寸許の觀音像は肌身を離さず、常に念珠を頸に掛く。容貌年よりも若く、快辯流るゝが如し。昨年千鶴子の事を新紙に讀み、練習の結果如是力を得たる也。

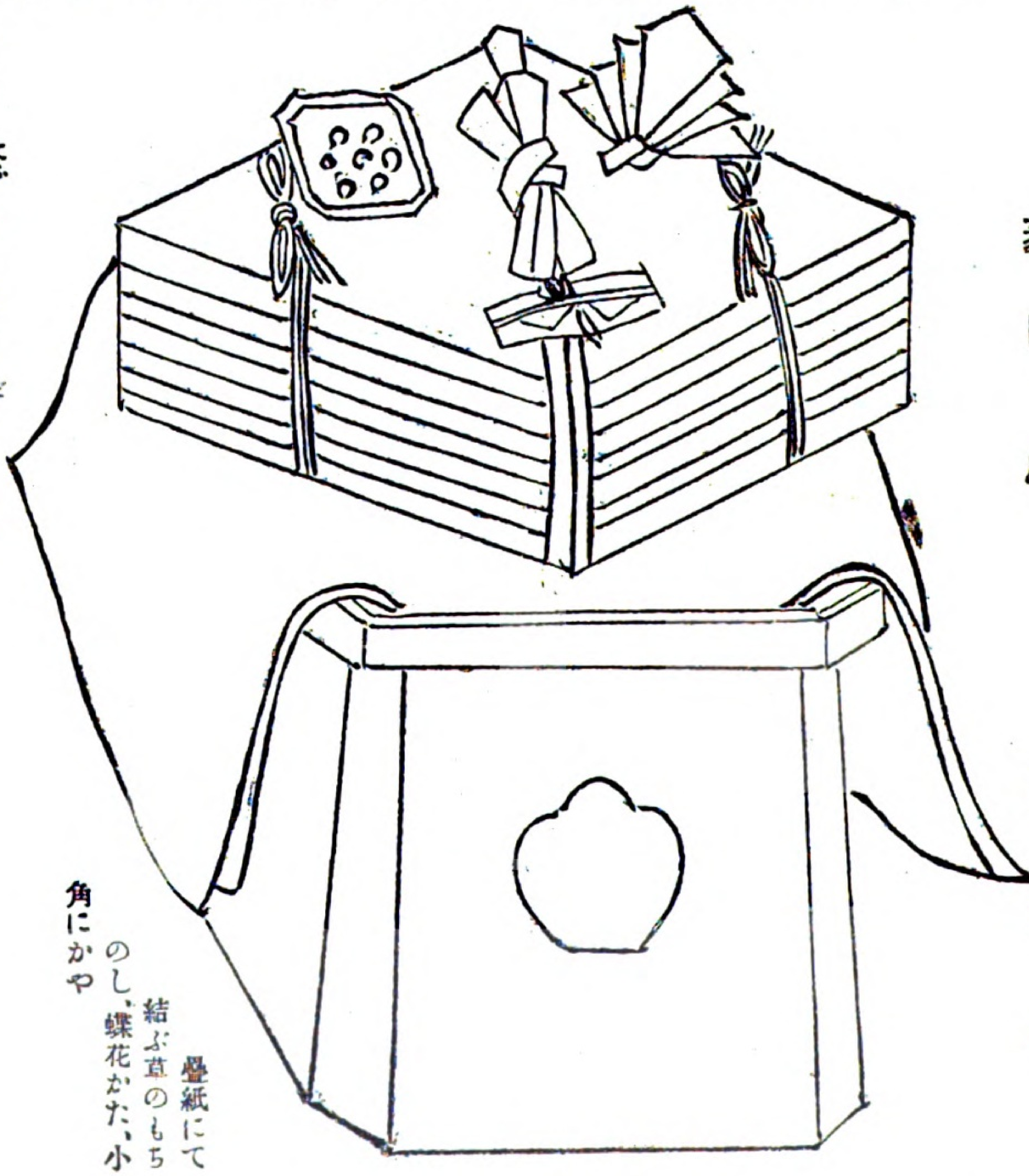
⊙いく子は念寫に能く、千鶴子は透視に長ず。爾來幾多の千里眼出づるも、二人者の上に出づる者なく、天下の耳目は皆此に集りぬ。然るに、いく子は學界の小人に誤まられて振はず、千鶴子は家庭の拘束に堪へずして自殺す。千金の鶯、猫に奪られしの感なくんば非ず。



# 雛節供の飾り物

菱田忠

三月上巳の節供はむかしより、上は王公貴人の殿邸より下は津々浦々のはにふの小屋に至るまで、ひとしく雛壇を作くり緋毛氈を敷きて雛を飾るの習ひです、古い物は神社佛閣に納めたり、或は川へ流して了つて追々新らしい物を求むるとは云へ、由來付なる雛人形はどこか捨難き節があつて考古癖ある者の等しく賞翫するところです。この飾りものは一寸新案ではありますがさほど六ケしいものでありませぬ、三寶の上へ奉書を重ねて敷いて、麥餅七枚高く重ねて三所を疊紙にて結へ右に蝶を置き、左に小角にかやを置くのです。前に小さく折形したるは熨斗包であります。




○曲水宴

五節供と云ふのは一月七
三月三日、五月五日、七月七日、九月九日、を巾します、節供といふのは時節の物を作りて供ふるの意である。

そこで三月三日を上巳と云ひて、昔は曲水宴など催ふされたものである、曲水宴は顯宗天皇の頃から盛に行はれて來たもので、其樣は川上から盃を流して其盃が我前を通り越ぬうちに、詩を賦し歌を作りました、勿論王侯貴人の戯れで専ら禁庭を中心として行はれたものです。

### ○雛遊の事

古へ醫學未だ開けず、事多くは迷信に出づ即ち雛人形を作つて之に病を移して川に流せば、病根を絕つと爲したものである。

雛人形は漸くして出來た。然るに後人其源を忘れて、雛を一の翫具と心得、家毎に美麗を盡して競ひ飾るやうに成つた。

「源氏物語須磨の卷」に云、彌生のついたちに出きたる巳の日、けふなんかくおぼす事ある人は、みそぎしたまふべきと、なまさかしき人の聞ゆれば、海づらもゆかしくて、出給ふいとおろそかに、ぜしやうばかりを引めぐらして此國にかよひける、陰陽師めしてはらへをせさせ給ふ、舟にことくしき人形のせて流すを見給ふにもよそへられてしらざりし大海の原に流れきてひとかたにやは物はかなしき。

とあるぞ、上代雛遊の樣なるべし。

### ○桃花酒

又昔は上巳の節供には、酒に桃花をひたして飮んだものです。一に桃の節供と云ふもこゝらから出て居る。

「節序紀原」に、本草曰三月三日酒浸桃花飮之除百病益顏色。

### ○草餅

三月三日に鼠麴草を摘んで、これを餅に搗き込み、雛に捧げ、或はこれを喰ふ事は、鼠麴草は和名ハヽコグサで、ハヽコは蓋し母子の意通ずるが故に、これを作り食して母子倶に全からんを祝福したものである。

「文德天皇實錄」に、嘉祥三年民間訛言云、今三月三日不可造餻以無母子也、此間田野有草俗名母子草、二月始生莖葉白脆毎屆三月三日婦女採之蒸搗以爲餻傳爲歲事。とある



# 新徒然草（其の三）



磯千鳥

「人に願事ある時、何時を見計ひて訪ぬべきや」と問ふ男ありけるが、問はれし人答へて「願事は相手の人の幸なる折ならではかなふまじ。朝は人の心騒がしく物頼むに應はしからず。晝は日影赤くさし、無心言ふには何となく面染ゆく、しみ／＼と話もし難し。されば必ず夕餐の後を見計へよ。夕餐濟せし頃は相手の心穩にて、尤も幸多き頃なれば」と申しゝとなむ。

「女の性は、みな僻めり。人我の隔深く、貪慾はなはだしく、物の理を知らず、唯「迷」の方に心も早くうつり、言葉も巧に、言ひて苦しからぬ事をも問ふ時は言はず、用意あるかと見れば又淺ましき事迄問はず語りに言ひいだす。深く計略り飾れる事は、男の智惠にも勝りたるかと思へば、その事後より露るゝを知らず。素直ならずして拙きものは「女也」と女の事としあれば塵芥のごとく、いひなしたる兼好の心根こそ怪しけれ。心僻めるはなど女のみかは。さるを女の性とのみ言ひて、男の性はひがまである樣に云ひなしたるは、兼好の性ぞひがめる。いとこゝろ得ず。この世にある人にしあらば、其罪責め問はましものを今はそれもかなはず口惜しきこと限りなし。

ある折はあるのすさびにつらかりき
　別れて友は戀しかりけり

あるのすさびに、つらくするものは友のみにあらず、凡て貴き物、得難きものも我傍にある程は打輕んずる事猶水、日の光の貴さを心附かぬごとし。

母の常に我傍にいまし、何くれとなく世話燒き給ふ間は、さして得難き事と思はぬのみか、既に年長けにし我身を何時迄も子供の樣に、の給ふに、折には「さ

もあらばあれ」と竊に眉ひそめ、不足に思ふ事もあり。

されど一度その御許離れ、冷たき他人の中にまぢはるに、其人の、し給ひしこと、の給ひし事、今更に身に泌み、などて彼の時、かの貴さ覺えざりけむ。行く先永くも在さぬ物を、この次御側に參らば、心ゆく許り、優しくし參らせむ」と思ひ、戀しさに長き文書くこともあれど御側に參れば、またも元の如く由なき不足も出で來るらめ。

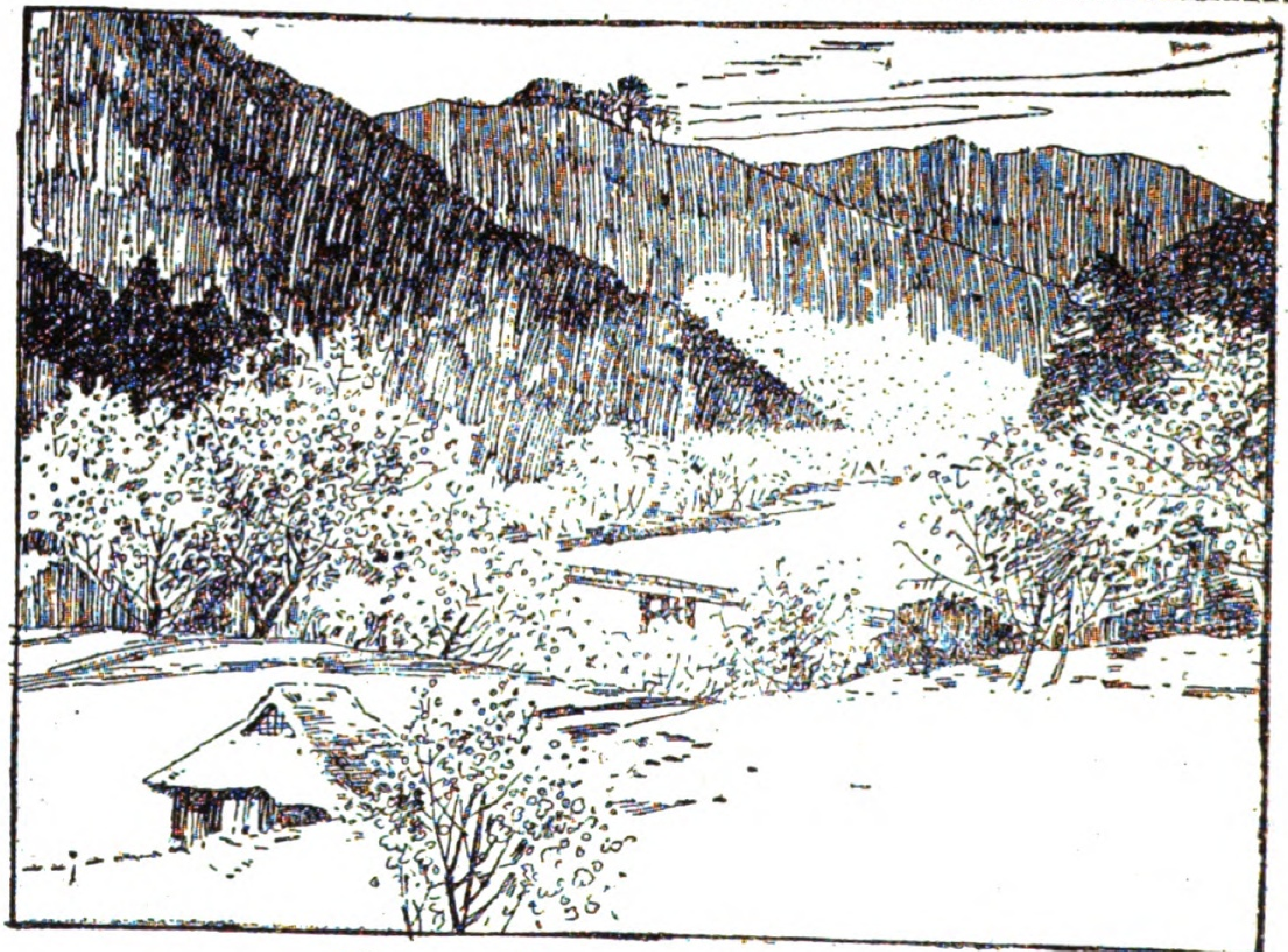
あるみにうむの器は、この頃價安くなりつれども、品いと惡しく、押さばへろ〳〵と凹むが多し。などて價高くとも品宜しきを造らぬにや。あるみにても昔の方は品よかりしとさる年寄は申し侍るが、今時の若き女のことをあるみの姿光れる樣なりとは何人の譬へそめし。

世に尋常女學校と申すはなきに何れも高等女學校と申したるはいかゞ。高等理髮、高等洋服店の類にや。』

曾呂利新左衞門なりけりと覺ゆ。或日太閤の心にかなふ事せしに、太閤は『何にても爾の欲する品とらせむ』と言ひければ曾呂利暫し首傾けてありしが『されば、此處なる明り障子の棧の間の一間毎に一文錢置きて賜はれ、棧の間は總てにて四十八候ふが、初の間には一文、次の間には二文、其次には四文、其次には八文、追てかくの如くし賜はれ』と言ふに、太閤は暫し考へて後、それ計りはと申しゝとなむ。』

子持の男親の心は樣々也。子寶と申せば子は寶との み思ひしに、三界の首枷等と喞ち、我子を餓鬼と呼び己家に在る間は、『騷し、外に出てあれ』と叱る親あり。初めて子得たる男親の、子を亦なく愛しみ、湯にも己にて入れ、乳母車も己にて押し、あるは我書見等する側に來て書類破りなどするを叱りもせず、なか〳〵に嬉しげなる顏して『此子は書物を好むと見ゆ、あれ見よや』と我妻と顏見合せたる男もあり。

また世の中には、親なる我身の言ふ事にしあれば、是が非にても通さむとし、物事辨ふる樣なりし子の『其事は僻事也と覺ゆ』など言へば、父は眼に角立てゝ怒り『あな、親の言葉に口答する不孝者』と無下に叱る親



大和月の瀬の梅

もあり。(されど若き親はかゝる事をしかねず)

癇高き男親もわろし。或時は叱るべくもあらぬ事にて折檻するよと見てあれば、或時は氣味あしき迄可愛がりたり。かゝれば子供の心僻み、父の機嫌よろしき時にても、父を恐れ、顔色覗ひて何事をもすめり。なべて他人と交る折は、言葉滋く、愛嬌ある男は、己が家に歸れば、なか〳〵に氣六ケ敷く、常に不興げにしたり。

女親の心も様々也。日頃『暇なし、暇なし』と喞ちてある女の、夫の不在中は火鉢の側にゐさらばひ、新聞讀むに續き物より初めて隈々に至る迄見ぬ處とてはなく、あるは隣の女などと立話しに時を移し、あるは子寢さすとて行火に入りたるがあり。

世の母親には子に訓ふる處と己の仕業の異れるがあり。『摘み喰ひなしぞ』と常に敎へたる女の、物貰るとて、鍋のものふと摘みゐたるを子の見出で、『母上、何し給ふ』と尋ねるに途方に暮れて、さらばと一つ摘みやり『今日計りぞ』と嚴に言ひ渡すも由々し。』

萬の事は初終こそ可笑しけれ。ふと新しき友と親しくなりし折は、互に人目恥づる計り往來し、何時の世迄も心變らじ、變り給ふなと誓ひ、其人在らぬ時は我心空虚となりしかと怪めども、軈て日數經る程に、互に惡しき節をも見出でゝ「かの人は斯々の癖さへあらずばよき人なるを」等他人にも話し、果は何と言ふ事もなきに顔見るさへ心憂くなる事あり。

またさにはあらずとも共にある間は互に親しくし合ひたる同志も、住む土地隔りぬる程に、月一度の文通も疎になり易く、二年三年と過ぐる内には、年始状のみにて事濟ます事もあるよ。

なべて女は一時の情に脆けれども何事も直に打忘るが常なり。我慕へる師の君の轉任し給ふ折は、誰も誰も打嘆き、袖ぬらさぬはなけれども、其人行き給ひて後は思ひ出づる者もなし。

斯く觀ずれば世の中の事一つとして月日の力に打勝つものはなし。祖母の世に在せし頃、口癖の樣に『我身も老いにたり、此先も短し』などのたまひしが、其度に身を切らるゝ許りつらくて、祖母の君在すなり給はゞ如何せむと案じ、其折の悲み我ながら耐ゆべくもあらじなど思ひしが、失せませし後、一年程こそは絶えず、其人の事思ひ出でけめ、其後は御面わも思ひ浮べ得ずなりぬ。寫眞帖など取り出つる時は、流石「かの時かくし給ひし」と同胞同志にて語り合へども、御寫眞の次の紙に我身等のおどけたる顔の寫りある物見出づれば、悲しき想出は何時しか消え去りて心行くばかり笑ひ倒れたるもゆゝし。

年經て變るものは悲、喜の情のみかは。若きすさびに、人の許に思慮もなく書きやりつる文を程過ぎて『斯る事もありけりと』見せらるゝに、「よくもかゝる面恥し事遠慮もなく書き連ねし事よ。筆蹟を見れば正しく我身なれど』と額に汗する事もあるよ。』

冬の眞夜中ふと眼さましたるはいと心細し。同じ閨に母姉など眠れる折は、同じ闇にても心强けれども、我家遠く離れて、獨り冷たき衾に臥したる夜半など、耐ゆべくもあらず。況して遠くの方に筧の水の落つる

音など聞きては自から郷里の事思ひ出され、晝間ならば由なき事も、斯る折はいたく心に懸り涙を流すこともあり。『斯る事思ふも詮なし。寢足らずば明月の日疲るらめと』思ひつゝ寢附かむとすれば、いよゝ眼冴え次の間に寢たる誰彼の寢息耳につくに、『よくも寢る人人哉』と腹立たしく思ふ。

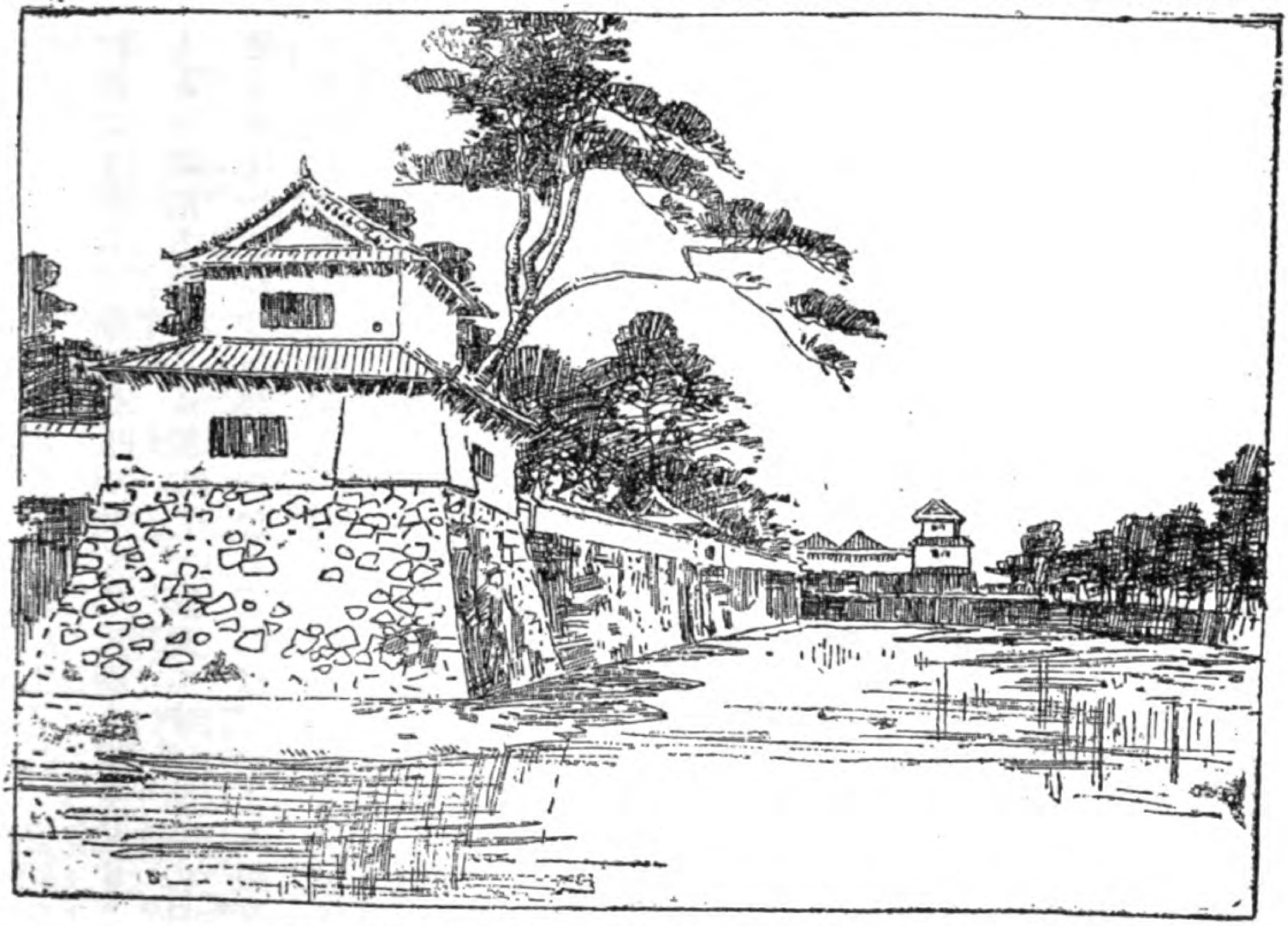
我身豐にして初めて禮節を知り、施し事をも爲し得べし。貧しき者に慈悲迫るは心なき業とや言ふべき。人恒の産なき時は、恒の心なし。人窮りて盗みす、されば我身の正しからぬ事するは、本より誡むべき事なれど、人の惡事は是を憎むよりも隣れむこそ、女にはふさはしき事にはあれ。』

一年の内にて春こそ、ことによけれ。

雨あがりの空うらゝかに晴れたる日等、町行けば、家も道も美しく濡れて、軒下に雨傘乾したるも見ゆ。垣根越しの木の枝のいつしか若芽吹きて、清々しき風の亘る毎にさや〳〵と音立てゝ雫したるもよし。野に出づれば、いぶせき藁屋の破れたる籬の陰に桃



京都鶯の里



別府府内城封建の面影(其八)

の花白さと紅きが雜り咲きたる、麥の穗は五寸あまり延びて其間より、あはたゞしく雲雀の羽ひらつかせて聲美はしく飛立つも風情あり。小さき流などに沿ひて名知らぬ花摘むに、ふと履みたる草の下に水ありて雪駄の濡るゝに、周章てゝ飛びのく事もあり。

暮れ方の春の野は殊に哀深し。日西に傾きて立木の影長う落ち、梢の方にては烏けたゝましき聲して騷ぎたる、遠き山々には夕霞棚引きて、此處彼處の汽笛ゆるやかに鳴り出でたるを聞きては、えも言はれぬ憧憬心の中に起りて、そゞろ涙ぐむ時もあるよ』

さる若き女の『我國の文書く道は形にのみ捕はれてあり、初には女ならば、一筆しめし上げと書き、終は、かならず、かしことしたるは虛禮なり。此事あるべからず』とて我慕ひ參らする何々の君と改め、候と言ふ文字使はず、到る處に！？など杓子の樣なるもの挿みたるがありき、されどつら〳〵思ふに、文の初に一筆しめし上と書くは、人の家訪ねし折先叩頭すると同じく、これを惡しと言ふ理もあらじ。


彌生日記
淺みどり

軒の柳もけぶり初めて、あたゝかい色、柔かい風、菜の花の咲くのも遠くはないと思ふと嬉しい。十時頃から母樣のお指揮で、お雛樣かざる。男の中の一人娘でお祖父樣の秘藏子であつた母樣のお初節句の時のが、今も保存してあるので皆んな古い大形で、衣裳も、今出來のケバ／＼しい物でなくお道具もそれは美事なものばかり。奥の六疊の床に金屏はえてもえ立つ樣な緋毛氈、紫縮緬の幔幕しぼる緋房のゆらぎ、いつのお節句であつたらう敬さんが、白酒をみんな、のんでしまつて、私が泣いたことがあつたッけ、今その人は、遠くアメリカの空に故國の春を偲んでいらつしやるであらう、打ちふる帽子、淡るゝ影、波は靜かなるにも似ず、刻々に船をのんでゆく。あの時の光景、よく喧嘩もしたけれど、流石に血を別けた、從兄だもの、かつ見ながらにかねて戀しく『御機嫌よう』も口の中、飽かぬ別れを告げたのも、もう二年の昔となつた、早く歸つていらしやれば好い、必とブローチか何んかのお土產があるワ。

綾子がもう歸つて來た、蝦茶袴、元祿袖のお被布、手製のオペラバッグを下へ置くと、あふれるやうな笑顏を傾けて『アラお雛樣かざつたの』とかけよつて、大きな振分髮の人形を抱き上げる、まるで人形に抱かれて居るやうなので思はずホヽ笑むと『姉樣もうれしいこと』といふ『ア、嬉しいことよ、早く片付けて一緒にお雛菓子を買ひに行きませう』早晝飯をすましてコートにボアを卷いて、襟卷マントを着た綾ちやんの手を引いて、神樂坂へ出る、菱餅や箱入と籠入の美しいのを買つて歸りに越後屋へ白酒を注文に寄ると、コレはお孃樣ようこそと、すでに上へ上げられさうになつたのを、やう／＼きりぬけて外へ出ると、小僧が後から追つてきて、半紙に包んだお菓子を綾ちやんにと持つて來てくれた、ホントにあの家の夫婦は物堅いのね。東五軒町から江戸川端へ出やうとすると、まがり角で突當りさうになつた、オバコートの角帽さん、杉原樣のかるた會で二三度一緒になつた早稻田の…視線がバッタリあつた、仕方がない、無言で挨拶してす

れ違つてから振返つて見ると脊高い姿の男らしさ『原田様にどうしても歐洲人のスタイルね』と小夜子さんが少なからず・・・なのも無理はない、そしてあの濃い眉のあたりには才氣があふれて居る様で。早速今日御目に掛つたことを報告して小夜子さんをよろこばせてやりませう。

八百松で林檎を買つたので急に荷が重くなつた、これから先とても十丁はあるけさうもない、綾子は泣きさうな顔をして居る、随分歩かせられたからね、すぐそこから辻車を呼んで歸る。

今夜は勞れて居るので八時頃お湯にはいつてお先に床に入る　メリンス友禪の夜着の襟の間から幽かにただやう御園の香。

## 雛まつり

今日はお節句で綾子のお客様がいらつしやる筈だ。いつもの通り一郎と綾子を學校へ出してやると、家の中が靜かになつた、小夜子さんへ繪端書かいて時に出させる、一寸お雛の宮居を見舞ふと、草餅、菱餅お菓子や炒豆が形の如く供へてある、臺所へいつて母様に伺ひながら時に手傳つてもらつてお重詰の料理をする。

割に手際よく出來たので嬉しい、ちらし壽司は時の苦心でこれも上出來、あとは茶碗蒸しだけだから、母様にお願ひすることにして、丁度歸つて來た綾ちやんを鏡臺の前へつれていつて新しい五吋巾の眞紅のリボンを一の字にきッつと結ぶと眞に可愛こと、括り腭の小さい口元、鈴を張つた様な目、我妹ながら年頃になつたならさぞと思はるゝ、友禪の被布と着替させて、少さきまろうど待つ間の暫を次の間で淺妻を復習つてやる。覺束ない十三絃の音につれて歌ふ綾子の聲は透とほるやう、桃の花がホロリと散る。折から少さき足音につれて格子戸がチリンと明く綾子は爪を掛けたまま飛び出して「姉様麗子さんよ」と手を引いて來る、大きな稚兒輪に雪白の丈長、色の白い面長な牛若丸の様な麗子さんが、莞爾片靨を見せて居る。桐胴の火鉢

へ火を入れて美濃紙に南洋堂の栗饅頭うづ高く盛つたのを上げて、無邪氣な話を聞いて居ると、美紀さん、若ちやん等が次々に、玄關には可愛らしいぬり下駄や、赤い鼻緒の千代田草履やがズラリと並んで奧は急に賑になつた。

少さなお膳が各々の前に運ばれて、椎の實の樣なお盃につがれた白酒を、かたみにこぼさじと氣づかひながら召上る樣子の可愛らしさ、も一度かういふ時代になつて見たい、母樣も嬉しさうな子等の樣をながめていらつしやる。天使の樣とはよく云つたものね。

　一度は京のみやげのぬり下駄の
　　鈴の音に笑む少女なりしを

一郎が唐紙の間からソツトのぞいて居る母樣が『お這入りな』と仰るとパタ〳〵逃げていつてしまふ。食後のネーブルを食べてから、火鉢のそばへ圓くなつて、面白いお伽話を一つして上ると、もうそろ〳〵おむかひの女中達が見える。

主も客も歡をつくしてたのしいまどゐを解いたのは四時半頃、綾子と二人御門まで送つて出る、春とはいへど夕風が身にしみて寒い風邪引くと不可ないワとすぐ引返す。

夜は部屋へ引籠つて三月の女學世界を讀む、茶の間の置時計が春雨の一曲を奏し終つて靜かに九時を報じた、お雛のさゝめきも聞ゆる樣な、靜な晩、白桃の香が身に沁むやう、おぼんぼりへ油をさして綾子と並んで夢に入る。

## 病める友

春はあけぼのやう〳〵白くと、言ひし清女ならねど、實際この頃の朝はいゝ心地ね、縁側に立つてウツトリして居ると、どこからともなく、聞える鳥の聲、空は紺青に澄んで彼岸櫻が根掛の玉の數ほど咲き初めた、ヒラ〳〵とひるがへるは、去年の枯葉かと見ると、それはすゞめの一連であつた、美しい自然は榮あれと我を包む。時がお釜の下を焚付けたものと見えて、白い煙が霞の樣に棚びいて居る。

今日は小夜子さんと品川の別莊に病みます歌子さんを見舞ふ約束、部屋へ這入て髪を結ぶ、例の丸髷に前髪ふつくり、石入りの髷櫛に白いシネラリヤの花を挿してお化粧をする。おぼろお召の二枚重に緋の長じゆばんを、そろへてながめると、我ものながらふるひつきたいやうに思ふ、羽織は藤色の紋羽二重ときめて、朝飯の卓に向ふ、お茶をのんで居ると窓の外で、ポスがクン／＼鳴いて居る、母樣が障子を明けてパンをおやりになるのを見て居ると『ホヽ』とかすかな笑聲が聞える。オヤと思つて向を見ると袖垣のかげに濃い紫の被布を召した、小夜子さんが立つて居らつしやる『今ね、お部屋をのぞいたらいらつしやらないから、こちらへ廻つて來ましたの』さう、不意打は隨分ね、まあお上りなさい



ましな」小夜子さんは敷石の上にゴム草履行儀よく脱いで叮嚀に母様に挨拶なさる。相も變らぬローマに束ねてクリーム縞の大きなリボン、キット合せた、白襟を、西洋花に眞珠を嵌めにブローチでとめていらつしやる。時がカステーラと茶器を運ぶ。私は一寸御免かうむつて着替をしてくると九時が少し廻つて居るので、すぐ出掛ける。時に電車まで送つてもらう、八ツ山で降りて直ぐ京濱電車にのる、大師穴守の參詣や、汐干狩の連中で大分込んで居る、靑物横町で降りると、もうそれからは譯はないので、ブラ／＼歩いて、もよりの店から果物の籠を買つて持つて行く、と、向ふから來た二人連、デップリ肥た赤ら面の高浪の叔父様だワ、運は島田の阿娜者、藤鼠の襟から拔出た様な、白い頸足をなめた髪ゆら／＼と。わざと顏をそむけて通り過ぎたが、アヽいゝお年を遊ばしながら、今だにやまぬ、あの不身持、叔母様がお可哀相だワ、考へ込んで居るうちに、早くも歌子さんの御門の前まで來て仕舞つた。

朝淨めした、敷石を音もなく通つて玄關から訪へば桃割にくづ引き掛けた、小間使が取つぐ。とつたショールを渡して直にお室に通る、海に面した八疊の眞中に敷いた、絹蒲團の上に起き直つて居らつしやる歌子様の、マアおやつれなすつたこと、それでも、さも嬉しさに堪へられないといつたやうに『よくいらしつて下すつたのね』を幾度も／＼くり返して仰しやる。こんなによろこばれるものを、もつと早く來て上りやよかつたと、思て小夜子さんを見ると、やつぱり同じ思か、細い歌さんの手をにぎつて『とうにから伺ひたいと、思つて居たのですけれどネ……つい御無沙汰しちやつてほんとに、すまなかつたワ、あなた随分だと思つていらしつたでせう』『そんなこと思ひはしないワ……私ほんとに嬉しいことよ、今日は、ゆつくりしていらつして頂戴な、ネみどりさんもいゝでせう』先刻のお小間使が、紅茶のお茶碗と、シユークリームを盛つた鉢を運んで來る。小夜子さんは物めづらしさうに障子の腰硝子から外を見ていらつしやる。

『こちらへは、お一人で』と聞くと『えゝ母が來て居て吳れたのですけれどね、二三日前に歸りましたの』『お淋しいでせう』『えゝ、でもね馴れましたから別に淋しいとも思ひませんけれど、時々大きな船が來るでせう、さうすると、何ですかね、泣きたくなつて仕舞ふのよ』と伏目におなりになる『え』と聞きなほすと『あの船に乘て湯澤さんが、こゝへいらつしやる樣な氣がして、こう胸が一ぱいになるのよ』『湯澤さん？』『八重子さんの兄樣よ』と歌さんはホッと吐息して『みんな夢だワ』其年頃には其年頃の思があつて、そして移り移つて行くのは當



り前の事ですけれど、私自分で自分の心がわかりませんの、この間もね八重子さんと二人でさん〴〵泣ちやつたのよ、え、時々ねいらしつて下さるワ、ほんとに、優しい方ね、實際私はあの方に合せる顏はないのよ、私のやうな者をあんなにまで思つて下すつたものを、何故といふこともなしに厭つて〳〵厭ひ拔いて、八重さんが、持つて來て下さるお手紙を皆んな、目の前で破つちやつたのですもの、一昨年の夏でしたワ、寄宿舍の裏庭の銀杏の木の下に居ると、淡紅色の洋服着た、八重さんがかけて來て、「兄樣が京都のお土產ですつて」と箱入りの美しい芙蓉の花かんざし、私の手に渡すのを、突返して「もうこれから、こんなことをなさると、先生に言つけますよ」と叱付けると「姉樣あんまりよ」と八重子さんが白い花の、付いたボンネットを、ゆるがして泣いて、おしまいでしたワ、エ、今年卒業なさるのよ、これからネ二三年英語を勉强してどうしても、洋行すると仰つていらつしやるの、そして兄樣のお亡りになつた、ところを親しく見てくるのですつて、そんなことを聞く度に私身を切られる樣に、辛くつてよ…、御兄樣ともお優しいのね兄樣は、こんな無情な女らしくない私をお憎みにもならず、英國へいらつしてからも、時々にお便りを下すつたのよ、けれども矢張私は嬉しいともイヽエかへつて、うるさい位に思つて居ましたワ、でも時々はあんまり、冷たい心、何故こうだらうとソツト我胸に手を當てゝ見たこともありました、お亡りになる際まで私の名を呼んで、いらつしたのですつて、そして戶村さんといふお方が御歸朝になつて、この形身のお時計とゞけて下すつたのよ。と歌さんは、かたはらの亂箱を引よせて、緋びろうど張りの小箱を出してパチンと明けて、美しい懷中時計を、お見せになる、小夜さんも私も、その手の込んだ彫りに暫し見とれる、歌さんは、くゝり枕に、もたれて「戶村樣が仰つたワ婦人にして、あたたかい、愛情が、無かつたならば、何の價値もない、香りのない、花も同然だつて…香りのない花、全くだワネ、そして、今にすがれて仕舞ふのよ、かへつて心のゆく

まで、お詫びが、出來て嬉しいワ」雪の樣な顏に、ボツと血の氣が冴えて見ゆる。肺といふ、病はかうも、美しくなるものか、月見草よりも、なほさびしい御姿、「あちらでは學校に御出遊ばしたの」と小夜さんがきく、「いゝえ、ある畫の大家のところに、いらしつたのよ、それはネ、美術家としても個人としても、缺點のない青年でしたワ。エ同じ病氣よ。因緣だワ、私、もう〳〵、あんな淸い深い愛情は、浴する事は出來ませんワ、三年前の私が、今の樣な心ならば皆んなが、幸福だつたのでせうけれど……この時計の中には湯澤さんの魂が這入つて居るのですワ」と歌さんは靜に箱を仕舞ひながら「マア私、つい心にあるもんですからこんな面白くもないお話しちやつて、すまなかつたはネ堪忍して頂戴な」と急にはれ〳〵と顏を、むけて、ニツコリ遊ばす、ゆくりなく聞き得た、小說の樣なお話、なくてぞ人の戀しき、といふ言葉を目のあたり見るやうな氣がした、小夜さんも熱心に耳かたむけていらつしやる。

お晝飯を、頂いてから、小夜子さんと、一寸お庭に出て見る、ひくい竹垣の、直ぐ下はもう海で。汐干狩の、貸舟に、ひるがへる、旗に手がとゞきさう。

海にも、陸にも陽炎、もえて、何といふ、のどかな日であらう、昔々浦島太郎が龍宮から歸つて來たといふのは、こんな日であつたらうかと思はれる。歌子さんも、縞縮緬の寢衣着のまゝ、緣側の柱によつて、「この邊の海は、きたなくつて不可ないワ」と仰る「でも私等の樣に、山の中に居ちや、ほんとに、めづらしくつて、氣が晴々してよ、ねいみどりさん」と小夜さんは上氣した顏を向ける『私は目白や雜司ヶ谷の景色が好きだワ」と歌子さん。『早く、よくなつて、一緒に散歩しませう」と云ふと、淋しくホヽ笑んでいらつしやる。歌子さんは安樂椅子に、小夜さんと私は緣側に、腰を下して、しばし、クラスメートの話に時をうつした。

「オヤ四阿の、影が、もうかたむきかけた。『もうお暇しませう」と仕度をすると、殘り惜げにおとめになる

「道が遠いから、今つから、出掛けなくつちや、おそくなるのよまた來ますワ」、『さう…ちや、こんどはとまる、つもりで、來て頂戴なキットヨ」と力を入れて仰る。もう澤山よと、いふのもかまはず、無理に玄關まで送つていらつしやる、御門際で振返つて見ると、まだ淋しさうに立つていらつしやる、何だか胸せまるやうに思はれた。

車を八ッ山まで、急がせて、丁度來合せた上野行に乘る、夜の電車は、早い、もう銀座通、軒を並ぶる、商店の、瓦斯や、電氣は、赤く、青く、かゞやき初めた、須田町で乘りかへて、江戶川の終點へつくと、もう大分、暗くなつた。車の上の寒いこと。護國寺の前で、小夜さんと別れて家へ歸ると、六時過、着替をしてお飯を頂く。高浪の叔父樣の事を話す、と母樣が「困つたもんだネ、お幸さんも、たいていぢやない」と矢張り叔母樣に同情なさるワ。

部屋の窓を明けると、今宵は、恐ろしく霜の深い晩で、庭の植木も、石燈籠も、皆んな吸ひ込まれて、何にも見えない。

床に入つてからも、經机の、女主人公の、やうな歌子さんの事――優しい八重子さん、――何の思もない幸福な小夜子さん等のことを、かはる／＼思つて居るうちに、何故か今日見た、叔父樣のお馴染の女の顔が目に浮んで、はては、その生立や、境遇、のことまで考られる、神經が亢ぶつてるのね、時がまだ起きてる樣だ、葡萄酒を、もらつてコップに一ぱい、のむ、何だか頭痛がする。



# 小學卒業後の子女教育

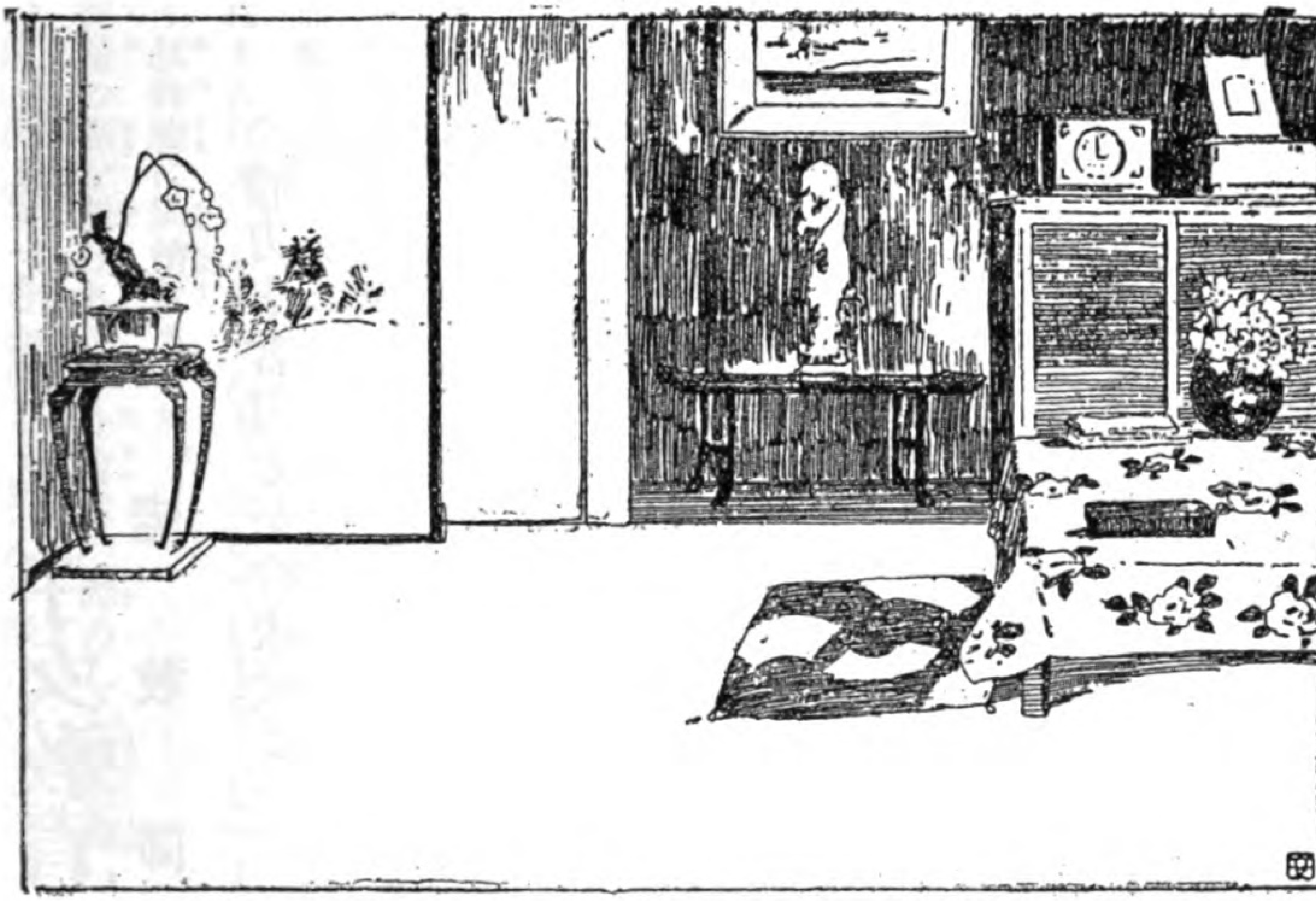
老教師

## △體力と智力とを吟味せよ

この三月、小學校を卒業すべき子女を有せられる家庭では、最早、卒業後の敎育について、それ〳〵心をいためて居らるゝでせう。我が身の老をも忘れて、その子女の生ひたちを樂まるゝ人情からいつても、小學時代の六ケ年を無事にくゞりぬけて、更に中學なり、高等女學校なりの門をくゞらせるといふのは、いかにも悦しかるべきことゞに相違なく、また、その子女の身にとつても、いそ〳〵中學なり高等女學校なりに入學するのだといふ決心は、小さき胸を躍らせて、まだ入學試驗の濟みもせぬ前から、毎夜の夢を大きな校舍に運ばせることでせう。が、敎育といふものは、何處までも子女を本位としてすゝむべきものでありますからたとひ、規定の如く小學の課程を了へたにしてもその體力や智力に於て中等敎育を受けしむるに適するかどうかを顧みてかゝらぬと、切角の心づくしも、徒に子女を苦しめる結果にならぬとも限りませぬ。故に父母は細かき注意をこの點に拂つて子女の體力も相當の發育をとげ、その學力も、中以上の成績を占めて居てこれならば十分といふ見込がついたら、然るべき學校を選んで入學の手續をすることにし、その見込が不十分だつたら、これまでの先生方と相談して、みだりに先を急がぬ方が得策です。古人も

『人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道に迷ひぬるかな』

と詠まれた通り、愛情といふ美しい色鏡を透して見ると、その子女の總ては、たゞ美く見えるばかりで、それが爲め、却つて望み多き前途をあやまらせる例は、世に尠からぬ事ですからかゝる折の注意は出來るだけ深く、且つ細かにせなければなりませぬ。中學にせよ高女にせよ、中等敎育と名のつくものは、何れも小學よりは課程も六ケ敷く、生徒に對する取扱も、小學と



梅咲や匂うがうへの萩茶碗

は、大分趣が異ひますから、體力や智力に缺點のある生徒は、そのために健康を害したり、不良の成績に陷つたり、遂には、半途廢學の不幸を見ることになります。一年はやく入學しても、學力の劣等なため中途で落第すれば、一年おくれて入學したのと同じ結果になるばかりか、落第といふ不名譽は、少年の心に癒すべからざる痛手を負せて少からず鋭氣をそぐ、假に成績の中以下の者ならば『急がば廻れ』のいましめを守つて、なほ、一ケ年位は、小學の教育を受けさせ、それから進ませる様にしたいのです。學校の選擇も肝要ですが、これは、寧ろ小學の先生と御相談あれ。

### △入學の準備と手心

今の學制では、尋常小學六年の業を了へたものは、直ちに中學なり高女なりに入學出來る譯になつて居ますが、近來國民一般に教育の必要を感じて、中等教育位は授けておかぬと、親の義務がすまぬといふので、何所の學校でも、百人の新入生を募ると三四百人づゝ

の應募者が集る。そこで、學校の方では、選拔試驗を行つて、成績の優秀な者から入學を許す事にして居る故に、願書を出した者には、入學試驗に應ずる準備をさせる必要があります。が、この試驗は、尋常六學年の程度を標準にして、讀書、作文、習字、算術位を試驗するので、さう面倒なものではないから、捨てゝ置いた所で、相當の學力さへあれば、必ず通過し得るにきまつてをる。しかし、試驗といふは、多少、當り外れのあるもので、優秀な生徒などでも、意外の失敗を招くやうなこともあるから、安全をはかるならば本月のはじめ頃より、尋常六學年の教科書を反覆復習させて置くがよい。尤も、ある小學では、中學教育を受くべき生徒の爲めに、入學準備の特別教授などを行ふ所もありますから、そんな特殊の施設があれば、別に、家庭で心配するには當らぬけれども、この準備のために骨を折らせることも又考へもので、中には隨分失敗をしてゐるのがある準備に、三ヶ月間力を注がせて、勉强させておいた子



仙臺青天守臺昭忠碑

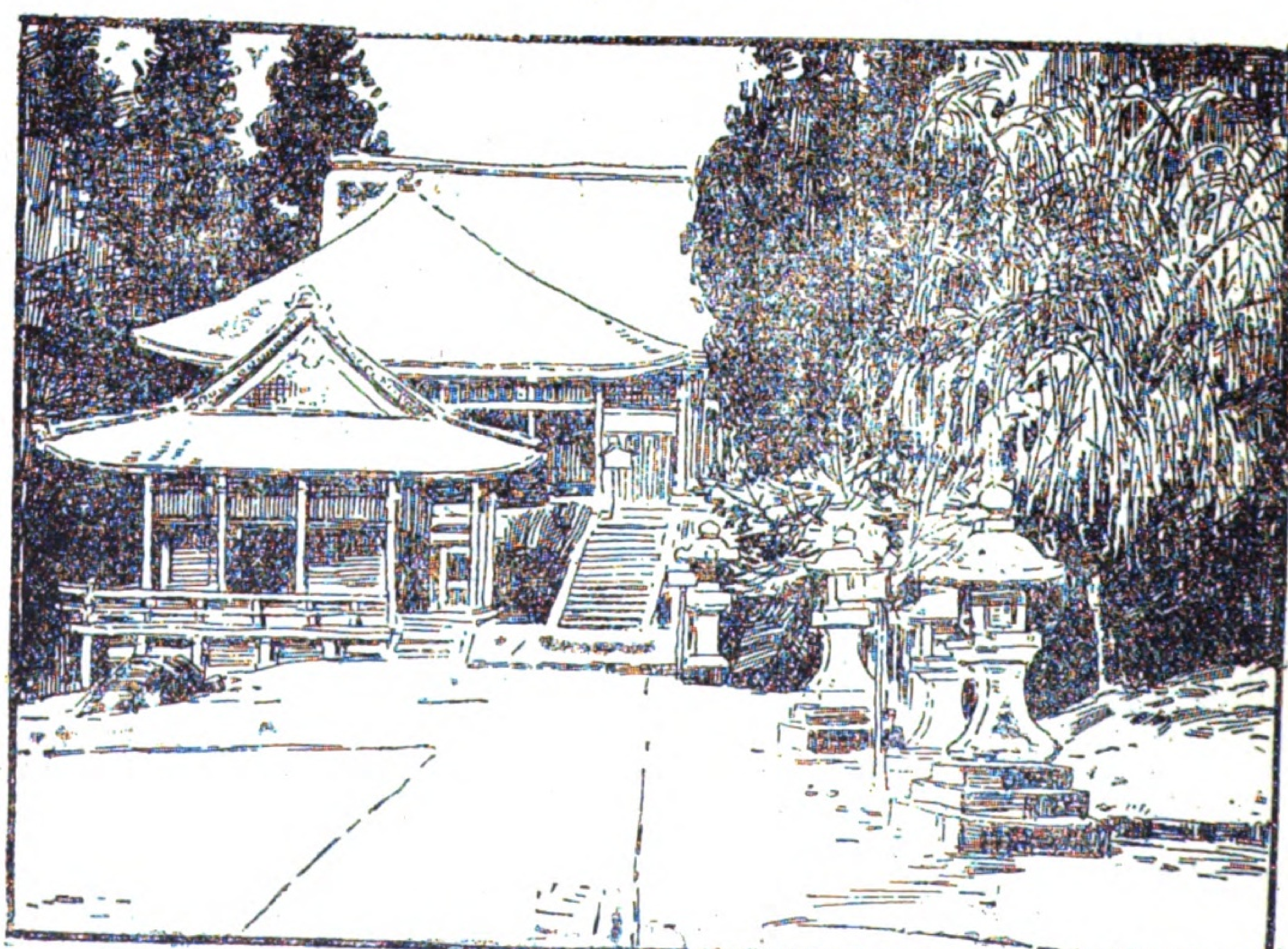
が試驗には成程第一番であつたが、入學して見ると、體力も學力も、自分より優秀な者が大分居るので、これと歩調をそろへて進むことは、なか〳〵容易でない。で、臨時試驗が濟み學期試驗がをはつて、發表された成績をみると、十一番目まで下つてゐる、かうなると、本人の落膽は非常なものである、故に入學の時には、中以下の成績でも其後、眞面目な勉强をつゞけさせて一番二番と鰻上りに席順をすゝめる樣に仕向て行くと、小さき心にも、おのか努力の効あることを認めて、日一日と、學業の進歩を樂しむやうになるから、就學當時の父兄の手心は、この邊の呼吸を明にしておくがよろしい。

### △豫習と復習

入學試驗の關門を通過して、いよ〳〵學校の門をくぐると、まづ第一に驚くのは、小學時代に比べて學科の數の多いことである。小學時代には、一人か二人かの先生が一學級の生徒を敎へて居るのであるが、中學校や女學校では、少くとも、六七名の專門敎師が一學級を受持つのである。そして、その敎へる具合から生徒に對する態度までが、小學の先生とは異つて居る。新入の生徒はこんな關係より、その學習上に尠からぬ困難を覺える樣子が見えるから、學力の優秀でない者は、最初の一學期位は、家庭の方で手心を加へてやらなければならぬ。一體、中等敎育を受ける程の生徒は、日常の學習上お稽古の下調と、復習を怠らせては、迚も完全な智識を得て行くことは出來ない。つまり、習つた所を智識にするには、豫習と敎授と復習との三段の手數をかけなければならぬ譯であるが、そのうち、豫習と復習とは、全く、敎室外に於ける生徒の努力にまつのであるから、その子女を中學なり高等女學校なりに入學させた以上は、どこまでも、この努力を怠らせぬ樣に仕向けるのが宜しい。この豫習復習は毎日どの位の時間を要するかといふと、同じ樣には行かないが、まづ、一日に、二時間乃至三時間は必要である。中にも國語、漢文、英語、數學等の學習には、最も多

く力をいれさせて、他學科學習の基本學科として、完全なる智識を修め得る樣にさせたい。しかし、入學當時は、能力も薄弱なり、學習上の欲望も無い位であるから、すこし、難解な場所でもあると、切角努力しようと思つた意氣込も挫けて了ふ樣な傾を生じ易いから最初の一學期位は家庭の方から、種々の方法をめぐらして、學習に力を添へてやらねばならぬ。かくの如くにして一學期をおくると生徒も學校の樣子に馴れ、豫習や復習に對する方法にも熟して來て、大抵は他の助力をからずに遣り通すやうになるから、二學期乃ち、九月の始めよりはすべて、その自由にまかせて、側からは、その成りゆきに注目してをればよいのである。中學や女學校に入學してからは、小學當時の樣に敎室のみの勉强で滿足させて置いては、好成績は得られない。又この時代には、身體を發育させる點にも十分意を注いでやらなければならぬから、擊劍か柔道のやうなものを選んで、體力の鍛錬をはからせる樣に仕向けたい。

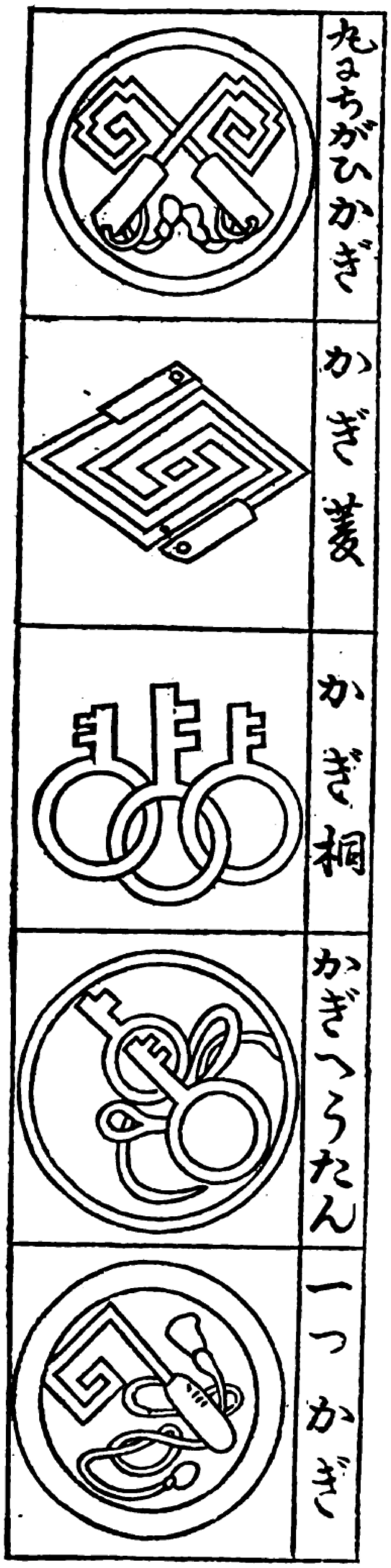
近江名刹三井寺



### △住所の選擇

恩愛深き父母の膝下より通學の出來るものは、實に幸福なことであるが、學校所在地に遠ざかつてゐる人人は、就學すると同時に、その宿所の選擇に氣をつけねばならぬ。その周圍の刺戟と、四邊の空氣とは、子女の敎育に重大な關係を有しますから、宿所の選擇には餘程愼重な注意を拂つておきたい。尤も學校によつては寄宿舍とか公認止宿とかいふものを設けて、あるから便利であるが、寄宿舍や公認止宿が、すべて完全無缺なものではないから、なか〱安心は出來ない。それから、親戚や知己の關係をたづねて、その監督の下に子女を托するなどゝいふのも例のあることだが、これも、餘り信用はおきかねる、とかく、親戚などゝいふ間には、つまらぬ遠慮の行はれるもので、これも好ましくない、で、今敎師の立場から、安心して子女の一身を任せ得る所を索めると、敎師の家に賴むより外はあるまい寄宿舍などでは規律ある團體的生活は出來るが、躾にまで手の屆く所は、殆ど無いから。親戚も知己も、下宿もこの點に於て賴みにならぬものとすれば、どうしても、德望ある敎師の、健全なる家庭を擇んでお賴みするのがよい、敎師の家庭に賴む以上は、惡友の感化とか、金錢の浪費とかいふ心配はないから一番得策である。

鍵の意匠



# 贅澤に流れぬ衣裳競べ

小柳夏村

眼鏡が多摩に流れて之れに苦しめられてゐるのは、何處の國も同じことゝ見えて、近着の倫敦ガールス、オーン、ペーパーに下の如き記事が載つてゐる。彼地の狀況が知られると共に、又發見することがあらうと思ふ。

△一季節に帽子一ダース

鳥の羽毛と少しばかりのレースと薬とで造つた一寸した帽子が一個五百圓もする。隨分高い値段であるがそれでも婦人はそれを見て驚きもせずに買つて行く。此の一例でも倫敦婦人の服裝の贅澤さ加減が察せられる。今より十五年以前には、五六十圓も奮發すれば倫敦第一の雜貨店に這入つて、極上等のボンネットを買へたものだが、今日は何處の店へ行つて見ても、百圓以上の佛國輸入のボンネットがズラリと棚一杯に並べてある。五六十圓の端錢では人が見向きもしない流行廢れの緣の狹いのがやつと買へる位で、帽子の値段は五六倍も騰貴したのである。

値段が上つたのみならず、是迄一季節に二三個位用ふれば十分と思はれてゐたのに、今では一人で一ダース位被り古してもまだ十分とは思はれない。衣裳なども、十五六年前には三百圓も出せば柄も善く仕立も上等のイーヴニングコートを得られたが、今では一寸したのでも四百圓はかゝる。少し上等のものになると千圓も奮發せねばならなくなつた。

△質素な決心もめちや〳〵

斯の如く我が英國婦人の服裝が高價になり贅澤になつたのは、多く米國などの風潮に影響されたものと思はれる。佛國などでは小間物屋なり帽子屋なり婦人の服飾品を取扱ふ商人なりが、劇場や競馬會を利用して巧に流行を造り出すのであるが、英米婦人のハイカラな連中は、季節〳〵に彼地へ出懸けては互に流行に遲れざらんとするのである。斯くの如くにして夫の收入

の五分の一、四分の一、甚だしきは其の三分の一をその家の婦人の身の飾りの爲めに支出するのが現代一般の風である。素より婦人がさう贅澤をしたいと思ふのではなからうけれども、舞踏會などに出掛けて見ると自分の衣裳が他の婦人のにくらべて際立つてみすぼらしく見える爲に、自然質素な心も滅茶滅茶に溶けて仕まつて、つひ流行の擒となつて仕まふのであらう。そこで如何な負債を起しても身の飾り丈けは一通りにはりこむ。從つて婦人の被服費は家事經濟の最重要なる項目となるので、その爲めに夫をして血眼になつて金策に奔走せしむる婦人も稀ではない



△飾り方の上手下手

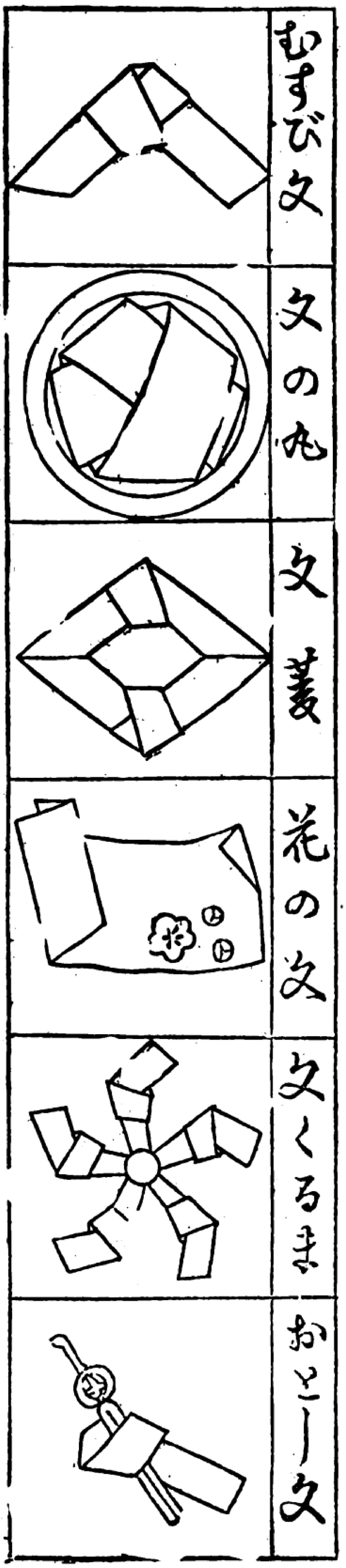
去れど何故に他の物は度外に措いて、服裝ばかりを富者も貧者も同一にしやうとするのであるか、甚だ不可解な傾向である。大分限者、大門閥家の夫人も、夫の俸給以外に一文の貯へもない花嫁も、同じ地質、同じ柄の服裝をしてゐるのが不思議である。然し、人形も衣裳からと云ふ通り、服裝は婦人の美を發揮するに最も大切なものであるから、身の飾りに餘り腐心するなと云ふのではない。却て服裝により、又他の方法によつて大に其の美を發揮されたいが、たゞそれを上手にやつ

て欲しいのである。

△學ぶべき巴里婦人

佛國婦人が服裝の優美なので世界一と言はれてゐるのは、極めて微細なところまでも骨を折つて工夫するからで、決して其の被服費が多いからといふのではない。英米婦人の樣子を見ると、地質や柄や縫箔さへ立派であれば、直に魂を奪はれてしまふ。そして好みの柄を五六種覗れば、三種位は必ず買ひ込む。こんな風で、最初自分が買はうと思つた品質が、或は自分に似合ふ色合かどうかといふ事を深く究めず、たゞ其の美しいのに眼を奪ばれて撰擇を誤るのが普通である。然るに佛國婦人は決して迷はない。必ず自分が豫期したもの、自分に似合ふものを買込む。そして英米婦人が此れも彼れもと五六着も買ひ込むのに反して、研究に研究して自分の氣に入つたものを一着丈け買ひ入れるのみならず其の一着の服を丁度男子が同じフロックコートを何度も着るやうに、何度でも着る。英米婦人のやうに幾回着たから捨てるといふやうな事はない。之れは大に學ぶべきことゝ思ふ。着物の似合ふと似合はないとは金額に比例するものではないのである。

ふみの意匠



# 婦人の人格を認識せよ

遠山霞

何か來よ、このさをどる胸に何か來よ、少女十八花の盛りはこゝに參りました、なべての色彩、なべての芳葩、我が衣にと織られ私の挿しの花として世にみちみちて居ります、うれしい春、たのしい春。

白蠟のやうに、細い肌の、うら／＼とした春日がさして、透き通る櫻色の、あゝ美しい若い血潮のともすれば頰に出で、さつと染まるほてり、あゝいつしかも私はこのさをどる胸になつたでせうか。

私は、女ならぬ外の世界の方をなつかしう思ひます、もしこの世が女ばかりの世界だつたら誰れが面倒な手數をかけて、五尺の黑髮をくしけづりませうぞ、錦繡も羅陵も貴樣方の爲めで御座います。道を行くにも愼しう、着物を縫ふやら、御料理するやら、琴やヴイオリンの御稽古も皆なうちあけた處、私一己の爲めでは御座いませぬ、皆樣に、ほめていたゞきたいがほんとの心で御座います無智で頑固で醜くつてそれで、女で御座いますと銘うつて通れる世なら、女の身としてこの位樂な事は御座いませぬ、然し皆樣がそれでは承知なさらない、やれ新時代の女子はどうのかうのと、被仰るのを、私はいやだとは申しませぬ、私どもは皆樣方につれて向上も致します、修養も致します、皆樣の要求なら、身を粉にしてどんな事でも致します。

あゝ大に求めて下さいまし、過分と思召す程女子にもとめて下さい、必ずしとげてお目にかけませう、けれども、女といひましても造り花のやう、只人の世の飾として、美しう裝ふて居ればよい、馬車に乘つて夜會に出でゝ蝶々のやうに舞へばよい、知惠ありがほの分別がほは禁物だなんていふ方もあるやうで御座いますが、いくら男子の方の御要求でも、それはいやで御座います。

婦人として人格を認めて下さいまし、私共は人間で御座います、男子の方と同じ人間で御座います、人間

としての道は男子の方と同じやうにつくして參りますたゞ髮が長く、袖が長く、柔い曲線を以てなり立つて居るばかりが女の本領で御座いませぬ、男子の方は雄雄しい、かたい直線で御座います、同じ模様でも建築物でも直線だつたら、どんなにぎごちないでせう、そこに、ふつくらとした曲線がまざりまして、はじめてその美が發揮されるので御座りますもの、私どもはただ造り花のやうになりたくありませぬ、社會をくみたてる要素として、曲線になりたいと思ひまする、世に存在して居るものから曲線を全くとりのぞくことが出來たら何誰か遊ばして頂きたう御座ります、幾何の圖式の外には何がありませうぞ。

然し私共は、男子の方を凌がうの、男子の方から、私共の美の前に、ほゝゑみの前に、ひざまづいて頂がうなどいふさもしい心はもちませぬ、飽くまで男子の方にすがりたい、男子方は私共より、ずつと〳〵すゝんで頂きたい、強者であつて、私共の指導者であつて欲しい、私はこの青春のもえたつ心を捧ますのに、強い〳〵男性の方を求めます私の心に描く男性の方、それは、心も肉體も丈夫な方で御座ります、恰も亭々としてたつ塔のやうな、さうしてすわりのいゝ風にも雨にもびくともしない塔のやうな方で御座います剛健な意志の、高尚な志操の、美しく清い、感情の、冷靜な思慮があり、學識と材能とをそなへた方、かういふ方が私の理想です。

美しいきものや、寶石やらは、美を生命の女ゆゑに欲しくないとは申しませぬ、しかし換へられませぬ私共を眞に愛して下さる方の人格には換られませぬ。

私こんな口廣いことは申して居りますが、私とても泣きました、自分が女であるといふことを曉りましたその刹那は、眞に涙が出でゝとゞめられませんでした、口惜しう御座いました、十二三、十五六、繩飛びしたり、鬼ごつこします時分は、自分が男やら女やらしかと自覺はして居りませんでした、たゞ、髮が長いのが女といふ位で御座いましたのに、あゝさとれば苦しい女の身で御座いますまた樂しい女の身で御座いま

す。

すがらねばならぬ、愛さる可き身である、あゝこの自覺よりして始めて、朝夕の化粧も有意義なものとなりました、道行きずりにもはつと顏をあからむるやうになりました、見渡した處、實は私の希望に叶ふ男性の方も見當りませぬ、一生を托す可き偉丈夫にもまだ出會ひませぬ、

私の知つて居ります範圍で申しましたなら所謂政治家や實業家は、たのもしくない方が多う御座います、意志は堅固で御座いませう、材能もありませう、今の政治家は感情と志操が、零なので御座います、生意氣な、そんな事云ふても、とても政治家や實業家の家庭にはいつて機敏に働くことも出來ない癖にと被仰る方もありませう、然し是等の方々は、へんな女を以て女としてお出で遊ばすやうにみえます、錦繪のやうな趣味しかおありにならないやう、云はゞよく働いて呉れるものは妻として立派な女としてはみて下さらないのでは御座いますもの、下女同様におあしらひになるらしう御座ります。



軍人、長いマントに肥馬に鞭つ姿は、ほんとにほれ

ぼれいたしますけれども。

又海軍の方の快活な、瀟洒な風もよう御座いますけれども、案外なのは、思つたより、開けない方が多いやうで御座ります、國家の干城といはゞいゝやうなものゝ、ともすれば腕力に訴へ遊はす様な方が多いのはこまります。

裁判官、天皇の御名により國家の法律をおとりあつかひになる方それは立派で御座りませうそれでも何だか、急に淋しいやうな氣がします、物を皮肉に御覽になり、從つてやさしい情緒にかげてはお出でにならないかしらと思はれます。



然し私は職業は、何とも申しませぬ。

人にとつぎたう御座ります、人として立派な方にとつぎたい、もしかその方の職業から來ます癖だつたら私が及ばずながらも補いませう、あゝ立派な人に嫁ぎたいと思ひます、財産はいつでも出來ますもの、財産ものぞみませぬ、立派な人格

の人に嫁きたい。

さうしてならふ事なら一つのある偉大な特徴のある方に嫁きたいと思ひます、あゝ春の夜の灯は、うす紫の焰ともえて、我がとる筆を照して居ります。

時々思ひます、いづれは、來る可きある運命風か雨か、はた雪か。

この運命はそも〳〵何處にひそんで私を伺つてゐるのでせう、かうしてゐるのも何だか薄氣味がわるい。

美人が幸福でもなく、醜婦が薄命でもない、奇拔な人が平凡な運命に服從して樂しさうに行くかと思ひますと一方には平凡な人が案外、奇拔な生活をして參りますあゝ何だか私には解らない、謎で御座います、結婚といふ謎、この謎の解き方一つで一生の運が極るので御座いますもの、この謎をとくためには私の滿身の血潮をそゝいで、悔いませぬ

あゝ何か來よこれが私の心のさけびで御座ります、女の身のこちらから、參るわけには參りませぬ、また「何か」を喚ぶことも出來ませぬ、あゝ「何か」その「何か」は私にも解らない。

媚といふもの、笑といふもの、涙といふもの、それを女の武器とか申します。けれど。

よく、ぐづ〳〵した、おとなしい女子の標本として昔の女子を申しますが私はさうは申しませぬ、昔の方は媚と笑と涙とで、巧に男子の方を籠絡した方が多いではありませぬか、私にはその眞似は出來ませぬ、ただ自分を修養し、向上し、かくて來る可き運命を待つて居ります、餘程、今の女子の方が、おとなしいので御座ります、あゝさをどる胸、十八の花の盛りのすぎぬ間に。（光榮ある人生の春第五等賞）



# 好きな物は消れるもの



食物の消化物不消化物と云ふ事は、本来其物各自の元来持つて居る性質では無い。人は皆一人々々の顔の違ふ如く心の違ふ如く肉體の出来工合も皆違ふ。随つて一人の人には不消化な食物も、今一人の人に採つては必ずしも不消化でない。現に餅は多くの人には不消化物であるが、私の老母は既に七十以上であるが、下痢してお腹の工合が非常に悪いと、御飯は否けないと云つて餅を食ふ。尤も餅は平常から非常の好物である。然るに一般の人には不消化な此餅を食ふと、必らず老母のお腹の悪いのが治る。是は一般の人であつたら愈々お腹を悪くするであらうが、私の老母は餅で治つてゐる。

私は又貝類殊に鮑とか蛤とか云ふ物が非常に好物で、お腹の工合の悪い時でも、是等を食ふと非常に心持宜くなる。其際は唾液もまだ食べない間から盛に出る。胃液も同様に盛んに出て居るのであらう。そこで一般の人には不消化な貝類も、私の體内に入ると、澤山な唾液や胃液の盛んな働きで、忽ち楽に消化されて了ふのである。

絶食して居る大病人でも、好きな食物は大抵よく食ふ物である。さう云ふ時に好きな食物を食はせると、今まで弱りに弱つて居た胃を始め、其他の消化機關でも、是は好物だと思ふと同時に胃液なり何なり消化に必要な液を兎も角も少しでも出す。即ち少しでも元氣が出て来る。そこで好物が入る。こなす。久しく食物を食はない所へ少しでも食ふから、非常に夫が滋養になる。さうすると機關は愈々元氣を得て、益々働き出す。乃で他の食物も追々食へて来るのである。所謂絶食者が食附くと云ふのは、然云ふ工合になつて来るのであるから、大病人に好物を食せるといふ事は却々効能のあるものである。大病でなくば尚は更の事である。「是は不消化物だから、いくら貴方の好物でも、決して食べてはなりません、當分は流動物に限ります、牛乳とソツプと玉子と」など丶云ふ醫者は、今の醫學の進歩を知らず、醫術なる者の活用法を知らぬ庸醫である。

之れと同じ理由で、料理も凡て眼に見ても綺麗な様に、刺身でも何でも綺麗にして食膳に上すと云ふ事が實に大切である。さうすれば見るからに嘸甘からうと思ふ。さうすると食はぬ先から消化機關が働き出す。唾液胃液が盛に出る。そこへ其食物が入るから、得たり賢しと直ちに消化して了ふ。だから料理法には味が甘くすると共に、體裁を美しくする事も肝腎である。續いては食器の美しい事、食堂の美しい事、一同愉快に團欒して食べる事なども、勿論消化をよくし、滋養とならせるに最も大切な事である。（醫學博士遠山椿吉氏）

# 大切な家計上の心得

生存競爭が激しくて生計難の聲が高くなつて來ましたが、それでも十圓や十五圓の月收でもやつて行く人もあり、之れは全く心掛け一つです。收入が少くつて暮らせぬと云ふやうな人は大抵日常の小使錢を粗末にするので、自然收入よりも支出が多くなる譯ですが、一定の豫算を作り如何してゞも其豫算以内でやるとさへ定めて置けば暮らせぬと云ふ事はありません

で私は第一に分相應の豫算を作る事を奬勵して居ります。夫れから手提げの小さな金庫を備へ、其中に帳面と鉛筆と一寸四分位に切つた傳票代りの紙片を入れ、小使錢も其中に入れ置く事にしたいと思ひます。而て假令一錢を出しても右の紙片に記し、假に一寸出したものでも假と書いて記入し一々紙挾に挾んで置いて、寢る前に必ず帳面に轉記し、今日は一日の豫算から幾ら殘つたと云ふ事を調て置くがいゝと思ひます。

又月給暮しの人は本月分で本月を暮らすやうに致したいものです。中には來月、來々月分を宛込んで家計を立てゝ居る人もあるが、夫れでは心に些の餘裕なく、病氣の時などは大變に困難するから、之は是非來月又は來々月分として、本月は本月分で暮らすと云ふ事にしたいのです。差當り餘裕のない人でも半年か一年心掛けて居れば雜作なく出來る事です。

夫れから現金買は家計上の一大要件で、呉服店雜貨店などから通帳を取つて置いたら、屹度餘計な無駄使ひをする事になります。八百屋等の現金買ひは大變面倒に違ひないが、大勢の人が一致してやれば自然習慣になつて了ひませう。現金買に更めてから買過ぎがなく、餘裕が出來たと云ふ方が澤山あります。又商家では賣溜と小使とを區別し、且つ小使を記入する樣になつてから豫想外の好成績を擧げて居る人が多くあります。(嘉悦孝子女史)

# 東京の生花の産地

市内には生花を指南する流派が二十幾種といふ程あつて、是等宗匠の許に出入する男女の弟子は實に萬を以て數ふ。加ふるに中流以上の家では、殆ど皆床に挿花するから、隨て其需要の數も非常のものである。

扨是等の生花が何處から供給さるゝかと聞くと、其種類に依て産地が極まつて居つて、松樅、躑躅の如きものは重に府下北足立郡、房州三浦半島などから輸入されるのであるが、其地方には夫々仲買人があつて、土地の所有者に交渉し、季節々々に剪り採つて水陸を運び來り、市内十數戸の問屋に卸すと、小賣人が毎朝夫を又問屋から束の儘を買込んで來る順序となつて居る。

草花類は府下何れの農家も兼用、又は畑に栽培するが多く、殊に蒲田、千住、澁谷等では蔬菜等より收益が多いと云つて草花の栽培に殆んど全力を集注して居る農家も少くないから、供給は十分で、何時でも不足を告る樣な事は無い。

千住其他北足立郡の村落より持出す草花は、車や舟に積まれて一時先づ吾妻橋際の市場に持込まれるので、毎朝其邊一帶に紅紫白黄の彩霞

を濫らし實に美事なものであるが、此數十萬本といふ花は十一時前後になると悉く小賣人の手に移つて市中に賣捌かれる。

西洋草花は他に比して需要極めて少いが、上流の家庭で投入用としてポツ〳〵注文して來る事もあるから、其樣な場合には、温室を設けて培養して居る植木屋即ち入谷の入十、入惣、入又、我は妙華園などに駈付けて需要に應じて居るとの事である。

## 瓦斯の經濟な用法

大切な食物を調理する臺所に、薪や炭を使つて、煤烟をうづ捲かせ、灰神樂を立たして、鍋ひたての鑵を眞白にするなどは、文明の今日如何にも間の抜けた話である。そこで燻ぶつて燃えない薪をくべて目を眞赤にするよりも、瓦斯を引けば、手間も掛らず煙も立ず家中が清潔でいゝといふので、近來ハイカラな(善き意味の)家庭では、瓦斯が大流行となつた。

其瓦斯も使ひやうで、高價にもなり廉價にも揚がる。どうすれば安くあがるかといふに、一體物の煮立つ温度は開闢以來定つたもので、一度煮立つたものを、其上煮立たさうとしても夫だけ煮立つものではない。煮立たさうとすればする程、蒸氣となつて飛んで了ひ、お湯は減り、果ては焦げついて鍋を痛める。唯殖えるものは月末の瓦斯代ばかり。

そんな事とは知らないで、湯がぐら〳〵煮立つて居るのに、猶ほ瓦斯を燃やして平氣で居る女中、甚だしきは何も懸けないで燃し放して居る奥樣さへある。そして瓦斯は高くつくと言ふけれど凡そ不經濟に費やして安く揚がるものはない筈である。瓦斯は入用だけ使へば安いものだが、無駄に使へば、こんな馬鹿〳〵しいものはない。

又瓦斯の火は、焔の高さの三分の二以上の所が一番火力の強いものであるけれども、今まで炭を使ひつけた習慣から、何でも火元に近づけさへすれば宜いと思つて、成るべく下の方に鍋を懸けやうとする。それが爲めに瓦斯の大部分は空しく費やさるゝのである。瓦斯は到底愚かな者には使へない。

人工營養即ち牛乳で子を育てる人の最も困まる事は、夜中に乳を呑ます場合、母乳と同じ温度(攝氏の三十七度)に牛乳を保つことの甚だ困難な事である、或は熱過ぎたり、或は冷た過ぎたりして程好くゆかぬので、嬰兒は往々腸胃を害うて下痢を起す。成人になつて慢性の腸胃病に惱む者の多くは、嬰兒の時の乳の温度の不規則に基づくといふ事だが、此害を防ぐには、瓦斯調節器を用ふれば可い。

之は水銀の膨脹收縮を利用して、「バーナー」に送る瓦斯の量の多少を自動的に調節する裝置で、安いのなら一二圓で買はれる。之を用ふれば室内の温度をいつも同じやうに保ち、酒の燗でも湯の加減でも常に適當の温度に保たすことが出來る。(大藏省技師西村寅三氏)

## 和洋の應接間

現時我が國の應接間は和洋とり〳〵に成つて居りますから、自然其飾りつけなども双方に亘

つて居ります。西洋間は勸工場の様に種々様々なものを飾りたてゝ客の目を喜ばせ、互の話題にもなる様にしてある。之に反して和風の應接間は、貴重品を一品なり二品なり置いて、靜肅に客の心に味はせると言ふ様に作られてある。譬へば床の間には幅を懸け、其下に花でも活けて、片方には硯、紙、互ひ棚の上に一つ二つの置物でもして有れば立派な應接間になるのであります、

應接間は主人の趣好を客に御馳走とするのでありますから、主人が書齋に趣味を持つて居る家の應接間には自づから其れが頷ける様に、木石に趣味を持つて居る人ならば其れ等を飾つて置くのも好い事と思ひます。それから假へば主人が朝鮮から歸つて來たとか、何々の國、何々見物に行つて來たとか云ふ場合には、其持て歸つたものを飾つて置く事も非常に面白いと思ひます。

座蒲團をよく十枚も二十枚もお座數に積んで置く家が有りますが、如何に立派な座蒲團でも日本風から押して來て之は餘り好ましい事では有りますまい。次ぎに西洋間で一番心を用ゐる處はストーブの周圍です。之は丁度日本間の床の間に相當するので、埃を溜めたり物をゆがめたりして置かない様に、ごた〳〵と種々並べて有るものにも自らの統一を取ると言ふ事が注意すべき點であります。

其れから此所に餘り以外の事で注意すべき事は、日本の人は「明けばなし」と言ふ事を何んとも思はないことです。日本間の飾り付けは質素な代り庭に草木を面白く植ゑ水を流し築山をしつらへてあるから、先づ風雨の日で無ければ障子を開けて庭の御馳走をするのが普通に成つて居ますので、開けて置くと言ふ事を普通の事の様に思つて居りますが、西洋間では之を大層嫌ひます。特別の場合の外は戸を閉ぢると言ふ事を忘れない様に、特にストーブなど焚て居る時は此注意が最も必要であります。(山脇房子女史)

# 小兒の離乳期の注意

哺乳器は殊に清潔を旨とし、授乳者の指尖などには、動もすると細菌の附着して居る事があるから、其邊には一層注意を要します。渇した時に一旦沸騰させた水を飲ませるのは甚だ宜しい。外國では大麥の煎汁を乳兒に飲ませて居ります。

生ひ立ちの善い子供は、七ヶ月目に齒が生える。そこで始めて乳以外の營養物を與へる。但し固形物は一切見合はせ、先づ飴位に止めて置いて、それから段々齒の生える八九ヶ月の末頃から、ぼつ〳〵粥の汁にソップ(殊に羊肉ソップ)位を與へる。但し一年頃よりは、少しづつ卵の白味の濃い重湯を與へ、追々母乳の回數を減じて行き、其代りに牛乳又は黄味の粥を與へつゝ、注意して離乳時を失はぬ様にします。

次に二歳になつたら、百合、野菜の若葉などを與へ、漸次眞の粥に移る。決して急劇に色々の食物を與へてはなりませぬ。此の時代は小兒に取つて最も大切な時で、又僅かの事から、直に胃腸の障害を惹起し易い頃であります。といつて又た離乳期を過ぎて後も、尚は初生兒の過

りに乳汁のみで育てると、軈て貧血狀態に陷り其の爲めに身體も薄弱になり、自然に抵抗力も薄弱の弱い〳〵小兒となります。

顏が蒼白くても、乳兒が肥滿してさへ居れば素人には健康兒のやうに見えますが、決して油斷せずに、早く貧血狀態に陷らぬ前に鐵分を飮ませる事を怠つてはなりません。十ヶ月後には母乳八回の内一回を減じ、其代りに重湯一回を與へ、それから又一週間の後には、更らに牛乳一回を加へ、母乳一回を減じ、乳粉を十五倍位に粘つたものを、漸次に濃くして與へ、一ヶ年後からは、母乳三回に牛乳三回、重湯一回とソップの少量を與へ、自然に母乳を忘れる樣にさせるのが宜しい。而して一年半程經つてから全く母乳を離し、其の代用品としては牛乳、驢馬乳、牝馬乳、山羊乳、コンデンスミルク、及び乳粉等があるけれど、母乳に最も近いのは山羊乳と驢馬乳です。併し日本では山羊乳も驢馬乳も、却々容易に得る事が出來ませんから、大抵牛乳で間に合せます。（[illegible]醫院齋藤知二氏）

# 盆栽の松竹梅

梅の花を綺麗に咲かせますには、成る丈け日當りのよい暖かな處に置かなければなりません。それから第一番に肝要なのは水のやり工合で、春雨の降る樣に、如露で水を灑ぎかけて、常に鉢の土が乾かぬ樣にしなければなりません。餘り乾き切つても、又た水を遣り過ぎても不可ないのです。さうすると、本職の植木屋も跣足と云ふ樣な綺麗な花が咲きます。植木の水は、人間の食物と同樣ですから水を切らすと蕾も萎みます。

又た來春も綺麗な花を咲かせたいと思ふならば、實を持たせぬ樣に、花が一杯に開き切つてもう散りさうになつたら、其花を摘んで了ふのです。さうして花が散つて、若葉が芽を出して來ましたら、日當りと風通しのよい場所に置き其れに油滓なり下肥なりを水で薄くして二三度やればよいので、其他に別段面倒な手入れは要りません。尙又花の咲いた後に一旦植替へをしますと、其上のことはありませんが、夫れも面倒なら植替へないでも構ひません。

松を枯らさない樣にするにも、水の遣り樣は梅と同じで、如露で雨の降る樣にかけるのです。水が切れると樹が弱はつて、葉が赤くなり、終ひには枯れて了ひます。それから梅と少し異なつて居りますのは、風通しのよい、南向きの、朝から晩まで日影にならない處へ置くのが第一で、さうして枯れた葉が出たら一々摘んで取り除いた方が、樹の爲めにも、又見る目にもよい。そして三月頃になつてから、油滓を水に割つて水も梅などよりは、澤山やる方がよいのです。くれ〴〵も日當りよい處に置くことを忘れては不可ません。

竹は松や梅などゝは少し手入方が違ひます。松や梅は日當りのよい處を好みますが、竹は午前十時頃まで日に當てゝ、夫れから先きは日に當てないで、樹の下の樣な日影に置かぬといけません。さうして水は澤山やらないといけないのです。其譯は竹と云ふ物は高い山の水氣の少ない處には少なく、人家のある處に多いからです。然し風通しは惡くても關ひません。（百草園主人）

# 平凡の裡に無限の教訓を得る妻の日常

瑤琴

蚤の刺すのも、寢苦しさもそんな事は自分には一切無關係なり、目覺し時計が枕頭で遠慮もなくチリ〳〵と鳴り渡るに惜しき夢破られて四時半と云ふに眠き眼こすりて起き上る。

今日も晴れか、曉の空瑠璃色にまだうす暗い、井戸端に行つて、顏や手を清めて、さて水瓶に水をくみ入れる、桔に八杯目には手がだるくて息も切れさうになつて來る、之れが私に取つて最身體を丈夫にするものと、空氣の清い朝自然にする深呼吸にからだ中せいせいとする。

ホッと一休みして米を磨ぎ御飯にたく、味噌汁を拵へ、香の物を出して膳に並べるまで三十分や、四十分はどんなに急いでもかゝる。

起きなくてもいゝ清子が一番先きに目をさましてぐづぐづ云ふ、子供にうそを云つてはいけないと知りつつ今乳にひつ付かれては大變とつい心にも無い事を云つては自分で後悔する。

しかたがない、あとで其好いものと云ふのを買つてやらう。

やつと學校に行く子供達も起きた、三人を流しに集めて身體を拭いてやる、總領の英子は一人で泣く。

床を上げに行つたついでに蚤を取つて居る間にとうとう清子が抱かれて來る、忙しい人の心も知らないで嬉しさうに膝に跨つて飲みにかゝる、無心の乳子とはよく云つたものといつも思ふ。

勝手でシユー〳〵と音がする、フト氣が付くとおつけがふき溢れるのだ、一寸其鍋おろして頂だいと云ふと英子が一角大人らしく布きんでおさへておろしかけるトタンに手を辷らしてシユウと灰神樂があがる、一寸賴んで倍の手數がかゝる。

今の音で乳をはなしたのを幸に手早く床をかたづけ

て時計を見ると六時半過ぎて居る旦那樣を初め皆を集めて食卓につく朝はほんの手輕なもので之れとて滋養になりさうな物は無い、去りとて肉や魚類の濃厚なものはまだ働きかけの胃には適しないと云ふので勢、玉子の樣なものでも用ゐねばならぬ。

七リンの火を火鉢に取つてあとに玉子の鍋をかけて置いたのが丁度いゝ工合の半熟になつて居る、毎朝玉子六ッは贅澤な樣だが將に之れから一日活動せんとする元動力となるべきものと




思へばあたり前の事である食べかけた處へ魚屋が來るいつも〳〵同じ樣なものばかり、こちが割合に安いので十九錢のを一尾買ふ、料理したらこちらに持つて來て吳れといつも云ふのに又流しに置いて行つてしまふ無責任な不親切な事、一時の間も惜しいのに魚屋まで人に時間をつぶさせる。

自分より先きに食べてしまつた子供達が待つて居るので大急ぎでかき込んで、清子を旦那樣に頼んで髪を結ひにかゝる、此頃流行のリボンをかけ

てやる、二人とも大悦び手をふきながらつや〱とした毛に水色のよくうつる事、我子ながら癖もない好い毛とひとりでほめる。

旦那樣のシャツ、ヅボン下、靴下の洗ったのを洋服の側に置いて、靴をそろへに玄關に下りた處へ、行つて參りますと二人が揃つて挨拶に來る辨當袋に草履袋など氣を付けて出してやる。

睦まじげに並んで行く後姿、我子ながらしみ〲と可愛い。

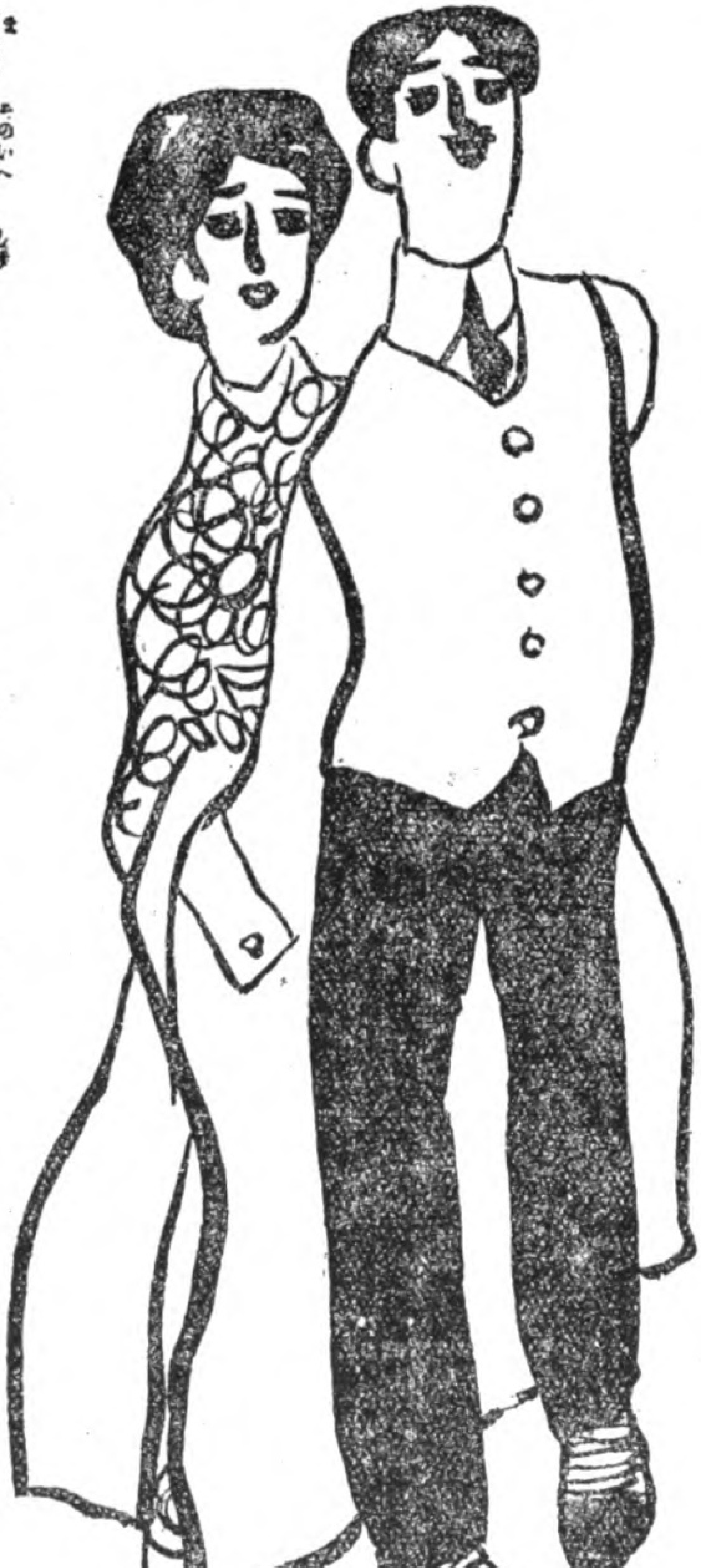
三人の子の母として、親愛なる夫の妻として何で浮か浮かと此貴い時間を冗につぶされるものか、自分の身體のつゞく限り人々の爲めに最善なる道を取つて進まねばならぬ、盡さねばならぬとの決心はます〲固くなる、思へばまだうら若き血が肉の内に燃えたつ。

時もたがへず旦那樣の御出勤、今日の樣な日は好いが天氣の惡い時はお氣の毒、激しい生存競爭の渦中に有つて足手まとひをかゝへて、時にはつらい事も有りなさるだらう、然う思へば一粒の御飯でも粗略にはならないと思ふ、皆旦那樣のおかげだもの、などゝ玄關に送り出しながら考へる、處へ郵便が來る、講義錄と、里から

まだ先月の講義錄も讀み盡さない内にもう次ぎが來てしまふ、こんな事ではまだ〱自分の勉强が足りないのだと思ふ、ほんとに女子大學校の講義錄は爲になる樣だ、兒童研究、實踐倫理はとりわけ自分の興味を持つて見る學科、之れから得る處の新智識と精神の修養といひながら一ヶ月五拾錢で買へる樣な安い事では無い、家庭に老い込み易い人の爲めに之れより好いものは無い、女學世界は自分に社會の學問を敎へて吳れる常識を養ふ友となり、之れは丁度學校に行く代りの先生の樣なもの。

夜のたのしみと封を切つたまゝ机の上に置いて、母からよこした手紙を見る、例の折針流ながら有り難い思召、子は親の事を忘れて居るが親は決して子の事を忘れない、自分の近狀、孫の樣子を聞かして吳れといつも書いて無い事は無い、之れだけはお返事を上げず

にはすまない、夜でも書く事にしよう、自分も此家に嫁ぎ、子供が出來ると共に親を思ふの心が次第に薄くなる樣に思つては時々悲しくなるが、人の愛には矢張り限りが有るので有う、限りある愛を夫にも、子供にも、又生みの親にも平等に注ぐと云ふ事は出來ない、人の家に嫁しては先づ其家を主としなければならぬ、夫れがとりもなほさず生みの親への孝行にも當るのだ、母上も夫れで滿足して入らつしやる筈、今迄は何とも思つては居なかつたが、自分が親の身になつて見れば却却大抵の事では無い、着物一枚だつて新しいものは猶更、縫ひなほしだつて云ふまゝに着せてやる事は出來ないのは何處でも同じことだ。



午前八時おでかけ

表を通る豆腐屋の聲に驚かされて手紙をしまひ流しのかたづけにかゝる、清子は自分の立つたのも知らずに向ふをむいて何かしてゐる。

夫のシャツ、ヅボン下、子供の着物や前掛一くるめ

に洗ひにかゝる、清子が覺束ない足取りで下りて來てからだにつかまつて乳をくれとせがむのをいろ〳〵になだめたりすかしたりして居る處へ、下駄の音がしたと思つてそつとのぞくと、○○の奥さんだ、此忙しいのにと自然にしがむ顔に不自然な笑顔作つて出て行くお子樣が無いからおひまだと見えてのんきさうに、つやつやと結い立てのお髪に美しくお化粧までして入らつしやる、又くだらぬ着物の自慢に入らしつたのだらうが、私にはそんな事耳に這入らぬ、いゝ加減に聞き流して居る、白木屋も、三越も今年になつてから一度も行かないのだもの、てんからお話にはならない。

お羨ましい事、私などはとても奥樣の樣な眞似は出來ませんので、お邪まに上りましたらみせて頂き度う御座いますと云ふと、其得意さが顔にも樣子にも現はれて居る、氣の毒な人だ、たとへ百圓かゝつた帶でも十五圓出して染めさせた模樣でも、來年はもう廢れてしまふ、火事があれば燒けてしまふ、年數がたてば弱つてしまふ、云はゞ一時の虚榮心を滿足させるに過ぎぬ、其處へ來ると私なんかはのんきなものだ、世の流行はだん〳〵廻つて居るのだ、五年も八年もしまひ込んで有る羽織の色が、今年の流行のと同じ事だ、こんなうまい事はない、夫れよりか自分は千金にも、萬金にも代へられぬ子寶と云ふものを持つて居る、健な行く末望み多き我子を眺める時の滿足さは、どうして着物や髪かざりの、吹けば飛ぶ樣なものとはとても比べものにはならぬ、こんな事を思つて見ると自分の眼の前には當世流行の着物を纏つた骸骨が坐つて居る樣に見える。などゝ勝手な事を考へてお相手して居ても、根から張合が無いと見えて、とう〳〵お暇とおつしやる、まあお宜しいでは御座いませんかと口には云ふものゝ其實帶に頬かぶりでもさせたいと思つて居る處、強いて止めもせず、出した羊羹を紙に包んで、盆に乘せながら送り出す。

何の要事で來たのか一向要領を得ぬ、義理でしかたが無いが貴重な時間をつぶされるだけで、生意氣な事云ふ樣だが餘り德にもならぬ、仕掛けた洗濯ものを干

してしまふ、ともうお晝になる。乳、乳とねだつて泣いた清子にやつと乳を與ると、可愛や一口、二口飲んでいつかスャスャと寝てしまふ、そつと下に寝かし付けて一人晝飯を食べる。

三時には又おやつの要意をして置かねばならぬと、天井につるして有つたかき餅をおろして見る、寒に拵へたのでまだ何ともなつて居ぬ、砂糖の這入つたのを少し燒いて置く。




只今と云ひながら學校から歸つて來た二人、這入つて來るよりにこ／＼と明日は遠足に行くのですよと云ふ。

夫れでは辨當袋や足袋、草履など寄せてお置きなさいと云ひ付ける二人はもう大悦び、明日のお辨當は卷ずしにしてお菓子を澤山に入れて頂戴よと云ふ。

自分も覺えがある、澤山に／＼と慾張つて持つて行つても、さう食べられるものでは

無い。

處へ清子が目を覺してのこ〳〵出て來る、泣きもせずにぼんやりと立つて居る、三人にかき餅の燒いたのを分けてやつて夕飯の支度にかゝる、丁度よく八百屋が廻つて來たので出て見る。松茸が百目六錢だと云ふので、百目だけ買ふ、運動會に持つて行くのにと柿を五つ、食後のに五つ。

夕方の献立は煮肴、松茸、豆腐の煮付、煮豆などで早く出來上つてしまふ。

テーブルに皆並べてしまつてまだ暇が有るので仕かけの仕事をする。

處へ役所からお歸り、お召かへなさつて、すぐに御飯にする。

子供の無邪氣な話に平和な家庭に一層の花を咲かして一日の苦しみは悉く忘れてしまふ。

夫れは然うと彼の清原子ーと少し眞面目になつて旦那樣が、

彼の收賄事件がとう〳〵知れて〇〇新聞に出されたよ、夫ればかりぢやアー無い、夫れが原因となつて、妾を置いて居る事や、家庭の紊亂して居る有樣や細君の顏の批評迄して出して有つたと云ふ事だよと。

あの奧さんなどは何處へ入らつしやるのにも綺麗にしてサモ愉快らしくして入らつしやるのに内幕はそんなのかしら、彼の人は餘程仕合せな方と思つて居たのに、ほんとに身には錦を着て居ても心にいろ〳〵な心配事が有つて　何にもなりませんわね　ソーして見ると私などは朝から、晩迄襷をはづす暇も有りませんが夫れが幸福の元となつて居ると思ふと何とも云はれぬ愉快さを感じますよ。

然り〳〵、艱難汝を玉となすとは其事だよとお云ひなさる、例の格言が今日は一層しみ〴〵と身にこたへる、不平も無い、不足もない、只前途に洋々たる希望が有るばかり。

夕飯の仕舞事をした後子供を連れて明日のものゝ買物に行く。

二人は各々に袋をさげて行つて菓子屋で自分の好き

なものを入れてもらふ、八百屋でかんぴよう、玉子などを買つて歸るお天氣は明日も上等らしい、菓子の袋や、ハンケチ、紙など一緒に集めて早く起して頂戴よと云つて床につく、大方夢にも遠足の事を見るのだらう。

淸子をねかして、夫れから巻ずしを拵へにかゝる朝では間に合はないから。

御飯を炊いて、かんぴようを煮て、玉子を燒いて、のりを燒いて卷く迄却々二時間では出來ない、臺所で獨りぼつ〳〵といろいろの事考へながら漸く十時頃出來上つたのを切つて竹の皮に包んで仕舞ふ、之れで漸く戸締りをして來てやつと坐る。

晝の疲れで三人の子供は前後も知らず小さな寢息を立てゝ寢入つて居る、自分はしばらく見入つた、磨かば照さん白玉を



静に宿せる兒の胸と無心に歌つて居た自分は早や三人の母となつた、實に白玉の之れより磨き上げなば如何に美はしの光り放たんも計りがたき此貴き三人の母として自分は完全に母たるの勤めを盡す事が出來るだらうか、之れを考へると足らぬ自分が悲しくなる、廣い社會に、否此宇宙に我母より外に貴きもの、大切なるものは無しと信頼せる我子に對してつく〲と自分は悲しく恥しくなる、世の中に之れと云ふ心掛りは無いが、之れだけがいつも自分の心にかゝる、どうしたならば我子を完全に敎育して行く事が出來るかと云ふ問題はいつも自分の頭からはなれた事は無い。

　着物の上げをおろしたり洗濯ものゝ仕末をしたりして時計を見るともう十二時になりかけて居る、日記帳を付けて目ざまし時計のねぢを卷いて枕頭に置く。

南天の意匠



修養語

# 垢ぬけのした奥様

浮葉

趣味ある婦人、趣味ある婦人と云ふ言葉は近來よく聞く所で御座いまして、識者、名士と云はるゝ方々が聲を大きくして要求して居られるばかりでなく、當事者たる奥様方に於ても其必要を認められて、趣味あるべく頻とつとめらるゝ樣に見受けられます。之まことに盛世の慶事、結構な事ではございますが、扨趣味ある御婦人が續々出來まするかと申しますに情ないかな寥々雨夜の星のそれの如く、あるかなきかちらとの光さへ伺ふ事が出來ませんのは、誠に殘念に存じ上げます、これは何故でございませう、一つには奥様達の修養の方法が間違つて居るにもよりませうし、又一つには趣味ある婦人の資格のむづかしいのにも因るので御座います。

さて、趣味ある婦人と云ふに對して趣味を有する婦人なる言葉があります。一寸きくと同じ事を云つたものゝ樣ですが言葉は似よつて居りましても其意味には霄壤の差があるのでございます、趣味あるとは第三者が婦人其者を見て云ふ時、趣味を有するとは婦人自が或事柄に對して云ふ時でありまして、例へば私は旅行の趣味を解する、自然の詩味を感ずる、或は花が好だ茶が好だと云ふ場合であります。此趣味を有すると云ふのが取りも直さず世の要求する所の趣味ある婦人だといふ樣に速斷されて居る御方があるやうです、三尺の小庭にもダリヤとか、コスモスとか、ハイカラの名の花を植ゑたり、破れ垣根に朝顔の露けき風情を賞したり、障子一つつくらうのにも形美しく紙を切つて、之で趣味の能事畢れりと得々としてよがつて御出の御方もありはしますまいか、實にも其等の事は趣味ある御婦人の一面には違ひ御座いませんが、それを以つて全部だとなさるゝからいけないのです、

趣味ある婦人を形づくるには種々なる要素がありますが、今一々細い事は申しつくせません、其二三を擧げて見ますると先づ

自己の有する所の趣味を醇化して身にあらはし得る事、茶の湯に堪能なる人の日常生活におのづと雅味を添ふ樣に、踊の素養ある人の風姿のよくなる樣にありたい之が一、

文字ある婦人の常識で解し得る範圍内の田地は隅から隅迄すつとたとへ一鍬にしろ殘る限なく掘り試みて常に充實したる心持で居る事、之が二、

凡て物事に拘泥しないこと、去るものは追はず來るものは拒まずと云ふ綽々たる態度を持して居りたい事之が三

樂天的にして亦多涙、情熱があつて、決して僞はらぬ事、かくてぞ一時雨過ぎてうれしき月夜かなの風韻を現じ得るので御座います、之が四、

人の目端を見る事に機敏であつて其感情を忘れても害はぬ樣、或る程度迄自我を沒却して他と同化する事、之が五、

氣に入らぬ風もあらうに柳かな、强き色彩で自己を現はす事をさける事、之が六、

以上であります、之等の諸質を統合して上水で漉き上げたる婦人を意氣な婦人と名づけます、趣味ある婦人の初步で有ります。

意氣と云ふと直に花明柳暗の巷を聯想されますが、之蓋し前述の諸點を具備した婦人が古來素人の婦人よりは此狹斜の婦人に多くあつたところから、意氣が彼等の專有物の如くになつたのだらうと存じます。意氣と云ふ言の本來の意義は決して藝妓島田に拔衣紋をさしたものではなく、すつきりと垢拔のした清々しい、云ふに云はれぬ心地よく氣前をさしたものだと思ひます、私はある雜誌で「蓑をぬげば黒羽二重の雪見かな」といふ古人の句を引いて意氣を說明されたのを覺えて居りますが、之誠によい解釋であらうと感服致して居ります、げにや蓑をぬげは黒羽二重の雪見かな、何等の高風、何等の餘裕でせう、此情味こそ今の奥樣方に

尤も缺けたる所のものかと存じます。

併し意氣な婦人には未だ深い所が御座いません、とかくに淺薄だと云ふそしりを受け易うございます、そこで此意氣の上に一種のうるほいが欲しいです、それは宗敎的の修養でも宜しい、哲學的の憤りでもよろしい、もしくば文學藝術の嗜でもよろしい、其等冥想的の潤色を得まするとこゝにはじめて奥行のある人柄がそなはるので御座いまして、唯單に意氣など云ふだけでは喜劇の主人公にはなれましても悲劇には出場することが出來ません、喜劇悲劇も演じ得てこそはじめて語るに足るべき婦人と言はるゝのであります。

しかしながら此思想的な所ろも半可通ではいけません、人生には宗敎が必要ださうなゝぞと月並な考へから宗敎をきいたり、又一も二もなく駄小説を耽讀したりする人も世間には御座いますが、これは解しがたい行爲です、何と申しても宗敎は自己内心の押へがたき要求を自覺して後入るべきの門で御座いまして、罪惡に對する恐怖も、無常の不安も起らない身でどうして眞の信仰が得られませうぞ、此宗敎心の發現がやがて人生の眞の根柢でございまして、これが又やがて趣味ある婦人の内面の要質であゝます、宗敎心と申しましても何も佛敎とか、キリスト敎でなければならぬと云ふ事は御座いません。人々の敎育の程度により、性格により、境遇によつて、主なるキリストの贖罪で安立される方も有ませうし、親鸞聖人の絶對他力の救濟に隨喜せらるゝ人も御座いませう。隻手の聲の公案に禪想をねるの女、宇宙の眞をたづねてカント、ヘーゲルの跡を仰ぐ女、詩聖がのこせし一句に人生を高く見る女、一筆の丹靑よく萬有の美化せらるゝにあこがるゝ女、これ等何れも一括して宗敎的と名づけたので御座います、斯樣に内に敎法の眞趣を保ちて外に意氣を持する所の婦人を、趣味ある婦人とは云ふのでございます、嚴として威風おかすべからざる婦人、氣品ゆかしき婦人、高逸の香を帶びたる幽寂なる婦人、溢き趣きさびたる味、いづれか此内面、外形、兩樣に整ふたる婦人の趣味ならざる、したはしくもまたなつかしきは趣味ある婦人でございます。されども皆樣、之を貴女方に求めるのはちつと無理かも知れません、思へば今が花の時代で御出なさるものを、花に味なしたゞ色と香あれば足る、みじかくとも春は春まあ〳〵華やかに御暮し遊ばせ、長々しき此くりことは葉櫻の行末を今にしての老婆心で御座います、御退屈樣。（特別寄書の内）

# 世間的智識の應用

ミセス、アキスリング

駿河臺鈴木町に實素な和洋折衷の建物があります。こゝにアキスリング夫人を訪うて日本婦人に就ての御感想を伺ひました。夫人は良人の事業を助けて仙臺、盛岡等に五六年居られ、先年歸國後再び本邦に來られて、今は神田三崎町のバプテスト中央會館に働いて居られる方です。

## △美徳の中に包まるゝ嫉妬心

日本で交際する御婦人達には、貴族、政治家、軍人の夫人、或は女工、婦人店員、學生、教師、看護婦等色々の人がありますが、誰方に接しても心地よく感じます、優しく行儀正しく親切で、忍耐、温順、寛容などの徳に就てどれ程多くの教訓を受けたか知れません併し一つ著しい缺點かと思はれるのは嫉妬心でございます。優しく柔順ではありますが、此の嫉妬の感情が心の中に蟠つて居る樣なことを往々見受けます。或る事を一方の人には出來得て他方の人には出來得ないと云ふ樣は場合に起るのですが、之れは確かに精神の缺點でございませう。自分の持たないものを他人が持つたからと云つて、其の幸運を惡まなくても宜さうなものでございます。

## △意外な言葉

又日本の婦人方は、女子はたゞ男子の内助者で附屬物であるといふ樣な傳來の思想に制せられて、それ以外に於ては何事に就ても餘程決心がにぶい樣に存じます。例へば英語、裁縫、料理などに就て會を開きましても、二三度位出席されるのが精々で、注意は直ぐ何處かに散つた仕舞つて、つひお流れになつて仕舞ひます。それも極く些細の理由からだから不思議です。申す迄もなく女子は男子の内助者でなければなりません併しそれと共に女子の生涯にも亦女子自身の一定の目的がなければならぬと思ひます。「一國民はその國の婦人より高きに登ること能はず」といふ格言があります此等の言葉をよく味ひ、私共の目的を定め、それに

向つて傍目をふらず進まねばなりません。「日本及日本人」の記者は、「日本の婦人は何も之れと注意すべきことをして居ないから、注意する價値はない」とか申しましたが、實に意外な言葉でございます。日本を大國として立つに至らしめた國民の母たる婦人に對して決して正當な説と申すことは出來ません。

### △私共の目的

即ち、妻たり、母たり、家婦たる外に尚ほ或る目的があつて欲しいのですが、されぱと言つて、婦人も何か職業に就かねばならぬと申すのではありませぬ。女辯護士になるとか、婦人參政權の爲に運動するとかいふ事は勿論望みません。婦人が自ら生活費を造るべき場合には、職業を求めることも必要でせうし、又女學校や女子大學がある以上は、女教師の必要なことも申す迄もありませんが、而かも一般の婦人に就て申せば婦人に最も適當な天地は矢張り家庭でございます。そして此の家庭に於ける主婦として母としての仕事が大なる目的と一致して居て欲しいのであります。

### △智識を得る事と應用

家庭の事に就て申しますと、日本の家庭は萬事不規律の處が多く、爲めに時間を浪費する事が尠くないと思ひます。もつと時間を有用に使ふ法が有りさうだと思はれることが澤山あります。又おしなべて日本の婦人はどんな階級の人でも多く内に閉ぢ籠つて居て、交際の機會が非常に尠い樣に見受けます。主婦たり母たる者の智識精神を廣くし、高尚にする事は、子供を將來有用の國民に仕立て上げる爲に最も大切なことですから、婦人ももつと度々外出なさる樣にお勸めしますそして廣く世界の麗はしい物を見、自分よりも優れた人に接して、それより得た智識を家事に應用されるならば、結果は餘程宜しからうと思ひます。

### △全く異つた姉と妹

女子教育の價値に就て色々御説があるやうですが、

これは幾ら高くてもよろしいと思ひます。私の知人に二人の姉妹があつて、姉は普通教育丈を受け、妹は高等女學校より女子大學迄の教育を受けて、大抵同じ年頃に結婚しましたが、その家庭の相違は實に著しいものでございます。姉の方はする仕事に秩序がなく或る朝は五時に起きるかと思へば、次の朝は七時か八時まで寝て居ると云ふ風ですから仕事がいつも押し迫つて來て居ります。春衣が夏になつてやつと出來上り、冬が來ても暖い着物が出來て居ないから子供は何時も寒い目に逢はされて居ります家の内は不潔で、食事はキチンと時間に間に合はず、隨つて良人も仕事が十分出來ぬから、急の場合の貯蓄などは無論出來て居りませぬ。音樂、讀書、交際などは、好きではあるけれどもちつとも時間がありませぬ。所が妹の方は、學校生活の間に仕事に秩序をたてることを能く學んで置きましたから、極く短時間で仕事を濟せることが出來ます。料理も巧に迅速に調理して配膳し必要な著物は時候に應じて早く用意して置くから、小綺麗にして居て細かい所に手が届きます。從つて一寸とした音樂會を開いたり、讀書したりする時間も有り、折々は自ら筆を執つて雜誌に寄稿なども致します。そして多數の人々に色々物を敎へたりして社會に有用の働きをして居ります。と申しても男らしいとかキッツイとかいふ婦人ではなくて、その第



キスリング氏夫妻

一に注意するのはその良人、家庭、子女であります。

この樣に姉と全く違つた所のあるのはつまり學問に由つて得た、頭腦のお蔭と思ひます。

## △女生徒の日常

學校教育は此のやうに大切ですが、日本の女學生の授業時間はあまり多過ぎるかと思ひます。男子ならば一日七八時間の授業時間もいゝかもしれませぬが、女子の身體は夫れ程強くはないから、多くの休養の時間が要る上に、女子教育の完全な結果を見やうとするには、家庭に於て料理とか、室の整理とかいふ家事上の仕事の手傳させなければなりませぬ。即ち毎日學校で教はつた原則、方法を實際生活に應用する機會を與ふる事が大切です。之れが爲めに、一週間に二日位の休日があつても休みは多くはなからうと思ひます。そして土曜日は家庭の仕事の爲めに、日曜日は休養、或は高尚なる精神生活に入る修養の爲めに費すことに致したら如何でせう。

## △自ら恃み得る修養

尙ほ私共日本の若き婦人を愛し、眞にその進歩を圖らうと努めて居る者を惱まして居る問題があります。それは日本の婦人達も西洋の樣に段々と男子の間に立ち交つて會社や官衙に務められ、又遠く家庭を離れて此の大都會に入り、下宿屋や個人の家に住つて勉强して居られる方が多くありますが、此の婦人達の中に墮落したと云ふ悲しい事を能く耳にすることであります。これも多くは婦人の修養が缺けて居るからかと思ひます。女子が大多數の人の中に立ち乍ら純潔を保たうと致しますには、之れに應ずる丈けの堅固な品性の修養がなければなりませぬ。今迄引籠み勝ちに育てられ少しも交際しなかつたものが、急に廣い世間に出ると勢ひ誘惑に陷りますから、日本の現在の有樣では特に婦人は自ら恃む丈けの精神の修養を積まなければなりませぬ。斯樣に修養を積むならば、女子も子女の教育以外に價値ある者となります。かくてこそ安心して男子の中に立ち交て仕事をする樣にもなれますし忌はしい事も聞かなくなりまして、敬愛する日本國の道德がもつと美しく世界の人の眼に映ずることになりませう。

# 人生の春の評

千鶴子

光に榮に滿ちたる人生の春、名をきいて私の胸は高鳴りました。華やかな雜誌を手にして感じた儘を、元より批評等とおこがましい次第ですが皆樣には及びもつかぬ私の事故、當らぬのは勿論御承知の上で。

口繪の少女美しう御座いますのね、紅の煙、紅の唇小姬君のミラ子を思ひました、榊原樣のはそんなにもありませんけれど。

晴れなる日の轉り。達者なお筆に書き流された、むつかしいお說、眞意を十分に解する力の私に無いのを悲しみますが高い御理想をお慕ひ申上ます。

一生涯の記憶のページ。旦那樣を主に遊ばした普通のこと、何故か私には題の言葉の方が深く頭に殘りました。

與謝野樣の。いつもながら現代的なお論を伺つて胸がすつきり致しますのね、女性の方だけに私等に眞の同情ある痛切なお言葉が嬉しう御座います。

夢より醒めた女。青年の夢より醒めた若き女の痛切なる叫び、會ふ人每に强い印象を與へて少女のプラウィドを縱にした内藤樣も遂に現實の世に入らうとして此の闇へをせられるのでせう、夢見た者は何時かは醒める時が來ればなりますまい、花常の春ならぬを如何にしませう、とはいへ此心の閃き筆の走り、見はてぬ夢の美しさに醉つていらつしやる少女十八の春はまだまだ永う御座いますわ、御自愛遊ばしませ。



少女を飾る賀狀の數々。斷片ながら各々個性の表はれてゐるのが嬉しう御座います、興深く拜見致しました。

輝くおもて。許嫁の人を持つて樂しいと思ばれる方は幸福です、輝く理想の中に生くる君よ、永久に幸なれ。

春の曲。……長生殿のうちには……私も二度三度繰り返して恍惚なりました、始から終まで息づかずに讀まれる樣なお作、其中に時の不眞面目な惡口とは見えますけれど讀み行くうちに何となく美しい一篇の詩と化して自分も高調な眞曲に醉はされた心地、確に此卷の天位と頷かれました。

理想の夫に配せる歡び。これも樂しめる一人、太平の世を祝す。

現實に生きる人と……時子さんと云ふ人厭やですね、何だか讀み終へてさびしい心になりました。

若き夫人の心理解剖　野菊樣のはいつもしみじみと拜見致します、あさみどり樣――靑春時代を自由に過す人はやはり幸福でせうね、けれど短い春の命考へて見れば同じ事でつまりませ

ん。

みすゞ子様――我信濃の奥にもかゝる健氣な少女のありしよと儚ならぬ涙もこぼれました、みすゞ子様とやら其お心を枉げず撓ます、尊き君が希望に向つて御奮勵あらんことを祈ります。

初島田印象記。お上手には相違ないのですが私の俗眼に映つた初島田の印象が薄いやうに思はれて……

海邊の正月。どちらのお家がどうなのか一寸わかり惡いのが殘念です。

花のあつまり。無邪氣に描き出された花の集り、樂しい學校時代を追想して思はず微笑みました。春風満ちた園の中にいづれ劣らぬ花のとりどり、可愛いゝ三保様、優しい妙様、書く人も美しの人、私是が一等好き!!

奥様方の理想觀。隨分お口もお筆も達者な方と思ひます、唯ずうと讀んで見ましたばかり。

自覺せる職婦の心理。ほんとうでせうか? 御同情申上ます、神は何故美しい人にばかり榮も誇も與へられたのでせう。少女の春を蝶の如くに舞ひ狂ふて美貌に生きる令嬢もありますのに、然し君よ尚一歩を進めて文藝の道に生きられんことを望みます。

未來を樂む處女。可愛らしい方の様ですれ、今のつらさも數



年後のたのしさに如かないでせう。

處女時代の誇り。思ひあがり給へるみ心、後半が始には似ず眞面目におなりになつた様ですが此位自負心が強ければ貴女は常に幸でせう。

光榮ある私の體。藥師の君――若き人のうるはしき惱み、覺悟なされた時の御心の中思はれて寂しう御座います。

初産の妻――玉露様が眞實にお産遊ばしたんでせうか、平和にみちた初産の春、お目出度う存じます。

人生の詩の時代。動揺せる心燃ゆる血汐、戀を戀する少女の美しさは亦何にか例へませう、我もまた詩の時代に生きる一人ながら、此筆のしぶり、腦の不明紅の血は胸にもゆれど、ペンシル持つ手はわなゝけど思ふ思ひの半だも表はし得ぬ悲しさよ、けれど憧がれてのみ暮す内が花、君と相似た望を抱いで今は隱れて泣く我身……唯此君の理想のまことゝならんことを祈るのみ、けれどももしや私と同じ運命に優しい戀に泣かれるのではないかと思ふと悲しう御座います。

艶なる薫を漂はせて咲き亂れた百花の中に唯一本きつと立つた桂の若木、潮風様のは一寸皮肉つた様で刺戟のある好い文章だと思ひます。

全體に、名にはぢぬ麗はしい一册でしたのれ。皆様妄評おゆるし下さいませ。

# わらびの意匠


丸花わらび
三つ立わらび
だきわらび
菊わらび
五つわらび
ゑだわらび
わらびさくら
わらびもつかう
つるわらび
三つもりわらび
わらびきり
たばねわらび丸
わらびともへ
わらびてふ
三つわらび



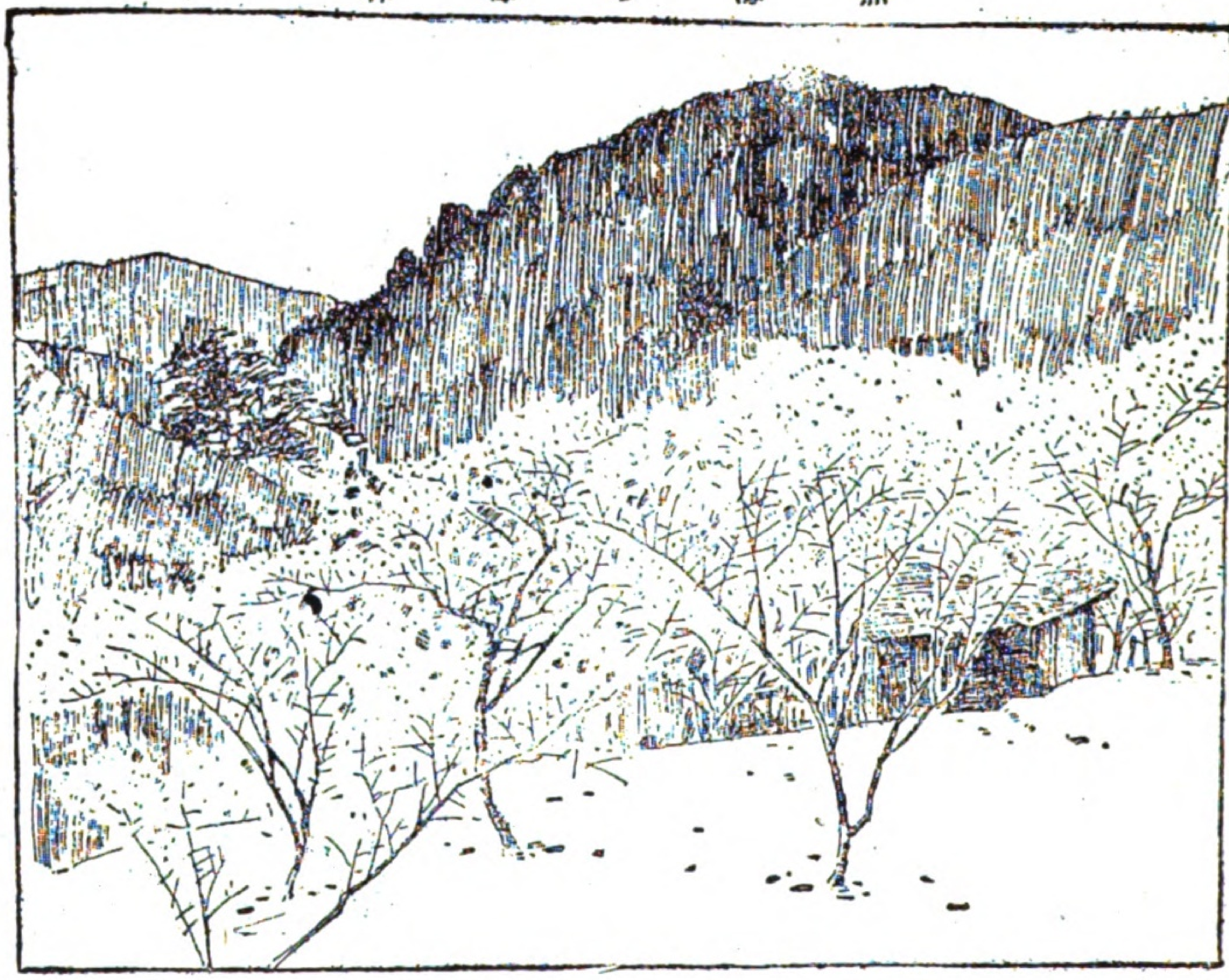
# 私の精神生活

梅香女史

一寸の蟲にも五分の魂とやら、とても他樣に比較はされますまいが、然し私にも亦私相當の望みが無いでもございません、元より他樣に御覽に入れるやうな事柄でもございませんけれど、思ふ事いはぬは腹ふくるゝわざと、法師が申しゝ事もございますからお書初の代りに一寸書いて見やうと存じます。

私は八歲の年から今年まで十餘年の長い月日の間、日々學校で新しい智識を注込れは致しましたが、元來偏屈に生れ付いた上に、極めて昔風な家庭に育つたものですから、とんと舊からでございます、ですから他樣の樣に女子大學に行きたいの、外交官夫人になりたいの等申す樣な、ハイカラな考へは少しも御坐いません、一生涯を靜かに、敎育と風流三昧とに暮したいと存じます、尤も初めは高等師範に行きたいと存じましたが、家の都合や何かで、難かしさうで御ざいますから、檢定試驗を受けやうと存じます、唯今は一向其の準備中なので御ざいます、あの、何故私が獨身主義になつたかと御尋ねでございますか、ハイそれは私の思ふ樣な夫が得られないからでございます、何だか此樣な事を申しますと生意氣に聞えますが、それでも私の見ました男の方に一人だつて尊敬される方が無いのでございますもの、頭に油をぬつたのや、顏に水白粉つけたのや、香水をプン〳〵匂はせたり、ベラ〳〵と引摺りさうな衣服を着たの等が多くつて、見るから如何にも輕薄らしいのでございますもの、中には眞面目な方もありは致しますが、何うも物質で固まつた個人主義のやうに思はれます、左樣で御ざいますね、夫として仕へるなら、丁度今年の御題の樣な、極めて高潔な性格の方でなければ厭で御ざいます、實際人格の在る方だつたら、何れ程貧困な生活であつても、如何樣な御身分で在つても、其樣な事は一切かまひません、若し其樣な思ふ通りの方がありましたら、共に力を合せて、立派な仕事を致したいと存じます、けれどそれは今日の處ろ却々得られまいと存じます、ですから私は私の理想を必らず成し遂げたいと存じます、岩にすら矢の立つた例があるでは御坐いませんか、努め

熱海の梅林



たならば必らず成し遂られます、氣永く御覽下さいまし、立派に成功して御覽に入れます、あの誘惑?……其れは私の望む所で御ざいますよ、此れ迄にも度々出會しましたが、結局それが精神を錬るのに好い師友と成りました、私は何の樣な危險な場合に會ても決して向ふに敗るやうな事は致しません、必ず對手に打勝つて、此方で却てそれを利用してやります、御覽なさいまし、今世界中で騒いでゐる六〇六號の梅毒藥なんぞは、砒素で造へてあるのだと申すぢやあ御ざいませんか、砒素の樣な毒藥ですら用法が良ければ、彼の樣な大した効能のある良藥になるので御ざいますもの、唯此方の心一つで御ざいますよ、刀劍だッてもさうで御ざいませう、燒ては打ち、燒ては打ちして、漸く出來上れば亦々砥石に掛けて、而して始めて名刀と言はれるやうになるので御ざいませう、御歌にも御ざいますわ、

　磨かすは鏡も玉も何かせん人のこゝろもかくこそありけれ

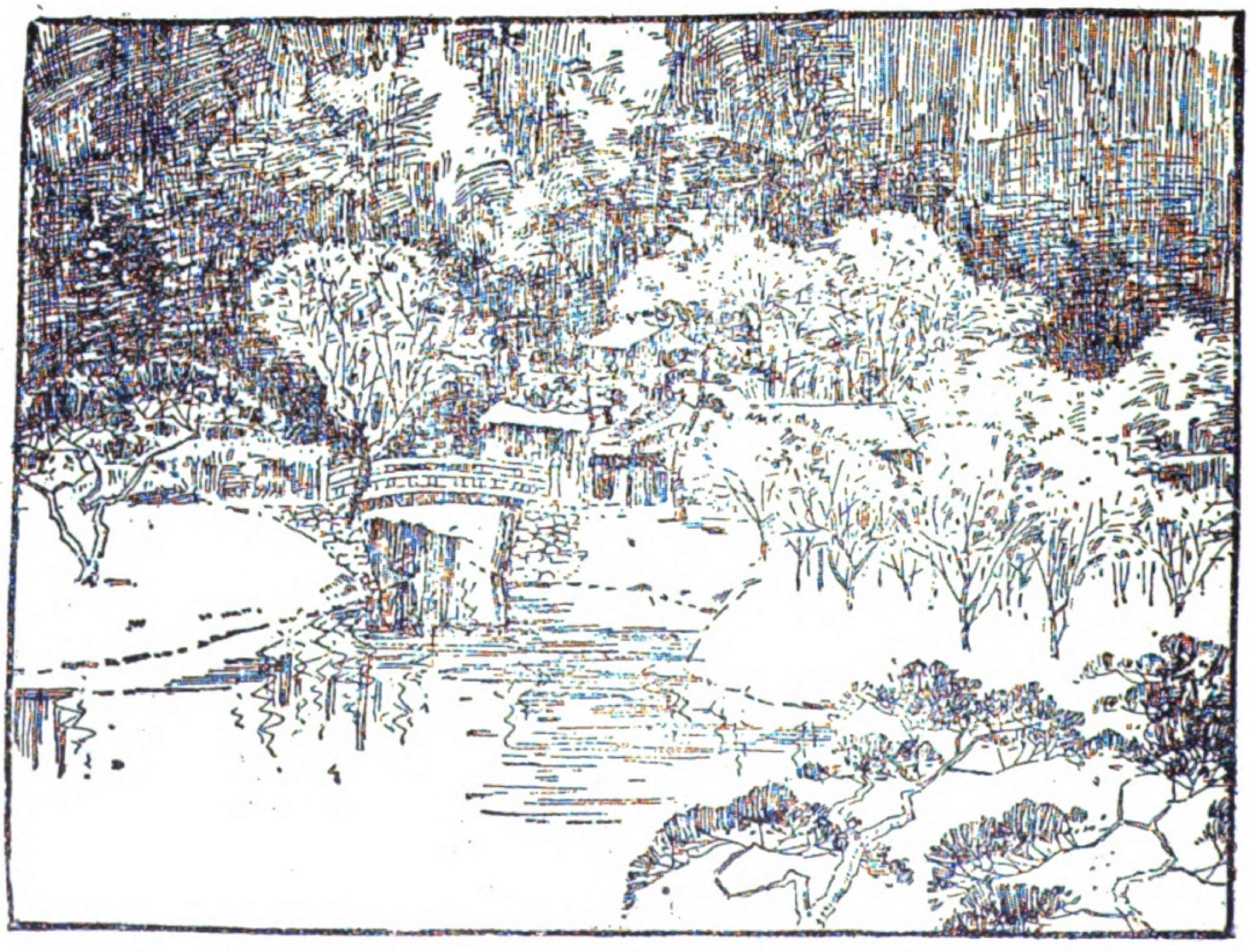
マア私とした事が、大變な御講釋になつてしまひましたね御免遊ばせ。

## △理想の學校

それでまづ學校へ勤める傍ら私塾を開て年月がたつと共にそれを次第に大きく致したいと存じます、猶都合よくば男生をも育てたいと存じますが、其れにはやはり確かな夫が無ければ困難でございますは、そして塾が盛んに成つて來たら、生徒を敎へるには唯言ひ聞かすばかりではなく、自分から先づ行つて見せて、そして導びくやうにしたいと存じます、塾には家庭風に軍隊の樣な正しい紀律を保つて、温かく、柔かな中に嚴かな犯し難い、丁度春と秋とが合併したやうな一種の風習をつくりたいので御ざいます、で場所はなるべく田舎の空氣の清潔な所で、菜園などを作りたいと存じます、畑には野菜は元より、花卉や果樹をうゑて、傍ら養鷄養蠶なども致したいと存じます、まだ〳〵此ればかりちやあ御ざいませんよ、暇々には雅樂を修めて置く考へで御ざいます、それから樂しいぢや御ざいませんが今時分には庭つゞきにずらつと野原一面眞白にお化粧した朝、皆なで爐を圍んで、日頃のお手前でね。

夏には夕立に沐浴した軒端の山から、涼しい光りを放つて、月が昇る夕、池の汀に床几を置いて皆なで歌や詩の詠競を致します、亦春は櫻花の雲の下で、箏に横笛を合せ、秋は千草の錦を茵にして、笙に琵琶をかなでます、同じ遊びでも茶の湯や生花、詩歌や管絃などの樣に、高雅なのを致して居りますと、聖賢の敎へにも劣らない修養が、識らず知らずの間に出來るもので御ざいます、精神が健全であれば、身體の方は自づと强壯になります、健全な精神は健康な體に宿ると申しますが其れは誤つて居ります、健全なる精神は健康なる身體をつくると申さなければなりません、肉體と申すものは精神一つで何々にでも左右されるもので御ざいます、其れには澤山の例が御ざいます、さりとて體育を打ち捨て置く事も出來ませんから、矢場と道場

とを作へて、弓術、柔道、長刀などを致します、春と秋とには競技會を開いて、塾生の父兄は元より、緣故の有る方々を御招待して盛に致します、で塾の經濟で御ざいますか、それは一般塾生から相當の塾費を納めさせますし、畑の方からも果物野菜、花などの收入も上ります、亦養鷄や養蠶を致しますれば、其の方も御ざいますから、十分だと存じます、學資のない篤學の子弟には、塾の雜用をさせて、望み通りに學校に通はせるなり、一の技藝を修めさせるなりして、養つてやります、主義は勿論二十三年に御下しになりました、敎育の御勅語の御主旨に基づくので御ざいます、而して女らしい女、男ならば男らしい男を作るので御ざいます、唯今の一般の學生等のやうに、女の樣な男や、男の樣な女は私は大嫌で御ざいます、塾では主として修身を敎へます、傍ら各自の學校の豫習、復習を監督致します、それで敎へるには儒敎はもとより、佛敎でも、基督敎でも、良い所はドシ／＼取つて用ゐます、決して或る一方に片寄ることは致しません、信仰だつ



讃岐栗林公園

でも其人々の考へに任せます、然し我國民であるからには、神社に對しては必ず敬意を致させたいと存じます。

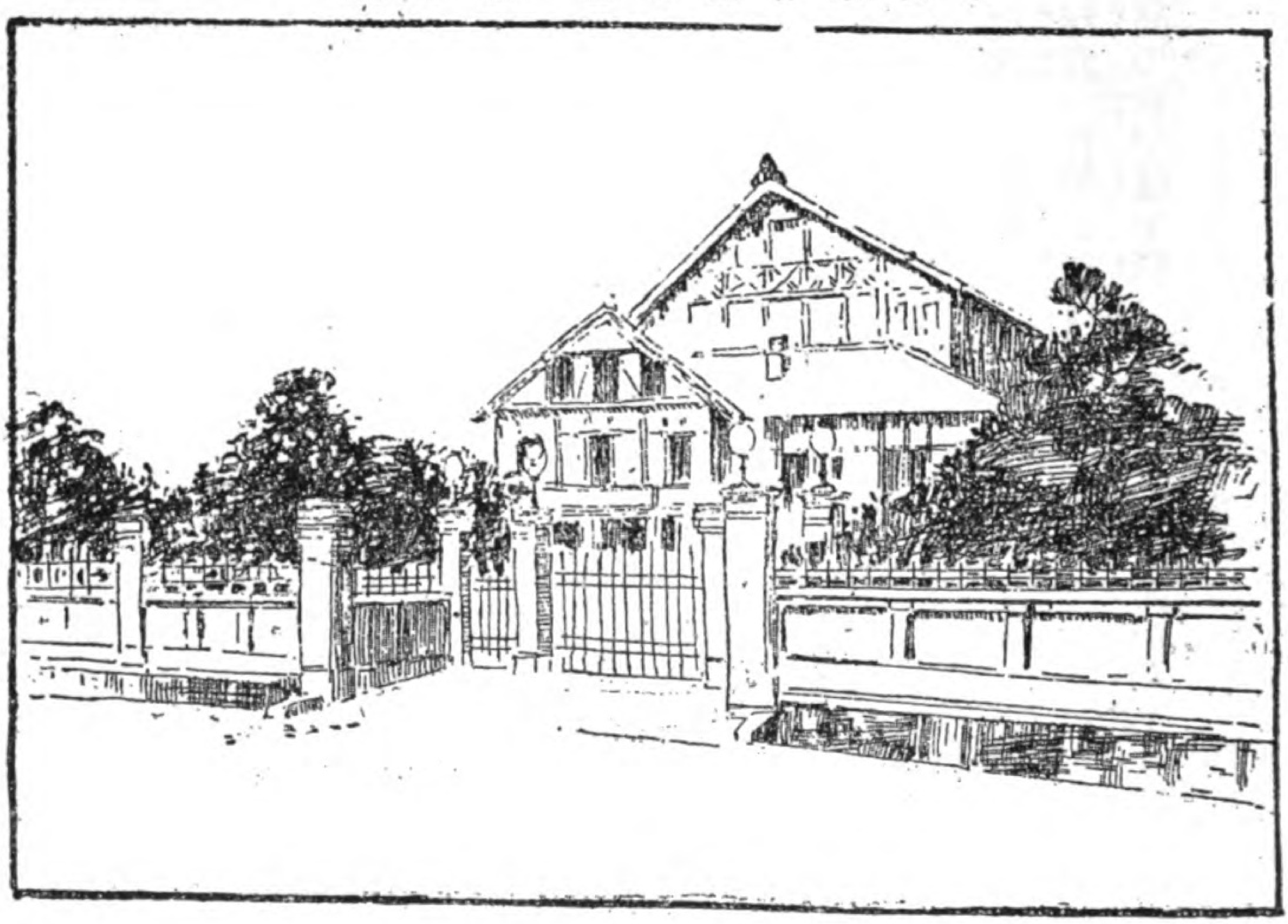
それから容姿で御ざいますが、勿論一切木綿物ばかりで、絹物はおろか、絹絲の入つた物は用ゐさせません、袂は付けさせます、袂がなければ女らしく無くなりますから、髪飾もなるべくさせません、其の方が眞の髪の美しさが見られますから、御覽の通り私はこんなに鴨脚返に結つて居りますが、根掛と櫛との他は少しも飾氣なしで御ざいます、高髷に結つた時もさうで御ざいます、束髪だつてリボンなんか決して用ゐさせませぬ、人工の裝飾ほどつまらないものは御ざいませんもの、尤も皆が皆さうだとは申しませんが、何故束髪に結はないつてゞすか、私は日本髷の方が好きで御ざいます、いかにも女らしくつて宜う御ざいますわ、其れは束髪の方が造作は御ざいませんが、裝飾であるからには其身に合ふた優しい方が宜いと存じます。

で長い年月の間には、一人や二人は是れはと見込の在る塾生も出ませうから、其樣なのを確かり教へ込んで置いて、年老つてからは其者に塾を讓ります、尤も實子が有つてそれが志を續いでくれる樣だつたら其れに越したことは御ざいません。

### △老後のたのしみ

老後はと仰いますか、それはどこか寂かな所に引込んで、あの關の小萬茶屋や美濃の養老の柔心庵のやうなのを作らへて、風月を友に、悠々餘生を送りたいと存じます、小萬と申せば感心な女で御ざいますはね、一度心を許した上は、同棲せない内に死に別れしたので御ざいますが、立派に貞操を守つて終りました、こんなのは今は藥にしたくも御ざいませんね、私小萬の意氣地が大好きで御ざいます、近頃は御覽遊ばせ、まだ十五や十七の子供で居ながら、二人も三人も情夫を持つてるなんて、それが立派な教育を受けて居る學生の中にあるなどゝは眞實に歎かはしいぢや御ざいませんか、淺間しいにも程が御ざいますは、場處で御ざい

帝國議會議事堂（衆議院）



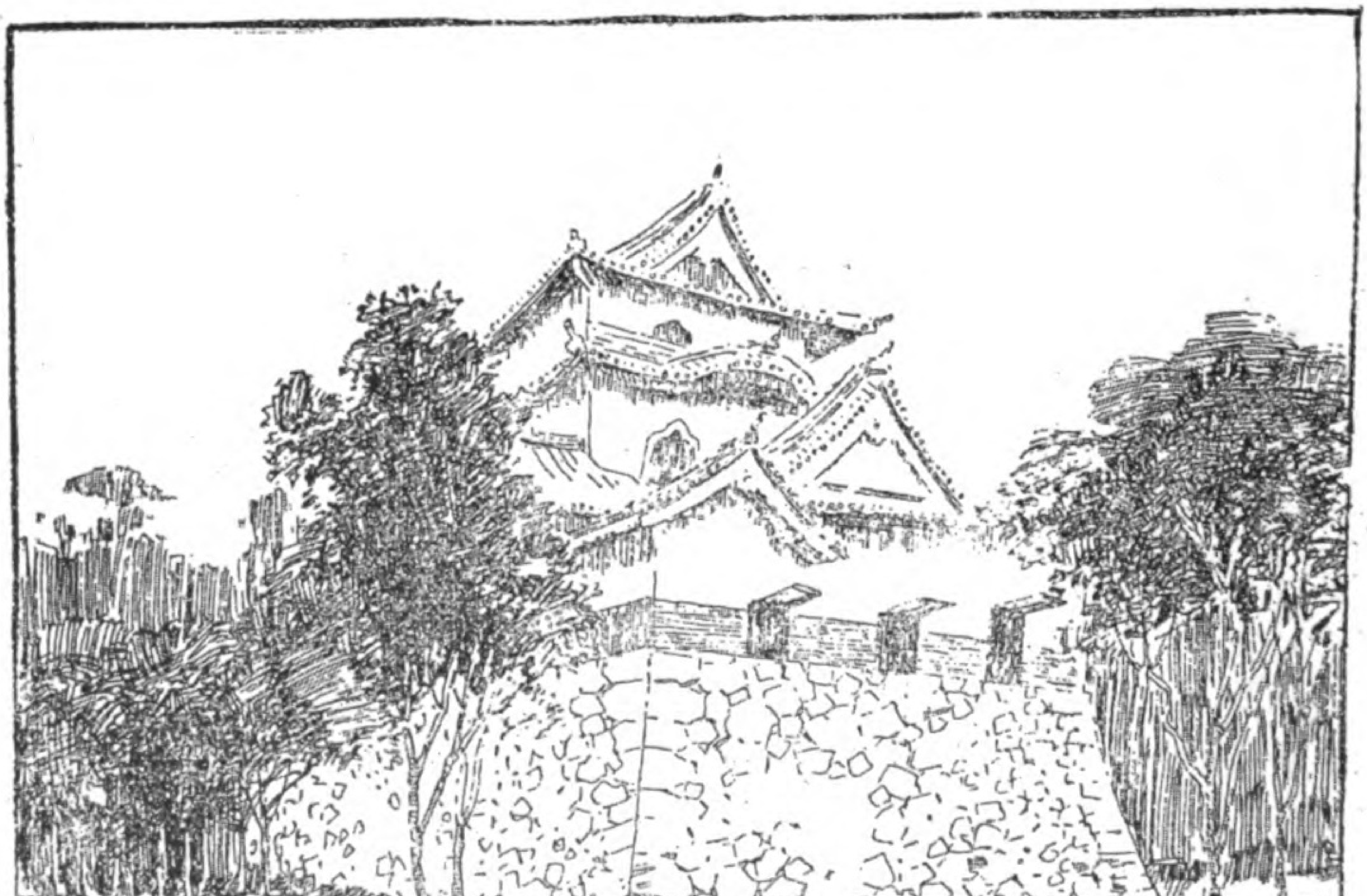
ますか、さうですね嵯峨と存じましたが、餘り俗で御ざいます。で先づ大原か宇治で御ざいますね、宇治の浮舟園、彼處は今は何うで御ざいますか私のまゐりました時は席貸のやうな風になつて居りましたよ、奈良も好う御ざいますね、それに大津も好きで御ざいます彼の琵琶湖を前にして、江州の山々を望んだ所は、ほんとうに好う御ざいますは、私三井寺山に登つて、辛崎から堅田、小松、ずうと遠く明神崎の方から、沖の島や竹生島なんかを見ると、氣が清々致します、近江富士も美しくて好う御ざいますね、あゝさう此頃は比良山が美麗で御ざいませうね、淡緑に澄わたつた空に、銀象嵌をしたやうに、くつきりと浮き出た姿は、全く言いやうのない好い景色で御ざいますね、八景中でも彼れが一等好う御ざいますは、それから三井寺山よりもう一層いゝのは四明ケ嶽でございますね、京都全市は勿論、鳥羽、羽束師、深草、伏見から山崎、八幡の方へかけて宛然で箱庭のやうでございますね、可愛い男山の此方には細い淀川が流れてゐてね、それか

ら前方には大阪の市街の煤煙ののぼつてるのや茅渟の海の浪がキラ〳〵日光に輝いてるのや、夢のやうに淡い淡路島、和泉大和あたりの山々など、繪だつてあゝは出來ませんで御ざいませう、東の方は近江一圓が盆景でございますのね、ぐるりと廻つた山々の中に、湖水があつて、その湖水の中には置石のやうな島、鴎のやうな白帆が浮て居ります、湖のまはりには泥で畫たやうな河が流れて居りますなど、ほんとうに理想的の景色ですわ、私一寸でも宜いから住んで見たいと存じますわ、其れでは比叡山の尼僧になれつて仰しやるの、あの方丈記の日野の外山や、平家の寂光院などの事を考へると、いつそ世間の煩さい絆を絕つて其樣な世渡りをしやうかなど、とんだ謀叛氣が出るのでございますよ、一寸庵の有樣を申上げませうか、先づ枝折戸を入ると雅味のある庭がございます、其の庭を通つて行當つた所が待合風の廣い土間でございます、其の土間の右が爐を切つた茶室で、土間から上るやうに成つて居ります、茶室の奥は八疊の座敷で、南に面してをりますが、生垣越しに眺望を縱にすることが出來ます、此の座敷の奥が四疊半の書齋で、座敷の北の方は壁を隔てゝ三疊の臺所がございます、厠は書齋の北になつて居ります、水は山から筧で引いて一切の用に便じます。遣水なども勿論それに寄ります、庭は小山を築き、池を掘つて種々の草木が面白く置かれた石を交へて植てございます、其の間には亦四阿が處々にございます、こゝで一寸四季の眺めを申しますれば、梅や櫻が雲が欺く下には、紫雲、櫻草、蕨、茅花などが芝生交りにとり〳〵に笑つたり、握拳を出したりして居ります、軒端には藤の花が房々と垂れ下つて、池の汀には燕子花がしをらしい姿を水鏡に寫して居ります蓮の葉に螢が光れば、遣水の邊に水鷄の聲が致します、萩や女郎花などが咲けば、蟲が鳴き出します、柿や栗を取りつくした頃には、楓や草葺の屋根に這ひ上つた蔦が紅葉致します、垣根に咲き殘つた白菊も移ひ橘の果がおく霜に匂ふやうになれば、山茶花や水仙が咲き初めます、此の樣な景色を我ものにして、琵琶

を彈じ、茶を立て、歌を詠み、花を插して長閑に暮らして居るのでございます、樂しいでは御ざいませんか
それで賣店の方は何うかと申しますと女の子を二人ばかり使つて、門前には茶と書いた旗を立てまして。

何方樣にても御隨意に御休息被遊たく候、湯は釜に沸りをり候へば、御遠慮はなか〳〵に水と相成り申べく候、お茶代を給はるとならば、御辭退は仕らず候、何程なりとも柱の竹筒にお入れ被下度候、風流の御嗜好おはしまし候御方樣は、料紙の用意も御座候まゝ、必ず一筆御遺し被下たく候御望みに依りては庵主事何時にても御相手仕るべく候。

と申すやうな口上を面白く書いて張り出して置きます何せ主意が營利的ぢやあないのでございますから、座敷が借りたいとお望みの方には、隨意に御貸せ申すし庭で遊びたいと思ふ人には庭をも借します、其中に話せる樣な人でもあれば、引止めて共に風流を談りたいので御ざいます、煩らはし俗世間の事は全然うち拋つ

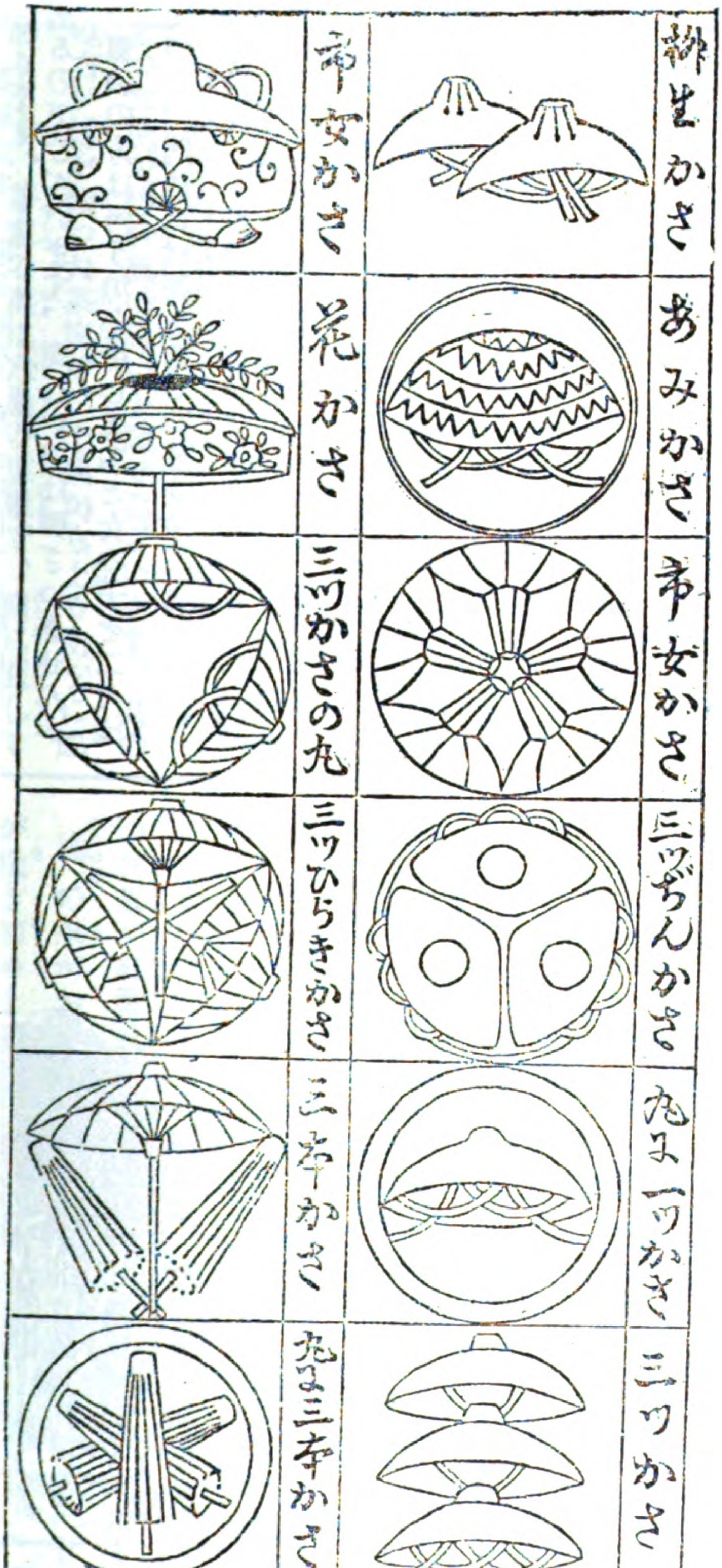


封建の面影（八）熊本城

て終てね、だが決して無爲に徒食するのではございません、養鷄や養蠶を致しますし、庵室に來らして下さる方や、御近所の方を折にふれ時につけて敎化（生意氣な申狀では御ざいますが）致したいのでございます、要するに一生涯を通じて人を感化敎育するに努む

る傍ら、風流三昧に過したいと存ずるので御座いますあら生存競爭に敗けたものゝまけ惜しみの言草だと仰るのですか、まあ何でも宜う御ざいますよ、御聞賃にお餅でも燒きませうかね。

笠の意匠



# 婦人諸病の自宅治療法

子宮病血の道の一般的の容體と云へば、凡て黴菌性の子宮病には痛みがある其痛みが急に始まり又急に劇しい時がある、黴菌性でない方は多くは慢性であつて何時始まつたとなしに次第に惡くなる、氣分や面色が惡く、ぶら／＼して居る婦人の多くは即ち此病人である何んにしても一般共通とも云ふべき病狀は白帶下、腰の痛み、下腹の痛みである、又下腹が張る樣な、筋張る樣な、引緊る樣な容體となれば、又足が引つれて痛むと云ふ人もある、之れ等の病狀は又月經と關係がない人もある、又多くの婦人が月經になる前に白帶下が增すもので月經時に痛みのある人は勿論のことである其他に頭痛、逆上、眩暈、肩の凝り、手足や腰等が冷える、消化が不良で胃が惡く、便通が惡るい、神經が過敏になり物事が氣にかゝり、過ぎ去つた事や取り越し苦勞をして喜怒哀樂の感情が動き易く何事にも疲勞し易く仕事が倦み易く、短氣となり氣不性で氣六ケしくなる、記憶が惡くなると云つた樣に種々の病狀が起つて來るのみならず、此樣な容體に苦しむ婦人には妊娠せない場合が多いので、子供はなし身體は諸所惡いのが何時治るのか知れないので、鬱々として樂まず不快な月日を送る樣になる、甚だしきに至りては可哀想に艶麗花の如き美人や花嫁をして此苦痛をなさしめ、小便は度々したくなる又其度每に痛みを覺え、而して陰門の周圍は白帶下の爲めに濕ほされ不潔にして臭氣あり、子宮內膜炎を起し終に腹膜炎を起して一命を失ふことがある萬一九死の中に一命を拾ふことが出來ても、芳顏の美人又見るカゲもなくしをれて快活の氣象はいつしか變じて憂鬱症となり子寶などは得ることが出來ず其身の不幸を泣き喞つ婦人は多數である、實に子宮病血の道ヒステリー病者程氣の毒なものはない、然るに世間には此の弱點に乘じ妻の病氣が治つた藥とか何處で發見したとか影も形もないことを云つて自己の粗藥を賣付けるものあるとのことだ、日々多數の患者が訴へて救を求めに來る賢明なる婦人諸君は此の樣な山師の甘言に迷はぬがよい、此婦人病の化學的の治療法に就てはハガキにて東京市京橋區弓町二二大日本化學研究所へ申込みあれば症候や病理や治療法や不姙の原因等を詳述せる療法書冊子を無代で進上します。

（その一）

中學世界 第十四巻 第四號 增刊

# 入學準備

（洋装菊判紙數二百四十頁 口繪……石版寫眞版豐富）

正價金二十錢 郵税貳錢

▼『入學準備』號は、學海に信用厚く、その事情と消息とに遍通せる『中學世界』の事業として、極めて、適切に忠實に編輯せらる。

▼『入學準備』號は、變化推移の劇しき學海の最近事實に基きて、勉强法、準備法、受驗法等の資料を滿載し、且つ諸學校志願者の諸心得を附すべし

▼『入學準備』號は、學に志さんとする一般青年諸子に對して、親切なる師友たるべく、又、老實なる顧問役たるべし。

▼『入學準備』號は、當年受驗界並び諸學校の形勢を大觀し、これに依つて戰鬪の準備をなすべく、最も便利なる調査材料と典據とを有せり。

▼『入學準備』號には、又中學程度の諸學科目に就き、それ〲有益なる專門諸教授の講話を戴すると同時に、又、興味を中心とせる學生日常生活のスケツチ文をも併せ收めらる。

▼『入學準備』號には、曩に中學世界にて募集したる、官立學校入學擬試驗（百圓懸賞）應募者の成績と、優等答案との發表あり、且つ、その採點に當りたる諸教授の講評をも收錄す。

（三月十五日發行）

（博文館發行）

幼年畫報第五巻第四號增刊

三月十五日發行

# 鳩八百羽

小波作　竹坡畫

石版極彩色十六頁
活版二色刷十六頁
光澤寫眞版一四頁

菊判美麗畫本

正價金拾錢　郵税五厘

鳩八百羽鳩八百羽、かんのん様のおどうの前に
ボツポボツポと鳩八百ポ、豆を食おとて鳩八百羽、百
羽百羽のまた鳩百羽、百羽百羽のまた鳩百羽、百羽百羽
と八へん叫べば、パツパパツパと鳩八百羽、ボツポボツポ
と豆食ふ八百羽、雉鳩三百羽、家鳩三百羽、土鳩は二百羽
みんな合して鳩八百羽。

東京本町　博文館發行



女(ろの三)

女（ろの四）

•尋常小學生の好讀物•

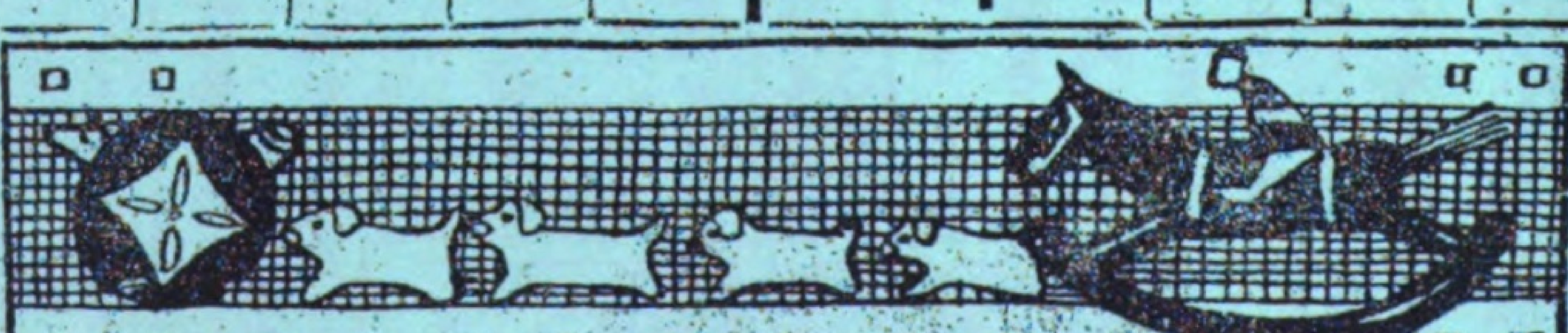
# 幼年世界

ヨウネンセカイ

◎毎月一回一日發行◎菊判紙數八十頁※口繪石版一枚光澤寫眞版二頁◎正價一册八錢◎郵稅一錢◎

第一巻第三號…三月一日發行


□笛と吹矢……巖谷小波
■競馬ゴッコ……
■うさぎうさぎ……
■麥さんの一生……
□オヒナサマ……木村小舟
■僕の雛子 笹井花明
■オヤコウコウ 管沼笑兒園
□奈須與一……武田櫻桃
■■■口繪
◎奈須與一……尾竹竹坡筆
◎雛祭
◎いろ／＼のあそび……アート寫眞版
□一郎の冒險……阪本岱南
■幼年理科 木村小舟
■やせたおかげ……さゝふね
□犬と猿……海賀變哲
■お伽算術……竹貫佳水
■今と昔……
■馬と牛……
□學校消息□智惠パーク□保護者會其他□懸賞あても寫眞□繪さがし等

東京本町 博文館

女(ろの五)

高安月郊　薄田泣菫　共著
蒲原有明　與謝野晶子
淺井忠　中澤弘光　畫

# 畿內見物

●●●京都の卷（新刊）
●●●大和の卷（新刊）
●●●大阪の卷（近刊）

鳥子紙極彩色金文字箱入頗美本

正價各金貳圓　特價各金壹圓　小包料各拾貳錢

淺井忠中澤弘光二家の靈筆に成れる**木版彩色畫**（三十一頁）**原色版**（二十四頁）コロタイプ版（三頁）**寫眞版**（六十一頁）版）及無數の繪畫（木版及寫眞版）を挿入し高安月郊蒲原有明薄田泣菫中澤弘光與謝野晶子五氏が畿內遊行の美文を蒐めて濃麗高雅目もあやなること眞に出版界絶無の美本也今や百花蕾を破らんとし人皆遊行を懷ふの時畿內の勝景を酷愛し兼て美術文藝に趣味深き諸君は勿論繪畫修學諸君の座右姑くも本書を缺くべからず希くは淸鑑を給へ

| 書名 | 著者 | 版 | 定價 | 送料 |
|---|---|---|---|---|
| 日本倫理彙編 | 井上哲次郎・蟹江義丸 | （十冊） | 金拾五圓 | 小包七十五錢 |
| 一日一信 三千里 | 河東碧梧桐 | （新刊） | 貳圓五拾錢 | 小包拾貳錢 |
| 春泥集 | 與謝野晶子 | （新刊） | 金壹圓 | 郵税六錢 |
| 浮艸集 | 二葉亭四迷 | （再版） | 壹圓貳拾錢 | 小包拾貳錢 |
| 子規短册 | 正岡子規 | （新刊） | 金壹圓 | 小包八錢 |
| 東京印象記 | 兒玉花外・中澤弘光 | （新刊） | 金七拾錢 | 郵税六錢 |
| 柳公權金剛經 | 敎厚發堀 | （新刊） | 金五圓 | 小包拾貳錢 |
| 天覽台覽 愚禿親鸞 | 須藤光暉 | （五版） | 壹圓五拾錢 | 小包拾貳錢 |
| 空海 | 須藤光暉 | （再版） | 金貳圓 | 小包拾貳錢 |
| 法然上人 | 須藤光暉 | （新刊） | 壹圓五拾錢 | 小包拾貳錢 |
| 天覽台覽 孔子之聖訓 | 二條基弘・東久世通禧 | （四版） | 金八拾錢 | 郵税六錢 |
| 基督教聖典 | 赤司繁太郎 | （新刊） | 金壹圓 | 小包八錢 |
| イエスキリスト | 佐野天聲 | （新刊） | 壹圓五拾錢 | 小包八錢 |
| 簡易聖書 | トルストイ | （再版） | 金六拾五錢 | 郵税六錢 |
| 法然と親鸞 | 木下尚江 | （新刊） | 金五拾錢 | 郵税六錢 |
| 雜誌藝文 | 京都大學內 京都文學會 | （一日） | 金貳拾錢 | 郵税一錢半 |

發兌元　麹町區平河町五丁目五（振替東京三八一七番）　**金尾文淵堂**

藏版書目往復
端書申込進呈

女（ろの八）

# 春一週間の獻立

みかづき

### △月曜日

(一)麥穗鱚、鞘豌豆の吸物　(二)魴の玉子蒸　(三)豆腐の油いため

(一)鱚を三枚に下ろし、骨を去り、鹽を成し、小骨をぬきて三十分間置き、魚の身の方へ縱に庖丁目を中分程入れ、又是を横より斜に身の中分だけに庖丁を入れ、煮立てる湯にくゞらす時は、形麥の穗に似て面白し。鞘豌豆は色を青くあげる爲ゆでる。十分程前に薄鹽をなし、ざつとゆで、いづれも椀いれにして鰹節出し汁を加減して注ぎ入れる。

(二)魴を三枚に下ろし、適宜に切り、味淋と醤油と當分にして切身を小半日程浸し置き、後深皿に取り別け、あとの汁に玉子を三人前に一つの割にて交ぜ、切身の上よりかけて、蒸籠を要する程でも無ければ御飯蒸しにて出す。

(三)豆腐を五六分の賽の目に切り、板の上に布を敷きて列べ、暫時板を斜になし置き、水切れたればフライ鍋を火にかけ、ラードをとかし、豆腐を並べ、裏表共燒きて、上に山椒味噌を十分厚くぬりつけ、蓋をして暫らくむらし置き、味噌共に熱く温まりたる頃庖丁にて皿にすくひ取りて出す。山椒味噌はよく擂り砂糖を入れる、木の芽にてもよろし。

### △火曜日

(一)牛肉飯、野菜葱　(二)淡雪玉子吸物　三つ葉　(三)三つ葉白胡麻ひたし。

(一)上肉を細かく切り、葱は小口切りに成し御飯の水加減を常よりやゝ多く成し、味淋五分醤油九分位の割に入れ、牛肉と葱を入れて仕かける。

(二)普通の鰹節出し汁を加減し、玉子の黄味と白味を別々に成し、黄味の方は煮立てる湯の中にて半熟に成し、白身を茶せん又は玉子廻しにて泡立て、三つ葉はざつと湯でゝ一寸位に切り、玉子の黄味と共に椀に入れ、白味を出し汁の中にて一寸煮立たせ、大きくふくれたる時直ちに椀に入れ、青海苔を火とり粉にしてふりかける。

(三)ざつとゆでたる三つ葉を揃へて切り、白胡麻を擂り、味淋と醤油を等分に合してかける。

### △水曜日

(一)吸物、結び細魚、波形獨活
(二)口取り蓮根引茶きんとん、細魚のうの花酢、牛蒡月寒
(三)鱠代り伊勢海老のサラダ
(四)壺、餅半ペン白玉白味噌かけ
(五)燒物、牡蠣のオムレツ

(一)細魚は料理して頭を去り、尾は其まゝにして脊より裂き、尾のきは迄半分に切り、玉章結びに成す。獨活は皮をむき、一寸程に切り、縱に庖丁を入れてぐるりとむき、横にして小口よ

り切り、出し汁の中にはなす。煮出し汁は例の通り。

(二)きんとんは蓮の皮をむき、亂切りにして水に離し、酢を少し入れて煮立てたる湯の中に入れ、ざつとゆで、笊に上げ、水を切り、あく引砂糖たつぷりと鹽少しにて煮る、別に甘藷を湯煮し、うらこしにかけ、砂糖、鹽、引茶を程よき加減に入れてねり、蓮根にまぜる。

卵の花鮨は、三枚に下ろして小骨を去りたる細魚に、鹽をふりて一時間置き、水にて洗ひ、笊にあげ、更に酢をかけて十五分間置き、今一度取り出して新らしき酢に暫時漬けたるを、豆腐のからを味淋と燒鹽にて煎りつけ、鮓の様に握りて漬ける。

牛蒡月寒は、太き牛蒡を三分程の輪切りに成し、甘く煮つけ、中央のすきたる穴にきんとんに用ひし芋を少々殘し置きてきれいにつめる。

(三)伊勢海老の尾と頭を去りて茹で、鬼皮を取り、堅に細かく裂き、チサの葉を洗ひ水氣を切り指にてよき程にちぎりて皿に列べ、其上に海老を置き、ドレツシングをかけそつと交ぜて置く。

ドレツシングは、玉子二個、食鹽小匙一杯胡椒同上、白砂糖小匙二杯、サラダ油大匙一杯上等の酢大匙三杯の割にて、煮ぬき玉子の黄味のみを鉢に入れ擂りつぶし、鹽、胡椒、砂糖を入れてよく練り、サラダ油を入れてのばし、酢にてゆるめる。

(四)餅半ぺんをつくるには、油の少なき魚をよしとす。今日は、細魚の頭と皮骨共取り去り、擂り身に成し、長芋を下ろし金にて下ろしたのを少し多くと、葛粉を水にてときたる物を少々直味淋及び鹽をも入れてよく擂り込み、幅六分丈け一寸程の長方形にとり、玉子燒に油をつけ、こげ目の付く程に燒き、煮立ちたる湯の中にてゆで、水を切り、白玉は例の如く小さくまるめて作り、いづれも温かき内に半ぺん二つ白玉三つの割にて器に入れ、上より暖かき味噌をかぶる程かける。味噌はよく擂りて砂糖を加へる事。

(五)新らしき牡蠣のむき身を布にて包み、堅く絞りて水氣を去り、小さく刻みて鉢に入れ、其上より玉子を割り、白味と黄味をよく交ぜ、胡椒と鹽を入れて味をつけ、猶メリケン粉のドロドロにときたるを一匙入れてよく交ぜ、三つ葉のゆでたのを切りて入れ、オムレツ鍋にバタとヘットを等分に入れ(バタのみではこげ易き故)溶けるを待ちて右の物を流し込み、弱火にて十分程燒き、二つ折りに編笠に成して兩面共燒き目を付け、食鹽をそへる。

## △木曜日

(一)牡蠣と燒肉　(二)梅あへ蓮根
(三)煮奴海苔かけ

(一)牛肉を薄く切り、フライ鍋にバタを十分に敷きて火をかけ、よく溶かし、肉を入れてかき交ぜ、燒けたらば引上げてさましおき、一方にて牡蠣のむき身を鍋に入れ、バタを小匙一杯だけ加へ、胡椒を少し入れてトロ火で十分程煮て身が縮み汁澤山に成りたる時火より下ろし　身だけ掬ひ上げ、別の器に取りおき、後の汁のみを鍋に入れて、刻んだ玉葱と前の牛肉を入れ、鹽と胡椒にて加減して弱火で廿分間煮て・メリ

ケン粉を少し入れ、ドロ〳〵に成りたる頃、赤葡萄酒少しと牡蠣を入れ、弱火にて五分間交ぜながら煮る。

(二)造り様は昨日のきんとんと同じ。只引茶の代りに、梅干の種を取りてよく擂り、色を美しくする為紅を少し入れるのみ。

(三)絹漉し豆腐を賽の目に切り、水を切り置き鰹節を小さくかき、味淋三分、醤油七分、鰹節澤山の割に、汁の分量は少なき加減にて煮立て、豆腐を入れて煮る。煮え上りかけたる處を下ろし、ふた物に入れ、浅草海苔を火どり粉にしてかけ、すり生姜を載せて出す。

先きにお菓子を造りし時殘りし白味を泡立て一合の牛乳を煮立て、白味を入れ、ふくれ上りたる時、玉子ばかり引上げて皿に取り、後の牛乳に砂糖を入れ、レモンなら二三滴落し、皿に取りたる泡雪玉子の上よりかけて、食後の菓子と成す。

△金曜日

(一)車海老のライスカレー　(二)ひやうてい玉子　(三)干鮎煮付け附合せかんぴやう。

(一)バタとヘットを等分にフライ鍋にとかし、メリケン粉大匙山に一杯をパラ〳〵と入れて狐色にこがし、生姜のしぼり汁少しとカレー粉茶匙一杯とを入れてよく混ぜ、牛乳にてゆるめ、深鍋に移して湯を加へ、車海老の皮をむき、小さく切りたるを入れて、よく煮えたらば鹽にて味をつけ、温かき御飯にかける。薬味はみそ漬と新たくあんを細かくあられに切り、別の小皿に入れて出す。

(二)中熟玉子の兩端を少し切り取り、中央より二つに切り、小丼に入れ、白あんをかけるあんは鰹節出しに甘味を加へ、鹽加減をして葛をときて入れる。

(三)鮎は花かつを澤山に敷きて味淋醤油にて煮つけ、干瓢は別に煮て付け合す。

△土曜日

(一)豚の支那料理　(二)井出の里　(三)蕗みそ

(一)豚の上肉を細かく切り、少しの水にて煮つめ、黒色に成りたる時赤みそ少しとバタを入れる。(分量は肉五十目にみそ五匁バタ大匙一杯)。又煮立ちたらば玉葱を刻んで入れ、酢又は酢を好まぬ時は西洋芥子を少々入れ、匙でよく交ぜ二三度煮立たせ、葱と肉を掬ひ上げ、殘りの汁にメリケン粉大匙一杯入れ、手早くかきまぜ、ドロ〳〵に成りたる時鹽と胡椒にて味をつけ、前の肉と葱を皿に付け、上より右の汁をかけ、温かき内に出す。

(二)糸こんにやくを味つけ、下ろしぎはに玉子をかける。

(三)蕗の薹を串にさして焼き、擂り鉢ですり、赤みそを加へ、砂糖を入れてよく擂るなり。

△日曜日

(一)鯒のフライ　(二)鯒のチリ　附合せ豆腐　(三)獨活の芥子和へ

(一)鯒の骨無き片身を切身に成し、十分間程薄鹽をふりおき、洗うて水氣を取り、メリケン粉をまぶし、暫時置きて玉子の溶きたる中に浸

し、パン粉をつけ、フライ鍋にヘツドとバタ或はラードを溶かして揚げる。

(二)骨付きの片身を五分程の厚さに切り、豆腐は大賽の目に切り、大皿に盛り、別に柚又は橙のしぼり汁と生醤油を等分に混ぜて小丼に入れ、ちりれんげを添へ、いづれも食卓の側迄出し置き、鍋に煮立ちたる湯を入れ、こんろに載せて持ち出し、先づ鯒を入れ、一ふきしたる時豆腐を入れて、豆腐の浮き上る處を椀につゆ共に入れて、柚醤油をよき程ちりれんげにて掬ひ入れて食す。

(三)獨活の皮をむき、亂切りにして水にはなち暫時置き、煮立ちたる湯の中に投じてさつと茹でゝ引上げ、湯を切り置き、別に鍋に煮出汁と、少しの味淋を入れ、煮立つを待ちて獨活を入れ下ろす前に醤油を入れ、一度煮立たせ、滋味をつけ、網杓子にて掬ひ上げ、別に生醤油と煮出しにて、あくぬき芥子をときて和へる。



# 切廻しの上手下手

胡蝶

## 外觀

望まれて、望んで來た當家、主は當時賣出し大學出の辯護士法曹界の花形、大公判でも有ると、新聞は主の辯論で華を咲かすといふ雄辯家。

月收は家業柄定りは無いが、三百圓から五百圓、家賃七十圓の大構へに、書生四人、下女三人、當世流行の魁といふ衣裝に舶來のボーア卷いて、金紋ゴム輪の自用車でお出ましといふマダム振りを御覧に成つたら、まあ春野樣の奥樣は御幸福と十人が十人口を揃へて羨むで有らうが扨内輪へ入れば切々苦勞は有もの。

## 小姑

良人の御出ましを送つて居間へ這入る、ガラス越しに朝日が一ぱい映して、水彩畫の「曙」が鮮麗だ。座敷の屋根から煙が立つて霜どけの筧を滴る音がする。事務所では高橋さんが來たと見えて、賑やかな話聲がする。

長襦袢の襟を昨日襟治でとつた、勅題のと掛け直さうと出した處へ、

「嫂樣御勉强ねえ。」と初音さんが這入て來た。

姑樣のお好みで襟も袖もリボン迄赤づくめ、美人とは申兼るが、毎朝二時間かゝつての極彩色でまあお美しいお孃樣と申上やう。

ベタリと火鉢の傍へ横坐り。

『ねえ嫂樣後生一生のお願ひが有のよ、叶へて頂戴なとあまへる。

之は初音さんのお定り文句、又初まつたと思つてゐると、

『昨日小川さんへ伺つたら流子さんと浪子さんにお目に懸つたのよ、そして來年の初會の召物の御相談が有てね、流子さんも浪子さんも明日三越へお誂へに成のですつて、ねえ嫂樣私あの園遊會の時のあれ着升の。』

「えゝあれがいゝぢやあ有りませんか、あなたによく似合てよ。夫に大層お若く見えますつて、皆が誉めて居ましたわ。」

「でもねえ皆様が御新調なさるのに私許り古物着ては私構わないけれど、兄様のお顔にかゝわるわねえ嫂様私も・・・・え、いけ無くつて？」

「左様ですねえ、だが私の一存にもいきませんから兄様お歸りに成つたら訊つて見ませう。」

「ぢやあ何卒、願つてよ」

用事は之だけと許りに立上る。「左様〳〵母様がお茶を入れるから被入いつて、」




「オヤ左様難有う御座い升が、之仕かけましたから又お晝から緩くり頂きに出ますつて仰つて頂戴な、」呼付てお二人でお説きなさるつもりだらう虚然行れない「あらさう」と銘仙の長い袂を振つてバタ〳〵出て行く。

松平さんの秋の園遊會にお正月のお取越しと云つて新調て、又初會の着物拵へて頂戴なんて、よく云へた事。何ぞと云ふと、私構ひませんが兄様のお顔にかゝわるつて、何も初音さんがいゝ着物着たつて、兄様のお顔がよく成る事は無い。又あれを聞て上なかつた

ら、母樣と二人と私におあたり成さるだらうと、困つたものだ。

　初音には帯も此間新調たのだから、此度彼の事件の報酬は半ば、お前に遣るから好きなもの拵へたら宜からうと仰つて明日は入金の筈だから二三日内に三越へ行ふと樂しみにして居たのに。左樣かと云つて年末もの入りの折柄二人のを云ふ譯にはゆかず、私だつて御年始に豈夫去年の儘では行かれ無い。

　眞實に之で小姑が無かつたら……。




### 買物

　今朝は大層冷たい。昨夜の手拭が氷つてゐる。オヤスリツパが見えない、又初音さんが私の引掛て行たのだらう、湯殿を素足で歩くと指先がちぎれさうだ。

マア霜が澤山下りて雪の樣に眞白だ。

午後から片山さんのお歳暮を見立るといふ口實で三越へ行く。

隨分急いだつもりだが、日が短かいので、家へ歸つたら、吉岡が玄關の掃除をして居て、松が湯殿からお風呂がお宜しう御座い升と出て來た。もう那麼時間かしら。

お土産のお菓子を持つて隱居所へ挨拶に行く。お暇にあかして姑樣がお拭込に成るつや〳〵した紫檀の小形の長火鉢に、本南部の鐵瓶がチン〳〵湯氣を立て居る。

友染モスの蒲團かけた炬燵の向ひ側に、蜜柑の皮を散らして雜誌を讀でゐた初音さん。

「お歸りなさいまし」と許りまだ雜誌を讀でゐる。いつも三越から歸ると直ぐ飛で來て、彼是ひらちやらするのに、今日に限つて澄し切つて、昨夜の餘憤がありありと見える。

姑樣は繼物をお片附に成つて、宜いのが有りましたかと仰るから「お孃さんのにと思つて友染に致しましたとお目に懸ける。

「之が餘り宜う御座いましたから。初さんあなたのに買つて來ましたよ。」と自分でも欲しい位な、白鹽瀬に姫百合の刺繍したオペラバックを出すと。

「マア〳〵いゝのだねえ、初さん鳥渡御覽。」と姑樣が仰る。初音さん喜ぶと思ひの外、ちよつと手に取て、

「マアいゝのねえ、之を持つて初會に行くといゝけれど、手提許り當世でも着物が一世紀前ぢやあ仕方が無いわ。」とポンと投り出す。

なんて惡らしい仕打だらう。

姑樣は「嫂さんの御新調を借りればいゝさねえ。」とうまく當つたらうと云はぬ許りに、私の顏をヂロリと御覽被成る。

あゝ厭だ〳〵那麼思ひして着物なんか拵へ度無い、此分では出來て來た時のお二人の樣子が思ひやられる一層斷つて仕舞ふかしら。

## 手形書替

パサリ〳〵と障子を鳴らした木枯は寒さうな庭の冬木はヒューヒュー吹しをる。良人は或事件の取調べに名古屋へ御旅行此間に少し仕立物を片附ませう。

初音さんの不斷着を縫乍ら、眺物の出來ばえを思ふ。

仕立上つたら嘸よく成るだらう、友絲の刺繡模様はしぶくつて面白い、羽織の色は素鼠だがちと粋過ぎたかしら。初音さんのもあゝ定まつたからまづ安心して着られる。等と考へて居ると、不意に吉岡が障子を啓けて「峰岸さんがお出で御座い升」と云ふ。「峰岸さん」と聞た許りでもう厭な感じがする。



「先生はお不在だと申ましたら、奥さんにお目に懸り度つて仰い升が」「左樣、ぢやあお目に懸り升からお通し申て」「應接所で御座い升か」「いゝえ奥座敷へ。」

どうせ一度は厭な思ひをする覺悟で有り乍ら一日でも遲かれと祈つた人、仕方が無い思ひきつて面會ふ。之は亡男樣が生前ある事業に失敗被成つた負債で、國の兄さんが相續人だから、當然返濟の義務は有り乍ら、今の御樣子では、返金の見込が無いので、自然當方で引受る事に成つてゐる。多い收入も、この方へ引かされて三年間注込だ金額も少なく無い、夫でもまだ八百圓殘つてゐる。

豫て云ひ附つた文句を胸の内で繰込し乍ら座敷へ行く。

雪と成るのかしら、灰色の雲が一層低く重なる。床の山茶花少し亂れて、桐胴の火鉢に櫻炭が燃える樣におこつて居る。

襖子の傍には何度も水を潜つた鐵無地の羽織に羅紗の前掛締めて、鰐皮の折鞄を膝に乘せた色艶の惡い横口の手代峰岸、何か考へてゐるらしく屈托顏は、大方利息の勘定でも仕てゐるのだらう。

自分が坐ると、險しく鋭い目をこちらへ轉して挨拶する。

何と云ひ出すかしらと、無言つて、やり場の無い目で、チツト指輪を見詰る。

外を通る煮豆屋の鈴の音が響く。

愛嬌の無い冷やかな口吻で、

「早速ですが、先頃の約手期限も切迫しましたが何卒此度は年末でもあり他に融金の都合も有升から一先御返金を願ひ度ひですが。」とそろ／＼折鞄を開けかける

心配してゐたものゝ、恁う面と向ふと、氣も強く成つて何度も諳誦した腹案をすら／＼と。

「此度は皆濟致すつもりで有りましたが押詰つて、國元に取込が出來まして主も只今其方へ參て居る次第、實は思はぬ出費で、就ましては、甚だ申兼升が、もう半期待て頂く樣にと、主が申置れましたが左樣願はれませうか。」

「ハア左様ですか、何分年末金融逼迫の折柄、困りましたなあ」と顔をしかめて腕組をする。

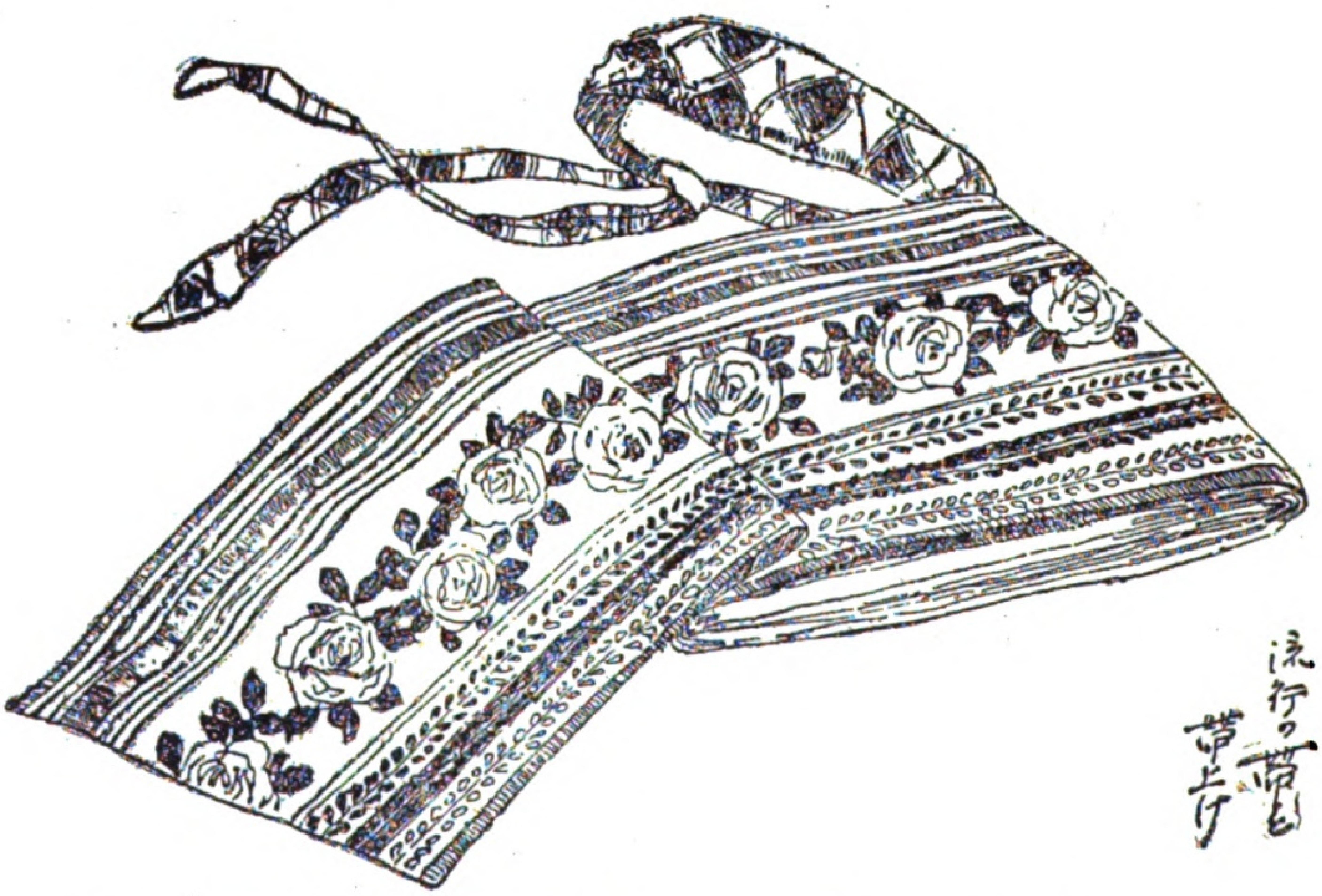
「ちや書替ませうが、どなたか裏印が願へませうかな。」と、いかにも同情の無い顔をする。

「ハア外の事と違ひまして、友人に裏印を願ふ事も出來ませんので……」

「夫なら宜しう御座い升、利息と書替手數料を頂き升」と、鞄から約束手形と、罫紙、算盤等を出してサッサと書き始める、應接所の時計が鳴る。

「夫では何卒之へ御印を。」

利息――十二月より翌年五月迄半期




書替手數料――

「之だけ頂き升。」

いかに商業とは云ひ乍ら、よくも恁う鐵面皮しく云へたものと感服する。

廿二三の勉强盛りを、恁うしてアイスの手代なんかに成つたのだらう。

恁な人に頭を下げる私も厭苦が、恁うまで冷酷に成つた人も、定めて厭苦思ひ出が有るのだらう。

歸る人を送つて玄關へ行く風はいよ／＼吹き荒んで、綿をちぎつた樣な雪さへ降り出した。

色の青褪めたインバネスの肩をすぼめた後姿は吹雪の中に消えてゆく。

# 良き後妻の苦心

知名の士の後妻となり、數人の子女を立派に育て上げ、賢母の譽れ高き某夫人の經驗談でございます。

◎

私は晩年になりまして、結婚をしなければならぬこととなりました時、終日終夜、考へ通し、おこがましき申條ながら、とても嫁くなら成るべく困難な所に嫁つて、自分に出來るだけの赤誠を捧げて見たいと覺悟しました。さうして緣あつて參つたのが當家で、繼子は十歳が末で五人ありました。其時私は心の中に、學校で百人も二百人もの生徒を敎育するのに比べれば五人ばかりの子供は、自分の理想通りに敎育の出來ぬ筈はないと思ひました。

ところが實際に當つて見ますと、一ツお腹から出た五人の子供は、皆性質が異つて、彼れの長所は是れの短所と云ふやうな譯で、例之ば此子は性質がやさしく、人との交際も親切で、宜いと思へば、兎角勉强が嫌ひで、お友達ばかり澤山出來る。それに反して一方は學問が好きで、勉强に世話が焼けないと思へば、一日机にばかり靠れて居て、お友達が薩張出來ない。さう云ふ氣風では他日社會に立つても好くあるまい、何うか良いお友達が出來るやうにしたいと思つても、なか〳〵此方の思ふやうには參りません。

◎

又同じその人の上を善かれと願つての叱言でも、眞實の親ならばモウ一息と思ふところで、それは却て宜くないと思ひながらも、止めて仕舞ひます。と云ふのは、お互に言ひ募ると云ふことは、親の力で譲つて仕舞うと云ふことよりも寧ろ害が大きいと思ふからです。それから又敎師として敎場に立ちましては、「あなた方はいつまでも御兩親の御世話にばかりなつて被居つては可けませぬ」と云ふやうなことを、憚りなく申しますが、悲いことには、繼母として此種の言語は、絕對に禁じなければならぬと云ふやうな遠慮があります。例之ば娘が結婚の支度をするにしても、我身分に比して是れではあまり仕過ぎる、自分の主義から言へば、衣服調度もほど〳〵にして、假令三十圓でも五十圓でも、金で持たせて遣りたい、さうするのが眞實の親切であると心にそれを繰り合しながらも、矢張り本人が滿足するやうにして仕舞ふ。又平日身邊の裝飾品などを購うにしましても、彼れも是れもと言はれて、少し虛榮に過ぎはしないかと思つても、思ひ切つて止め兼れると云ふやうなことが度々ありまして、斯う云ふ場合に出過ふ度に、私は子を持つ母は身體を大切にして長壽を保たなければならぬと、しみ〳〵思ひます。

◎

私が繼母として子供を育てる上に、最も困難を感じましたことは、新聞の三面に繼子虐待と云ふやうな記事の出ましたときと、それから矢張り同じ筋の小說の出ましたときです。書く人は、惡人に筆誅を加へるとか、勸善懲惡の意を寓するとか云ふ心に外ならぬのでせうが、出來るだけ務めて、子供に繼母である、繼子であると云ふ考へを起させぬやうにして、隔てのなくなると共に、親しい情の濃かにならうとす

る折柄、新聞や小説に、繼子虐待と云ふやうな題で、一も二もなく繼母の奸惡な所業が擧げてありますと、之を見た子供の心には必ず疑ひを起します。「家の阿母樣は大へんに親切らしくして呉れるが、矢張り繼母なんだから、内心は何うだか分らない」と云ふやうに疑惧の念を起すのは、實に無理のないことだと思ひます。それですから、私は新聞の記事や小説に斯う云ふことが出ると、「あゝ又こんなことが出たか困つた」と沁々身を切られるやうに厭に思ひまして何うか子供にそれを見せたくないと苦心をします。

◎

元より繼母の愛が生の母の愛と少しも變らないか何うか、それは私にも斷言することが出來ませぬ。此方ではいくら好くするつもりでも、物心の附いた子供の意中に、眞個の阿母樣の愛を知りたいと思ふことが、長い月日には必ずあるでせうと察します。併ながら多少教育を受けた婦人ならば、愛の方面からでなく、義理の上から、繼子は我子よりもモッと大切にしなければならぬものと云ふことは、知つて居る筈ですさうして義理の上から相互にいたはり、かしづいて居る中には、自ら其處に離るべからざる愛も生じて來るものです。かくして折角うるはしく往かうとする母子の仲に、水を注すやうな小説や新聞の記事は、家庭の爲にも、子供の爲にも、決して好結果は得られまいと思ひます。勿論有ゆる事實を無いと言つて戴きたいと云ふのではありませぬが、そこは筆を取る人の手心で、不幸な家庭に、社會から彌が上に惡刺戟を與へることのないやうに、御注意を願ひたいと云ふことは、私の日頃からの希望でございます。

◎

此繼母を一種の惡者のやうにしたのは、果して誰の罪でせうか。世間一般を見渡しましても繼母子の間は必ず子が善くて母が惡いとばかりは言はれないのです。然るに昔から母が惡者と定つて居ります。此舊くから傳つた思想は、容易に拭ひ去ることは出來ませんでせう。畢竟是れは弱者を憐み、強者を壓へると云ふ所から來て居るのであらうと思ひますが、紅皿缺皿のお伽噺や、其他いろ〱繼子苛めと云ふやうな昔噺が、子供の腦に先入主となつて居りますと若し其子が母を喪つた場合には、不幸の上に一層不幸を重ねなければなりませぬ。從て繼母の苦心もそれだけ多い譯であります。其外一寸とした語の「繼子にする」などゝ云ふことも、決して良感化を及ぼすべき語ではないのですから、斯う云ふ語も出來るなら根絶したいと思ひます。

私が嘗て米國に往つて居りました時に、友人と共に或家に泊りに參りました。所が其家の子息さんお孃さん達が、大層老母を大切にして居ります。後になつて此老母は子息や娘の繼母であつたことが分りました。其時に一緒に泊りに往つた友達が、「道理で大切に成さると思つた」と、申したのを聞いて、日本では多くの場合、仲の睦しからぬ親子を見ると、倣さぬ仲ではないかと聞くのに比べて、何と云ふ美しい風だらうと、獨心に感じたことがありました。彼方でも惡い婦人になりますと、思ひ切つて苛めるさうですが、良い家庭は皆前に御話したやうな美しい風があります。

## 投書（[illegible]の可否、眞僞は本誌これを保證せず）

# 賢こい女の側面

山縣きく子

◎女賢しうして何とやらの古い文句を楯にして、わるく頭を曲るわけではありませんけれどもねえ、世の中に賢夫人と崇められたまふ奥様方ほど娑婆氣の多い、愚にもつかないものは無いと思はれますよ。

◎立派な肩書のある夫人方の日常の御心がけ、家計の切り盛り、子女の養育、さては下婢の使用法まで勿體ないほど細々とお教示なさつて下さるには有難いを通り越して泣きたくなるほど身に沁みますわ、二十錢の銀貨一個で是れだけ立派な御經驗、筋道のついた御理論を買つて讀まれる現代の世もまた無暗と有がたく……けれどもねえ、説教僧侶の一人舞臺で光る頭をふり立てゝ口を機械の法談に隨喜の涙を流してゐる村の老爺老媼の罪の無さ加減を思ひ出されて、いやな氣にもなりますの……現實の生きた世界に少しでも意味のある生活法を爲やうといふ若い私共の希望から打算すれば型に箝まつた訓戒や、範圍の狹い、應用の利かぬ實驗は呪の聲とも聞かれませうから――

單純なお話でいゝんです、一般に通じた、人間の自然性、婦女の本來の性情に立脚地を置くお話であつてこそ眞實に強く私共の耳に響きますわ、皮を剥いだ正味のまゝ、虚飾を除つた生地のまゝで、私だつて普通の女ですと親切に打ち明けて普通の女に能る事を、了解易く教へていたゞければ聞く方でも感じますわ、卑しい女に有りがちのひがみも自然消えてしまつて、天國に遊ぶやうなのんびりした氣持にもなれやう、といふものです、境遇に左右され四圍の事情に動かされる弱い、危い支柱では、その支柱を懸命に頼つてゐる蔓草の私共は風の吹く日が怖ふござんすわ。

◎晶子さまの人生觀、お談義を伺ふ度に、その突つ込んだ諷刺と皮肉、キビ〳〵して氣もちがよござんすわ、世馴れた怜悧な婦人だけに殿方も及ばぬ鋭い所があつ

てね、けれども何だか自己單獨でいゝ氣になつて當りちらしてゐらつしやるやうな氣がして、お里が見えすくやうですわ、新しい時代には古いものを破壞して行くのも必要でせうけれども、威勢よくめちやくちやにこはして行くんなら私にだつて、否宅の下婢にだつて出來ますよ。若し口さがない輩あつて、晶子といふお轉婆は女詩人のひがみが嵩じて、血が逆上つたと云ひふらしたなら接角苦心してお敎になる御訓戒が浮ばれますまい、梅川忠兵衞の芝居を見て古いとすましてゐらつしやるのなら接角多年養ひ育てた愛兒の歌集を自己で焚いて、あゝいゝ氣持だと仰言るだけの勇氣がみせてもらひたいものですわ。

◎内藤さんは幸福よ、道樂と名譽とが一致するんですからつて、さる方が羨ましがつてゐらつしつた。道樂ならよムんす、けれどもね、智識が深く、理性が勝つて、だん〲荒んで來る現在の婦人の情的生活に、新らしい肥料をくれて美しく養ひ育てやうとなさるのなら、もつと實のある、底のあるのを…。

◎「常磐御前」は貞女だとか、烈婦だとか、立派な人々のお説が並べてある雜誌を見て私は何ともいへず情なくなりましたわ、源平時代に逆もどりして、しかも常磐その人に親しく接した事のなかつた人々ばかりで、獨斷的に意見を述べたつて何になりませう、大久保の殺人犯は明治の昭代に起つた事件です！常磐があの時代の代表的女性であるといふ、たしかな前提が見つかつたなら研究したつて徒勞ではありますまいけれどもねえ。

「萬一、自分があんな時に遭つたなら潔く死んで了う。」なぞと豪がつてゐらつしやる頭の古い何某刀自の御元氣は壯んですけれども、可哀さうに常磐は死ぬほど卑怯ではありませんでした、死んでしまつてもかまはないほど無益ぬ女ではなかつたのですわ、まだ死ぬるのには若すぎてゐましたのよ、私には貞女ですか烈婦ですか判斷はつきませんけれど、ある意味で常磐は、「賢い女」であつた事だけは想像が出來さうに思はれますのよ、御免あそばせ…。

# 春の海



霞立つやまべはほども遠けれど花の香さそふ春の夕風

（春海）


先生の御恩を忘れぬ記念
山茶花

あの先生がどうの、此先生が、かうのと、自分に都合の悪い事があると、先生にかづけて、陰口きいて、それで腹の蟲を、得心させて居たといふお轉婆の私等も、かうして卒業といふ境界線に、ぶつかりさうになると、すつかりおとなしく、涙もろくなつて了つて、謝恩の歌を、練習する時ですら、みんな泣き出すといふ有様。

たとひ雲井はるかに、立ち別れませうとも、すき洩る風の、身にしむ伏屋に、起き伏す身となりませうとも、どうしてお互に忘れませう。必ず雁の便りは、など謡ひ合ふのも、涙ながら……。ほんに長き年月朝に夕に、むつびかはした、私等二十餘名のはらから、西に東にちり／＼に、立ち別れて了つては、いつ又同じまどゐに、相逢ふ事が出來ませう。めでたき卒業とはいへあまりに悲しい別れの時ではありませんか。

私等はせめて後の思ひ出にもと、滋賀方面へ旅行する事となりました。

三月〇日

カラコロと、下駄の音も勇しく、ねむれる町の淋しさを破りながら、△△驛についたのは、丁度發車前。一同は、あはてゝとび乘つた。

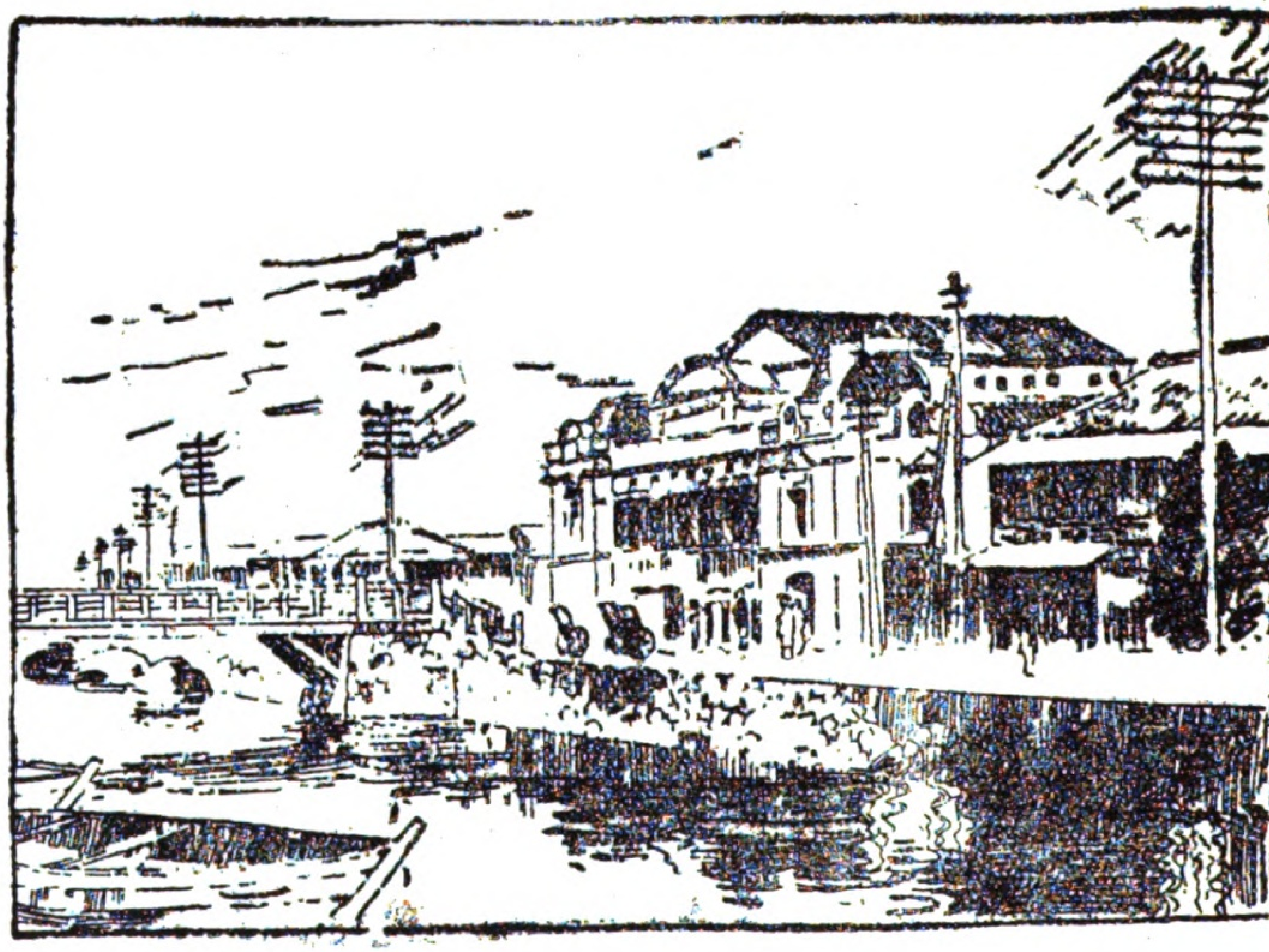
汽笛一聲――さやうならと、見送りの妹等――四年以下の寄宿生――の打ふるハンカチも、暗に消えて見えずなつた。やがて來ん日の悲しさ思ひ出されて、今更の様に名殘惜しくなる。

刻一刻、動一動、變りゆく車窓の風景の、應接にいとまなきを佗ちつゝ、おもしろき師の君の御話に、耳をかたむけて居る間に、車輪のひゞき轟々と走つて居た汽車は、いざと許り石山驛に三十の笑顔をふりおとした。

幽壯な比良の雲峰及び、琵琶湖上の眺に、先づ驚かされた一行は、粟津ヶ原を通つて、石山寺に至る。

本堂への石階五ッ六ッ上ッたつき當りに、「紫式部源氏の間」と記された簾子作りの、小窓がある。例の口悪屋の榎さん、村山さんの肩をたゝきながら、

「村山さん――ちやなかつた、明治の紫式部！！いつ



こゝにおこもり遊ばすの?!」なんかつてからかつてなさる。

「まあひどい」と可愛い目でにらめて、口元で笑つて。「私、あやかる樣に、おがんどきませう」となかなか引込んでらつしやらない。と私も私もと、五六人の紫式部崇拜家、けなげや、うやうやしく拜禮遊ばす。この二十年と過ぎたら、明治の紫式部が何人出來るか知れない。

此寺は聖武天皇の勅題所で、良辨僧正が勅を奉じて創建した所、承曆年中祝融の災にかゝつたので、源賴朝がこれを再興した。が天正の頃又荒廢したので、かの淀君安民治世の祈願の爲修理した。それが即ち今日に及んで居るのだとか。その名にたがはず、苔むす巖石がそこここに、ならべられてある。

月見堂のあたりから見渡すと、大空に浮き出た樣な雪まだ白き、比良山峰の美しさ。ふもとは霞立ちこめて見えず、瀨田の長橋目の前にかゝつて、限りも知られぬ湖面には、二ツ三ツ白帆の浮んで居るなど、誰れ

も誰れも只茫然として居る許り。

こゝでわりごなど開く。晝はがき求めて、湖南汽船會社の船にのり、琵琶湖上の人となる。

水の色遠く空に浮んで、比良山風も今はさのみ寒からず、蒼茫一色の中、遠帆豆の樣にして白く、そこはかとなく立ちこめた春の霞に竹生島もどの邊にあるのだか見えない。風なき大湖上の春のながめは、又一しほの趣がある。此の靜な湖面をゆる〳〵と、春の光を脊にうけて、比良の雲峰を見上げつゝ、瀨田の橋下をくゞるのどけさ。どうして〳〵書きつくす事は出來ぬ。

うつとりして居る間に、早や紺屋ヶ關につく。こゝで船をのりすてゝ三井寺へと急ぐ。

幾十の石階を上ると、先づ目に入るのは、矢張り湖上のながめ。

「どこから見ても、見あかぬ此の景色、出來る事なら我が住む里へ、持ち歸るものを」など云ひ出す人もある。

やがて左に折れて、小丘の頂に立つて居る十年の役に露と消えた勇士の記念碑に詣づ。

明治十一年中かしこくも我が　天皇陛下鳳輦をこゝに、枉げさせ給ひしより今は、御幸山と呼んで居るとか。

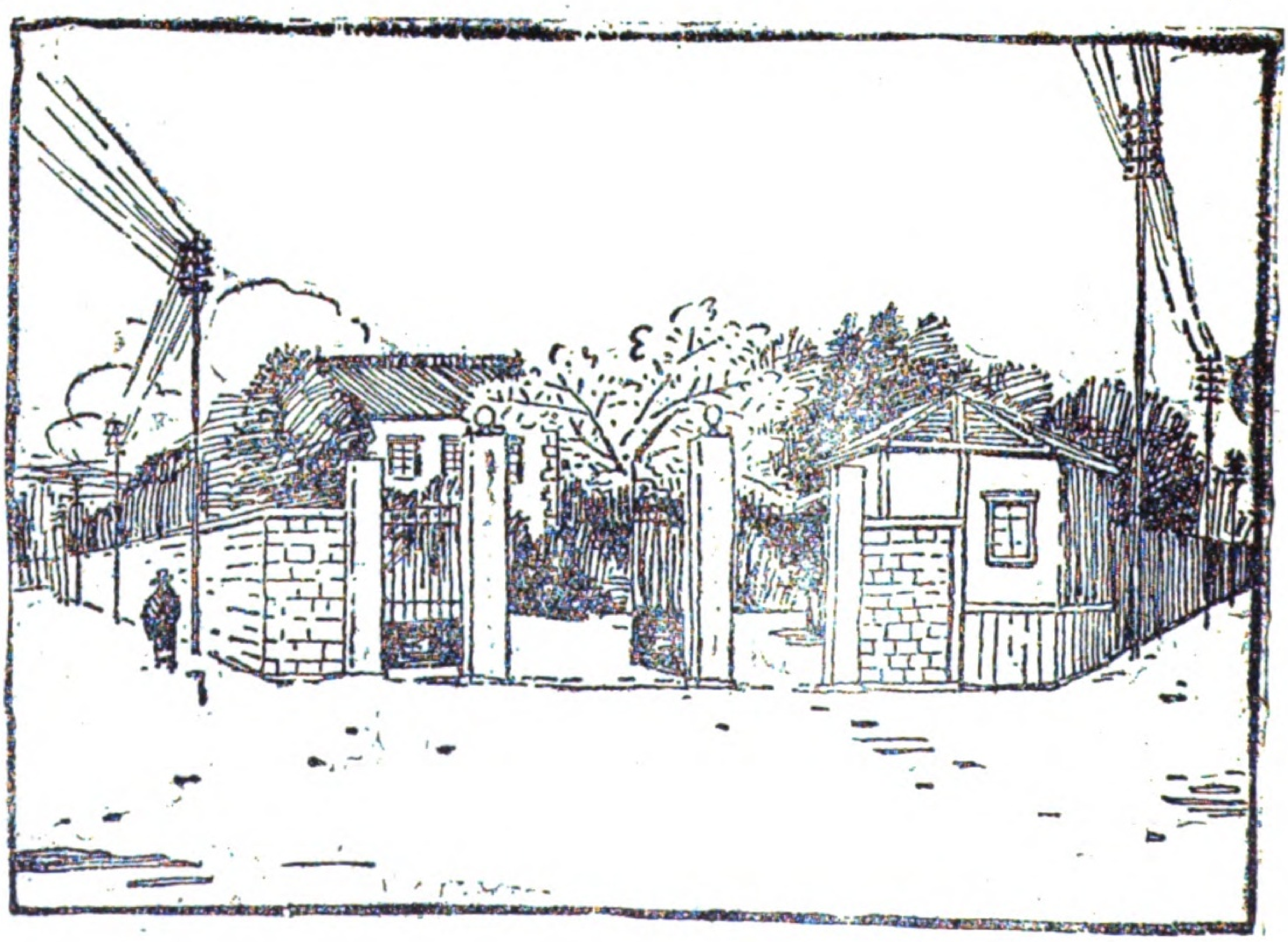
小暗き松(?)の並木の中を通つて、奥の院に至る。かたはらの釣鐘を納めてある祠に入ると、一人の番人が、ふしおもしろくいはれを說くをかしさ、隅の方で誰やらクス〳〵。

やがて終りになると、突然田宮先生「イナウ」と――番人曰く、此釣鐘を辨慶が谷間へ蹴落した時に釣鐘が三井寺へいなうと叫んだと、――まねられたので、今まで辛抱して居た笑が、どつと破裂して笑聲、釣鐘をもくつがへさん許り。

しばし行きて御井を拜す。むかし帝の御生湯に用ゐさせ給ひしものとて、古き書には皆御井と記されてあるが、いつしかうつついて、三井の字を用ふる樣になつたのださうな。

こゝを辭して三保崎を下り、總勢三組に分れて舟にのる。

私等はこれから、逢坂山下疏水道によつて、西の都に行かうとするのです。舟子が「ヤア」と叫ぶかけ聲を後に、第一舟忽暗中に消える。第二舟後を逐ふ。舟いよ〳〵暗に進むにつれて氣味の悪い事、おびたゞしい。第一のトンネルを出ると、ホツと一息つく。兩岸は、のどかな田舍路だ。しばらくにして又トンネルに入る。第一舟の唱歌の聲に、始めの恐しさも打ち忘れ、私等もコーラスを始める。さんざ唱つた末、お菓子など取り出して、頬張つてると、突然校長様の詩吟のお聲が。第一舟より聞えて來たので、ハツと衿を正して耳かたむける。又此舟より田宮先生、御聲ほがらかに吟じさせ給ふ。拍手の音、巖もくづれる様だ。第二のトンネルを出た頃、誰やらの羅漢さんしませうとの發議に「どつこいしよ、どつこいしよ」と、をかしげな身振りして、次へ次へとまはすをかしさ。果はアッハ、、オホ、、と笑聲波をも起さんず勢。同乘の師の



君等「面白い遊びですねえ」と御腹抱へ給ふ。

かく遺憾なく天眞を流露しつゝある内、早陸に上らなければ、ならなくなつた。

しばし暗中に分たれた第一、第二の舟人こゝに再會す。醉ふた人一人もなく、面白かつた面白かつたと、いづれも皆、嬉しさうなお顏。

これから西へ〳〵と、行き行きて〇〇館についたのは灯ともし頃。

湯上りの頰を、そよ風にふかせて、おだやかな夜の景色を見て居る間に、膳は運ばれた。師の君の、宿の下女を退けて、給仕下さるもつたいなさ。爲に名にしかふ京の粗菜も、心よく食べ終り。新京極見物にと出かける。

北は三條より南は四條まで、その賑しさ京都一であるとか。おのぼりさんとはいへ、誰一人目をまはした人もなく、迷子になつた人もなかつたのは、誠に結構至極と、喜ばねばならない。三々五々打つれて、人形千枚漬、繪はがき・みすや針など求めて宿へと急ぐ。

空には星が今にもふり出しさうに、閃いて居る。明日の天氣もしのばれて、嬉しい。

宿に歸ると、忽にして一大圓陣は作られ、京都言葉の面白き話が始る。まあ皆樣の、覺の好い事と、感心して了ふ。

やがて寢床はしかれた。「早くお休みなさい。寢坊をして、おいてきぼりに逢つては、大變ですから」との師の君の御言葉に、さらばと床に入る。

あゝ樂しき今日も過ぎて了つた。五日後の今頃は、ちり〴〵ばら〳〵になつて居るのだなど、考へ出すと又悲しくなつて、なか〳〵眠られぬ。

「風を引かぬ樣に」とふとん押さへつゝ、見まはり下さる師の君の御なさけ、今更ならねど身にしみて、感謝の淚頰をつたふ。



# 就職難の實況

女事務員

私の仕官なんてほんの氣まぐれですよ、同じクラスの近藤さんは遞信省の文書課に出てタイプライターを受持つて居られる。

冬の暖かい日でした、私は妹と一緒に縁先で編物をして居た時に、不意に訪れて下すつて、御役所の御話を面白くして下すつて、今一人人が足り無いで候補者を選定中だが、貴方なら適任者だから是非出て下さいな、さうすれば私もお喋りが出來て仕事も爲よいから、と勸めて下すつた。

私何も初めから月給取なんてツマらないわ、と思つたのですが、今迄が餘り學校許りでしたから、少しは世の中を見るのも藥になると一寸考へたので、いゝ加減の御返事して置くとこれが事實になつて、二三日經つと、上官に話したら、それは丁度適任者だから是非出てくれ、それには履歴書を差出して呉れつて來ました、併し私はまださう決心して居なかつたのですが近藤さんは其次の日曜に早くやつて來て、何でも出て下さい私も是非つて話したのだから今更貴方が出て下さらないと私も役所で嘘を吐いたやうで信用が無くなるから、と言ふので仕方がなく決心をし履歴書を差上げました、さうすると五六日經つて、「御面談の要有之候條明五日午前十時當役所に御出頭可有之」なんて、六ケ敷い葉書が來ました、私は御面談なんて何を聞くのかと思ひつゝ、半分は好奇心に驅られて、其翌日遞信省の門をくゞりりました。

今迄學校に許り居て役所なんてものは初めて見たので、眞個に變でした、玄關に行つて端書を見せると兼て言ひ付けてあつたものと見えて應接室に通されました。

こゝに通つて見ると二人、私位の年頃の方がお待ちになつて居られる、待たせられた事二十分位でしたらうか、初めは此方々は何か面會の人でもあるのかと思つて居たのですが、私の後から又二十五と三十位の方が此應接室に御入りになり、此前の方御二人は順々に人事課に呼出されました、それで其後で私が呼出されたのですから、私 初めて一寸した仕官にまへ一日否一時間の中に四人も競爭者があるので驚きました、就職難なんて男子に許りあるものだと 思つたら女子にも矢張りあるものとつくづく恐いやうな感がしました、段々後で樣子を聞いて見ますと、この一人の空 位の爲に凡そ百人近くの候補者が現はれたので履歴書は山の樣に人事課長の卓の上に集まつたさうでした、それで採用する側でも却却其撰擇が困難で、先づ履歴書で選別し、それが濟むとマア口述試驗とか人物試驗とか言ふものをするのださうです、女子の人物試驗つて何も容貌に重きを置くのでもないでせうが、さりとてそう閑却もしないさうで、それは〇〇呉服店の樣に全然それが採用の標準になるのではないと云ふ事です。

私はこの時案内せられて課長室に行きましたの、「ヘーア貴嬢が松田さんで、御學校は何所を、ヘーア、近藤さんとは

同意で、ハーア、ハーア……」

何でもハーア許り繰返される課長さんでした、八字髭はイヤに短かく剪んで居る四十前後の方でした。併しこの方に依つて本省五千幾人の官吏が任免されるのかと思ふと、敬意を表せずには居られませんでした。

「何れ此方から重ねて申上げますから……」

と云ふ詞を後にして此日は歸へりました、私の後の二人の方も矢張り此通りの問答をされるのかと、應接室を出る時につく〴〵この御兩人の御顔を見ましたの、彼方では嘸にお考へになつた事と思ひます。

斯くて其翌々日出頭の命があつて日給三十五錢の雇となつて御採用の光榮を得ました。

## 鳩の意匠



雛まつり（享保頃の風俗）





## 泉岳寺の印象

高輪　若栞

春雨のふる夜徒然なるまゝに、此程から義士傳を讀みかけたところ、よめばそれ程元祿の昔師走の十四日、決死の四十七人が、吉良家へ擊入の壯擧がしのばれる、花は櫻木人は武士と後の世迄も淸き名を、殘した人々の遺骨のある泉岳寺へ、詣づる。

泉岳寺前で電車を下りて右へ一筋道をたどつて行くと、義子團子義士壽司、なんて呼び物の店が並んで、繪端書や貝細工、泉岳寺土產の杯を賣る店などが、なかなか多い。

進んで樓門を通り本堂の前に立つて參拜をする、大砲の彈丸が奉納されて居る、左りの方に義士遺物の陳列場がある、まづ墓所へ參詣する、右手に主稅梅と云ふがある、主稅は芝居でする力彌である、彼は松平隱岐守(三田)の邸に於て、割腹をする事となつたので、此梅樹の本に惜しや若木の花を散らしたのであつたが、其後某植木師の手より、由緒ある梅なればとて、緣故淺からぬ此庭に、移植されたのである其傍らの瑤池梅といふのは有名なる、堀部妙海尼即ち安兵衞の妻と定まつて居たが、まだ結婚はしなかつた折しも主客の一大事件が起つたので、父も夫も大義の爲めに一命を捧げたので、孝貞二つながら全き彼女は、江戶に上り尼となつて、君公、同志の菩提をともらふた、婦人である、長矩侯の室瑤泉院が、鉢植の梅を贈られたのを、妙海尼の更に此處に植ゑたのである。

そこに首洗ひの井戶といふのがある、吉良義英が白髮首を、こゝで洗つたとの云ひ傳へ。其左側に天野屋利兵衞(天河屋義平)の墓がある、彼

は淺野家に出入して居た商人であつたが、かつて、淺野家で、什器の蟲干をされた時に其嗜みある彼は、拜見に行つた、その節重寶の茶碗が紛失したのである。

疑ひの雲は忽ち義平の一身にかゝる、元來侠氣の彼は他人の罪を身に被る心で私が盜みました、と立派に出た。

然しそれは、長矩侯が自身ひそかに、居間に持歸つたのであつた事がわかつたので、以來彼の男らしい心膽を大勇の大石が見拔いて、討入用の武器を調達させたのである、この事が知れて彼は捕へられた、そして種々に拷問された、しかし良雄等の本望を達せし事を洩れきゝて潔よく自首したのである、

芝居でするヽと彼れは長持の上にぬつと腰掛けて、天河屋義平は、男でござる、といふ、氣持のよいところである。

線香求めて點火して、入れば香烟は不斷に立昇る。

正面には長矩侯、向つて室瑤泉院の墓所がある、大石父子のは、何れも小さき小屋が設けてある、

立寄つて見ると、本望成就、心願成就、いろんな文字が小さく、何者かのいたづらであらう、

他は小屋がけなし、形同じ石碑で、横には俗名と享年が刻り付けてある、

よく見ると、石碑の一部分を缺いであるのが多いこれは例の迷信から願ひ事が成就するといふので、粹者達が爭ふて守袋に秘めるのだといふ、

墓の數は都合四十八基、これは誰もしる事だが、彼の智勇勝れた大石が、事前の策略として日毎夜毎に花柳の巷に入り浸りで、酒池肉林の歡樂を盡しで居た折しも、薩摩の藩士で喜劍と云ふ人、隣座敷に居て、餘りの馬鹿騷ぎにあきれて、酒宴の場へ飛び込んで、嘲罵した上句、貴樣の樣な奴は主の恩を知らぬ、犬にも劣つた腰拔武士、これでも喰へ、と刺身を足の指で差出したのを、良雄が這ひつくばふて喰つたといふ、

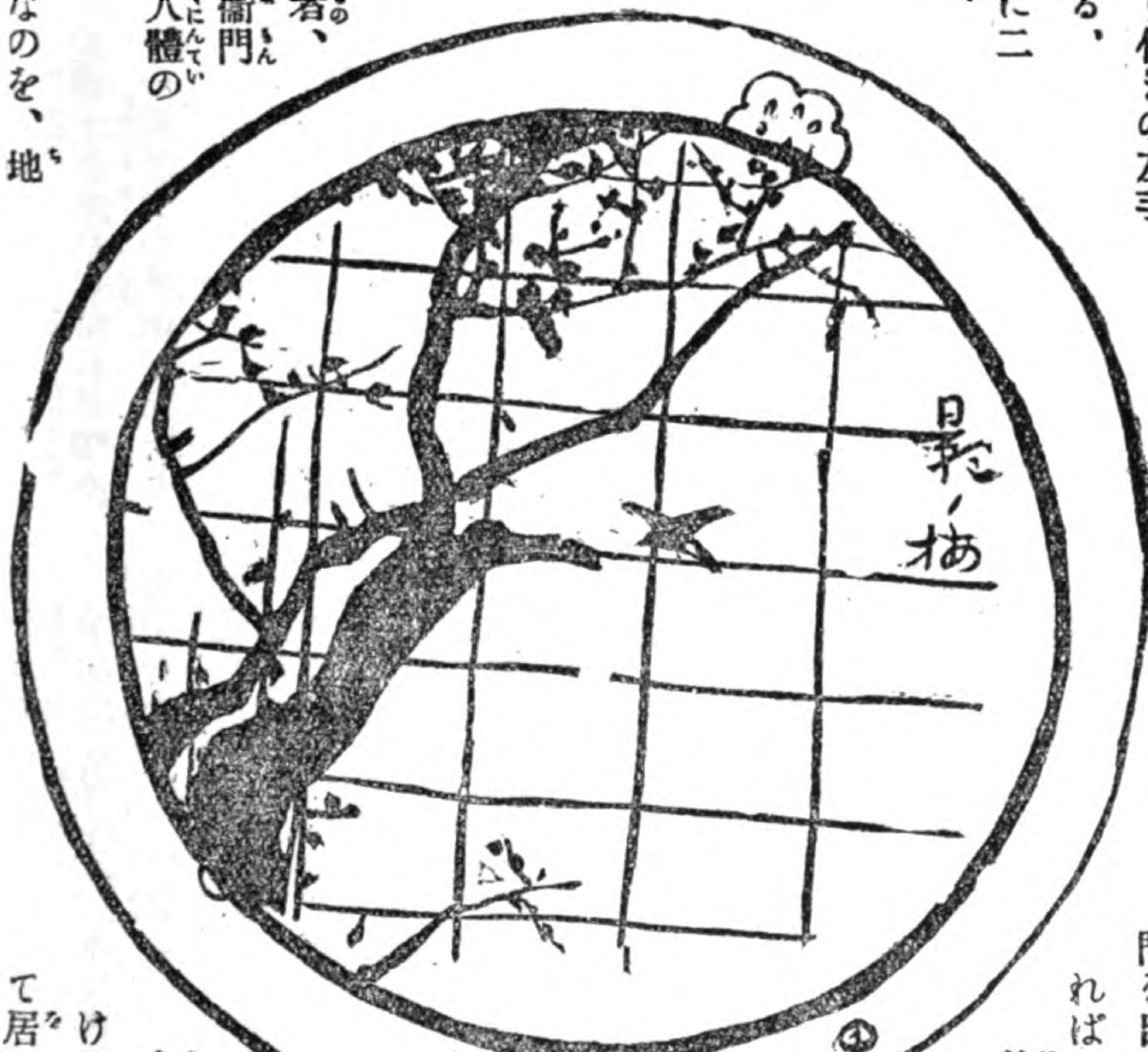
機熟して良雄等の本望を達せし時、喜劍前の失禮を悔ひ、誠忠の士の心事をも解せず、無禮を加へしを謝

せん、といつて其墓側で割腹した、此烈士をも此處に葬つたのである、一番取り付きの左手にある碑が即ちそれである、

一通り展じ終つて、更に二百年の昔に逆りて追懷すれば、一種愴懷の感に打たれて、襟を正しうせずには、居られぬ。

海軍服の可愛らしき坊ちやん連れし夫人、桃割れに、頸白粉きは立つて美しう、化粧した半玉の手を引いた若者、頃は元祿十四年と、雲衞門張りののどを自慢氣な職人體の男。

此處に詣づる人の樣々なのを、地下の義士は如何に見てゐるであらう。



門を出て丶右に折れ、石段を下りれば、木像堂がある、不細工な義士の人形であるが、濕氣て暗くて不快な感じがする、それから遺物陳列場に行く。

誠に質素な二階建ちで、場內掃除の行屆て居るのが、殊にうれしい、うつかりするとすべりさうだ、當夜義士の着用した陣羽織、小手、脛當、などよく見れば、血の付いて居るのもあらうけれ共、既に地質が朽ち果てて居るので、よくは分らぬ山鹿

流の太皷、采配、寺岡平衛門が、吉良家の大門を打破つたといふ槌もある、刀劍、半弓、槍、鎖帷子、又義士の或者が世を忍ぶ假りの世渡りに、營なんだ刷毛屋の看板迄、保存されてある。

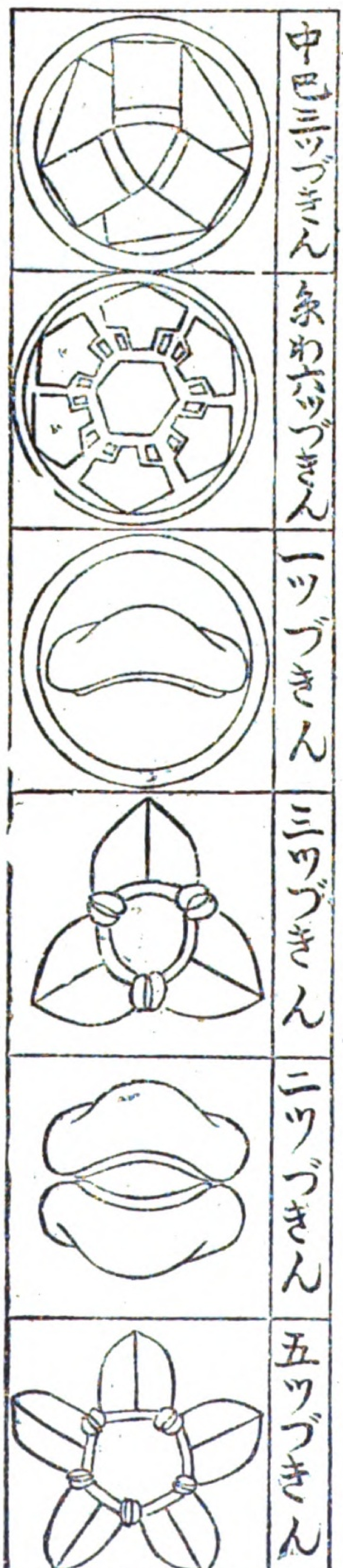
殊に良雄は武術のみならず、文學美術のたしなみも淺からず、書も美く、自畫讃の竹に雀の小幅など、其人と成りを忍ばしむる。

一代の俳人大高子葉の色紙、短册、赤穂城あけ渡しの書狀より、義士等と往復せし手紙、淺野侯の使用されし器具、瑞泉院の着用されし衣類迄、一見悲痛の追想の料となる。

後世より見て、兎角の評はあれど、四十七士の如きは、日本武士の粹を發揮したものである、

室鳩巢は、義人錄を著して、其忠誠を稱へたのを、竹田出雲が、院本に綴つて、假名手本忠臣藏と題して淨瑠璃に語り、更に脚本となつて、芝居に演ぜられる事となつたのだ、此忠臣藏の芝居は、何地で演じても大入のある事請合なり。

利の爲めに節を變じ、黃金の光る處には理非の眼も眩み、生活難の叫び喧ましく、眉に火の付た樣に騷ぎ狂ふ現代の人も半日の參詣に何等かの敎訓を得るのは泉岳寺の遺蹟である。





# 雑記帳

與謝野晶子

×

不良少年と云ふ者はあるが不良少女と云ふ者は餘り聞かない。男の犯罪に比べて女の犯罪は非常に尠い。監獄や感化院の統計を見ても其れは明白である。知名な政治家、學者、實業家、官公吏になる程道ならぬ私財を貯へてゐて、公盗と云はれても仕方の無いやうな人が多い。又さう云ふ位地の人は大抵閨門が亂れてゐる。

日本の女子が誘惑に陷り易いと云ふのはわたしも認める。併し其れは無教育と無財産との爲である。教育あり財力ある男子が滔々として金錢の誘惑、醜業婦の誘惑に節操を破り廉恥を抛つ事の多數なのとは到底比べ物で無い。日本の男子は概ね是等の誘惑に陷り易い危險性を持つてゐる。不良少年よりも不良中年、不良壯年、不良老年の男子が最も多數なのである。

大昔から正當の戀愛にしても女子から申込んだ例は殆ど無い。伊弉冊尊の「あなにやし愛男」と先づ唱へられた神話などは稀有の例である。其れ程日本の女は貞恭であるに關らず、今の女子教育家や父兄が、女子の操行のみを嚴しく取締らうとするのは甚だ見當ちがひだと思ふ。

女子の貞操の重んずべき事は、男子側の漫然たる感情論や、修身書風の無根柢な獨斷說などと違ひ、わた

しは自分の實踐してゐる權威と、合理的な自分の「生」の規律とから説くことが出來る、其れと同時に、女子の墮落の誘因が男子側にあるのを見て、之を取締るならば寧ろ先づ彼を取締る事を望んで、男子側の反省を要求したいのである。

元帥とか大臣とかの旅行に必ず遊里の婦人が送迎し政治家の會合が待合で開かれ、學者の宴席に醜業婦が斡旋をすると云ふ見苦しい現象が何處の文明國にあらうか。代議士とか府縣會議員市會議員とかの中から、毎年多數の刑事被告人を出すと云ふのも我國にのみ見る事の出來る不祥な現象である。殊に文教の首腦を以て任じてゐる男子側の敎育者から、最近十年間に破廉恥漢を出してゐる事は實に無數だと云ッて可い。

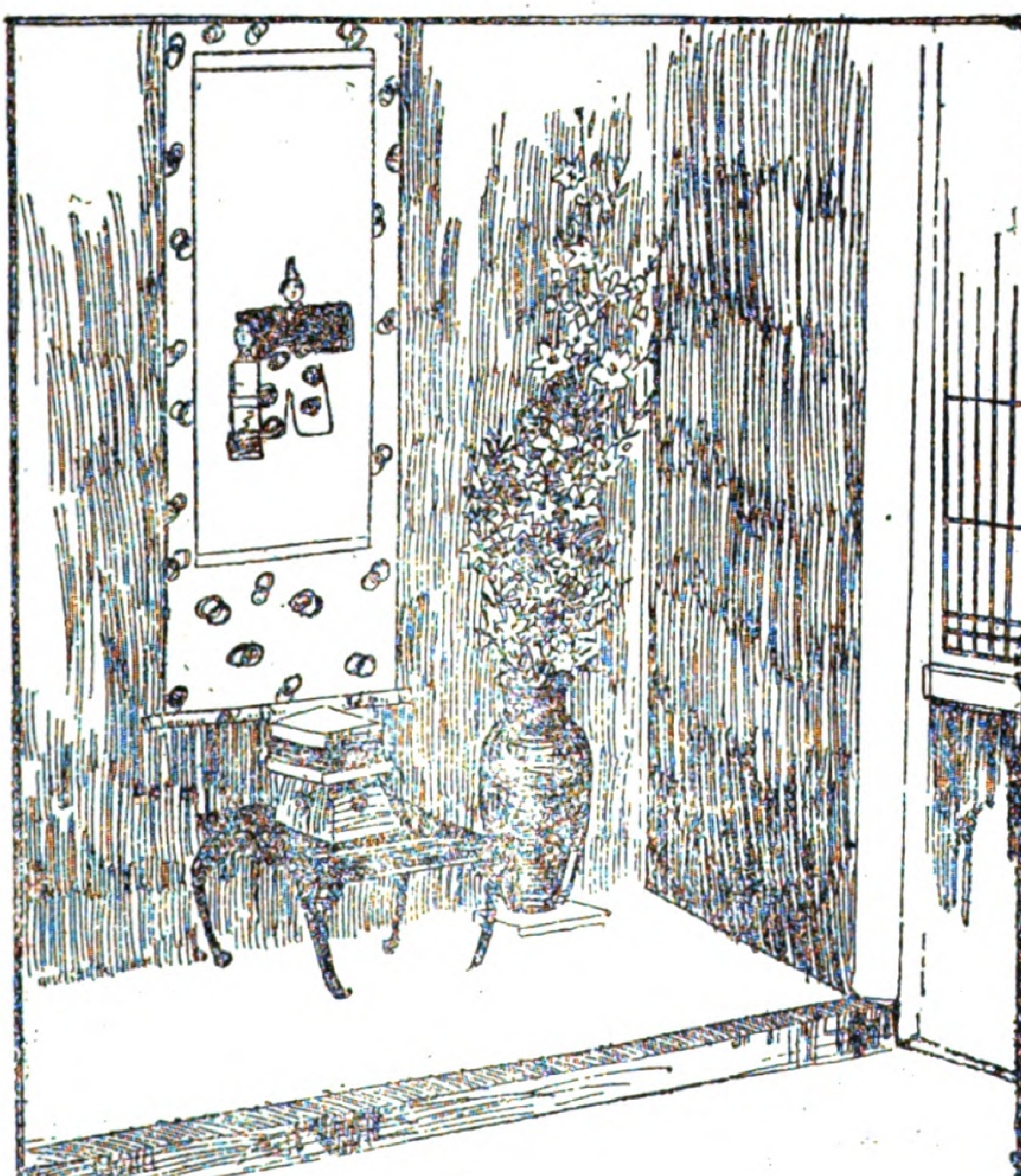
若し知名な夫人令孃の多數が、右に述べた知名な多數男子の爲す如き不德を公然と行つたならば何うであらう。片手落の取締はよくない。女子を淸くしやうとするなら、男子が先づ淸くなつて範を示されるがよい。而して其れは元帥、大臣、大將、學者、紳商と呼ばれる上中流の男子を第一に戒飭し、男子の行狀を實際に一洗して戴きたい。繰返して言ふ。日本の男子は女子に比して幾百倍か惡德の誘惑に陷り易い危險性を持つてゐる。

×

女子には右の樣な危險性が無く、稀に墮落する女があると云ふ丈で、皆が皆男子のする如く異性との情交を二三四五にし、賄賂を受授し、詐僞を行ッて刑律に觸れると云ふ樣な事は無い。五障とか七去とかで不自然に窘められて來た程あつて、消極的に「獨を愼む」支那聖人の敎は男子よりも女子の方が比較にならぬ程よく遵奉してゐる。昔の學者は孔子以後に聖人君子が

無い樣な事を云ふ。わたしは然うは思はない。支那流の聖人君子なら古今の婦人に無數にあると考へてゐる。「溫、良、恭、儉、讓」の五德を完全に行つたのが聖人君子の典型であるなら、男子は知らぬこと、在來の日本婦人に其れに當てはまる立派な婦人は幾等でもあると思ふ。

　其代り在來の日本婦人には理性が缺けてゐた。支那流の命令的道德は理性と并立し得るもので無い。唯感情的に妄從し、禁慾的に忍從し得る單純な階級の人のみ之を守る事が出來た。其れが理性の勝つた多數の男子に守られずして、感情的な多數の婦人に守られて來た所以である。



草の戸も住替る代ぞ雛の家

　所で現代は理智を重んずる。男子はより多く理性的になッた。婦人も亦久しく閉ぢてゐた理性の目を開き初めた。

　「合理的」と云ふ標準が萬事の上に下される。「何事のおはしますかは知ら

ねども」と云ふ他律的なめでたい時代は過去の夢となつた。

わたしが自ら理性と感情との平衡を得たいと努力してゐるのも之が爲。婦人方に向ッて肉體の勞働と共に精神の勞働即ち思索を奬め、因襲の繋縛より脱して、自ら建てたる正當なる規律に由て自己の生活を健かになさいと注意するのも之が爲。又男子側に對し、益その理性と感情とを爽かにして、學問上ばかりで無く、操行の上にも一人前の文明男子と成られん事を祈るのも之が爲。要するに不合理な事は現代の文明人に堪へられない所だからである。

×

わたしは日本の男子の無節操や不品行を苦々しく考へるけれども、又考へ樣では恕すべき點が澤山にある。「母親の性情が男の子に最多く影響する」と云ふ遺傳説に、わたしは種々の比較研究の結果から信用を拂ッてゐる。

而して日本の男子は何う云ふ家庭で育つかと考へると、すべての男子が全く母親なしに育ッてゐる。一人も母親らしい母親は無いのである。瓜の蔓に茄子はなりません。不品行な父親と愚癡な高等下女との間に生れて大きくなッた男子は、當然賄賂其他の不義の利慾に誘惑せられ、醜業婦に男子の貞操を二三にして愧ぢない樣な結果になッてゆく。其れに不思議は無い。

×

わたしは折々日本の各社會を見渡し目を瞑つて考へる度に、自分の周圍を野蠻人に取卷かれてゐるやうな氣がしてならぬ。あの樣な野性の男子が多數の勢力を恃んで何の方面にも跋扈してゐる事かと思ふと、日本人の前途までが心細く感ぜられぬでも無い。わたしさ

へ斯う考へるのであるから、況して各社會に少しづゝ散在して、沈默の中に努力を續けて行かれる俊秀な天才肌の人達には恰も四方の野蠻國に壓迫せられて文明國の羅馬が亡んだ樣に、身を狹められる感じがする事であらうと思はれる。

×

と云つて、わたしは自分の一生を悲觀はしない。引いてわたしの住んでゐる自分の國をも、同じ國に生れ合してゐる人種の前途をも、併せて好都合に發展して行くものだと考へてゐる。何う云ふ保守的な傾向が一時の勢力を得るにしても開きかけた人間の理智の目は再ひ曇るもので無い。秀でた素質の種ばかりが永久に榮える。男にせよ女にせよ野性な者は次第に文明の大勢に逆行して消滅するであらうが、太古の優れた神々の御血筋が萬世一系



花はまた咲ぬ端山の下蔭いさこれをたに折りてかへらん

の例稀なる實祚を踐ませ給ふ如く、歴代の文明貴族である藤原氏が今猶立派な子孫を絶たぬ如く、現代に目を開いて自らを教育する秀れた男女が、今日よりは明日と段々に殖えて行つて、然う云ふ人々が將來の日本の要路に立つて健闘する樣になつたなら、今日社會組織が何うの斯うのと云つてゐる事なども、漸次好都合に改善して行かれるに違ひない。自分の爲にも子孫の爲にも又國家の爲にも、斯う云ふ見地からわたしは自分の生活を高く、淸く、豐かなものにしたいと努力してゐる。

×

新歸朝者の仲小路遞信次官が歐洲の文明の現狀を見て「勤勉努力の風」を稱讚せられたのは結構である。わたしは今の日本の若い俊秀な男女が執るべき路も勤勉努力の外は無いと思ふ。語を換へて云へば精神肉體双方の勞働を實行する事である。殊に女子に於ては從來不具な無意味な勞働のみを奬勵せられて、頭腦を働かして理性と感情とを高く、淸く、細かにする事を怠つてゐた。大急ぎで少くとも今の一般男子と對等な程度までにでも其方面を向上させねば成らぬ。其れを思ふと、高等女學校程度の低級教育に甘んじたり、婦人雜誌にたはいもない厭味たつぷりの美文などを投書したり、衣服やリボンの裝飾品に小な煩悶を起したりしてゐる時で無い事が、自尊心の强い、聰明な、若い婦人方には逸早く氣が附く事であらう。

×

大谷伯爵夫人がまだやつと三十ばかりの御齡で突然お亡くなりになつたのは惜しい事悲しい事で御座いますね。私も一度御目に懸りたいと蔭ながら願つてゐました程尊敬してゐた方ですが、終に其機會を得させな

んだ。

夫人が新しい婦人の或る典型を代表して居られた事は、申す迄も無く諸新聞が既に有らん限の讃辭を呈して居ります。婦人旅行家としても確に日本一で、他の婦人の及び難い所で御座いました。

併し夫人の短い御生涯でせられたあれ丈の活動は、勿論天稟に因る事とは申せ、顯門の出身と本願寺の財力と、英邁な光瑞伯の感化とが被動的にさせたとも申されませう。夫人の眞の自主的な活動は今後に於て目覺しく發展するのでは無かつたでせうか。私は此意味で未來の多かつた夫人の早世を哀悼致さずには居られません。



私は西本願寺派の信徒の家に生れながら、幼い時から他力往生の宗旨が腑に落ちませなんだ。近年に至つては本願寺の宗制が政府の官制に倣つて俗氣に滿ち、其勸財の仕方の銅臭に富んだのを見て反感を深くし、殊に本年の三四月に亘る祖師の大遠忌とやらの計畫が、全く美名の下に信徒の淨財を本願

寺に吸集するのが目的であるのを知つて、北越の雪の中を行脚し乍ら法を說かれた親鸞上人の質實な宗風は地を拂つて滅び去つたと歎息しました。

けれども又思ひ返して見ると、其處が大谷伯夫妻のえらい所では無いか。信徒の淨財を此機會に集めて、其財力を一層有益な文明事業に利用しようと云ふのが大谷伯夫妻の本意では無いか。伯夫妻の從來の遣方の堂々たるに考へて、私は斯樣に善い意味の解釋を下し最初の反感を打消して居ました。

而して若し私の想像通になるなら、近き將來に於て伯夫妻は本願寺から離れて自由なる公人と成られ、伯は立派な文科大學を設立し、夫人は完全な女子大學を立てられる事であらうと期待して居ました。

さて夫人を失はれた以後の大谷伯は此後如何樣に活動せられるでせうか。かねて勤勉努力の人である伯は夫人の死に由て今更の如く無常迅息の理を自得せられ一層善根功德を植うる事に精勤せられる事であらうと存じます。

×

わたしに宗敎の事を問はれた方がある。わたしは斯う答へた。

わたしは何う完全に生きやうかと考へてゐる。如何に安樂に死なうかと云ふ事を對象とした他力往生の宗敎などは勿論用が無いのみならず、凡て宗敎と云ふ樣な冷い抹香臭い名の物は不用である。

わたしは死を怖れてゐない。肉の機關が活動を止める迄の事である。「肉」と云ふ一個の物が變化し朽廢して行くのに何の不思議があらう。死ぬ事などを考へるのは借りもしない借金を心配する樣なものである。無用の心配である。

宗敎が無くて何うして完全に生きて行けるかと言ふ

人がある。然う云ふ人は宗教が先づ有つて其れから人を生じて來たものだと思つてゐるらしい。家があつて人が生れたのでは無く、人が或る必要から家を作つたのだと解つて見れば、役に立たなくなつた古家を壞して仕舞ふのに何の不思議も無い。

わたしは今更壞さなくても初めから何の宗教の厄介にもなつてゐなかつた。

わたしの生きて行く道は、わたしの天分と境遇と周圍の事情とに順應し、わたしの理性と感情と技能と意志とが自分で拓いて行く。

×

婦人雜誌で婦人の筆になつた叙情文などを見ると、のろ／＼と、又くど／＼と、たはいもない事を書き並べた物が多い。其點丈でも今の婦人が現代の忙しい、切迫した、緻密な精神生活に觸れてゐない事が曝露されてゐる。徒然の餘り硯に向ふと云ふ樣な呑氣な時代は過ぎた。忙しい生活の中で起伏する思想感情の張り詰めた結晶を、言はねば胸も裂くる氣持で、筆執る手をぶる／＼と震はせながら、黑い血で紙の上に染め附けるのが現代では無いでせうか。

×

「柔順」と云ふ事を日本の女子の美德として保存したいと言ふ人がある。保存と云ふ事は吝臭い事として何事にもわたしは大嫌である。實際の役に立つものなら其物は如何に舊くても永久に新しい效用があつて、自ら存在するに違ない。保存などゝ云ふのは最早實際の役に立たなくなつた物を強ひて物惜みする骨董根性から云ふ事である。

「柔順」と云ふ事が何れ位日本の女を卑屈にし、畸形にし、女の生活を悲慘ならしめたか知れない。又之が

為に女が何れ位男子の足手まとひに成つて迷惑を與へたかも知れない。

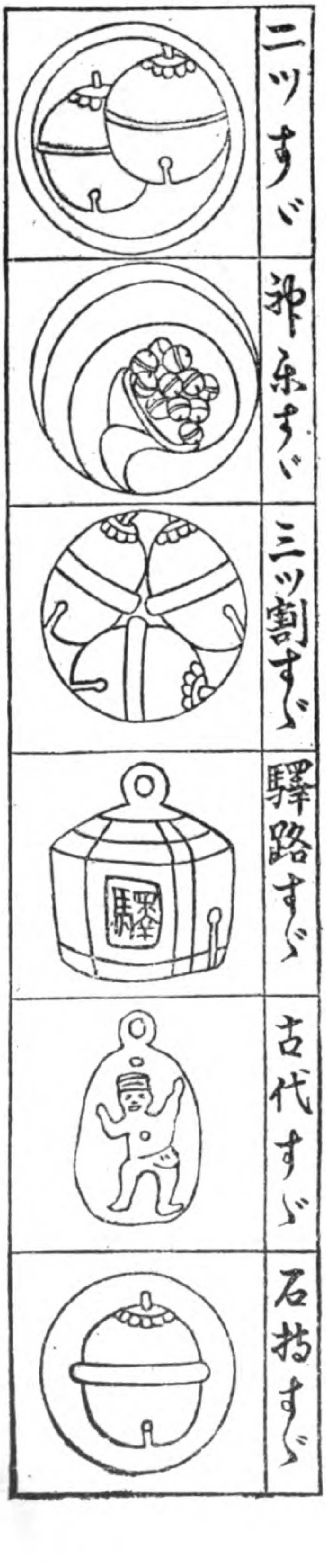
わたしは「柔順」の代に「健順」と云ふ事を奬めたい。之はわたし自身に年頃實踐してゐる所である。「柔順」と云ふ事は何の理由もなく反省もせずに唯因襲に屈從する事で、女子の人格を認めず却て器械あつかひにする思想であつた。わたしの「健順」と云ふのは、婦人自身の聰明な理性と、圓滿な感情と、勇邁な意志とに從つて、自己と社會との調和を保ちつゝ生活する事である。一言で云へば合理的に生きて行く事である。

時代に不用な物は保存する必要が無い。亡ぶる物は亡びよ。靜に沈着いた、思慮ある、眞の新しい婦人は最も自己に適した生活の新規律を考へ出して社會との調和を計つて行く。今更舊式の「柔順」などを說いたりなんかするのは却て危險な思想である。時に適せない思想は凡て危險である事を注意したい。

×

わたしは今産褥にゐて、微弱な陣痛を忍びながら、數時間の後の死生の境を豫想し乍ら、此雜記帳を此處まで淨書して筆を擱いた。

鈴の意匠



# 千鶴子に對する最後の實驗

（未だ公表されざる新事實）

文學博士　福來友吉

## △世界第一の透視能力者

透視といふ事は、日本に初めて起つた事實ではなくて、外國にも往往見るのであるが、御船千鶴子のやうに著しいのは、是迄何處にも現はれなかつた。佛蘭西のリセイや、露西亞のコーテイツクなどは、透視するので名が知られてゐるが、而かも餘程曖昧なものである。實驗の方法の進んだ事、又よく適中する事は、千鶴子に於て世界のレコードを破つたのである。學術の研究に對しては、無論大なる貢獻を爲してゐるし、斯る能力を人間は有するものだといふ自覺を人に爲さしめて、爲めに又々色々の人が出て來る其の事實に對する功勞も亦大きいものである。長尾郁子夫人の如きは即ち其の一人であらうと思ふ。だから一通りの花を彼女に持たせて置きたかつた。特に此の四月には又上京して再び實驗を受けることを希望して居たし、私自身も、此の前彼女が上京した時は人の目前で行はれなかつたのが不滿足であつたが近來は顔はまだ隱さねばならなかつたけれども手許を人に示して行ふ迄に進んで居たのだから、之を何うか人にも見せたいと思つて居たのに、最う見られないのは遺憾である。千鶴子に對する私の最後の實驗は、まだ世に發表しないから、此の機會に少しく茲に述べて見やう。

## △鉛管とボール箱の實驗

最後の實驗は昨年の十一月であつた。十一月十六日に熊本へ着いて、十七日から實驗を始めた。これは千鶴子が東京から歸つて五十日程經た頃の事で、東京より歸つて後、家庭問題の爲に精神を使つた結果、面色は惡く、元氣も非常に銷沈して居た。のみならず透視の方も、私が行くといふ事を聞いて、僅に二三回試みた丈で、其他に全く試みる機會が無かつたさうで、能力の程は何うかと案じ乍ら試みた。

十七日には私の宿泊してゐた研屋支店の座敷で、午前に二回、午後に二回實驗した。私一人で別に立合人とてはなかつた。其の午前の第一回の實驗は、豫め二寸に一寸位の平たい鉛製の管の中へ、文字を書いた紙片を入れて、同じく鉛で密封した物を五十個造り、其

の中より一個を引き出した物で試みた。私自身でも、中に何が書いてあるか分らなかつた。これは十時四十五分より始めて、十五分三十五秒間で了つたが、千鶴子は、何うも分らないと言つた。

　で鉛では餘程むづかしさうであつたから、第二回には、豫め用意してあつた別の實驗物を與へて試みた。これは百二十個の新しい活字を買つて來て、大學の心理學暗室へ持つて行き、之を名刺の紙に三字宛捺して、錫の箔に包み、それを名刺を入れるボール箱に入れ、其の上に十文字に帶封を施し、且つ封印を爲した物で、かういふ物を百五十個造つて、其の中の一つを與へたのである、活字を暗室へ持つて行つて捺したのは、此の澤山の活字を暗い所で捺せば、捺した者自身にも何といふ字を捺したか分らず、實驗には最も適當だと思つたからである。此の實驗は、十一時三十五分に始めて六分二十五秒間で了り、千鶴子は「工客字」と書いてあると言ふから開いて見ると之れは立派に適中して居た即ち午前二回の實驗の中、一回丈けが成功した。

### △能力は幾らか減退の氣味

それより千鶴子に晝飯を饗應して暫時休息させ午後一時過より再び始ため實驗物は、やはり午前の第二回の時と同じ製法の物で、實驗は一時十七分より始めて、九分三十三秒間で了つたが、今度は旨くできなかつた。

　で其の實驗物を私の手元へ取つて、千鶴子を又暫時休息させ、三時三十分になつて、今一度試みよと言つて再び其の實驗物を渡した。此の實驗は六分四十七秒間で了つて、「彦戌別」と書いてあるといふから開いて見ると、今度は確に適中して居た。が幾らか能力の衰へて居たことは明かであつた。

### △骰子の目の實驗は多くは適中

翌十八日には、熊本濟々校の校長をしてゐる井芹氏の宅の書齋で試みた、立合人は最初は井芹氏で後は同氏の夫人が居た。此時の實驗は、雙六の骰子二つを箱の中へ入れ、封をしてよく振つて、如何なる目が出てゐるかを透視するので、之を前後九回行つて、初め四回は千鶴子一人別室へ入つて私の見ない所で透視を試み、後の五回は目前で試みた。即ち午前十時三十一分から始めて、第一回は五分七秒間かかつて、二と五と出てゐると答へたが、實際は一と一であつたので、不成功であつた。第二回は、五分三十一秒間で、一と四と答へて、こ

れは適中した。第三回は、二分五秒間で、三と六と答へ、これも適中した。第四回は三分三十七秒間で、二と六と答へ、これも適中した以上の四回が千鶴子が別室へ入つて透視したので、其の中一回外づれた丈で、他は皆な中つた。

## △顏だけ隱せば目前で行ふ

そこで何うかして目前で實驗したいと思つたから、千鶴子が難しがつて餘程躊躇して居たのを、やう〳〵勸めて、午後から又同じ實驗を試みた。しかし惡い癖がついて居て、顏を現はして居ては何うも工合がわるいと言ふから、彼女を坐らせて、毛布を上より吊つて胸元迄垂れさせ、本人の手元は自身にも私共にも見えるやうにして行はせた。これならば細工をする餘地もなく、私の目的は達する。で第一回は三分五秒間かゝつて、一と三と答へたが、實際は四と五であつたので中らなかつた。第二回は三分四十四秒間で、四と五と答へたが、實際は五と五であつたので、之れも失敗した。第三回は一分三十八秒間で、二と五と答へて、之れは適中した。第四回は一分五十九秒間で、二と五であると答へ、之れも中つた。第五回は一分五十五秒間で、一と二と答へ、之れも中つた。

これで十八日の實驗は了つた。此の日は前後九回の實驗中三回失敗して、六回成功したので、特に後の五回の實驗は目前で行つて見せたのだから、其の結果は先づ間違のないものと思つて居る。

## △鉛管の實驗の成功

それから十九日になつて、又一度鉛管の實驗をした。私は骰子の目の中たる事さへ見れば、他は何うでもよろしい、鉛に包むといふのも、たゞ封を切らずに直に透視が出來るか何うかを知らうとする迄の事で、他に目的があるのではないと言つたけれども、何うも氣が濟まぬと見えて、今一度是非行らせて吳れといふから、十七日に試みて分らないと言つた其の實驗物を又渡した。此の實驗は午後二時十三分から始めて、三分六十秒間で了り、「無受次」とあると答へたから、開いて見ると、今度は正しく適中して居た。たゞ此時には千鶴子は一人別室へ入つて透視したので。それ丈が此の實驗の缺點であるが、併し三分十六秒の間に、鉛管を開閉するといふことは、人力では到底出來ない事だから、此の實驗は先づ確實なものと見てゐる。之れが私の最後の實驗である。

## △大橋邸實驗の眞相

家庭問題等の爲に精神を勞らした結果、透視の能力は、やゝ薄弱になつて居たらしいが、右の如き事實を偶然の適中といふ事は出來ぬであらう。封を切るやうな事のないことも確實である。千鶴子が東京へ來た時に、大橋邸で行つたのを引證して、某博士は近頃或る新聞で、彼女を詐欺師だとか言つてゐるが、甚だ早計な批評である。彼の實

驗を行ふた時には、私が千鶴子に、かういふ種類の物で實驗すると言つたので、それでは稽古をするから貸して呉れと言つたから、前夜芝居を見て歸る時、即ち十二時頃に、山川博士が作つて來る約束の物と同じ形の物を二個彼女に貸し與へた。すると其れを宿へ持つて歸つて、其の晩彼女は懷中に入れて寢たといふ。斯樣すると透視が能く適中すると云ふのである、ところで翌日午前九時頃に熊本出身の大學生が二人宿を訪問したから、其の求めに應じて其の中の一個を試みて、これは適中した。それから殘つた今一個の方を其の日大橋邸で山川博士が實驗した時に出したのである。それも、私は練習用の積りで渡したが、千鶴子は今仕損じては濟まぬといふ考もあり、又私の渡した物で行つてもよいのだと思つて居たから、それを用ゐたので、遺憾ではあつたが、透視としては十分私は認めて居る。これは當時の新聞紙にも出てゐた事で、今更それを詐欺師なぞいふのは、甚だ輕跳な言葉でもあり、又學者たる者の研究態度ではなからうと思ふ。

## △自殺の原因

千鶴子が自殺した原因は其の後熊本の清原氏井芹氏等から私の所へ來た手紙に依ると、第一千鶴子の能力に對して學者が餘り輕薄な批評を加へたのに奮慨したのと、又一方には長尾夫人の如き有力な透視能力を有する者が出たり、或は自分の姉なども追々透視を行ふやうになつたりしたのに刺戟されたのと、今一つは昨年の九月以來家庭の事で非常に精神を勞らしたのと、の此の三つが重もなるものであるらしい。即ち學者にも幾分其の責任があらうと思ふ。斯る精神能力は、水を呑んだり飯を食つたりする能力と違つて、奬勵すると發達するが、抑へると退縮して了ふ。恰度幼稚園で子供を扱ふやうなもので、成るべく引立てるやうにしなければ、好い成績は見られない。それを無暗につゝき壞して此の結果になつたのは惜しむべき事である。今少しく精神に重きを置いて研究すべきであるのに、意地惡く詐欺呼はりをするのは、精神研究に就ては全く無能力者と言つてよい。今後は何うか斯ういふ事のないやうにしたいものである。(談話筆記)



# 奇蹟縱橫の女傑

## 島王の妃となれる日本の一勇婦の實歷

双松庵主人

昨年の夏から都下に年若い一奇婦人が來て居て、時々馬車を驅つて外出する外、絶て都人に其の影を見せず、何となく忍びやかに何事をか計畫して居るらしいので、苦心慘澹、其の人物經歷等を探つて見たが、果して探れば探る程水滸傳的の奇蹟縱橫で、或は鏡の如き陽春の恬波となり、或は巖を嚙み船を覆す秋天の激浪と爲り、或は潺湲たる幽溪の滴水、或は澎湃たる萬重の銀濤となり、一起一仆變幻極り無く、眞に世にも稀なる一大女傑であることを知つた。

### △奇拔な述懷

名を尾崎菊子といひ、肥前五島の豪家の出である。五島といへば、九州を距る西方數十浬の一簇島で、日夕目に見るものは蒼海白波ばかりである。住民は蛋戶漁家が其の半を占めて居るので、人は海に勇に、大海を視ること袵席の如く、片舟に帆かけて遠洋に怒濤と戰ふ事などは何とも思はない。菊子が、此の間に出で、任俠で膽大で、權略家、愛國家、不思議な女傑であるといふのは、やゝ肯かれる所もある、今年二十六歲である。小學校は尋常一年に三年間居据のまゝ退校して仕舞つたが、其の時の述懷が奇拔である。本を讀む事なぞは昔から幾千萬人のやつた跡を踏むだけのことで、面白くもない、寧ろ私は一生、人の歩かない方面を進まうといふのであつた。それからといふものは、絶て書物を手にしたことが無い。

### △一擲三十萬金

十五歲の時に、兩親に勸められて一旦嫁したが、間も無く其處を出て、それより男子を全く蛇蝎視するや

うになつた。半生の波瀾層起も、一にはこの結婚に胚胎してゐるのである。家に歸へるや、極めて自恣放縱の人となり、手當り次第に家產を持ち出し、その一たび外出するや、連日連夜家に歸らず、常に長崎邊に行きて萬金一擲、桂を焚き玉を羮、鳳漿龍髓の美を盡さしめるのを得意としてゐた。爲めに、家產を蕩盡すること三十萬圓、一少女の仕業としては、實に驚くべき額であつた。




### △燦たる蕃界の金鑛

けれど一旦前非を悔ゆるや、其の挽回策を考へて一日もぢつとはして居ない。即ち屢々臺灣に航して、或は樟腦に、或は金鑛、石炭鑛に着眼して深く邦人未到の地を踏査し、其の甚しき時は三十日間殆んど絕食の

窮狀に陷り、植物の根を嚙んで僅に露命を繼いで居つた事さへもある。其の野宿法の如きは實に奇想天外で、火を放つて密林を燒淸すること三回、毒蟲を殺し、猛獸を驅逐し、其の四顧廣漠たる焦土の間に、獨り悠然と石の枕露の床に起臥するのであつた。斯くて深く蕃界を拔き、山又山を分け入るに及んで、終に生蕃と相知り、彼等の畏敬する所となつて、暫く其處に起臥したこともある。彼女は今猶言つて居る。當時確に有望と認めた金鑛は、未だ何人も手を觸れまいから、何時でも採掘は出來るだらう。彼地に往返する事十七回、其の艱苦の報酬は只これのみだと。蕃界の密樹鬱蒼たる邊に燦然たる金光は、今猶彼女の眼底に映ずるのである。

### △飄然鵬翼を張つて遂に島王の妃となる

二十歲の時には、飄然鵬翼を張つて遠く新嘉坡に渡つた。新嘉坡は、馬來半島の一角にある熱帶下の良港で、南洋諸島と交通の最も頻繁な處である。

此處に着くと直に一理髮店を開いた。妙齡女子の、しかも單身經營なので、來客は常に麕至し、思はぬ繁昌を極めたが、二人の和蘭紳士があつて、其の健氣な働き振りを見、人氣の惡い此の港で、獨身經營の容易ならざる事を說き諭し、間も無く南洋アマジャ島の土王の配として歸がせた。この島は、地圖を見れば針頭大に過ぎないが、兎も角も世界地圖に名を記載されて居る處で、その島の王妃となつたのである。

島王は、歷代世襲の王で、年は四十ばかり。今が分別盛なりであるが至つて暗愚な方であるから、色々齒痒いこともあつたらしい。

土王家の傳來の寶物に王家の系譜といふものがあるが、或る蘭人が王を威嚇して之を取り上げやうとしたので、彼女は見兼ねて身を躍らして蘭人の喉を扼し、短銃を擬して其の無禮を詰めたやうな事もある。この事あつて後、全島の民心は一時に彼女に歸し、隱然自ら島王の實あるに至つた。

### △島内統治の全權を握る

何しろこんな離れ島であるから、聞いて見ると全く夢の樣な話がある。五十錢を投じてバナヽを買ふと、殆んど小舟に一パイあるから、之を外國船に賣りつけると、非常な利益を得られるので、此の方法を土人に敎へ、大に土人の商賣常識を養つたといふやうな事は、此の開けた世の中には一寸珍らしい話であらう。斯る島に王配となり、バナヽの賣買、其他ゴムの栽培等を敎へて民に利殖の道を知らしめ、他方に於ては財を惜まず恩惠を施し、而かも豪膽勇武壯夫を凌ぐの槪があるから、自ら務めて英雄の心を攬るといふ主將の法に適ひ、土人に推戴せらるゝは勿論、島内統治の實權は次第々々に彼女の掌裡に歸してたのである。

### △自ら立てし司法制度

島内の土人間に訟事があれば、其の判官は必ず彼女である。其の法律も亦彼女のつくる法律である。裁判法は、原被兩造を面前に出し、双方の申告を聞き取り、之を常識に訴へて即決するのであるが、綸言汗の如くで、絕て不服を言ふ者が無い。

犯罪者は之をゴム園に使役して其の罪を贖はしめるので、現に百五十人の園丁中、二人の有給者を除く外は、悉くこの贖罪者であるといふ。斯樣に島内の經營の善くいつて居るのを見ても、只の婦人でない事が分る。

彼女は、斯る間に、曾て蕩盡したる資を作りて、再び家勢を回復し、更に大なる志望を齎して現に都下に在るのである。嗚呼其の胸底に果して何をか包容せる。





# 和歌

佐々木信綱先生選

## 一等

○　羽前　野口菊子

やう／＼に苦しき境のがれいでゝ安き心にたゆみおぼえぬ。

評、人生のあるものをうたひて、其底に達せる觀あるをもて採る。

## 二等

○　横濱　四絃子

さにぬりの湖そびやかた夕されば誰が心かも赤き灯ともる。

評、まだ見ぬとつ國の瑞西の湖畔なども思ひやられて。

## 二等

○　横濱　佐野こう子

二十年をかにかくわれは我と云ふはかなき人に仕へ來しかな

評、やう／＼の歌と趣は異なれど、ともに心深き歌。

## 三等

○　福井　伊藤愛子

春の夜や小琴に掛けし綾ぎぬの美き香沈みて雨細うふる

評、しつみての句よく一首の情趣を活躍せしむ。梅の灯の歌と同じくうつくし。

## 三等

○　伊豆　日吉くらじ

梅の灯に眠れる鶴の夢の間を靜かにつもる春のあは雪

評、春の雪にふさはしくうつくしき歌。

## 三等

○　下谷　中川しげ子

木蓮の白くひらけば故さとの城下に住める母こひしけれ。

評、城下といふ詞と木蓮の花とがよく調和したり。

## 秀逸

○　名古屋　ますみ

緋桃ちる御堂の縁に狂ひ女の小唄かなしき春の夕ぐれ

評、悲痛。

○ 三河 石野くに子

桑畑の細き小道に紅の夕日をうけて君を送りし

評、可憐なるおもひでの作。

○ 下総 小野牧子

若芽せし雑木林をほの透きて濃青の海の見ゆるすがしさ

評、畫のやうなり。

○ 赤城 塚田秀子

仰ぎ見るそこに理想の宮あらむ神しろしめす夕榮の國

評、けだかくうつくし。

○ 深川 佐久間貞子

いつまでかひとりの母をなげかする君もをさなき人ならなくに

評、世の波にもまれし姉などの妹にさとすやうの歌なり。但此歌耳なれたるやうの感じするは我がひがおぼえにや。

○ 下野 片岡浪子

かゝるべき神のさばきとうらもなくおもへど涙頬を流るゝ

評、着想、原作、頗にまろび出づ。

○ 石見 松田貞子

鋤あぶる香たゞよふ夕ぐれの酒屋賑ふ鑛山の町

評、着想の奇抜なるをもて選びつ。

○ 加賀 徳久田鶴子

春の夜や小琴は君にまゐらせて薄月匂ふ柱によりぬ

評、艶麗。

○ 小樽 晋子

そことなう花の香かをる夕窓にすゐても見たき春雨の日よ

評、あえかなる人の姿見ゆるやうなり。

○ 但馬 久子

黒髪も心も艶の失せにけり鹽のせてふく風のつよさに

評、上句すぐれたり。四句猶あらばや。

## 佳作

○ 阿波 大久保八千代

おでやかにとりどり咲ける其中の花の王者を櫻とし呼ぶ

○ 本郷 横田佐久

暖簾もる酒の香強し春雨は港の街のたそがれを降る

○ 大分 加藤きよ子

二日三日別れて歸る府にして雨の洲岡を見るがさびしき

○ 越後 小坂つま

いとし子よこのむ鈴木ゝ貰ひやらんくすりのまばとすゝめしものを

○ 鵜川 曾手森枝

今日もまた空を眺めて暮すかな病める我身のそゞろかなしき

○　神戸　森　清子

夜のいたく更けたる街をかさ／＼と落葉の走る音の冷さ

○　福井　吉田香瀾

春の夜の夢に取られてかへり來ぬ魂の姿と朝の戻見ぬ

○　廣島　香川玉代

きえ／＼し風吹たえて明るよの光しづかに積るしら雪

○　秋田　紅葉女

美しき衣を纏ひてよろこびし少女の時のなつかしきかな

○　鶴岡　楢樹いわせ

忘られし我身さながらかむばつの沼にかれたる藻の花に似る

○　大阪　木山綾子

アカシヤの枯葉ちるなる夕まぐれ一人淋しくもの思ふかな

○　近江　辻　廣子

木なうてば響はとほくふる里の遠野に返る時を思ひぬ

○　攝津　森島繁子

夕映ゆる窓に身を寄せ涙ぐむ君にし母のうつし絵見つゝ

○　東京　雛　白

白酒を強ひられぬとて雛の膳に面そむけたる美しき君

○　越後　田鶴子

つらゝする軒端にちかう金色の光まばゆき越の山々

○　水戸　鶴ヶ谷園子

靜やかの夕なるかな故郷をなきてわかれしそのよるのごと

○　和泉　小原貞子

かよわなる性と生れし悲しさをあはれ自ら慰めて生く

○　伊豆　土屋常子

里の子の草笛遠くたそがれて君ます里のうすうきえゆく

○　新潟　立花君子

散るはなを袂にうけて遊びてしむかしの春のなつかしきかな

○　豐後　工藤みさは

美しき灯はかゞやけりかるたする若き少女の紅の頬に

○　北海道　上原玉枝子

北のはて氷流るゝ樺太の海を思ひぬ春しきたれば

○　三河　かすみ子

美しき夢かと見れば鐘の聲も長閑けき春のあけがた

○　常陸　渦海薫の人

みぞれ降る初冬の夜は柴焚きて語るを好む祖母なりしかな

○　札幌　俣野恭子

何といふ名だにも知らず春くれば今年も咲きぬ背戸の木の花

○　鳥取　妙　香

人魂のわれて消えたる荒寺のふるきいてふに梟のなく

○　栃木　波多野嘉子

安らかに乳兒はいねける東の間を焚くになれし母とは成りぬ

○　下總　小出保子

強く風空を吹く三月の頃ともなれば君のしのばゆ

○　牛込　夢　子

胡蝶追ふコバルトのかさ見え隱る桃の花咲く市川の里

○　岩代　鶴田千代子

冬枯の小島か崎の一ッ松たてるもあはれ我身にも似て

○　三河　金香澤雄

うらゝかに春の日もえてはり板の赤きうら地にしら絲のちる

○　紀州　木下たまへ

梢は笑む柳はやさし此春に母の此世にまさぬかなしき

○　本郷　佐久間千代子

なとめてふ詩覚えぬあたゝかき春の日を浴びて髪けづる朝

○　伊豫　有田百々代

弓削の島むかしは鬼の棲みしてふ磯家に我は歌をよみつゝ

○　淡島　岸浦文江

空をとぶ小鳥の群もうらやましはらからなきに戀しめる我

○　四ヶ原　三宅文子

病ひえてひた泣く愛兒ふところに亡き母思ふたそがれの道

○　大森　山内もゝ代

講堂に灯す頃の夕闇をしめやかに降る春の雨かな

○　赤坂　靜江

思ひぬと母は優しう宣へど肩上げとれし淋き戀しみ

○　本郷　市川糸子

春雨やかろきなやみの床にゐて歌など思ふ夕べ淋しき

○　横濱　後藤たけを

小鳥など窓に來てなく相模なる伯母が家こひし松原にして

○　米國　村越光子

たけりくるふ獅子にもまがふ岩にたちて眞帆かたほ行く春の海見る

○　小樽　上原玉枝子

青空にうるめる月の淡きにも似たる思ひに胸閉づる日よ

○　京都　貫菊子

春は來ぬみどりやゝますをちかたのやまにかすみの雛うかゝりて

○　大和　園　みさを

常共に上野の花にほゝゑみし春は昔の面影に似て

○　大分　横井眞砂子

二十四の春はむなしく暮れはてゝ花ちる空よ淡きかなしみ

○　靜岡　坂口八千代

山茶花の花にむかひてうつくしき君が笑まひをおもひうかべぬ

○　大阪　田中れん子

梅の戸にしろき鶴群かたむけて餌をやる人や春の淡ゆき

○　越志　鈴木春子

若草にれむれる牛のやはらかき風にふかるゝその心よさ

○　京都　京子

幾千里波の彼方にわが夫とおなじ心にわれをまつらん

○　廣島　加藤しずゐ

しめやかにそゝぐ小雨の朝の戸に鶯とび來て紅梅の散る

○　神戸　梶原みつゑ

茫として夜會いづれはほてりたるわが頰にふる春の淡雪

○　下越　小出保子

君が着る羽織の色とそことなく咲く野の花と似てよろしけれ

○　横濱　田澤廷子

みどりなる松のこずゑのひまに見る相模の海の午後のかゞやき

○　横濱　會田よし子

梅か香や月のひかりにひたりつゝ故鄕思ふ山あひの宿

○　品川　尭子

松風は琴の音のせてかろく吹ぬ春の宵は靜にして

○　廣島　加藤かをる

鐘ひくう沈みて消ゆる靜けさに紅梅のちる有明月夜

# 俳句

武田鶯塘選

天

白酒や口紅薄き人の妻　山城 中西白浪

地

冷えておはす五百羅漢や梅月夜　新潟 内藤きく枝

人

鮭の身のあかきに降るや春の雪　香川 大井久子

秀逸

妹が打つ薺に淡き灯影かな　新潟 五十嵐みつ子

水莊の朝水仙を賣る舟來　芝 遠山ひさ子

草の根の白き流れや柳鮠　香川 猪熊さい子

雛病んで影やせたりな春二月　長崎 深見つゆ子

養蠶の講話會あり小春寺　福井 吉田碧海

道問はん人もなくして納屋の牛　愛知 早川朝子

湯氣籠る初湯の空や梅匂ふ　長崎 荒木つぎ

梅二輪里居の窓の春寒し　大森 もゝ代

宮島の鹿追ふ波や春の水　廣島 野添朝子

猿田彦大神の灯や初詣り　長崎 服部よし子

湯殿から見る茶の花や宇治の宿　和泉 北野くま子

白足袋の黑うなりけり今朝の雪　熊本 須磨子

炭積んで下る舟にも梅薫る　福岡 千代子

誰が取りし札やかるたの紅の跡　茨城 七字ひろ子

風呂吹の一と箸重き輪切哉　廣嶋 鈴木いち

寫生して歌ものきばや春の海　越後 岩木芳子

若武者の丈高にして梅こぼる　越前 山口靜江

花散るや竹林院の手水鉢　靜岡 神尾たが子

とある家に餅つく音や梅の花　越中 愛子

我髪にこぼるゝ月や夜櫻に　神戸 伽若子

我今し旅の宮川初日の出　奈良 辻信子

梅咲くや知らで泊めたる最明寺　長野 湖山阿貴子

草餅に名高き寺や雪肥えて　天塩 矢萩常子

影踏んで私語する人や朧の月　東京　甲賀馨子
若水や梅にかけたる小提燈　伊豫　武田梅子
子の手から取つては飾る雛かな　廣島　荒谷みつ子
若水や釣瓶重げの初島田　鳥取　安達元子
匂ひ吐く樹もあり庭の朧月　能登　向井きみ
濤の音に苫屋の飾ゆれにけり　伊豫　有田百々代
船苫や蘆発の千鳥飛び入りぬ　武藏　中澤たか子
春の雪八坂を北へ女連　京都　内藤紅子
霙ふる藪の我が家伯母が家　京都　内藤しづ
仄暗きを閼伽汲む群や落椿　備前　藤本綾子
閼伽涸れて朽葉の宮の寒さよ　丹後　[illegible]野菊枝
温泉の宮や春寒人の小豆粥　香川　大井裕子
春の雪朝寝の窓に積りけり　越後　五十嵐文子
月と燈と明き雪の巷かな　羽前　あはゆき
三千の婦舞ふ寺や春の風　埼玉　伊藤時子
短日や蓮髮にして客に對す　横濱　天野光代
君に侍る玉の腕なや初湯殿　長崎　服部ふぢよ
川添の桃さく家や磯の音　福岡　井上かつ子
梅咲て高髻重き見合かな　紀伊　山田松子
芹飛々重角を組む汀かな　香川　猪熊葉子
大吉のみくじもうれし初まゐり　長崎　深見つゆ子
破魔弓やこの下野に人となり　栃木　早乙女さゆめ
繪双紙も小春の縁に見られけり　澁谷　濱女
初日の出金波大洋を眞二ツ　三島　遠山馨子
踏そめシナツキなんど泪きげん　信濃　柏谷たか子

陽炎やよき稚兒遊ぶ嵯峨の道　福島　長谷川よしの
いさ祝へ十三道も君が春　茨城　森山花子
聖壽の君が雙歌や小松引　信州　ちか子
初東風に鬢のふくらみ戰ぎけり　長野　睦子
天井のまゆだまふきぬ春の風　東京　森　茂枝
女多き宵の灯や歌加留多　能登　大杉れつ子
よく走る車に乗りて春寒し　淺草　渡邊富美子
追羽子や美しき子の突き上手　伯耆　佐々木とく子
初鶏や其曉を島けふる　府下　磐田たき子
初鶏やしら〳〵明くる海の方　横濱　稲毛たき子
やり羽子ににぎはふ春の大路かな　上總　八田俊子
屠蘇汲んで若かりし日の物がたり　美作　山[illegible]女
水仙や刀自と呼ばれて庵住ゐ　埼玉　林　畝子
梅一輪ほゝゑむ雪の月夜かな　福岡　川口喜久子
天と打つ鈴の響きや春寒し　北千住　竹内とみ子
梅の窓墨繪に似たり月朧　岐阜　はろみ
いかだ師の霧縫ふ川や初日吐く　松山　白石ゆきえ
嚔して入齒落しぬ春の川　愛知　三浦しの子
さゞ波や滋賀の旅籠の蜆汁　下野　片岡濱子
春寒く卵を洗ふ流れかな　麹町　牧野銀杏子
七里は雨に煙りて柳かな　大和　阪本鹿の子
茶に醉ふて出れば月の梅薫る　旅順　森野鷗子
髪すき[illegible]除夜の鐘きく夕かな　神戸　藤原かれ子
鎌倉は名所の果ぞ濱千鳥　岐阜　坂井田まつば
追羽子やよき子そろひの羽織着て　神戸　杉浦萬齢子

# 懸賞募集　さまざまの家風

〆切　三月二十日

廣き世間の家々には有來りの家風といふものあり、家風は即ち其家に具はる一種の風習、模型にして、其內容は千差萬別、それ〳〵固有の色彩と風格とを存す、吾人は屢々豪奢生活の外觀に眩惑さる、而かも其の內容の美醜如何を知らず、吾人は亦屢々質朴生活の主義を聞いて其の說に感服す、而かも未だ實際の可否如何を知らず、豪奢と質朴とは、生活主義の兩端なり、而かもこれを外にして生活上の主義は又た千差萬別なり、或は放任主義あり、美的主義あり、超然主義あり、世間主義あり、非世間主義あり、嚴格主義あり、淸貧を可とする主義あり、濁福を喜ぶ主義あり、簡易主義あり、複雜主義あり、或は專ら規律を標準として小心翼々なるあり、或は放縱不羈にして物に拘らざるあり、今これ等の家風の實際に就てそれ〳〵その色彩と風格の異なる處を見これに正當なる、且つ奇警なる批評を加へ、以て家庭生活の眞相を明かにせんと欲す、

△記事はなるべく具體的敍事的なるべし、抽象的理論的なるべからず
△事柄はなるべく、實際の模型に據るべし　空論を主張し空理を談ずべからず
△記事は選定の上四月十五日發行の本誌增刊に掲載す
△賞金は發表當日現金にて送達す
△紙數は十枚以內の事
△選定は甲乙の二種に別ち甲十種、乙十種、總計二十種を採る
△賞金甲の部に入る者拾圓、乙の部に入る者五圓とす

# 手軽に出來る子供の洋服

和洋裁縫女子共立會 松江美佐子

此の前には、四五歳の女兒服を記載いたしましたから、本號には、六七歳の男兒服を記す事に致しました、此の形は、五歳から十歳位迄の子供に適當で御座います。

地質は、冬ならば、ネルかラシャ類を用ひ、色は、紺、花色、オリーブ色、鳶色などに致します。夏ならば、縞セル、霜降、小倉又は、白、水色、白茶色等の無地物で綿、リンネルなども適當で御座います、ネクタイは總て服にうつりよい色を用ひます、釦



ブラウス及半ズボン出來上り圖

此服は、出來上り圖にある通り、兩方のヒダの上に、三ツづゝ六つ、飾ボタンをつけますなら一層引立つて見えます。

それから、ズボンは、大人のやうに、ズボン吊りで吊るす事は身體の爲によろしくありません故、チョッキにボタンをつけて其れに、吊るすやうに致します。若しズボン吊りで吊るす場合には、仕立方を少々代へて、兩脇をあけずに前をすつと上まで明けるやうに致します。

用布は、六七歳兒のために、二尺巾五尺三寸二歳について四五寸づゝ加減致します。

## 形紙の拵へ方

形紙を拵へるには、先づ左の印 の説明に注意をしなければなりません。

一、●●●●かやうに、遠く三つの穴は、地の目たての印。

一、●●●近く三つの穴は、ワナの印。

一、●●二つづゝ穴のあるのは、ギャザの印。

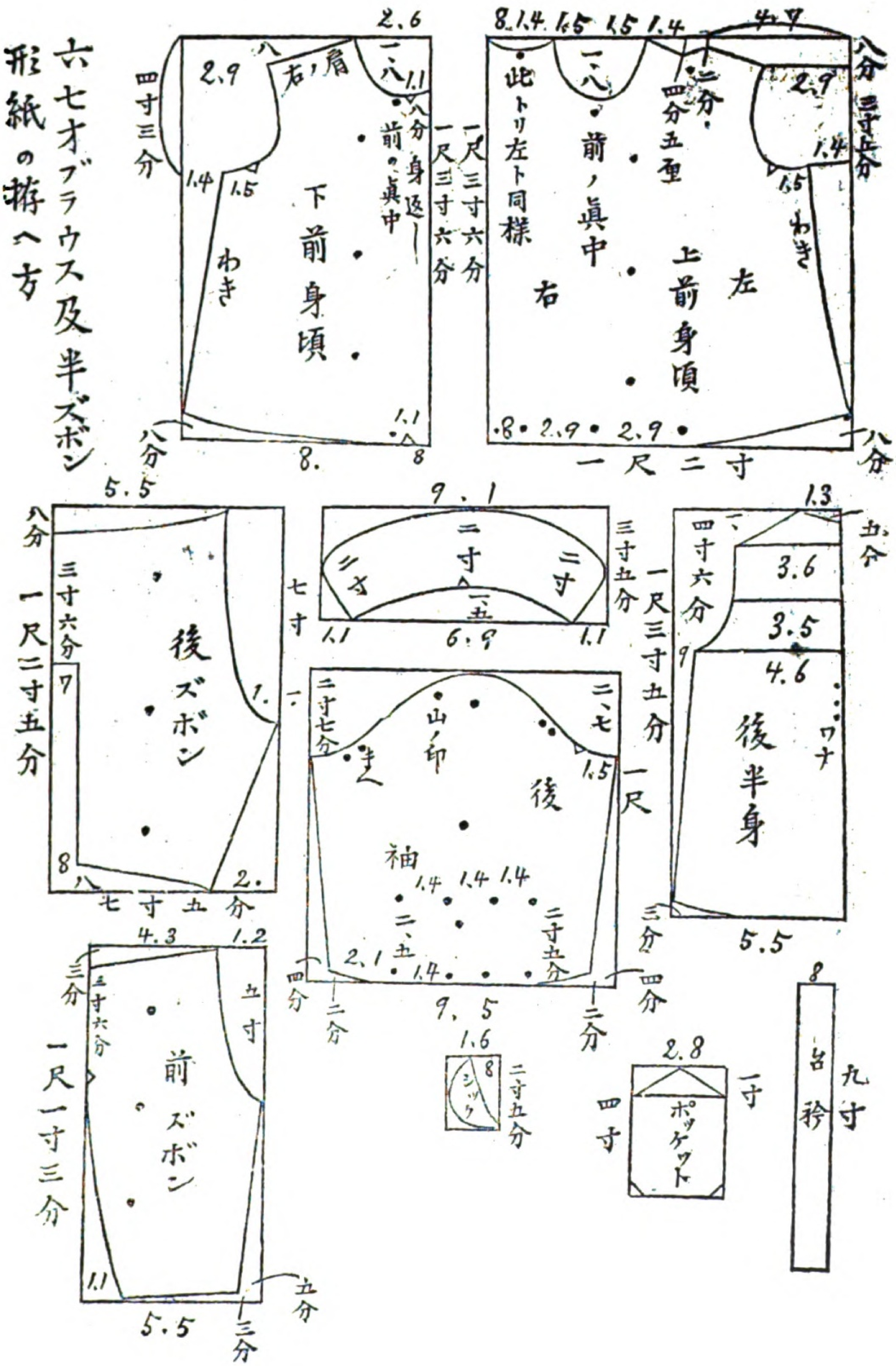
一、●一つづゝ各所にあるのはヒダ、山等の印。

一、V 切込は合印です。

右印の内、第一と第二、即ち、地の目たての印とワナの印は、切れを裁つまで必要な印で、他の印即ち、ギャザ、ヒダ、合印等は縫ふ時に、必要な印です。

此れが解りましたら、形紙の拵へ方にかゝります。これは、先づ左圖の通り、寸法通りの四角な紙を拵へ、何れも、形を拵へぬ内に、一々、地の目たての印、及びワナの印を付けて置きます、夫れより各所を寸法通りに拵へるので御座いますが、總て、圓味をつける所は圖に倣へて、無理のないやうに、自然に致します、これが濟みましたら、次は縫方に必要な印、即ち、褄に山の印、ギャザ印、ヒダの印、切込等、身頃に前の眞中の印、及びヒダ山の印、袖付けの切込み、下前身頃の身返しの切り込み等

# 六七才ブラウス及半ズボン形紙の拵へ方

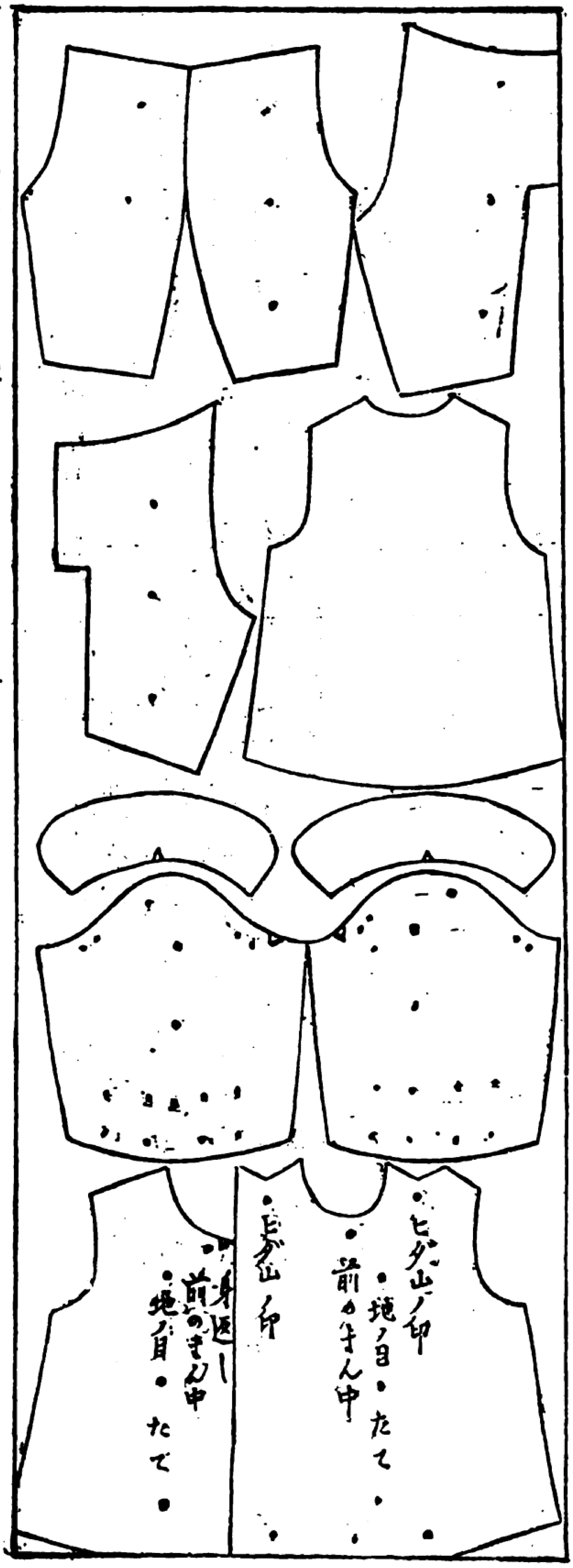


縫て落ちのないやうに悉く穴をあけて置きます。

## 切地に形紙を宛てゝ裁つ心得

先づ左圖の通り二尺巾を擴げて、上前身頃一枚下前身頃一枚を取り、

二尺巾五尺三すの布を以て六七才ブラウス及半ズボン裁方

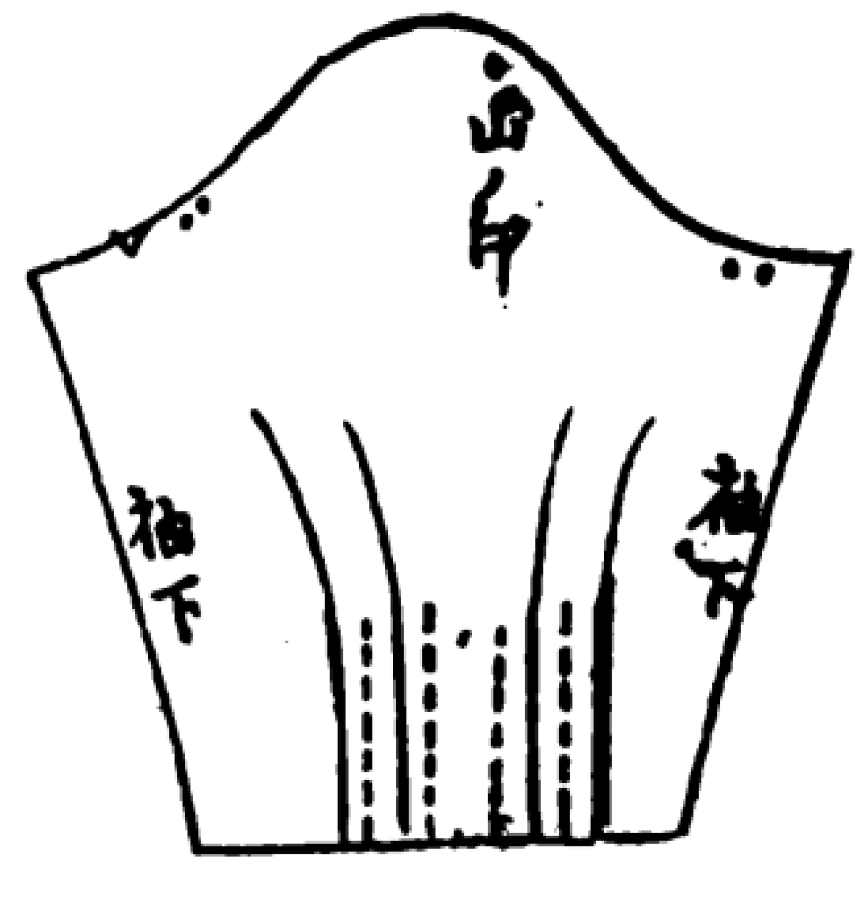



次に、兩袖、及び折衿二枚を取り、次に後身頃はワナで取り殘り切れで後ズボンの右左、前ズボンの右左及び臺衿二枚、ポケット一枚、シック三枚を裁ちます、但し地質がヘルなどの地ならば臺衿一枚とシック一枚は毛繻子に致します。

かやうにして裁ち終りましたら、針をぬかぬ内に、チョーク或は白墨で各所の印(但し地の目縦の印とワナの印は除き)を悉く切れに移して置きます。夫れより形紙を取りのけ、今チョークで付けた印を消えぬやうに白糸で又印をして置きます。

## 縫方順序

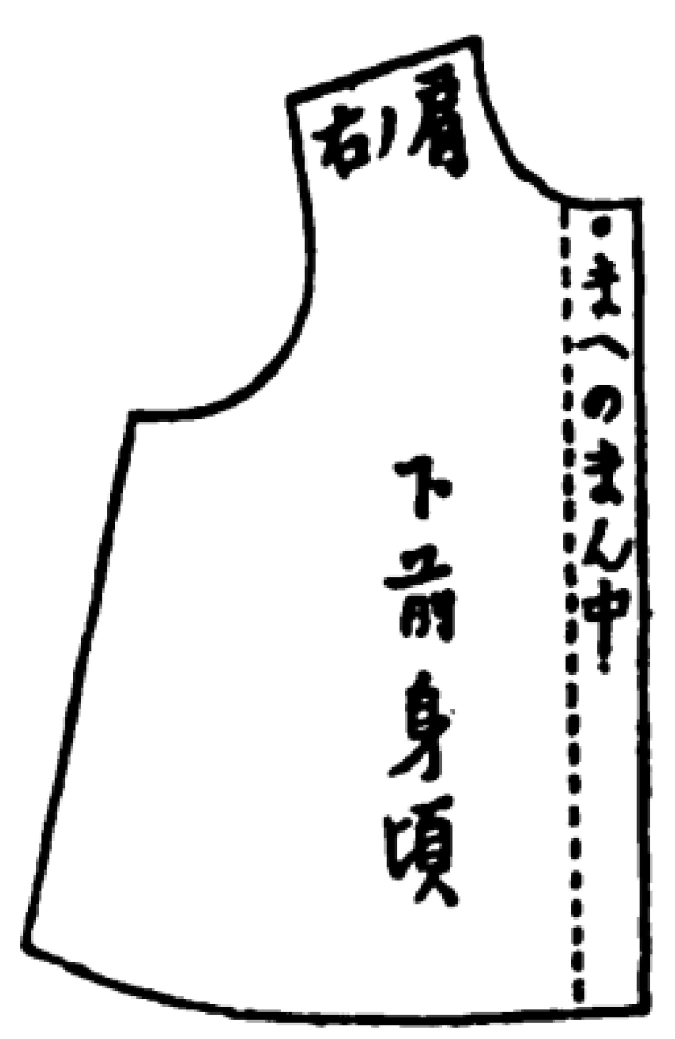
先づ第一に、袖の袖口にあるヒダの印を山にして三分五厘づゝつまみ二本は後の方へ二本は前の方へ　けます。




夫れより袖下を縫ひ、口先きを七八分折つてまつりつけます。次に、折衿二枚を合して外廻り三方を縫ひ、表へ返して正しく飾ミシンをかけ、次に、臺衿の二枚にて此の折衿の内側をはさみ（但し臺衿を兩方へ五分づゝ長く出し置く事）ミシンをかけ表へ返し置き身頃の方へかゝります。

身頃は先づ下前の身返し即ち八分の切込から裏へ折り此の端を又二分折つて表からミシンをかけ、次に上前身頃のヒダの印、即ち前の眞中から右左とも二寸九分開いた處を山にして七分のヒダを外向きに取り

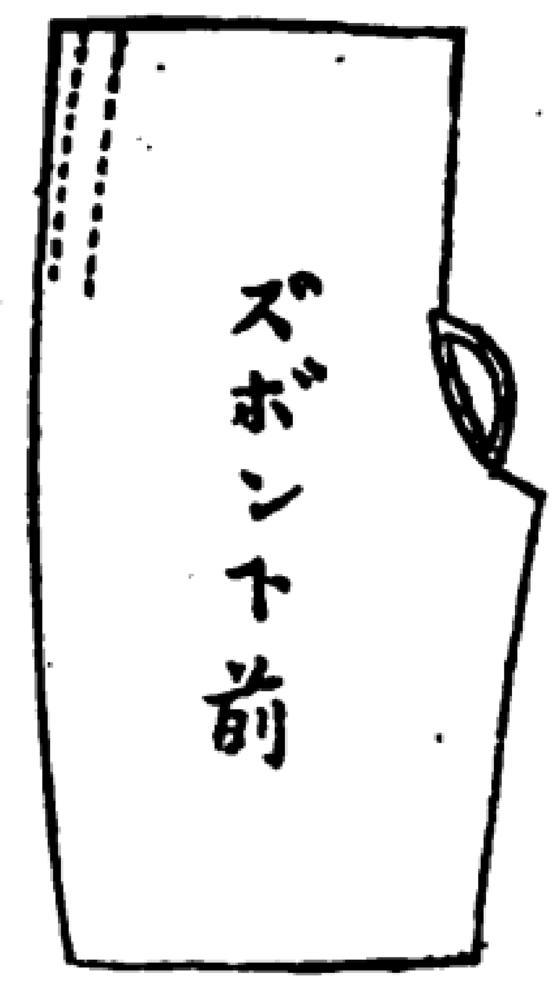


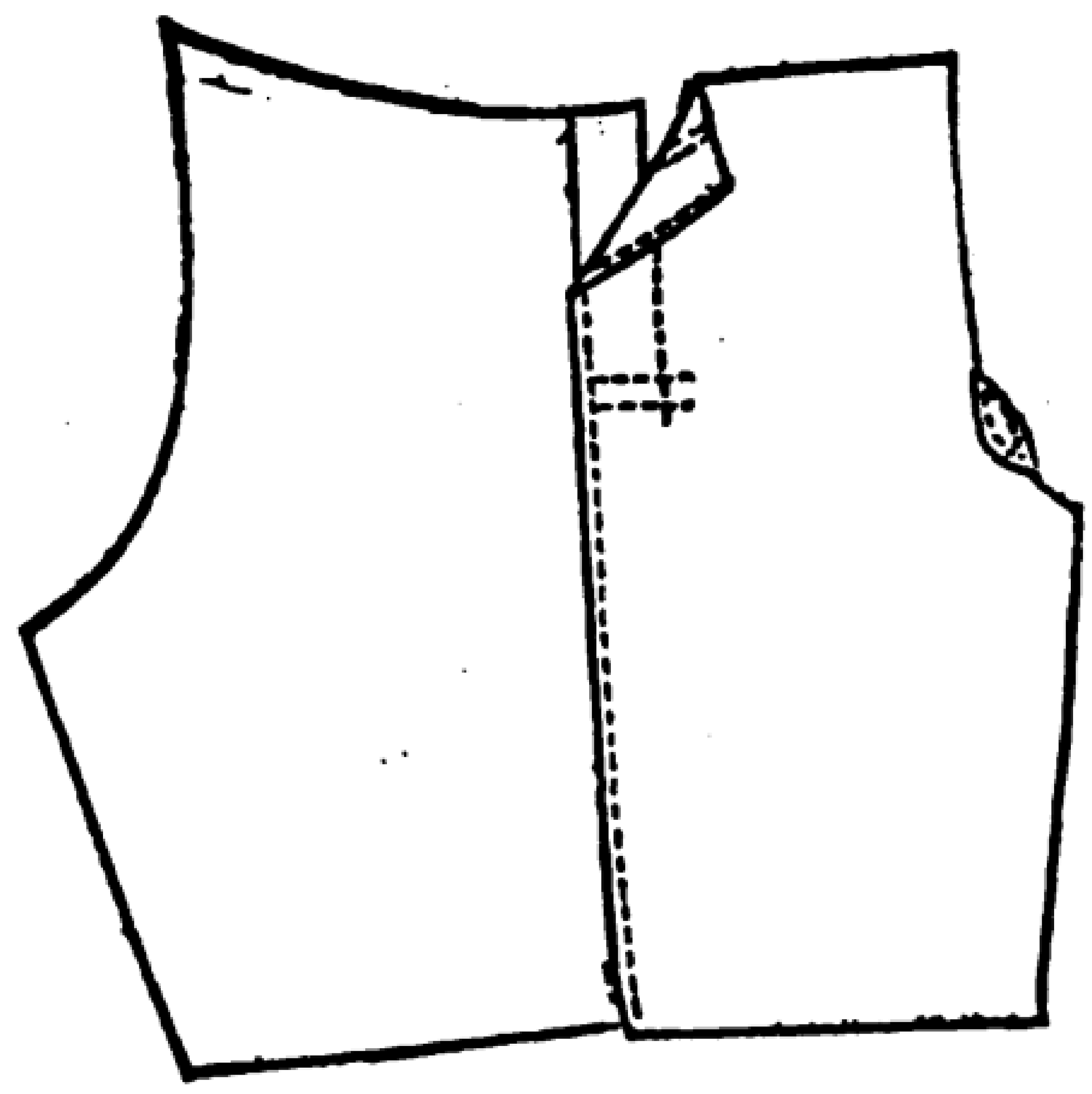

ます即ち右圖の通り次に、上前、身頃の前の眞中から、衣の肩の處へ其切れか冬ならば毛繻子で細く裏へ見返しをつけます、次に後身頃の左の肩と合し後身頃の右と下前身頃の右の肩と合して縫合し折りは前の方へ向け次に、先に拵へた折衿を付けます。これは先づ臺衿の表一枚を持ち此のまん中と、後身頃の衿肩のまん中と合し、前のまん中と、折衿の端とが合ふやう、即ち臺衿の端から、五分入つた處と上下前のまん中と合して縫付け、（但し臺衿は端、二分だけ殘して後三分は重なりのために縫ひつける事即ち下前は、端まで臺衿がつくやうになる）次に臺衿の兩端及び裏の方を折りてしつけをかけ前に折衿をはさみたる處も一處にぐるりと飾ミシンをかける事、夫れより脇を縫ひ、袖をつける事、袖は袖付の方の印から印までギャザ縫ひをなし、身體の袖付のあきに合してちぢめ袖下の縫目と身頃の切込と合し、袖の切込と身頃の脇の縫目と合し、即ち袖下の縫目が一寸以上前へずれるやうにして縫ひ付けます、此袖付は、叮嚀にすれば、七八分の斜め切れでつゝみます。次に、裾を、六分程折つてミシンをかける事、夫れより、ズボンにかゝります、ズボンは先づ前後兩脇に巾一寸丈三寸六分位の見返しをつけ、次に、シックの表一枚を持ち上前の股上の下から七分位上つた處へ縫ひつけ裏へ折つて此縫合した處は表から飾ミシンをかけ奥の方はまつりつけます、即ち




上圖の通り次に殘りのシック二枚を取り外側をぐるりと縫ひ（但し端二分程殘す）此の表一枚を下前のズボンに縫付け、折りはシックの方に向け次に裏を折つてしつけ




をかけぐるりと飾ミシンをかけます、即ち、上圖の通り、夫れより前後の脇を縫合し折りは前の方へ向けて、前の身返しをつけた飾ミシンと、區別の立たゝぬやう注意をして、飾ミシンをかけます、そして身返しの付き仕舞ひの處は左圖の通り正しく止めミシンをかけます、夫れより前の股上を縫合し、折りは

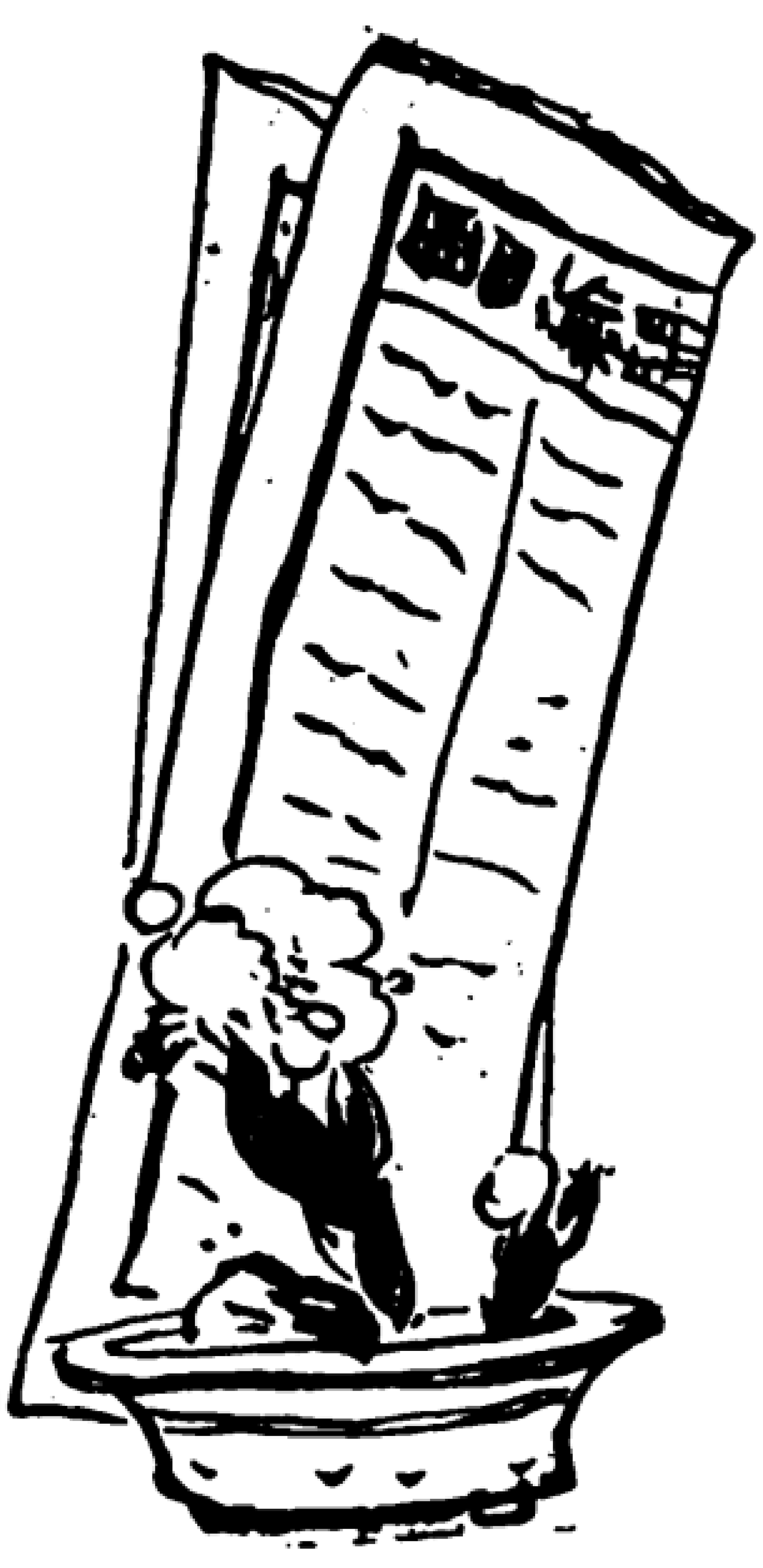


上前の方へ向けて先きにシツクを付けたる飾ミシンと區別の立たゝぬやうに、飾ミシンをかけます、夫より後の股上を縫ひ次に前後の股下を合して縫ひます、夫れより前後の腰裏を付けます、これは、前後共ズボンの形通り、巾一寸五分の切れを拵へ、丈はズボンの巾だけになし、前　共先づ表の方へ縫付け、折りは少し深目にヅボンの方へ向けて折り、腰裏を放して飾ミシンをかけ、次に兩端及び下部に折りをつけ、ズボンへ正しくしつけをかけて表からミシンをかけます、最後に裾を七分程折つてまつりつけます。尚これは、前後のまん中に一つづゝ縦に穴をあけ、兩脇の見返しの上に一つづゝ四つ穴をあけてかゞり、チヨツキにボタンをつけてこれをつろします、尚身頃は臺衿のまゝをホツク又はボタンにてかけるやうに致し右の肩は上前身頃にホツクを二つつけ、下前の肩の縫目の處へ糸で貫ぬきどめのホツクかけをしてかけるやうに致します尚ネクタイは結んで上前の臺衿のまん中へ一寸縫ひ付けて置きます、又身頃の裾へは、テツプ又ゴムテツプを通し上下前のまん中の印と印を合しつまり三寸二分程重ねてゴムテツプならば丁度よいだけに入れて兩端へ縫ひ付け身頃はホツクで止めるやうにしテツプならば、上前は端から出し下前は三寸二分奥の處へ穴をあけてテツプを出し、腹部で結んで身頃はふつくらとふくらして置きます。

**注意**　此形は、本月第一土曜日、即ち三月四日午後一時から本郷區春木町中央會堂内、明治母之會で實習致します、御希望の方は御隨意にいらしてよろしう御座います。會費拾錢、當日御持參の事。尚お出でになる事の出來ぬ方には形紙と縫上りの雛形をお頒け致します、形紙は一組十五錢、雛形は、ブラウスと半ズボンと兩方で三十錢、ブラウスだけなら廿錢、前に折衿スイツツの時分に、ズボンをなさつた方は只クゝリズボンと半ズボンの違ひだけで仕立方に變りはありません故上のブラウスだけ御覽になれば宜しう御座いませう、郵税は二錢づゝ爲替券封入本郷區追分町卅壹、女子共立會宛御申込の事。又同會で仕立の御注文にも應じます、地質をネルかヘルに致して、ネクタイ共、六七歳兒のために、三圓五十錢より四圓位迄、小倉ならば二圓位で出來ます、紺絣の和服などよりも遙に丈夫で、見た處も數段上品ですから、學校着などには至極適當で御座います。

## 彼岸詣　(寛政頃の風俗)





# 文苑

## 變化

尾張　榊原みね子

私の正月の樂しみは段々變つて來た。子供の時分無上の樂しみであつた御客樣の多いのも、今ではめんどうに成つた。御餅を食べるのも左程待遠しくはない。羽子双六は猶更子供めいてゐるし、晴着をきたつてたれに見せる人も無い。正月が來ると又今年も同じ事を繰り返すのだらうと云ふ感じさへ起す事がある。家政の苦も無く母の膝下に未來を夢見て居つた時分を忍び出して、心淋しう思ふ事もある。然し今でも正月と云へば心が改まる。立派に飾られた門松や、山から昇る初日出をながめた時は心が浮々する。金屏のかげの新味を帶びた福壽草の花、庭に遊べる子供の笑ひ聲も心をひく。新裝した雜誌を手にして開く時も胸がをどる程嬉しい。（一等）

## 雪の北海

根室　齋藤ふぢ子

透明な空氣を通して透明な月が照らす。玻璃を敷きつめた樣な、滑かな道路の上を橇が走る。人が行く。犬が飛ぶ。

暖かさうな皮を被ふた老人の後を、勇ましいスケーチングボーイが快い程の速力で追ふ。老人は道を避ける。ボーイは追ひ越す。

追越した少年は東へ〳〵と飛ぶやうに辷る。東には海がある。ボーイは海の上を走る。ボーイの前を橇が走る。ボーイの後を犬が飛ぶ。橇の上には氷魚がある。（三等）

## あゝ花々

熊本　白萩

皆樣を玄關迄送り出しゝ座敷へかへる。蜜柑や林檎の皮、お茶碗、さてはカルタ札など散亂した室内に、明るい洋燈が輝いて尚華やかな歡樂の香が漂ふてゐる。

熱した面を冷さうと縁の柱に凭る。星影まばらに、白梅の香がほのかに漂ふ。今の先の皆樣のお姿が繪卷物の樣に胸に浮ぶ。美智樣の赤い手柄初々しい新マダム振り、おゝあの美しいお瞳、あのちらりとしたお肩の邊り、丁度繪の樣、女でも見惚れる程だ。花羞かしき少女十七の春を迎へた妙さんや、芳ちやんの若々しさ。溢るゝ微笑み、華やかなさゞめき。おゝ花々。美智さんを滿開の花としたら、妙さん達は今咲きかけの蕾の花。あゝ少女の春……何とはなしに云ひ知れぬ熱い涙が頬を傳ふ。（秀逸）

## 母校を訪ふ

長野　あざみ

むら消えの雪路をたどつて校門をくゞつた。二年振りに訪ふ母校、カーテン絞つた硝子窓に午後の日が映じて。あゝ懐しの窓。夢と過ぎし四年の睦びは……。梅の蕾はまだ固い。六十の坂を越された校長の君の御健かさ。新顔の先生も二三人。「よく居らつしやいました」つて口に迎へて下さる嬉しさ。中でも懐しい懐しい松岡先生にお目に掛つた刹那、暫く……と申上げたつきりうつむいて了つた。「私の時間はもうありませんから御ゆつくり」と進めて下すつた椅子に依つて、道すがら考へて來た御挨拶も何處へやら。只もう懐しい聲、平和な面、情深い瞳に魅せられて、一分も長く御側にと祈つた。種々の御話中にも深い教訓を籠らせて、世間馴れない私の前途を導いて下さる尊いみ恵が、今更乍ら身にしみる。辭して歸る途に、つきぬ惜しさに振りかへる母校の瓦オレンヂ色に燃ゆる夕空に映えて、永久の榮えを示して居る。(秀逸)

## 都の友へ

信濃　きく香

姉様、お出で遊ばせな、露の宿へ、裏の椿林で昨日から鳴き出した。懐しい去年の様な聲出して。北のはづれの大林の右に立てた茶室が、日毎夜毎に松風の音立てゝ、人ほしさうに待つて居ます。

例の御好物もこもに包んでたくさんとつてあります。ね姉様、いらつしやいよ。

初雪消までお向ひに參ります。ポチつれてね。おゝ見える様、喜んで姉様にじやれつくポチの顔が、

丹ざくに紙よりつけて、梅の下枝に結びつけておきますから、きつとね。

## 友の許に

大阪　龍の花

百合子姉様、そんなに朝鮮は寒くつて？　外に出ると耳がちぎれるようだつて。まあほんとう……？　こんな暖國に居つて聞くとまるでうそのようね。ロシアとの戰の時、我が軍兵があんまり寒いので、鼠の皮で造つた耳袋をはめて寒氣をしのいだと云ふおはな しないつだつたか姉様にきゝましたが、姉様もその鼠の皮の耳袋はめてるの。オホヽヽ。氣味が惡くはなくつて？　御手紙の中の「今に私がお年始に歩いて居る最中、耳が飛んで、大阪へ行くかも知れませんよ」のところ、おほゝゝ妾をかしくて〱。おほゝゝ。姉様もずゐぶんね。滑稽に於いては引けはとりませんね。そんなに耳ばかり飛ばさないで、からだも飛んでいらつしやいな。そうしたら妾どんなに嬉しいでせう。ね姉様、妾の心わかつたでせう。どうぞ御身體を御大事に。さよなら。

## 旅の黄昏

大阪　松山かし子

左様なら！　それではこれでお別れいたします、どうぞお靜かに、お出なさいよ、村端れ迄見送つ て下すつた友の母君が心からの御言葉に、慇懃かお禮申上てお別れして、友と二人今朝來た道を長野驛にと急ぐ。

眠むつた様な田舎の野の黄昏の色と、私等の濃紫の羽織の色とが妙な對照の色彩を放つ。

「今日は何だかいつに無い此羽織の色が派手に見えるのねー」と友は自分と私の袂やら裾を見ながら云つた。長野驛に着いたのが午後六時、今朝出でし繁華の都に又歸るべく早くも私等は車上の人となつた。

樂しかつた一日の様を夢の様に廻つて見た。

## 編みもの

札幌 俣野恭子

ストーヴに薪を入れて、また編み始めた。

怖いほど靜かな夜で、ねて居る京子のかすかな息が胸にひゞく。キラキラ針の尖が光る。

「靜かだれえ、雪がふつてるらしいよ。」

低い靜かな母樣のお聲。一二三四……十八とかぞへて針をかへる。無意識にせつせと働く手を見つめてゐると、頭がぼうつとして、何だか遠い遠いところへ行くやうな氣になる。

## 奉公中の妹へ

淺草 そみなへし

文さん、櫻の花盛りに成りましたね。文さんが上京したのはつい此の間と思つて居たが、もう二月に成りましたね。過日お尋ねした時、暫時見ぬ間に文さんの肥つた事。御奉公は樂だと、しみ〲思ひました よ。故郷の方へ心配する樣な事は決して言つて上げてはいけませんよ。健兄さんは今度商業の事に付き滿洲へ出發し ました。三四年は滯在のおつもりとか。五人の兄妹の中の女二人で隨分我がまゝをしたから、之れからは文さんと私で母さんを慰めて上げませうね。今度御宿下りの時に、二人で寫眞うつして母さんの許へ送りませう。ね文さん、其の時の嬉しさうな母さんのお顏私今から見えるよ〻で、文さんのお出が待ち遠しいわ。

## 車窓

大阪 中島麻子

「ぢや。もういよ〱お別れねエ……麻さん、もう泣いちや下さるな。」と、氣を取り直して窓から、半身乘り出した、百合さんの、長いまつげに、又更に宿る露。強く握り交した、双の手にハラ〱かゝる。

一分！ 二分！ ピピーと發車の笛が鳴つて、がたりと一搖り、列車は徐々に進行し始めた。「百合さん左樣なら。」「麻さんお達者に……」

瞬時に白い手帕、双方でひらり振る途端、列車が、又一うねりしたので、互の姿は見えずなつた。

## 雪

島根 砧女

傘をさ して雪見に行く。路傍の處々に雪達磨が拵へてある。石屋の前のは炭團の目が入れてあつて、一番よく出來て居る。降る雪に傘の中が明るい。下駄の歯に雪がくつゝいて身が浮い て轉びさうになる。コツコツと大地に蹴落して歩く。外套を着て陣笠を冠つ 、男がすり違ひに消る。橋の上に立つて見渡す。川上の山は雪に降り隱されて見えぬ。欄干に積つた雪を傘で撥ね落してやると、ばら〱と散亂して川の水に消える。堤の松の雪が折々ぼたり〱と地上に落ちる。チ、――と鳴いて小鳥が一羽川を横切つて飛んだ。

## 昔と今

讃岐 鳥の花子

いつ來るかと思ふ て居たはたちの年は來た。いくら寒中だからとて水で顏洗はねばサツパリせんと云はれた父も、此頃は湯を使ふ樣になつて。早六十路の坂も一つ越えられた。兩鬢白う頬骨高い母も、四年すれば父の今の年になられる。十才になる末の弟が二つの時寫した此寫眞。

父に頰のあたりや肩のあたりがなつかしい程肥つて居る。母も前髮とつて結つた髷の形が大きい。伯母さんなどは同い年でも子がないからあんなに若いと母は口ぐせの樣に云はれるが、お氣の毒な、子故にかくもと、見くらべて思はずホロリとした。此時十八だつた兄は今は立派に子の親に成つて居る。

## コバルトの空

下關　田村きみ子

朝からひきも切らずの年始のお客で、眼の廻る樣に急がしかつた。今はまるで嵐のあとの樣にしんとして居る。

空はコバルト色に晴れて、暖かい日がポか〳〵あたつて、のどかな日和だこと。鉢の福壽草が大きく開き、黄なる花青き葉が彩りて燃えるよう。花瓶に挿したる椿も三つ四つ綻びて、得ならぬ香ゆるく來る。表の方で羽子つく少女、紙鳶あげる童等の聲が賑かに聞える。郵便の聲に出て見ると、友よりの美しき繪端書二枚。お勅題の「寒月照梅花」と、今一つは今年の十二支の猪の圖案のだつた。

## 明るき家

信濃　きく香

小さい人の羽子の歡聲に、刷ずり配る新聞屋の鈴の音和して勇しい。金色の初日さし込む明るい茶の間に集ふた人々の顏には、すべてよろこびの色が溢れて居る。

父樣が年功賞に社からお受け遊ばした銀のてふしでおとそくみ交はす。

三つ重ねの大盃は、一躍して作家の香になつた。盛裝した姉樣に朱塗の三寶敬々しく差し出されて作やは大まごつき。面喰らつたとは大兄樣の惡口だけれど、ペコ〳〵おじぎばかりして居る。お給仕役の小兄樣、「嫌だよ僕あ、お雜煮が冷えるぢやないか、最敬禮ばかりして……」と大しよげ。

花やが眞赤になつて笑ひころげると、お祖母のお膝に居た三毛まで目を圓くしてとび下りた。

## 哀れな少女

大阪　藤の花

私の家は今年になつてから、皆で樂しく笑つた事はまだ一度もない。なぜこんなに淋しいのだらう。一年々々淋しみは增して來る。自分は今人生の春に居るが……。あゝいつ迄此れが續くのだらう。いつになつたら我家に世の春の如き春が來るだらう。あゝせめて父母の此の世に居ます內に一度春が來てほしい。

## 嫁ぐ友へ

信濃　本間綠子

先日のカルタ會ほんとに面白うございましたね。其節いろ〳〵と御馳走になりまして難有う。お禮申上ます。英子樣、お目出度う。御婚約が成立つたさうですね。あなたが理想通りの官吏のお方。やつぱり高等官の奥樣ね。昨日迄ハイカラのマガレツトとに、大幅リボンのお嬢樣でしたに、明日よりは丸髷姿にお變りなさる。あなたの少女時代が惜しいわ。英樣々々て互にはれまはつたのが、俄に奥樣におなり遊ばすんだもの、私何だか夢のやうですね。けれども今迄通りに度々御伺ひ致しますよ。此品は記念の爲にお納め下さいませ。貴女の前途を祝します。


奇特の孝子マルコ
淡路、播

## △其七

マルコの乘つてゐる船はパラナ河を遡つて進んだ。彼れの目には凡ての物が珍らしく映つた。何と云ふ大きな河だらう、此れと較べたら、伊太利のポー河などは丸で小川のやうなものだ、本國の長さを四五倍しても此の川の長さには及ぶまいなど色々想像を廻らした。此の河はもと蛇や虎の棲家であつたのである。長い島が其所にも此處にもあるが、その上にオレンヂや柳の木が一面に生え茂つて居て、まるで林が浮んで居るやうに見える。

船は長い〳〵運河を通り、或は廣々とした湖面へ出た、かと思ふと、又島々が入り亂れた狹い流れを通つて、人跡の無い、青々した草木の繁みを左右に見ながら、進むやうな事もあつた。あたりは無論シーンとして居る。お母さんは此の河上に居るのだらうが、何時其處へ行かれるのかと、幾度か彼は泣いた。

一日に二度づゝ水夫と一緒に食事をするが、其の悲しさうな顏を見ては、誰れも言葉を交はさない。夜は甲板の上に寢たが、夢は暫々破られ、水と兩岸を照す凄い月光に驚かされて、幾度か飛び上つた。然し又「お母さんも此所を通つたのだ。此の島も、此の岸も、皆なお母さんが見たのだ。」と思つて、淋しいながらも又慰むこともあつた。

或夜水夫が歌を歌つたので、知らず識らず子供の時分に母が自分をねかした時の歌を思ひ出して泣くと、水夫は歌を止めて、

「オヤ、そんなに氣が弱くッちや仕樣がない。遠くへ來たつて泣くやうな。ゼノア人があるものか。ゼノア人なら大威張りで世界を廻つて歩くんだ。」と言つて彼れを勵ました。

彼は『ゼノア人』の聲を聞いて、勢よく頭を上げ、拳でトンと舵をたゝいて。

『ウンさうだとも、お母さんに遇ふまでは何所までも行かう、行く〳〵、行く。』

## △其八

三日四晩船で往つて、夜の明け方にロサリオへ着いた。町はパラナ河の岸にあつて、各國の船が幾百となく湊ひ、旗は勇ましく朝風になびいて居た。

ロサリオは眞直な長い通りが幾筋もあつて、その兩側に低い白い家が無數に並び、屋根の上には電線が縦横に走つて大きな蜘蛛の巣を見るやう。それに人や馬や車などが澤山往來するので、町の中は實にゴタ／＼して居る。

彼は彼方此方と袋を持つてさまよひ歩いた。しまひには頭がぼうッとして、ドッチへ行つても何時も同じ通りへばかり出るやうな氣持がしたが、其れでも一時間ばかり尋ねるうちにボーカの人が紹介して與れた宛名の人の所がとう／＼見附かつた。

ベルを鳴すと、毛髪の薄い肥ッちょな家扶のやうな男が出て來て、

「何の用ですか。」と尋ねるから、マルコは尋ねる人の名前を言つた。

「主人は留守です。昨日家族を引き連れて、ブエノスアイレスへ參りました。」

マルコは落膽して暫くは口も利けなかつたが、やがてやう／＼、

「けれど私は外にどなたも知りません。そして遠方から私獨りで來たのですから、何うかならんでせうか。」

と言つて紹介の名刺を出した。

家扶は其れを受取つて讀ながら、

「どうも仕方がありません。主人は一月程すると歸るから、歸つたら渡しませう。」

と至極冷淡なもの。

「でも困りますが。」

とマルコは願ふやうに言つた。

「フヽム、お前さん見たいな者はロサリオにはいくらも居るんだよ。サア行つてをしまひ。」

と言つて男はマルコが未だ其所に居るのに、戸を締めてしまつた。

△其九

マルコは暫く其處に立つてゐたが、仕方がないので又たトボ／＼と袋を持つて外へ出た。失望と後々の心配のために頭はクラ／＼してゐる。さてこれから何うしたらいゝだらう、何處へ行かうと考へながら、目當もなくぶらり／＼と歩いた。

ロサリオからコルドヴアーまでは、汽車で行けば一日で行けるが、もう二三リーラ外金がないので、其の日の小使を差し引けば、汽車賃としてあとに何にも殘らない。

汽車賃は何うして拵へやう。何か働いて儲ける法があればいゝが：：：でも人から施して貰はふかしら。いやいや。そんな事は死んでもいやだ。とこんな事を考へて長い町を歩いてゐる中に、すつかり勇氣がなくなつて、袋を道傍へ投げ出し、壁に倚りかゝつて頭を兩手の間に入れ、ぐつたり其處へ坐つてしまつた。

通つて行く人々は足で彼れをいぢつて行く。車は轟轟と往來してゐる。

暫くすると、ロンバルデイなまりの伊太利語で、

『坊ちやん、何うしました』とやさしく言葉を掛けた者がある。見ると先に船の中で近づきになつたロンバルデイの老人なので。

『オヤ、此所に居らしたの。』とマルコは驚き叫んで飛び上がつた。老人も意外なのに驚いた。

で、マルコは別れてからの事、コルドヴアーへ行く旅費に困つてゐる事を話し、且つ

『こんな譯で何か仕事をして二三リーラのお金を取りたいのですが、お掃除でも百姓の仕事でも何でもしますから、何うか世話をして下さい。』

と熱心に頼んだが、老人は『イケない／＼』と頭をふつた。そしてやゝ思案の體で顎を撫でながら、

『働くなんて、其りや云ふのは造作はないが、さう容易いもんぢやない。まあおいでなさい。こんなに澤山國の人が來て居るんだから、少し位は出來るでせう。』

と言つて老人は歩き出した。マルコは後からついて行

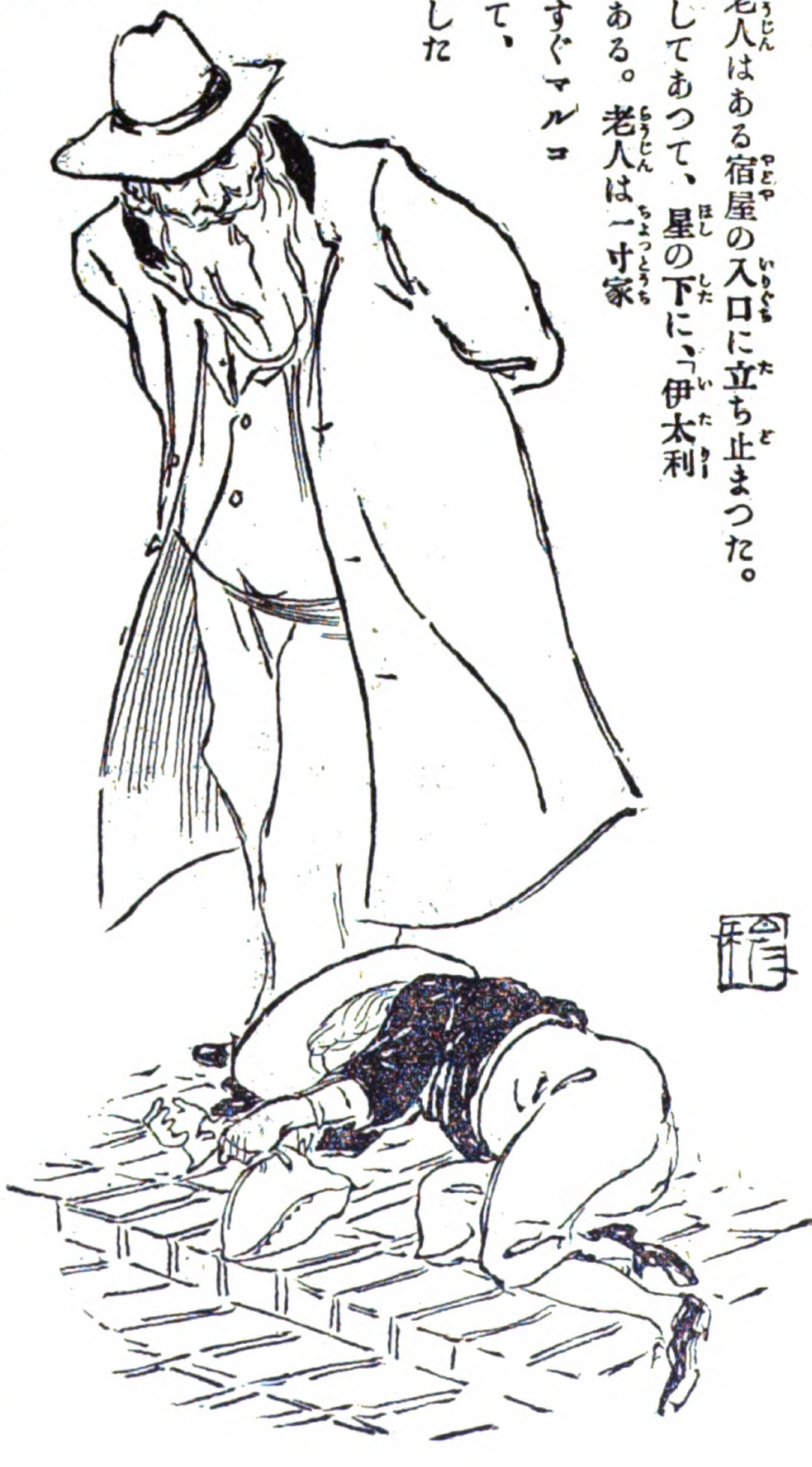
つた。

## △其十

暫く行くと、老人はある宿屋の入口に立ち止まつた。星印の看板が出してあつて、星の下に、「伊太利の星」と書いてある。老人は一寸家の中をのぞき、すぐマルコの方を振り向いて、

『丁度いゝ時でしたよ。』

と言ひながら、マルコをつれて大きな室へ這入つた。室はテーブルが澤山並んで居て、酒を飲む者、談笑する者で非常に込み合つてゐる。老人は最初のテーブルに近づいて其所に居る六人の客に挨拶した。其の様子を見ると老人もツイ先程まで、此の人々と一緒に話して居たものらしい。



『ねえ、おい。』と老人は立つたまゝ無造作に其の客人に話しかけ、マルコを前に立たせて又言つた。

「之れはほんとに氣の毒な坊ちやんなんだ。やはり本國の人で、お母さんを探しに、獨りでゼノアからブエノスアイレスまでやつて來たんだが、來て見ると、此處には居ない、コルドヴアーに居ると言はれたので、其處へやつて貰ふ爲に、書附を貰つて當地の人を訪ねて來たら、此處ではすげなく斷はられて了つたんだ。元氣のいゝ坊ちやんなんだが、金は一文もなし、知人はなし、ガッカリして居るのさ。どうだらう、コルドヴアーまで行く汽車賃位都合が出來まいか。出來なきや仕方がない、犬の子のやうに此所へ放つて置かなけりやならないんだが。」

「途方もない。どうして放つて置かれるか。」

みんなは一度に聲を立てゝ、拳でテーブルを叩きながら言つた。

「坊ちやん、サア、こつちへ來なさい。己れ達ちは伊太利人だ。‥‥どうだい美しい坊ちやんぢやないか。おい。皆な。出せ〳〵。どうだい、獨りでやつて來るなんて、エライぢやないか。サア御上がり。己れ達ちがお母さんの所までやつて上げるよ。心配ないよ。」

と言つて、或る者はマルコの頰をいぢり、或る者は肩を撫で、或る者は手から袋を取つてやつた。外のテーブルからも伊太利人が立つて其所へ集まつて來た。マルコの話は家中へ廣まつた。隣りの室に居た三人のアルゼンチン人も其所へ出て來た。帽子を持つて歩いて居た老人は、十分も立たぬうちに、四十二リーラの金を集めた。

「坊ちやん。どうです。」老人はマルコの方へ向いて、「亞米利加は仕事が早いでせう」と言つた。

「一パイ御上がり」と一人がマルコに葡萄酒のコップを差し出して、「お母さんが御丈夫なやうに」と言ふと、皆ながコップを高く擧げた。

マルコは「お母さんが‥‥」と言ひかけたが、嬉しさがこみ上げて、口がきけなくなり、コップをテーブルの上へ置いて、老人の頸に飛び附いた。

## △其十一

翌る日の明け方に彼はコルドヴアへ向つて元氣よくニコ〳〵して立つた。嬉しさは胸に一パイ滿ちて居た。然しどんな嬉しい心持でも、あたりの景色がよくないと、さう長くは續かない。マルコのこの時の有樣が丁度其れであつた。其の日はイヤな、鬱陶しい日で、汽車の中は殆んど空であつた。外は見渡す限り果しのない平野ばかりで、人家のやうなものは影さへない。長い車室の中に一人坐つて、左を見ても、右を見ても荒野の外に何にもなく、たゞ小さな脊の低い幹も枝も曲がりくねつた變な格好の木が、其所此所に生えて居るのを見て又心細くなつて來た。その廣い原一面が、彼れには荒れ果てた墓場のやうに思はれた。

三十分程ウト〳〵として、又外の方を眺めたが、景色は矢張り前と變らない。所々にあるステーションは世棄て人の住家のやうで、汽車が止まつても、ヒツソリとして何の音も聞えない。道に迷つて、荒野の眞中に棄てられた汽車の中に、自分獨りで乘つて居るやうな氣持がした。一つのステーションへ來るごとに、之れから先きは何とも知れない野蠻人の國だらうと云ふやうな事を思つた。

氷のやうな風が顏をつめつた。四月にゼノアを立つ時には亞米利加で冬に遇はうとは思はなかつたから、マルコは夏の着物を着て居る。

さうする中に寒けがして來た。其れと共にこの幾日かの疲れがドツト現はれて來た。激しい悲しみや喜びを感じたり、幾夜もよく眠らずに心配したりした爲めに溜まつて居た疲れが、今俄かに出たのである。

彼は眠つてしまつた。長い間眠つて居た、やゝ經つてオヽ、寒いと思つて目を醒したら、氣持が餘程惡くなつて居た。すると病氣になつて途中で死ぬのではないかと云ふやうな心配が起つて來た。道傍に馬や牛の死體が所々に橫はつて居て、犬や鳥に引きさかれて居るのを見てイヤな氣持がしたが、自分も荒野の眞中へ投げ出されて、あんな風になりはせぬかと云ふやうな恐れも心に浮んで來た。病氣で感じ易くなつて居る上に、あたりのイヤな景色を見て彼の想像は段々昂じて、

何事をも悲しいやうにのみ考へた。

### △其十二

自分は本當にコルドヴアでお母さんに遇へるのだらうか、若しもお母さんが行つて居なかつたらどうしやう。ロスアルテスの人が、何か考へ違ひでもして居つたのであつたらどうしやう。若しお母さんが亡くなつておいでならどうしやう。こんなことを考へて居るうちに、再び眠つてしまつた。そして自分がコルドヴアに行つて居る夢を見た。

「此所には居ないよ、此所には居ないよ」と云ふ聲が夜陰に家々の戸口や窓口から聞えて來るので、ビックリして目を醒すと、其の時彼れは車室の向ふの端れに、三人の鬚の生えた人々が、色々な色の肩掛けに身體を包んで自分の方をヂロ／＼見ながら、小聲で何か云つて居るのに氣が附いた。と此れは人殺しではないか、私を殺してこの袋を取らうとするのではないかと疑を起して、病氣のための心配、風を引いた苦しさの上に、又た餘計な心配を加へた。其のうち一人の彼れの方に近づいて來たので、マルコは兩方の手を廣げ、夢中で其の人に向つて叫んだ。

「私は貧乏人の子供で何にも持ちません。お母さんを探しに伊太利から獨りで來たのですから、どうぞイヂメないで下さい。」

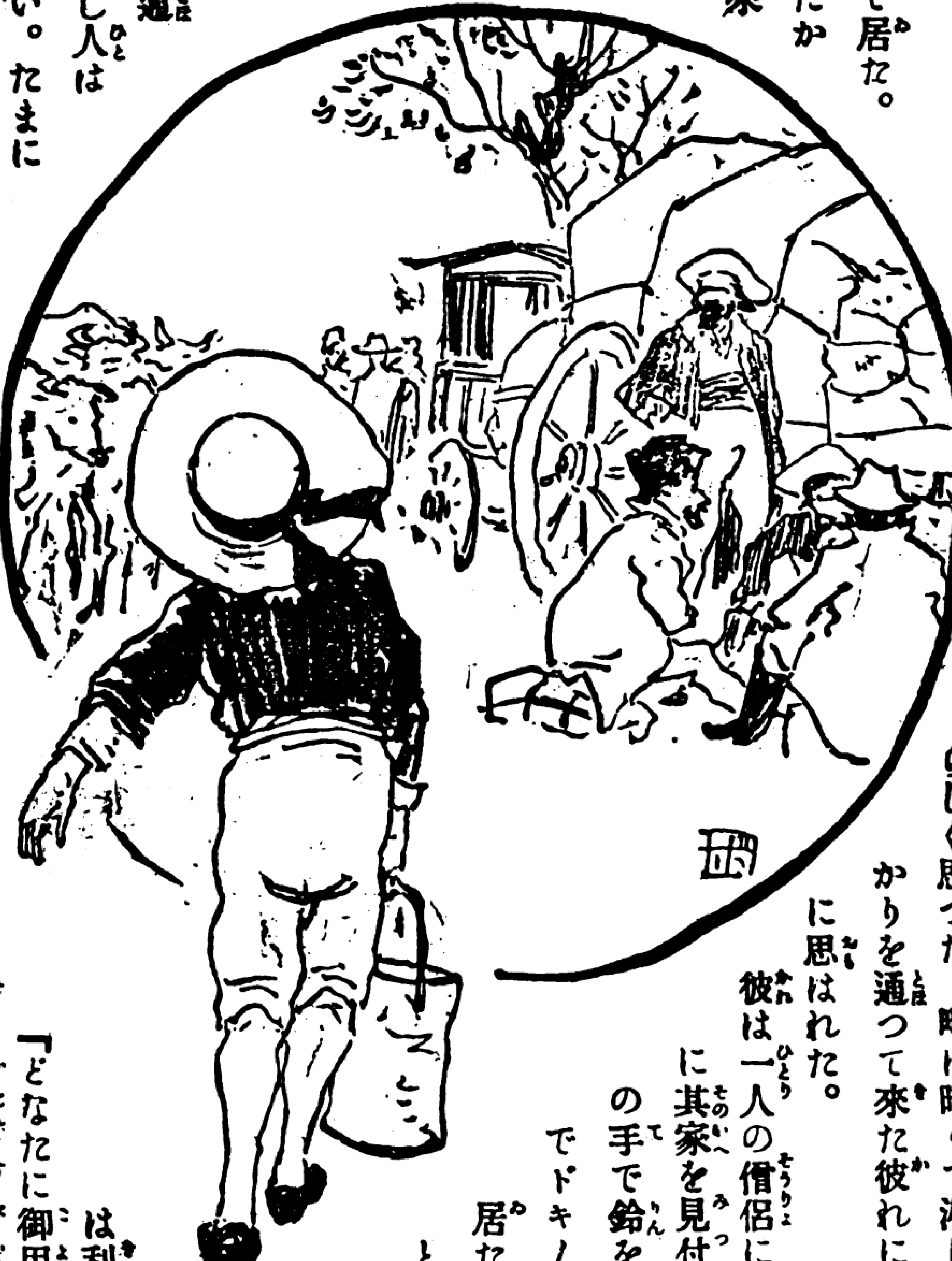
人々は直ぐ事情をさとり、氣の毒がつて、抱いたりすかしたり、色々慰めたが、マルコは全く夢中で知らずに居た。そして齒をガタ／＼云はせて居るのを見て、三人は其の持つて居る肩掛けをマルコの身體に着せ、其所へ坐らせて眠られるやうにした。

呼び起されて目を醒した時には、もうコルドヴアに着いて居た。

彼は深い／＼溜息をして、急いで汽車の中から飛び出した。さてステーションの人に、技師のメキネズさんの家は何所かと聞くと、かう曲つてかう行くと教會堂がある、其の傍らにあると敎へてくれた。マルコは大急ぎで出かけた。

### △其十三

もう日は暮れて居た。町を行くと、何だか又たロサリオへ來たやうな氣持ちがした。町は同じやうに眞直ぐて、再側には小さな白い家が並び、右にも左にも矢張り同じやうな長い眞直ぐな通りが見える。然し人はいくらも通らない。たまに街燈の下あたりで、黒い綠がゝつた色の人々に出遇つたり、處々に異様の建方の教會堂が黒く大きく夜の空に對して居るのを仰ぎ見ては珍らしく思つた。町は暗くて淋しいけれど、荒野ばかりを通つて來た彼れには、其れでも賑かに思はれた。



彼は一人の僧侶に道を尋ねて、直きに其家を見付けた。顫へる片方の手で鈴を鳴らし、片方の手でドキ／＼する胸を抑へて居た。

と一人のお婆さんが手にランプを持つて、戸を開けたが、マルコは直ぐには口は利けなかつた。

「どなたに御用がおありですか」と其の婦人が西班牙語で尋ねた。

「技師のメキネズさんに」とマルコは答へた。

老婦人は胸の上に十字架を書いて、頭を振りながら
「あなたもメキネズさんに御用がおありなんですか。ほんとに何うしたらいゝでせう。この二月の間、全く困つてしまつました。新聞に出しても未だいけないので……。今度は町の角々へ、メキネズさんはトクマンへ御越しになつたと書いて出して置きでもせねばなりませんかね。」
マルコは絶望した。
「あゝ私は呪はれて居るんだ。とう〳〵お母さんに遇はずに、道で死んでしまうらしい。一層自分で死ぬ方がいゝ。情けない。……エ、何と云ふ所でしたかね。どの位ある處ですか。」
「まあ可哀想に。いくらもありませんがね。其れでも四五百哩はあるでせうよ。」
マルコは兩手で顔を抑へて泣きながら、「其んならどうしたらいゝでせう。」
「どうしたらつて、私には解りませんが。」と女は言つたが、又急に思ひ出して、
「あゝイヽ事がありますよ。この通りを右へおいでなさると、三つ目の家に、庭がありますよ。其所に居る人が、明日は牛車を引いて、トクマンへ立つはずですから、其の人の所へ行つて、お頼みなすつて御らんなさい。事に依つたら、其人が車へ乘せて行つてくれるかも知れません。直ぐ行つて御らんなさい。」

### △其十四

マルコは袋を掴んで御禮を云ひながら其處へ驅け附けた。人々が廣い庭に提燈を幾つもつけて、丸い屋根のある荷車へ、穀物の袋を積む爲に働き、鬚を生やして、白いチヨツキを着た脊の高い人が、其の指圖をして居た。
マルコは其の人の傍へ行つて、伊太利から母を探がしに來たのだから、何うか一緒につれて行つて呉れと云ふことを、恐る〳〵話した。
彼れはマルコの頭から足の先きまでヂロリと見て、
「場所がないね。」とソツケなく答へた。

「私はお金を十五リーラ持つて居るから、其れを差し上げます。そして途中で、水も汲み、牛に草もやり、何でも仕事をしますから、どうぞ乘せて行つて下さい。」とマルコは熱心に頼んだ。

彼れは又たマルコの身體をヂロ〳〵と見て、前よりやゝやさしく、「少しも場所がない。其れに私等はトクマンへ行くのぢやない。エステロと云ふ別な町へ行くのだから、途中でお前を獨り置いて行くことになる。してそれからまだ大分歩かなけりやならんのだが。」

「構ひません。いくら歩いたつて構ひません。」

マルコは叫んだ。

「私は歩きます。其れは心配ありません。何うにでもして先きへ行きますから、どうぞ乘せて行つて下さい。可哀想と思つて、連れて行つて下さい。」

「いゝかい。二十日もかゝる旅なんだが。」

「構ひません。」

「苦しいよ。」

「どんな辛抱でもします。」

「獨りで行かにやならないよ。」

「何でも構ひません。お母さんに遇はれさへしたらいんです。どうぞ連れて行つて下さい。」

彼れは提燈をマルコの顔へ差しよせて又よく見て

「よし、〳〵。」と云つた。

マルコは彼れの手に接吻した。

「今夜は車の中へ這入つて御休み。明日の朝四時になると起すから」と云つて、彼れはあちらへ行つた。

# 讀者倶樂部

▲毎々誌上に御才筆をお振ひ遊ばす野菊樣の事を一寸申上げませう、私の宅からぢき一丁位の處にありますのよ、私近所にこんな天才の方がゐらつしやるかと思ふと、ほんとに嬉しいわ、蔭いてがらに、根上りの品よき丸髷、愛嬌ある御口元、女の私でさえ見とれる時がありますのよ、それに暮も御存じで、時々夫の君と打ち給ふとか、ほんとに〳〵スヰートホームで入らつしやいますわ。「むさし野にひと本はえし野菊をば文よむ人のめづるぞうれし」、人生の春、面白く拜見致しました、當選の君逹よ、花さく春の汚餓の時となりましたから、ます〳〵御才筆をおふるひ遊ばせよ。（榛の花）

▲記者樣、いつぞや稚な馴染の外交官をお書き遊ばした藤井佰松女史の御近狀御存じでしたらお聞かせ下さいませ、記者樣が、俗世に超越せる御住ゐ東海寺に、女史をお訪問遊ばしたのは往年二月二日と覺えます。年こそ變れ、同じ月日と思つて私は種々の感想にふけりました、あの趣味ある記事を拜讀して以來、ひそかに女史を崇拜してます、彼の後二三回御麗筆に接して一層おしたはしさを增しました。處が此頃は一すも御寄稿下さいませんのね、私共物足りなくつて……、どうぞ記者樣から御寄稿をお願ひ遊ばして下さいな、最後に本誌の益々隆盛ならん事と女史の御健勝を祈ります。（故山の花）―益々おすこやかでゐらつしやいます、いづれ其うちにお願ひいたしませう。

▲一月の增刊、ほんとに面白う御座ゐましたのね、千代子樣のもじつものとメイブがちがつてゐて結構でした、五位さまや一高ばかりぢやかなひませんワね、それにしても何うして賞に入らなかつたでせう、あまなみさんではないが、天下萬人の批評眼が定つたからなのかしらん、でも矢張運に運入らなくつてわネ、內幕はどうあらうとも、オホヽヽヽヽヽ色々と理窟こね離して厄介な讀者で御座居ますワネ、或る人曰く、女學世界の千代子を攻擊してもだめだ、記者さまの御秘藏ッ子だから……だつて、ほんとですか、公明正大な先生ですもの、まさかね――河岡嘲風先生の御記事痛快ね、然し和歌には何時もあてられますワ、オホヽヽヽ、御免遊ばせ、だつて私許りでは御座いませんもの……調が大變およろしいつて……オホヽヽヽ「鏡嘲願」、河岡さんでも御年召すのが悲しいのでせうか。（茶月子）

▲此のクラブを雜誌の交換や手紙の取次などに用ゐずに、も少し有益な地方の風俗やら、珍らしいお話を交すクラブに致したらと存じますが皆樣如何思召して？。（下野ホワイトリリー子）――記者も常にそれを遺憾に思つて居ります。どうか皆樣も御賛成下されて、見る人が共に樂しみ、共に智識を得るやうな記事を御送り願ひます。此の種のものならば、家庭或は學校の出來事もよろしく、世間話もよろしく、或は學問上の話でもよろしうございます。

▲日暮里の木村純子樣、二月號の、あなたの和歌を見て、何んとなく自分と同じ境遇のお方が潜んで居られるやうでなりません、まこと御境遇からのお作ならば、私は袖をさいてもあなたの涙をふいて上げたいとまで思ひます、私は作物を見てお尋ねする事は好みませんが、私もお作の通りの身で、心から筆をとりました、昨年の二月あをばの君のも、丁度ある海邊で見て、餘程お尋ねしようと思ひましたが、よしましたお二人のうちでどちらでもこのらんへ何なりと申して下さい。（莎子）

▲誌上にて御才筆を御振ひ遊ばす野菊樣、おなづかしく御慕しく御目にかかりたく存じ上ます一昨々年五月より愛讀いたしておりますが、御作によりまして、私は大變人格の高い淸らかな

いつくしみ深い母様（お若いのに失禮の段御許し下さい）の様な感じがいたします、君様ら御兩親はゐまさぬとか、實においたはしく暗涙にむせんで居ります、脊の君様の品性の高潔な、そして御立派な御とりなし御氣象迄（誠に失禮）私の養父によく似てゐらつしやいます、御作を拜見致します都度に思ひます、（元小學校教師なりし）私は、君様と同じく兩親なく、慈愛深き養父の許にて成長し、養母の死せし後は若き身を以て妹をはごくみ、家政をつかさどつて居ります、種々御教示を願ひたう御座いますが、失禮と存じ御交際は得願ひませんの、ホ……御自愛遊ばしませ。（白菊）

▲簾姉さんは、高山先生御崇拜遊ばすさうですが、誠に先生の御高見には私も常に感心致して居ります、そして樗牛全書は殊に耽讀致して居りますが、第五編は最も宜しいと申す評を承つて居ります、貴女方は何編をわけて御愛讀遊ばしますか。（春野）

▲私は下手の横好きで、園藝に趣味を持ちますのですつと前から少さな花壇を作つて樂んで居つたのです、所が去る四十年の大洪水の際に、全滅の不運に逢つて、其後二ケ年程中止せねばならぬ様になりましたが、漸く昨年からまた始めましたけれども、當地には珍らしい物もないものですから、廣告が出ると遠方でも注文する様にして居るのですが、培養法が惡るいのか種が古いのか、どうも好結果を得ないのです、どうか皆様のお内にあるのを數種お割愛下さいませんか、お禮はきつと致します。（丹波福知山町外羽合飯田百合子）

▲河岡嘲風様、御病氣は如何で御座います、昨冬十二月號に女學校參觀記をお出しになりましたが、あの第一高等女學校は（京都の）まだ他校にない事が御座いますのよ、それはれ、たとひ上級であらうが下級であろうが、また知つてる人知らぬ人にかゝはらず、何所で出逢ひましても大抵禮を交しますので、よく他校との區別がつくつて御有いますの、それはれ、袖の短いのと、袴の紐の結び方とでわかりますの。（浪花にて　ふた葉）

▲東京坂口様、栃木縣は何處?、私は數奇なる運命に江戸川端の住居を去りてより二星霜、此處靜なる地にしばし流浪の步をとめて默考致し居候、さはれ高原颪ギユー〳〵と梢を鳴らす夕にはしみ〴〵と東都の春の戀しう候、（宇都宮市二條町廿七番地佐藤方萩芳女）

▲上原綾子様、御作ほんとに大好きですわ、拜見してゐると身も心も月の宮にあそんでゐるやうですわ、美しい清らかな上品なそしてはなやかな上流の淑女として御慕しく存じ上げます、月光曲きかしていただきたう御座います、又千代子様私はすつかりチヤームされてしまひました、二月には御作が出ませんでしたのれ、失望致しましたわ、拜見してゐるとたのしい巡動會をゆめみてゐる様ですわ、（白菊）

▲我が最愛なる女學世界は、ます〳〵振つて來ましたのれ、與謝野晶子様の御作「雜記帳」いつもながら感心して拜見して居ます、ほんとに晶子様は思想の豐富な方で、心の修養の出來た方だとぞんじて居ます。（廣島濱の眞砂）

▲日常生活の教訓へ、孝佛の道を守る……として御出し遊ばしましたあをやぎ様、實に御同情申上げます、君様と同じ境遇に居りますので、記事がよくあひます、御なつかしく存上げます御いとひ遊ばしませ、よく面白いそして御逸筆にてお書き遊ばした水仙女史様、此節ちつとも御出し遊ばしませんのれ、如何遊ばしましたのちと御才筆お振ひ遊ばしては如何、玉露さんはほんとに私大好きよ、御作によりまして、私大變自覺した事が御座いますの、感謝いたしますわ、御幸福を祈ります。（白菊）

▲丹波の靜谷様、お金儲けは米國には澤山あります、しかし會話を少々知らないと不自由ですよ、私は渡米後もう三年になります。（在米ダコ

ヾ市中田きみ子）

▲「光榮ある人世の春」私待ちかれて求めましてよ、いつも〳〵皆樣の才筆御ふるひ遊ばす事、其中で一番感じたのが、村雨女樣の「自覺せる女の心理」でした。私も村雨女樣と同じ事をかんがへてゐますの、村雨女樣、御なつかしわ、御本名御しらせ下さいな。（東京うもれ木）

▲記者樣、誠に恐入りますが、中村春雨樣の御住所を御知らせ願ひます。（靜岡しん子）――牛込區矢來町三番地山里七十六號です。

▲人生の波瀾も知らず、煩悶もなく、こゝ有明海の片ほとり、靜なる片田舍に、平和の生涯を送りつゝ、華やかな都戀しの念も起らず、日々雜誌を讀んで樂んで居ります。（肥前淺野芙美子）

▲光榮ある人生の春、本當に面白うございましたわね、私はやつぱり千代樣のがようございましてよ、あの夢より醒めた女！よんでゐる内にはら〳〵と落涙致しました、紫の光を空に彩る夕まぐれ、なつかしき君やいかにと偲ばれて、行く雲仰ぎ乍ら感出多き畫恕を追想して居ります、なつかしい千代樣、どうぞお振ひ遊して頂戴な、いつ〳〵までも……れ（湘南濱くらき夕暮時にて、夢見る花）

▲妾は寒い北海道に住む一少女で御座います、五稜郭の古戰場に程近い函館の町に、明暮れ郷を戀しがつて暮して居ります、今後思ふまゝな投書いたしますから、宜敷く御願み申します。（函館小野龍子）

▲記者樣誠に恐りで御座いますが、女學學校へ入學するには如何なるものを調らべて置いたらよろしう御座いますか、又月謝は如何程いるでしやうか、入學期はやはり四月でせうか。（金田の一少女）――牛込區市ヶ谷河田町の同校へお訪れ下さい。

▲増刊は大變面白く讀みました、なか〳〵皆樣揃つて入つしやる事れ、私もお仲間にもれず人生の春に醉ひつゝある處女なんですの、どうぞよろしく、……綾子さま、ムーンライト數へて頂戴な、バイオリンでひけるでせうか、又野菊の君よ、どうぞ私讀お才筆お振ひ遊せよ。（大阪貴菁藪）

▲記者樣におたづれ致します、竹久夢二樣と宮崎與平樣とは同じ人なんでせうか、あんまり畫がよく似て居ますから、私は不思議でなりません。（熊本ちどり女）――全く異つた方です。

## 不如歸畫譜

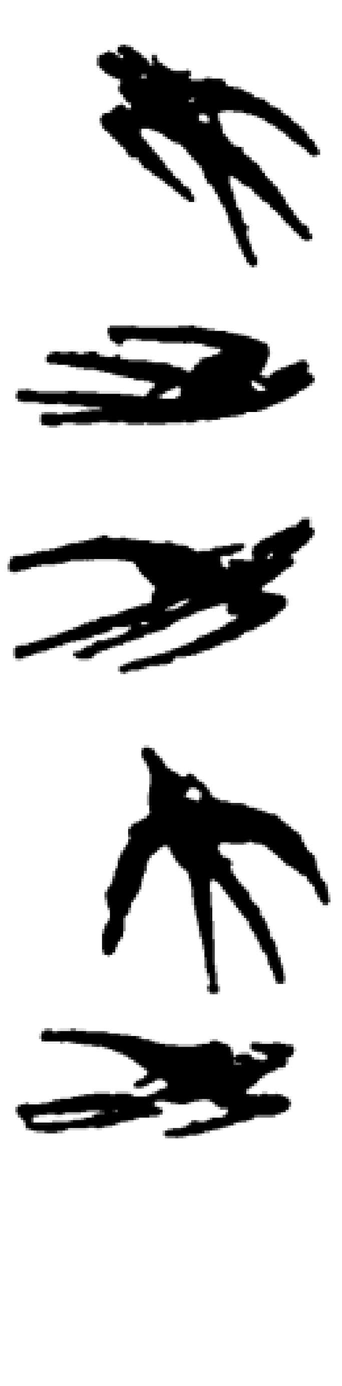
德冨蘆花著
中澤弘光畫

讀者に印象の深い小説中の事柄を畫によつて具象して示すのは面白き趣向なり、不如歸の讀書社會に歡迎されて多數の讀者にその事柄を印象されたるや久し、文の妙を畫に寫し、その人物や場所を具體的に顯はして更に印象を明かにし、浪子の面影、武夫の面目、意地惡き姑、優しき老女の涙多き生涯の人、薄命の人、數奇の生涯、變化せる事實一枚〳〵に轉展し行く粗文章以外の妙味を味ふべし、價一圓五十錢左久良書房發行。

## 井上通女

岡田辰二郎
永井虎吉　著

德川時代に傑出せし女秀才屈指に遑あらずといへども就中傑出して和漢の學に秀で詞藻あり品性高く、尤も修養深くして婦道の龜鑑となるべき國秀第一の人通女の如きは少し本書はこの天才あり修養あり、處女として妻として、又母として並びに才女の人としての通女の一生を詳述したるものにて婦人の讀物として敎訓に益する處ろ大なるべし、價九十錢同文館發行。



# 新刊紹介

## 少年日本歴史讀本第一編 天の浮橋

萩野由之編

未來の國民たる少年の頭腦に、國家的觀念を養成することは刻下の急務にして、之れが爲に歴史的の智識を注入することの偉大なる力のあることは云ふ迄もなし、著者茲に見る所ありて、日本歴史讀本の編纂を企て、上は天地開闢より、下は日韓合併に至る迄の事實を數十册の大部に記述せんとして、先づ第一篇として本書を著す、最も趣味ある筆致によりて記されたれば、少年諸子の爲に、又一般家庭の爲に好參考書たるは勿論、國民教育上に益する所少なからざるべし、定價金拾八錢、本館發行

## 家庭百科全書 母の智識

木村小舟著

本書は世の母親達が子女の質問に答ふる資料にせんとて、自然科學其他日常問題に就いての智識を說きたるものなれども、極めて平易なる文體なれば、直接子供の讀物として適當なり、内容は春夏秋冬に就き、其の折々の事柄を說きありて、何れも趣味多し、定價金四拾五錢、本館發行。

## 春泥集

與謝野晶子作

著者は「みだれ髪」の處女作以來多く短歌の作家として盛名を馳せ、近頃はまた散文を以て盛に生氣ある新思想の鼓吹に勉む、本書は此の間に成れる近作を集めたるものなり、優たる辭、雄勁たる氣、眞に、一世の歌人の名什たり、麹町區平河町金尾文淵堂發行。

## 大石陸母

碧瑠璃園著

陸女は赤穗義士の頭領大石良雄の後妻なり、人となり情に厚く義に富み、貞烈にして亦婉轉の才あり誠に封建時代に於ける理想的武人の妻たるを知る本書は即ち陸女が一代の事蹟を骨子として、其尤も美談に富める個所を仕組みたるものにして、主家の大事變に處して行く良人をしてよく其の志を行はしめたる且つ親子主從に對する愛情の懇切を致すのところ何れも凡婦をなして其の至誠に泣かしむるものあり。文章暢達にして明快近來の歴史小說中の傑作といふべし。定價一圓本石町至誠堂發行

## 法然上人

須藤光暉著

曩に「最充親鸞」「空海」の二卷を出したる敎祖傳記叢書は其第三卷として法然上人を選べり、上人は淨土宗の開山にして其高德偉蹟は深く人心の渇仰に價する事は云ふまでもなし、上人出世の時は藤原氏の政綱稍く衰へ諸國の武士次第に勃興し、天下の形勢正さに變ぜんとして人心の動搖測るべからざる際なりき、この多難の時に當つてよく衆生濟度の法力を致し、戰亂の巷に出入して佛陀の光明を布植したる偉蹟は本書の尤も盡して敍說したる處ろにして、一代の高德行狀を實現して史實以上の妙味を示せり、卷頭に伏見天皇後二條天皇の宸翰を始め來り、國寶となれる上人の行狀畫圖、數葉、眞蹟、御影等坊間得難き文書の石版を添へたり定價貳圓金尾文淵堂發行。

## 慈愛の涙

村田勤著

我が恩愛の血を分ち多年愛情の懷ろに育て 日夕慈愛の眼をそゝげる愛兒が一朝病魔の手に奪ひ去られなば親の哀傷は如何ばかりぞや 此書愛兒を亡へる人々の當時の感想を叙べ冒々悲傷を極む卷末に 古人の哀傷を歌へる詩を添ふ價一圓八十錢警醒社發行。

募集（三月八日〆切）

## ●特別寄書

（主として人事、人情の委曲を寫し、又時の社會百般の事柄を捉へ、時勢の變化を知るに足るべきもの△紙數は原稿紙十枚以內の事）

〔報酬＝五圓以上拾圓迄、現金贈呈〕

▲端書文（一人一種）

▲和歌（一人一首）

▲俳句（一人一句）

▲誌友倶樂部

△端書文以下三種共用紙は端書の事　△字體は楷書にて正しく書く事、不分明の字又は亂れたる書體は沒書とす　△名宛は博文館內女學世界行とし　△特別寄書の原稿には住所氏名を明記する事

### 賞品

△端書文
天賞畫圖、地賞七拾錢、人賞五拾錢

△和歌△俳句
天賞畫圖、地賞五拾錢、人賞參拾錢

---


毎月一回一日發行

**定價表**

一册（紙數二百八頁）…金二十錢
四册（三ヶ月分）……前金七十五錢
八册（半ヶ年分）……前金一圓四十五錢
十六册（一ヶ年分）……前金二圓八十錢
內（定刊數……十二册
　增刊四回：一、五、九、十一月價格同一

郵税　一册　二錢

**廣告料**

| 廿四字詰 | 特等 | 一等 | 二等 | 三等 |
|---|---|---|---|---|
| 一行 | …… | …… | …… | 五十錢 |
| 四半頁 | …… | …… | 十圓 | 七圓五十錢 |
| 半頁（卅二行） | …… | 廿三圓 | 十九圓 | 十四圓 |
| 一頁（六十四行） | 五十五圓 | 四十五圓 | 三十八圓 | 二十八圓 |

△等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

**註文略規**

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵券代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る
●總目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ





明治四十四年二月廿三日印刷納本　第拾壹卷第四號

編輯兼發行人　松原岩五郎

印刷人　山田英二

印刷所　博文館印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地

發行所　東京日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局　三百三番　二千六百二十番
　　　　　千十八番　三千二百二十九番

# 學生及び實務家の大福音

●本會の新式記憶術は心理應用精妙無限の新案にして何人にても容易に習得するを得べく且つ直ちに之を各自の學科及び實務に應用し得るを以て特色とす

●本術習得者は數十百個の事物にても單に一回の見聞を以て直ちに之を記憶し得るが故に本術を應用する學生諸君は何程困難なる諳記問題にても默讀一過直ちに且つ永久に之を記憶するを得べし

●本會の講義錄は何人にも理解し得らるゝ樣懇切平易を主とし毎週三回以上の發行にて僅々二週間を以て卒業十分に應用することを得せしむ

（但講習を急がるゝ方には特別速成の方法あり）

誰でも直ぐに應用の出来る

# 新式記憶術

●速成通信教授 ●會費金壹圓貳拾錢

教授概目 ●記憶術の定義●從來の記憶術●新式記憶術の原理●原則的記憶術三法●例外的記憶術●數學外國語法律地理歷史及其他の諸學科に對する各特種記憶術●各種業務用記憶術●娛樂的記憶術●其他數十項

●說明書は掲載雜誌名記入の上申込あれば無料進呈す

大阪市北區天滿橋筋西三丁目八十六番地

**大阪記憶學會**

---

# 世界唯一 マルタン赤白葡萄酒

佛國ボルドウ府メルマン會社釀造の本酒は

佛國大統領
西班牙皇室
和蘭皇室
**御用品**にて

各國博覽會に於て名譽金牌を受領する事六十八回に達せるにても品質の優秀なるは明白なり

（金星、銀星、赤星の三種あり）




健康と長壽は本酒の常用を怠たらざれば期せずして贏ち得られん「アルコール」分少なく品質の優秀にして價格の低廉なる本酒は能く貧血者虛弱者心身の疲勞者冷え症の者及び一般の飲料に適す

直輸入發賣元 横濱 東京 **山田屋商店**

一賣捌所は全國到る處和洋酒店藥店にあり萬一品切の場合は發賣元へ御用命を乞ふ

女（後付の一）

毛利公爵母堂、岩倉公爵夫人　鍋島侯爵夫人
大隈伯爵夫人各序　牧野伸顯男書簡

◉鳩山春子夫人著

# 婦人の修養

クロース製全一册

定價　金壹圓貳拾錢

郵税　金拾錢

本書は婦人界に名聲高き鳩山春子夫人が内外の務め繁きうちに深き素養と、廣き見聞と富める經驗とを以てものし敢て新奇に走らず舊を套はず能く其中庸を得たる好著と謂ふべし之を讀みたらんには母たる人は育兒の教へを開くべく社交の婦人は交際の術を學ぶべく一般婦人は常識修養の指鍼とすべし各女學校は最好の參考書として如何に偉大なる感化を受くべきか誠に得がたき現代婦道の木鐸といふべし

（後付の三）

發賣元　東京本町　博文館

# 家庭整理の指導

當代第一流の女子教育家編著

# 家庭百科全書

全部五十册――每月一回發行

和裝美本◉紙數各三百頁
石版彩色口繪一葉
挿畫十數個
正價一册金四拾五錢
郵稅一册金八錢

近時婦人教育の普及するや、女流の才學は一般に著しく進みたりと雖も、尙ほ之を日常家庭の上に施こすに臨み、輙もすれば實際に適せざるを憾むこと多し。是れ學校に在るの日には槪れ理想の學修に止まるが故に、實際の應用に臨み、或ひは學ぶ所高尙に過ぐるか、然らざれば未だ十分ならざるの憾ある所以なり。若しも家庭に教師ありて一々實際の問題に就て指導せんには、世の良妻賢母は言ふも更なり、未だ在學中の女流學生達の爲にも如何に裨益の多かるべきかは、敢て多言を須ゐざることながら、人ごとに家庭に教師を聘するが如きは、得て望むべからず。是に於て本書は最良なる家庭教師たる目的を以て編述發行し、敢て婦人教育の缺點を補はんと欲するなり。

第一編 新家庭訓 三輪田高等女學校長 三輪田眞佐子女史著
第二編 四季料理 宮中臨時御用洋料理師範 大日本割烹學會々長 石井泰次郎君著
第三編 裁縫指南 女子高等師範學校教授 喜多見佐喜子女史著
第四編 和洋菓子製法 東京治庖會講師 龜井まき子女史著
第五編 茶道と香道 水原翠香女史著
第六編 諸流生花指南 琴松園文雅君 松幸齋理常君 共著
第七編 育兒の務 醫學士 田村貞策君 朝夷孤舟君 共著
第八編 簡易治療法 新潟縣高田高等女學校教諭 藤井靜子女史著

第十四編 女德の養成 前田長太君著
第十五編 家屋と庭園 內山正如君著
第十六編 魚鳥家畜の飼養 農業世界記者 鹿野化骨君著
第十七編 女子作文法 遠藤ふみ子女史 松崎ふく子女史 共著
第十八編 子女の教養 私立高等女學校長 棚橋絢子女史著
第十九編 家庭の趣味 文學士 大森兜山君著
第二十編 家庭遊戲法 高橋忠次郎君 松浦政泰君 共著
第二十一編 書道手引 歌道書道專攻大和會々長 井田秀生君著

東京日本橋

發行所

販賣用電話
本局二六二〇

（後付の四）

# 婦女必讀の大全書

第九編 **禮式と作法**
女子高等師範學校教授 佐方鎭子女史著

第十編 **惣菜料理**
赤堀吉松君
赤堀峰吉君
赤堀菊子女史 共著

第十一編 **編物指南**
女子技藝實踐學校編物科主任 三木とみ子女史著

第十二編 **婦人の生理と衛生**
青山學院教授 牧野清子女史著

第十三編 **教育お伽噺**
少年世界記者 木村小舟君著

第廿二編 **歌の手引**
大和田建樹君著

第廿三編 **刺繡術指南**
刺繡術專門 磯村大次郎君著

第廿四編 **摘み細工指南**
山田興松君著

第廿五編 **新式化粧法**
藤波芙蓉君著

第廿六編 **室内裝飾法**
近藤正一君著

第廿七編 **衣服の調整**
石崎篁園君著

第廿八編 **洋樂手引**
東京音樂學校助敎授 前田久八君著

㊀總說 音樂とは何ぞ○音樂の起原○音樂の發達○音響大要○音樂と家庭㊁樂典篇 樂譜○拍子○拍數計算法○鍵板○變化記號○音階○音程○諸記號及樂語㊂聲樂篇 唱歌○聲樂の種類㊃器樂篇 樂器總論○樂器の種類○オルガル○ヴアイオリン○ピアノ○器樂の種類○著名音樂家小傳

第廿九編 **兒童訓話 母の智識**
少年世界記者 木村小舟君著

本書は子女の敎養に資せんが爲に、四季日常の科學問題を、最も趣味ある筆致を以て記述し、之に加ふるに適切なる寓話、及び唱歌をも挿入したれば、讀誦の裡知らず識らずに、一般の常識を涵養せしむべく編纂したり、世の母姉諸君は必ず一本を備へざるべからず。

本町三丁目 **博文館** 振替貯金口座東京二四〇番

（拔付の五）

を述べたる二大少年叢書生る

現代專門諸大家執筆　博文館編

# 少年百科叢書

洋装細長形頗美本
紙數每編、二百八十餘頁
美麗口繪數葉挿入
定價一冊金廿八錢
郵税一冊金四錢

少年は修學の時代也、故に其一日を怠れば、百年の悔を殘さん、殊に學海の波浪滔々として漲り、嶮山幾重に峙ちて、其前途や又決して安心すべからず、然るに學海の燈臺となり、學山の栞となすべき健全なる良參考書に乏しきは、亦昭代の一缺點にあらずや。即ち此缺陷を補ふべく茲に創刊さるゝもの我少年百科叢書なり。嗚呼修學の一路を求むる帝國幾萬の少年諸子は、此書によりて文明の新智識を享受し、學校の敎科と相俟って更に偉大なる効果を收め得るや必せり。少年机上の寶典之を措て他に求むべからず。讀め天下の少年諸君!!

第一編　先哲至言　勉學訓　既刊

第二編　讀書法　近刊

第三編　世界名君傳　近刊

第四編　世界名臣傳　四月發行

第五編以下毎月一冊又は二冊宛續々發行

振替東京二四〇　博文館

女(後付の七)

明治四十四年度の新學期入學者は今より準備に著手するの必要あり

☆東京に遊學せんとする者は本書に就き慎重なる調査を要す

最近調査

# 女子東京遊學案内

文學博士醫學博士 森鷗外君序文
坪谷水哉君序文
巖谷小波君序文
今井翠巖君著

(附錄)
最新東京實測明細地圖

洋裝四六判美本
紙數七五〇頁
正價五拾八錢
郵稅拾錢

(口繪)……各學校寫眞版十五頁挿入

(萬朝報評)
曩に好評を博せる『男子東京遊學案内』の姉妹書にして、またこれ好評を博すべきものたらずんばあらず、苟くも都下の學校養成所講習所私塾と稱するものはその何種たるを問はず網羅して痒き所に手の屆きたる心地す……

森鷗外君 巖谷小波君 大町桂月君序
今井翠巖君著

最新增訂 **男子東京遊學案内**

(附錄)……最新東京實測明細地圖

四六判美本紙數八五〇頁 正價七拾五錢郵稅拾錢

本書は四十二年三月を以て初版を出し東都遊學者の便に資せしが多大の好評にて一時に數萬部を賣り盡し久しく讀者の望みを缺きたりしが今茲に本書に訂正を加へ最近に於ける各學校の興廢盛衰を明かにし且つ著者が新に得たる知識に依り案内記を增補し以て四十四年度新學期に就學せんとする者の好指針たらしむべく改竄せり

東京 博文館 本町

(廣告の八)

女學世界
（毎月一回廿三日印刷納本）
（明治四十四年二月廿三日印刷納本）第拾壹卷第四號（明治卅三年十二月廿五日第三種郵便物認可）



定價金貳拾錢●郵稅貳錢

監修
小山静子　KOYAMA Shizuko
京都大学大学院教授

女学世界（じょがくせかい） 明治期復刻版㉜
明治44年2月（第11巻第3号）、3月（第11巻第4号）

2010年12月10日　第1刷発行　　定価（本体20,000円+税）

監　修　小山静子
発行者　富澤凡子
発行所　柏書房株式会社
東京都文京区本駒込1-13-14（〒113-0021）
電話　03-3947-8251［営業］03-3947-8254［編集］
協　力　株式会社博文館新社
印　刷　株式会社マイトベーシックサービス
製　本　有限会社青木製本

ISBN978-4-7601-3905-7